

Title	懐徳堂データベース全コンテンツ
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2002, 42(2), p. 1-320
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7239">https://doi.org/10.18910/7239</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 懐徳堂データベース全コンテンツ

湯浅 邦弘

# 目 次

序 言 懐徳堂データベースについて .....	1
懐徳堂DB全コンテンツ凡例 .....	4
1. 懐徳堂入門 .....	6
1-1 「懐徳堂」の歴史 .....	6
1-2 「懐徳堂」の貴重資料 .....	6
2. 懐徳堂文庫 .....	8
2-1 三宅石庵関係資料 .....	11
2-2 中井登庵関係資料 .....	17
2-3 五井蘭洲関係資料 .....	18
2-4 三宅春樓関係資料 .....	25
2-5 中井竹山関係資料 .....	27
2-6 中井履軒関係資料 .....	65
2-7 富永芳春・富永仲基関係資料 .....	133
2-8 山片蟠桃関係資料 .....	137
2-9 草間直方関係資料 .....	137
2-10 中井蕉園関係資料 .....	138
2-11 並河寒泉関係資料 .....	149
2-12 中井桐園関係資料 .....	153
2-13 中井木菟麻呂関係資料 .....	155
3. 漢籍分類解説 .....	158
3-1 漢籍目録と分類の歴史 .....	158
3-2 漢籍分類細目解説（漢籍分類検索） .....	162

4. 懐徳堂年表	183
5. 懐徳堂研究	188
6. 懐徳堂と中国古典の世界	191
6-1 懐徳堂の学則	191
6-2 懐徳堂の精神	197
6-3 懐徳堂と漢語	211
7. 懐徳堂事典	217
7-1 人物	217
7-2 事項	229
7-3 書誌	246
附録1 懐徳堂文庫の歴史	256
附録2 参考文献	258
附録3 貴重資料画像データ状況（兼資料名索引）	260
附録4 懐徳堂データベースサイト Map（差し込み）	265
懐徳堂文庫貴重資料画像	267

# 序 言 懐徳堂データベースについて

## 大阪大学創立70周年記念事業

平成13年(2001)5月、大阪大学は創立70周年を迎えた。5月5日・6日の両日、大阪国際会議場(グランキューブ大阪)に於てその記念式典が挙行され、記念事業の一環として「バーチャル適塾・懐徳堂」が公開された。これは、大阪大学の源流たる適塾と懐徳堂を、最新のマルチメディア技術によって顕彰せんとするもので、コンピュータグラフィックス(以下、CGと記す)による学舎の再現と関係資料のデータベース(以下、DBと記す)による公開が二つの柱となった。企画・制作を推進したのは、大阪大学マルチメディアコンテンツ実行委員会である。

当日は、インタラクティブコーナーに於て4台のコンピュータ端末が開放され、参観者は、適塾および懐徳堂のCGとDBを自由に体験することができた。この内、懐徳堂については、これまで、未公開分を含む膨大な貴重資料が現存しつつも、旧学舎そのものは既に存在しないという特異な状況にあったが、このCGによって学舎の一部が再現され、また、貴重資料は画像付きのDBによって公開された。初日の記念式典には約1500名、両日の公開には約3200名の来場者を得て、本事業は盛況の内に閉幕した。

ただ、懐徳堂関係の膨大な貴重資料については、こうした電子媒体による閲覧・体験だけではなく、文字情報として整理・公開される必要も痛感された。

そこで本稿では、この懐徳堂DBについて概説を行った後、以下にその全内容を、「1. 懐徳堂入門」「2. 懐徳堂文庫」「3. 漢籍分類解説」「4. 懐徳堂年表」「5. 懐徳堂研究」「6. 懐徳堂と中国古典の世界」「7. 懐徳堂事典」の7群に再編して採録し、併せて、現在進行中の懐徳堂資料の電子情報化について附言することとしたい。

## 懐徳堂データベースの構築

マルチメディアコンテンツ実行委員会の一員として、このDB作成に関わることとなった筆者は、まず次のような基本方針を立てた。

**閲覧対象**……このDBは、他のコンテンツとともに、大阪大学の創立記念事業として公開され、当日は、大学関係者のみならず、広く一般に開放されることとなった。そのため、DBの内容を、特定の閲覧者を想定して絞り込むことは避け、懐徳堂に初めて出会う入門者、

懐徳堂についてある程度の知識を有する初学者、懐徳堂について専門的知識を有する研究者、のいずれにも対応できるコンテンツを作成することとした。但し、表記はできるだけ平易なものとし、また、文章は、電子媒体の特性を活かしてハイパーテキストとし、後述の「事典」等をリンクさせるなどの配慮を行うこととした。

**貴重資料の定義と選定**……計画立案段階から記念式典までの時間を勘案して、DBの根幹をなす貴重資料の点数を約100点と想定して作業を進め、結果的に収録された貴重資料は114点となった。その選定には、筆者および後述の「懐徳堂研究会」の内の寺門日出男氏が当たったが、その際、福島吉彦、伊井春樹、岸田知子、宮川康子、竹腰礼子の諸先生の御協力を得、また、次のような点に配慮した。『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、1976年）収録の懐徳堂資料は約3万6千点、その後の受贈・購入分、図書以外の器物類を含めると、約4万7千点に上る。この中には、重建懐徳堂に関わる重要資料、昭和に入ってから収蔵された稀覯本など、様々な意味で「貴重」な資料が含まれているが、今回のDBでは、大阪大学の記念事業の一環としてその源流である懐徳堂を顕彰する、という事業の主旨を踏まえて、江戸時代の旧懐徳堂の学者および歴史に直接関わる貴重資料を最優先に選定した。なお、この内の6点（計16箇所）は、懐徳堂CG内に配置され、CGからもDBにアクセスできる設計となっている。

**資料調査と解題執筆**……DBを構築する前提として、貴重資料の実見調査と解題執筆が必要となることは言うまでもない。懐徳堂関係の貴重資料、特にその大半を占める漢籍資料については、これまで、十分な書誌情報が採られていなかった。そこで、今回の事業では、学外の専門家の協力をも得ながら、まず大阪大学附属図書館貴重書コーナー所蔵の貴重資料の実見調査を敢行し、その成果を踏まえて、解題を分担執筆した。担当したのは、後述の学外協力者6名、学内者2名、の計8名である。このメンバーを選出するに際して、重要な条件となったのは、第一に、懐徳堂資料の実見調査に実績を有することであったが、加えて、今回の事業の特殊性に鑑み、インターネット環境で日常業務を遂行しており、日頃筆者ともEメールで連絡を取り合っていること、も不可欠の要件となった。

こうして選出されたメンバーを「懐徳堂研究会」と仮称して、平成12年7月26・27の両日、大阪大学附属図書館ならびに文学研究科中国哲学研究室において懐徳堂貴重資料の合同調査を行った。以後、断続的に調査を重ね、分担して解題を執筆した。解題原稿は、協力者から筆者へ逐次Eメールで送信され、筆者が修訂を終えたものから順次「懐徳堂研究会ホームページ」（作業用、非公開）に掲載した。これは、他の分担者への執筆例とするとともに、相互の意見交換を行う窓口とするためである。

**写真撮影**……懐徳堂関係資料は既刊書などによって、その写真が公開されているものもある。しかし、それらは主として器物類であり、今回のDBで取り上げた漢籍を主とする貴重

資料については、ほとんど公開されていなかった。そこで、貴重資料としてリストアップした資料について写真撮影が行われ、それらはカラーのデジタル画像としてDBに収録された。撮影点数は、資料1点について最低1コマ、多いものでは19コマに及んだ。これにより、懐徳堂関係資料の公開は一気に進むこととなったが、こうした画像データの状況は後掲の「附録3 貴重資料画像データ状況」の通りである。なお、撮影準備と進行には大阪大学中国哲学研究室の学生諸君の協力を得た。

**新建懐徳堂**……懐徳堂関係デジタルコンテンツの総体は「新建懐徳堂」と命名された。これは、大正時代に再建された懐徳堂が「重建懐徳堂」と呼ばれたことを意識し、本事業が21世紀に於ける懐徳堂の復興と発展に寄与することを願っての命名である。なお、DBのトップページには「新建懐徳堂とは」の項を設け、次のような解説文にリンクしている。

懐徳堂の歴史は、復興と再生のドラマである。

まず、寛政4年(1792)の火災で懐徳堂学舎が類焼した際には、中井竹山が奔走して、幕府からの手当金および同志・門人からの醵金を集め、4年後に再建を果たした。

また、旧懐徳堂が、明治2年(1896)に閉校してから約40年の後には、西村天四郎の呼びかけにより、財団法人懐徳堂記念会が設立され、大正5年(1916)に新しい懐徳堂学舎が建設された。

この新懐徳堂(重建懐徳堂)は、大阪の文化大学・市民大学としての役割を果たしたが、昭和20年(1945)の大阪大空襲によって焼失。戦災を免れた資料が、戦後、大阪大学に寄贈されたものの、学舎はその後再建されることなく現在に至っている。

重建懐徳堂が焼失してから約半世紀、大阪大学は創立70周年を迎えるに際して、マルチメディア技術による懐徳堂の顕彰を企画した。コンピュータグラフィックスによる旧学舎主要部分の再現、並びに懐徳堂文庫貴重資料の電子情報化を推進し、これらのコンテンツ全体を、「**新建懐徳堂**」と名づけてサイバースペース上に公開することとした。

21世紀の初頭、復興と再生の新たなドラマが、この「新建懐徳堂」によって始まろうとしている

**懐徳堂資料電子化の展開**……平成13年(2001)5月の大阪大学創立70周年記念事業の後、懐徳堂資料電子化のプロジェクトは、新たな展開を遂げることとなった。先ず、本DBを根幹とする『懐徳堂事典』(湯浅邦弘編、大阪大学出版会)の編集が進められ、2001年12月に刊行された。また、平成13~15年度の文部科学省科学研究費・基盤研究A「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」(研究代表者・下條真司[大阪大学サイバーメディアセンター教授])が採択され、平成13年度には、本DBに追加する貴重資料の実見調査と解題執筆とが

懐徳堂研究会の協力を得て行われた。また、現在絶版となっている『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、1976年）を電子目録としてWeb版で公開するための目録調査・設計が行われた。本研究は、大阪大学創立70周年記念事業で公開した懐徳堂DBを大幅に拡充した上で、平成15年度末に、懐徳堂CGなどの関係コンテンツとともにインターネットで公開することを主要な目的としている。

## 懐徳堂DB全コンテンツ凡例

- (1) 以下は、平成13年(2001)5月5～6日に大阪国際会議場で公開された懐徳堂DBのテキスト部分を採録するものである。なお、後掲の画像については、原則として、今回初めて撮影・公開された資料を掲載した。資料はすべて大阪大学附属図書館所蔵である。
- (2) 本稿に収録したテキストは、公開版と基本的には同一であるが、次の諸点については、若干の相違がある。
- ① 公開後に発見された誤字・脱字の類、表記の不統一などについては、修正を加えた。
  - ② 「2. 懐徳堂文庫」の内、漢籍・国書については、実見調査と解題執筆の段階で、研究者を想定してかなり詳細な書誌情報を記録していた。ただ、本事業の性格に鑑み、書誌情報については簡易版を公開するに止めた。本稿では、その詳細版を復活させ、記載している。
  - ③ 「5. 懐徳堂研究」として作成した3つのコンテンツ、即ち「『論孟首章講義』全文テキストデータ」「天楽楼書籍遺蔵目録」全文テキストデータ」「懐徳堂学派の『論語』注釈（『論語』泰伯篇曾子有疾章の定点観測）」については、研究者を想定した専門的な内容であるため、各々、他の学術誌に掲載し、本稿では割愛した。それぞれ、「懐徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について—デジタルコンテンツとしての位置づけ—」（湯浅邦弘、杉山一也、竹田健二、藤居岳人、井上了、『中国研究集刊』第27号、45-66頁、2000年12月）、「天楽楼書籍遺蔵目録」について—懐徳堂資料のデジタルアーカイブ化に向けて—」（寺門日出男、湯浅邦弘、神林裕子、井上了、『懐徳』第69号、91-107頁、2001年1月）、「懐徳堂学派の『論語』注釈—泰伯篇曾子有疾章について—」（湯浅邦弘、寺門日出男、神林裕子、石飛憲『中国研究集刊』第29号、2001年12月）を参照されたい。



④公開版DBには、懐徳堂創建時の模様をアニメと音声で構成した「懐徳堂物語」が付けられている。これは、一般の閲覧者を想定して、多少動きのあるコンテンツが必要との判断で、共同制作者・凸版印刷株式会社によって企画されたものである。筆者もその一部について校閲を求められたが、いわゆる監修・編集の立場にはなかったもので、ここでは割愛する。

(3) 以下、「1. 懐徳堂入門」から「7. 懐徳堂事典」まで、各群ごとに本稿用の若干の解説を□内に記す。その際、当該コンテンツの作成に関わった担当者の名を付記することとする。特に記載のないものは湯浅による。

(4) この解説に続いて、DBのテキスト部分を記載する。その書式の詳細については、「2. 懐徳堂文庫」の凡例を参照されたい。

(5) ルビは、一般の閲覧者を想定して多目に付した。江戸時代の人名などで未詳のものもあるが、原則として、西村天囚『懐徳堂考』のルビに従うこととした。

(6) 附録として、①懐徳堂文庫の歴史、②参考文献、③貴重資料画像データ状況（兼資料名索引）、④懐徳堂データベースサイト Map の4つを掲げる。①は、「4. 懐徳堂年表」とは異なり、大阪大学所蔵の「懐徳堂文庫」の来歴を中心とした年表である。②は本DBを作成するに際して参考とした文献の一覧、③は貴重資料の資料名索引を兼ねた画像データ状況の一覧、④は本DBのサイト Map（構造と展開を図示したもので折り込みとなっている）である。

(7) 最後に、「懐徳堂文庫貴重資料画像」として貴重資料の画像をモノクロで掲載する（DB収録版は全てカラー画像）。原則として、今回初めて撮影・公開されたものを掲げる。各画像に附記された頁数はその資料の解説掲載頁を示している。また、画像番号（通し番号）は、「2. 懐徳堂文庫」の各資料に附記された画像番号に対応している。

# 1. 懐徳堂入門

本コンテンツは、懐徳堂に初めて出会う閲覧者を想定して、懐徳堂の歴史とその貴重資料とについて平易に概説したものである。

## 1-1 「懐徳堂」の歴史

享保9年(1724)年、大坂の地に異色の学問所が誕生した。「懐徳堂」と名付けられたその学問所は、五同志を中心とした大坂商人たちによって運営され、受講生の大半もまた町人たちであった。2年後に江戸幕府から官許を得た後も、昌平黌や諸藩の藩校、あるいは高名な儒者の主宰する私塾とは異なって、儒教的な倫理道徳を基盤にしながらも、自由で批判精神に満ちた教育と研究を展開していった。

ことに、膨大な経学研究を残した中井竹山・履軒兄弟の時がその黄金期であり、さらに、富永仲基、山片蟠桃らの近代的英知が輩出した。

しかし、幕末・明治維新の混乱により、明治2年(1869)に閉校。大正の初めに西村天囚らの奔走によって再興され、武内義雄らの講師陣を擁して大阪の文科大学としての役割を果たしたが、昭和20年(1945)の大阪大空襲により、学舎は焼失した。

ところが、書庫に収められていた書籍は、奇跡的に災禍を免れ、戦後、大阪大学に文学部が創設された際、一括して阪大に寄贈され、現在、それらの貴重資料が、大阪大学附属図書館に収蔵されている。

こうした経緯から、懐徳堂は、二度の歴史の断絶を乗り越えて、阪大の一つの源流と位置づけられているのである。

## 1-2 「懐徳堂」の貴重資料

江戸時代の旧懐徳堂が蔵していた書籍は、明治2年(1869)の閉校によって一旦散逸する。しかし、懐徳堂の貴重資料は、中井竹山・履軒の曾孫に当たる中井木菟麻呂によって保管されていた。そして、明治末から大正初年にかけて、西村天囚の奔走によって財団法人懐徳堂記念会が設立され、懐徳堂学舎が重建されたことにより、中井家所蔵資料が記念会に寄贈され、また、記念会も資料の蒐集・復刊に努めた。

その後、昭和20年（1945）大阪大空襲の際、懐徳堂の建物は消失したが、書庫に収められていた文献は奇跡的に戦災を免れた。戦後、大阪大学に文学部が創設された際、それらの資料約3万6千点が懐徳堂記念会から一括して阪大に寄贈され、やがて「懐徳堂文庫」として附属図書館に收藏されることとなった。

その後も、懐徳堂記念会の資料蒐集活動や関係者からの寄贈などにより、点数を加えながら現在に至っている。その内訳は、漢籍資料を中心に、和書、書簡、書幅、絵画、掛け軸、聯、扇子、印鑑など多種多様な資料からなり、総点数は現在約4万7千点にのぼっている。

このデータベースでは、「懐徳堂文庫」で、この内の約100点を厳選して紹介するとともに、「懐徳堂研究」の内の「全文テキストデータ」では、2点の全文テキストデータを公開する。

## 2. 懐徳堂文庫

本コンテンツは、懐徳堂DBの根幹をなす貴重資料の解題部分である。先ず全体を、資料の関係人物ごとに「三宅石庵関係資料」「中井莞庵関係資料」「五井蘭洲関係資料」「三宅春樓関係資料」「中井竹山関係資料」「中井履軒関係資料」「富永芳春・富永仲基関係資料」「山片蟠桃関係資料」「草間直方関係資料」「中井蕉園関係資料」「並河寒泉関係資料」「中井桐園関係資料」「中井木菟麻呂関係資料」の13類に区分した上で、各々、原則として該当資料を「漢籍」「国書」「その他（器物等）」の順に配列する。各資料の記載方法は、次の凡例の通りである。

### 【懐徳堂文庫解題凡例】

(1) 先ず、全資料について、次の基礎情報を記載する。

「資料名」

「関係人物名」

「数量（冊数）」

「外形寸法（cm）縦×横」

「懐徳堂文庫図書目録該当頁」「（漢籍についてはその）漢籍分類（部、属、類）」

「画像点数」（懐徳堂DBに収録されたデジタル画像データの点数）

「画像番号」（本稿末尾に掲載した画像の通し番号）

(2) これに続いて、解題を、1資料約800字を基準として記載した。また、漢籍・国書については、前記の「懐徳堂DB全コンテンツ凡例」の(2)②で言及した「詳細版書誌情報」を附記する。その項目は、次の通りである。

「見出し（書名、冊数巻数、著者名、その他）」

〔寸法〕

〔版式〕

〔版心〕

〔内題〕

〔外題〕  
 〔刊記〕  
 〔奥書〕  
 〔印記〕  
 〔装訂〕  
 〔備考〕  
 〔蔵書票〕  
 〔付箋番号〕

(3) また、各項目内の凡例・特記事項は次の通りである。

- ・「見出し(書名、冊数巻数、著者名、その他)」……書名が2つある場合(朱子の『論語集註』に履軒の首書(雕題)があるなど)は、『論語集註(論語雕題)』と( )付で列挙する。冊数巻数は「巻数、冊数」の順に記す。著者名および「~著」「~編」「~撰」の区分は、『懐徳堂文庫図書目録』の記載に従う。
- ・〔寸法〕……外形寸法、および(匡郭を有するものは)郭内寸法を、各々縦×横(単位cm)で表示する。
- ・〔版式〕……行数字数は「每半葉」を単位とし、「10行21字」「9行24~25字」のように記す。また、注や序で版式が異なる場合は、「序は8行20字」「注は双行24字」のように記す。
- ・〔書式〕……刊本でない場合は、〔版式〕に替わってこの〔書式〕の項に記載し、「~の紙を使用」として〔版心〕の項目は立てない。たとえば「左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。○行○字」。また、白紙の場合は「無郭無界の紙を使用」と記す。
- ・〔版心〕……版心に書かれた内容を、「(黒魚尾)(一本線)」あるいは「詩経(黒魚尾)(篇名)(巻数)(葉数)」のように上から順に書く。
- ・〔内題〕……数冊に各々内題が表記されており、冊数・巻数以外は共通している場合は、「○○一(~五)」のように略記する。
- ・〔外題〕……「題簽(書題簽)」「打付け書き」「帙題簽」の順に記す。
- ・〔印記〕……特別な場所に押印されている場合のみ、その場所についても注記する。受入印については、本項の末尾に「受入印「昭和29.12.22受入 105046」」のように記す。なお、受入番号が複数に及ぶ場合は、「331(~332)」のように略記する。
- ・〔装訂〕……線装本の場合は、「四針眼訂法」などの装訂に関する情報、および葉

(丁) 数などを記載する。その他の場合は、卷子本・折り本などの形態について記す。

- ・〔備考〕……「水哉館遺書」「懐徳堂遺書」の別など他の各項に包括されない諸情報を記す。
- ・〔蔵書票〕……表紙右下に添付された「遺〇〇」「懐〇〇」などのラベルの番号を記す。この番号は、前者が吉田鋭雄「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」(『懐徳』17号、1939年)の目録番号、後者が同「懐徳堂所蔵懐徳堂先賢著述書目」(『懐徳』19号、1941年)の目録番号に各々対応している。

〔付箋番号〕……1冊毎に挟み込まれている付箋に記された番号を記載する。付箋番号は6桁であるようだが、頭の「0」が付箋に入り切らず、「000309」が「00309」のようにになっている場合もあるので、頭の「0」は省略して下三桁の数字を「309」のように記す。また、番号が複数に及ぶ場合は、「596 (~600)」のように略記する。この番号は、懐徳堂文庫が大阪大学附属図書館に配架された際、配架の順序に従って便宜的に割り振られたもの。

なおDB上では、基礎情報の内の「漢籍分類」は、後述の「3. 漢籍分類解説」にリンクし、また、解題文中の主要な語句は、後述の「7. 懐徳堂事典」にリンクしている。また、DBの解題画面右側には資料のデジタル画像が掲げられ、資料の拡大ボタンも付加されている。

### 【懐徳堂文庫の検索方法】

次に、懐徳堂文庫の検索方法であるが、これには、①「関係人物検索」、②「資料名検索」、③「形状別検索」、④「漢籍分類検索」の4つの方法を考案した。①「関係人物検索」は、その資料の関係人物名から検索するものである。「著者」とせず「関係人物」としたのは、古籍の場合、資料と著者が必ずしも明快な一対一対応とはならない場合があるからである。例えば、『論孟首章講義』は三宅石庵の講義を筆録した書であるが、その記録者は未詳である。また、『論語聞書』は、三宅石庵・五井持軒による『論語』の講義を、受講者が速記し、後に改めて清書したものである。また、図書以外の器物についても、例えば、解師伐袁図は、猿蟹合戦を主題として、岩崎象外が絵を描き、中井履軒がこの絵に賛を書いたものであり、絵画に重点を置くか、履軒の賛に注目するかによって「著者」は異なってくる。こうした事情を踏まえて、「関係人物」という概念を設定したのである。従って、関係人物が複数になる場合もある。

また、②「資料名検索」は資料の読み（50音）による検索であり、ア行からワ行まで、各行ごとに該当資料名を50音順に列挙している。③「形状別検索」は懐徳堂資料の形状が多様であることに鑑み、「書籍」「文書」「器物」の3つの形状ごとに検索できるようにしたものである。「書籍」は漢籍・国書を含む通常の書籍、「文書」は定書・書牘など概ね一枚の紙に記された文書類、「器物」は、書籍・文書以外の多種多様の器物類である。④「漢籍分類検索」は、懐徳堂資料の中心をなす漢籍について、伝統的な四部分類によって検索するものである。但し、四部分類に習熟していない閲覧者の便を図って、後述の「3-1 漢籍目録と分類の歴史」と「3-2 漢籍分類細目解説」を加えた。

本コンテンツの担当者は、懐徳堂研究会メンバー、すなわち湯浅邦弘（大阪大学大学院文学研究科教授）、寺門日出男（都留文科大学文学部教授）、杉山一也（岐阜経済大学経済学部専任講師）、竹田健二（島根大学教育学部助教授）、藤居岳人（阿南工業高等専門学校助教授）、矢羽野隆男（四天王寺国際仏教大学助教授）、神林裕子（甲子園短期大学専任講師）、井上了（大阪大学大学院文学研究科助手）の8名である（所属・職名は平成13年12月現在）。各解題の末尾に、その資料の調査担当者名を附記する。

## 2-1 三宅石庵関係資料

懐徳堂幅（かいとくどうふく）

関係人物名 み やけ せき あん 三宅石庵

数量（冊数） 1幅

外形寸法（cm） 縦39.8×横83.7

画像点数 1

「懐徳堂」の三字を大書した三宅石庵筆の書幅。もとは額に仕立てて、懐徳堂の講堂に掲げてあったが、後に刻額を作って玄関に掲げ、本幅は掛軸に仕立て変えることになったという。「懐徳」とは、徳を懐おもうという意味で、中国の古典に由来する語と思われるが、創設時の関係者の書き残したものがないたため、その出拠については諸説がある。西村天囚は『懐徳堂考』において、『論語』里仁篇の「君子懐徳、小人懐土（君子は徳を懐おもい、小人は土を懐う）」を出拠としてあげ、また別の箇所では、『詩経』大雅皇矣篇の「予懐明德（予明德を懐う）」をあげている。この内、『論語』を出典とする説が通説となっているが、戦後、大阪大学文学部教授となった蔵内数太は、『中庸』にも引かれた『詩経』大雅皇矣篇の句、および『書経』周書洛誥に見える「王伾殷乃承叙、万年其永親朕子懐徳（王殷をして乃ち承叙せし

めば、万年それ永く朕が子を観て徳を懐わん)」を指摘した上で、『書経』の方を出典ではないかとした（「懐徳ということ」『懐徳』54号、1985年）。これは、周公が成王に与えた訓戒の語で、周の武王によって殷は滅亡したが、その子の成王が善政を行えば、殷の遺民は周の厚徳に懐くであろうとの意。蔵内は、大坂城落城後の大坂町民は、いわば殷（商）の遺民に比せられないこともない、としてこの言を重視するのである。

また、中井竹山は、寛政8年（1796）、懐徳堂再建時の「懐徳堂記」において、「懐とは何ぞ。念<sup>おも</sup>うなり。存して諉<sup>わす</sup>れず、循いて違うなきなり。徳とは何ぞ。得なり。夫れ固有の善と当然の則と之を知りて心に得、之を行いて身に得るなり」と説いている。いずれにしても、この書幅には、懐徳堂の基本的精神を道德の重視に求めた石庵の願いが込められていると言えよう。

なお、『論語』里仁篇の「子曰、君子懐徳、小人懐土、君子懐刑、小人懐惠」の解釈については、古注・新注とも、君子と小人の在り方を対比したものと理解する（その場合の刑は法則という良い意味である）が、荻生徂徠<sup>おぎゅうそらい</sup>『論語徴<sup>ろんごちよう</sup>』は「君子徳を懐えば小人土を懐い（土地に安住する）、君子刑を懐えば小人恵を懐う」との別解を提示している。その場合、この里仁篇の孔子の言葉は、『論語』為政篇の「道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以徳、齊之以禮、有恥且格（格は古注によれば正、新注によれば至る）」という徳治主義の主張に類似することとなる。

(湯浅)

中庸懐徳堂定本→35頁参照

中庸錯簡説→37頁参照

#### 万年先生論孟首章講義（まんねんせんせいろんもうしゅしょうこうぎ）

関係人物名 三宅石庵

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦22.7×横16.4

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍21上（経部、四書類）

画像点数 1

懐徳堂初代学主三宅石庵（号は万年<sup>まんねん</sup>）の講義録。懐徳堂が幕府から官許を得た享保11年（1726）、それを祝う記念講演会が10月5日に催された。本書は、その際に三宅石庵が行った講演の筆記録（漢字片仮名交じり文）である。全15丁。筆者は未詳。題名は、『論語』『孟子』各々の冒頭の一章について講じたことに因み、表紙題簽と扉には「万年先生論孟首章講義」と記されている。「論孟首章講義」というのは通称（略称）である。明治44年（1911）、



懷徳堂記念会より刊行された『懷徳堂五種』の中に翻刻されている。本文冒頭には、「官許学問所懷徳堂講義 享保十一年丙午冬十月五日癸亥 萬年三宅先生講」と題した上で、『論語』学而篇冒頭章、『孟子』梁惠王篇冒頭章の順で、各々の書名、首章の意味、文中主要語句の意味などについて、噛んで含めるように解説していく。また、本書の末尾には、「浪華学問所懷徳堂開講会徒」として当日の講演を聴講した78人の名前が列挙されており、その中に五井藤九郎（蘭洲）、富永善右衛門（芳春）らの名が見える。

懷徳堂は、五同志と呼ばれる大坂町人の経済力を基盤として設立され、受講生のほとんどは町人（商人）であった。しかし、石庵は、この講義において、商業活動や営利事業を論ずるのではなく、それらを根底にあって支える「人の道」の重要性を力説している。また、伝統的な儒家思想の中で厳しく対立すると考えられてきた「利」と「仁義」とについて、柔軟な思考を展開している。つまり、仁義の実践者には結果として利がついてまわるという前後関係を想定し、また、「利」そのものには害はないが、それを追求する過度の欲望が弊害を生むという形で、両者を統合してみせるのである。これも、大坂の町に生まれ、町人によって支えられた懷徳堂の大きな特色の一つである。

大正時代に再建された重建懷徳堂において、記念祭恒典を10月5日と定めたのは、この石庵の記念講演の日に基づく。

なお、本資料全体の翻刻・現代語訳は「懷徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について—デジタルコンテンツとしての位置づけ—」（湯浅邦弘、竹田健二、杉山一也、藤居岳人、井上了）として『中国研究集刊』第27号（2000年）に掲載されるとともに、懷徳堂データベースに収録された。

【書誌情報】

まんねんせんせいろんもうちゅうこうぎ  
『萬年先生論孟首章講義』 1冊

三宅石庵述 抄者不明 享保11年 手稿本

〔寸法〕 22.8×16.4。

〔版式〕 無郭無界の紙を使用。10行27字。

〔内題〕 「官許学問所懷徳堂講義」。

〔外題〕 題簽・帙題簽「萬年先生論孟首章講義」。元表紙に打付け書き「萬年先生論孟首章講義」。

〔刊記〕 「享保11年丙午冬十月五日癸亥浪華学問所」。

〔印記〕 新表紙に「懷徳堂図書館」。元表紙に「天生寄進」「懷徳堂図書館」。元表紙裏に「懷徳堂図書館」。1葉表に「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入104591」。

〔装訂〕 四針眼訂法。元表紙に新表紙を付す。全16葉。別に扉1葉あり。

〔備考〕

〔蔵書票〕「遺 1 17」。

〔付箋番号〕「114」。

(湯浅)

**論語聞書 (ろんごききがき)**

関係人物名 三宅石庵、<sup>ごいじげん</sup>五井持軒

数量 (冊数) 6冊

外形寸法 (cm) 縦23.1×横15.6

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍14下 (経部、四書類)

画像点数 7

画像番号 01

三宅石庵・五井持軒による『論語』の講義を、受講者が速記し、後に改めて清書したもの。三宅石庵は懐徳堂初代学主、五井持軒は五井蘭洲 (竹山・履軒の師) の父。全6冊からなり、『論語』全編の講義が収められている。文章は漢字片仮名交じりの口語体で、石庵・持軒の口吻そのままに記録されている。各冊末尾の識語によると、1・6冊目が筆記されたのは宝永3年 (1706)、2・3冊目は正徳2年 (1712)、4冊目は正徳3年 (1713) である。また、講義をした人物は1～3冊は五井持軒、6冊目は三宅石庵であったことが分かる。ただし、4冊目には講義者の名が記されておらず、5冊目には識語がない。

講義が行われたのは懐徳堂創立 (1724年) 以前であるが、すでに石庵と持軒とは親交があった。また、持軒の門人たちが後に石庵の門下生となり、懐徳堂創設に深く関わっていた。従って、本書は草創期懐徳堂の学問的状况を知る上で、極めて貴重な資料である。講義は、朱子『<sup>ろんごしちゅう</sup>論語集注』をテキストとしているが、受講者の大半が大坂の町人であったためか、初学者にも理解できるよう、実生活に即した例を挙げ、受講者を教化しようとする姿勢が窺える。例えば、<sup>しかん</sup>子罕篇第一章「子、<sup>まれ</sup>罕に利と命と仁とを言ふ (孔子は利と命と仁については、減多に口にされなかった)」では、「命」について「天命ナリ」と説明した後、「ツトムベキコトヲツトメザルシテ、アタマカラ天命、天命ト云フテ<sup>らち</sup>埒ヲ明ルハアシキ也。……<sup>たとへ</sup>假令バ病人アリ。……平生ハ無養生ヲシテ、<sup>わずらう</sup>煩テモロクロクニ業モノマズシテ天命ト云フハ、アヤマリ也」のように、極めて具体的かつ平易な講義をしている。また、この章の「利」についての解釈も、注目に値する。「マレニ利ヲノタマフカラハ、ワルヒモノニテハナキ也。利ハ勝手ヨキコト也」というように、商人の利益追求を肯定する点は、旧来の儒教倫理と大きく異なっており、後の懐徳堂にも引き継がれていった。

【書誌情報】

## 『論語聞書』 6冊

五井持軒・三宅石庵述 加藤信成等筆記 正徳三年 吉井克斎等浄書

〔寸法〕 23.1×15.6。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。毎半葉11行、行25字前後。

〔内題〕 「論語聞書」。

〔外題〕 書題簽「論語聞書 幾」。

〔奥書〕 1冊目「論語聞書一 紙数六十一葉 如此ハ本紙ノ事 五井持軒先生講 宝永三丙戌歳八月十六日 加藤信成謹書」。2冊目「論語聞書二 五井持軒先生講 正徳二壬辰歳季春初七日 土橋宗信謹書」。3冊目「右五井持軒先生講 加藤信成聞書也 正徳歳二壬辰仲春四日 土橋宗信謹書写」。4冊目「上論聞書終紙數一百廿八葉 宝永丙戌廿三日 加藤信昌謹書 右之聞書加藤信昌先生傳受之 正徳三癸巳年六月六日 吉井克齊謹書」。5冊目 なし。6冊目「論語 大尾 宝永三丙戌年暮春十七日満坐 三宅氏石庵先生講 後學加藤信昌謹書」。

〔印記〕 「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和26.9.10受入 法文21892 圖」。

〔装訂〕 康熙綴。

〔蔵書票〕 「6 45」。

〔付箋番号〕 「2117～(2122)」。

(寺門)

## 三宅石庵書状 (みやけせきあんしょじょう)

関係人物名 三宅石庵

数量 (冊数) 1帖

外形寸法 (cm) 縦15.3×横34.1

画像点数 1

懷徳堂設立の翌年、三宅石庵が土橋道節へ宛てた書状。本資料において石庵は、道節の住む江戸に火災が起きたことを見舞うとともに、前年に大坂に大火があり、自分も罹災して「他所」に避難したことを述べている。石庵の多松堂<sup>たしょうどう</sup>は、享保9年(1724)3月の大坂大火、いわゆる「妙知焼」により焼失し、石庵はしばらく平野の含翠堂へ身を寄せていた。本資料には「五月十九日」の日付があり、享保10年(1725)5月に書かれたものと考えられている。なお、享保9年5月には懷徳堂が建立され、同年11月には石庵が懷徳堂に居を移しているの  
で、本資料は懷徳堂において書かれたものであろう。

また、本資料において石庵は「此度中井忠蔵其御地へ被参候」(このたび中井翫庵が江戸

に参上する)と述べている。これは、享保10年5月に中井髡庵(忠蔵)や道明寺屋吉左右衛門・備前屋吉兵衛らが江戸に入り、設立まもない懐徳堂の官許を求めて運動したことを指す。懐徳堂の官許について石庵は当初消極的であり、享保9年の時点では、髡庵は懐徳堂の官許を求めていることを石庵に知らせず、運動のため江戸へ行く際にも、石庵に対しては行き先を偽るなどしていた。しかし本資料により、享保10年5月には既に石庵が髡庵の行動を容認していたことがわかる。

石庵の著作は、享保9年の「妙知焼」により一旦すべて失われた。石庵の没後、息子の春楼が父の著述を蒐集したが、これも安永元年(1772)の盗難によって失われた。これらの事情により、石庵の著述としてまとまったものはほとんど残っていない。本資料は、石庵の手に係るものとしても貴重である。

なお、本資料は現在「万年先生遺墨帖」に貼り込まれており、また「石庵先生遺稿」(『懐徳』18号)に翻字が掲載されている。

(井上)

#### 再建前の懐徳堂図(さいけんまえのかいとくどうず)

関係人物名 未詳

数量(冊数) 1帖

外形寸法(cm) 縦54.9×横28.1

画像点数 1

寛政年間に焼失・再建される以前の懐徳堂を描いた図面。作者および作成年次は未詳。現在は、「懐徳堂絵図屏風」(懐徳堂遺物)のうち第1版に貼り込まれている。本資料には「懐徳堂」の名は明記されていないが、図の南端に「此街自東達達西、呼曰尼崎町一丁目」との書き入れがあり、また講堂などを備えている学校施設であることも明らかであるので、懐徳堂を描いたものとわかる。

懐徳堂は、寛政4年(1792)の火災によって類焼したが、中井竹山らの尽力と同志らの協力により、同7年(1795)から8年(1796)にかけて再建された。再建後の懐徳堂が瓦葺きであったことは「懐徳堂瓦当拓本」などより明らかである。また、寛政4年に焼失する直前の懐徳堂にも瓦が用いられていたことは、竹山「懐徳堂記」の記述によっても知られる。しかし本資料においては、懐徳堂の講堂が茅葺きとみえる描かれ方をされている。実際に懐徳堂の講堂が茅葺きだった時期があったとすれば、それは享保9年(1724)の懐徳堂設立から宝暦元年(1751)の改築までの間のことと考えられ、本資料もこの間に作成されたものと考えられる。

なお、再建前の懐徳堂を画いたものとしては、他に天明2年(1782)「大坂学校之図」が

あり、やはり「懷徳堂絵図屏風」に貼り込まれている。

(井上)

## 2-2 中井翫庵関係資料

### 墨菊図 (ぼくぎくず)

関係人物名 泉治 (せんや)、中井翫庵 (なかいしゅうあん)

数量 (冊数) 1 幅

外形寸法 (cm) 縦67.0×横26.3

画像点数 1

菊を描いた墨画。泉治 (せんや) 筆・中井翫庵 (しゅうあん) 賛。賛文には、「墨菊の一幅は泉治なる者の畫 (か) きし所なり。治 時に一斗を飲み、口 嘖嘖して言ふ能はず、足踉蹌として行く能はず。而るに掌を運らして之を構え、能く象形を存するは一奇なり。今や則ち亡し。迺ち蠹殘に忍びず、糊繕して誌す。想ふに戊戌孟春望夜の事なり。甲子正月 翫庵書」とある。

これによれば、この画は享保3年 (1718) 初春の満月の夜、泉治という人物が、歩けない程に泥酔していたにも関わらず、見事に描き上げたものである。酒一斗を飲んだというのは誇張かもしれないが、いずれにしてもかなりの酒豪だったことは間違いない。泉治の没後、翫庵はこの画が紙魚に損なわれてしまうこと (蠹殘) を惜しみ、寛保4年 (1744) 正月、軸に仕立てて賛文を書き入れた。泉治なる人物についての経歴はよく分からない。画面右下にある印の文字は「澳」と読み、泉治の印と思われる。因みに「澳」には悪酔いの意がある。

なお、賛文中の「今也則亡」という一句は、『論語』雍也篇にある、孔子が早死にした愛弟子・顔回を回想して述べた言葉に基づいていると思われる。あるいは泉治なる人物は、不幸にして早死にした、三宅石庵門下の友人だったのかもしれない。だとすれば、この一句からは、翫庵の亡友に対する哀惜の思いを読み取ることができよう。

(寺門)

### 三輪執斎書状 (みわしっさいしょじょう)

関係人物名 三輪執斎、中井翫庵

数量 (冊数) 1 帖

外形寸法 (cm) 縦16.3×横156.0

画像点数 2

三輪執斎より中井翫庵に宛てた書状。本資料において執斎は、懷徳堂が幕府によって官許されたことを祝い、官許のために奔走した翫庵の尽力を労うとともに、「御礼」のため翫庵

が江戸に来ることを勧める。本資料には「六月十九日」の日付があるが、懐徳堂は享保11年(1726)4月に官許を受け、同年10月に官許学問所として最初の講義を行っている。従って本資料は、享保11年6月に書かれたと考えられている。

享保8年(1723)、江戸の菅野兼山すがのけんざんが幕府より校地と資金とを与えられ会輔堂かいほどうを立てたが、時の將軍吉宗はこれに飽きたらず、京や大坂においても人物を得て学問所を設置したいとの意向を持っていた。享保9年(1724)にこれを伝え聞いた執斎は、石庵こそふさわしい人物であると考え、石庵の門人である鬢庵に書状を送り、幕府の意向を伝えたのである。この享保9年の書状は懐徳堂の官許運動の発端となり、執斎は江戸にあって鬢庵らの活動を大いに助けた。執斎は享保11年の本書状において、懐徳堂の官許獲得を「未曾有の御事」とし、鬢庵の「御手柄」と石庵の「徳光」とを讃え、「於拙者も本望大悦に存候」と述べている。執斎の石庵への傾倒ぶりを読みとれよう。

なお本資料の冒頭には、鬢庵の「御叔父御卒去」を悼む文章があり、中井玄意(鬢庵の叔父)の没年を知る手がかりとしても重要である。また本資料は、中井木菟麻呂編「学校建立文書」に収められており、「懐徳堂旧記拾遺」(『懐徳』14号)に翻字されている。

(井上)

## 2-3 五井蘭洲関係資料

### 非物篇(ひぶつへん)

関係人物名 五井蘭洲

数量(冊数) 6冊

外形寸法(cm) 各縦27.2×横17.5

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書13上

画像点数 5

画像番号 02

五井蘭洲の主著で、荻生徂徠の『論語徴』を批判したもの。蘭洲は江戸在住中に荻生徂徠の著に触れ、本書の執筆を開始、蘭洲没後4年にあたる明和3年(1766)、中井竹山によって校訂・浄書された。全6冊からなる本書は、総論である「論語徴」「物茂卿」を筆頭に、『論語』20巻の中の主要な章について、各々まず「徴曰…」として徂徠の解釈を引用し、それに続いて「非曰…」として徂徠批判を展開する、という構成をとる。また、全20巻の後に「非物篇附録」として徂徠の『弁道』に対する批判を記す。竹山の『非徴』とともに、天明4年(1784)に懐徳堂蔵版で刊行された。表紙題簽の外題は、それぞれ「正編非物篇」「続編非徴」と記された。また本書は、平成元年(1989)、懐徳堂友の会から懐徳堂文庫復刻叢書2として復刻刊行されている。

内容は、厳しい徂徠批判に終始しているが、総論部分では、「徂徠は門を閉ざして本を読み、世間との関わりを持たなかった。詰問する者があってもつっぱねるばかり。いかに徂徠が出世したとしてもそれは独りよがりの偏屈なものである」と述べる。これは徂徠の基本的な人間性や勉学の方法に対する批判である。また「徂徠は古言に徴して実証的に解釈したと言っているが、実は多くの主観的解釈を混入させている」と、『論語徴』の解釈全般についても批判する。これは、「徴」という看板とその実態とにずれがあるとの痛烈な指摘である。さらに、「徂徠は梁の皇侃おうがんの『論語義疏』を見ておらず、皇侃・朱子共通の解釈を朱子独自の説として批判するという大きな誤りを犯している」と、『論語』注釈史の立場からも厳しく批判を加えている。このように本書は、徂徠の基本的な人間性や学問の姿勢から個々の解釈に至るまで厳しい批判を展開しており、その精神は、中井竹山の『非徴』にも受け継がれた。

なお「物」とは、徂徠のことを指す。徂徠が物部氏の流れを汲む者として中国風に「物茂卿」と称していたことによる。また「非物」とは、その「物」氏（徂徠）を「非」難するという意味である。

【書誌情報】

『非物篇』<sup>ひぶつへん</sup> 3巻6冊

五井蘭州撰 明和3年 中井竹山手稿

〔寸法〕27.2×18.7。郭内20.6×13.5。

〔書式〕四周双辺、有界、白口、黒魚尾の紙を使用。10行20字前後。版心に「(黒魚尾) (篇名/葉数) 懷徳堂」と記す。各篇の冒頭のみ篇名を記す。

〔内題〕「非物篇 (序/巻数)」。

〔外題〕書題簽「非物篇」。打付け書き「正編」。

〔奥書〕明和三年丙戌長至日。

〔印記〕「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「竹醉日吾以降」「天生寄進」。表紙に「懷徳堂圖書記」。4葉裏に「積善印記」「子慶」「竹山居士」。受入印「昭和28.3.26 受入 78873 (～78878)」。

〔装訂〕四針眼訂法。第1冊 (巻1・2) 42葉、第2冊 (巻3～5) 33葉、第3冊 (巻6～8) 33葉、第4冊 (巻9～12) 33葉、第5冊 (巻13～16) 33葉、第6冊 (巻17～20および附録) 本文25葉および附録17葉。

〔備考〕墨筆で返り点、送り仮名。

〔蔵書票〕「遺 222」。(第2冊以降は「遺 122」。)

〔付箋番号〕「395 (～400)」。

(湯浅)

## 中庸首章解 (ちゅうようしゅしょうかい)

関係人物名 五井蘭洲

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦26.8×横19.0

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍21上 (経部、四書類)

画像点数 1

画像番号 03

朱子の『中庸章句』の第1章に対する五井蘭洲の注解。全1巻。白紙に毎半葉10行で、草書体を用いて記されている。『中庸』の原文以外は、すべて漢字仮名交じり文で書かれており、一部の漢字にはふりがなが施されている。巻頭・巻末には、蘭洲のものとされる序文・跋文を載せているが、作成年代については何も記されていない。懐徳堂文庫所蔵の『中庸首章解』は、抄者未詳の抄本であるが、大阪府立中之島図書館所蔵の同書の表紙には「五井蘭洲先生著並書」とある。

一般に、懐徳堂の『中庸』学と言え、三宅石庵の「中庸錯簡説」を中心とする文献学的研究ばかりが強調されるが、蘭洲の『中庸首章解』は、懐徳堂学派の哲学的研究成果の一端を示す重要な資料である。また同書は、『中庸』の具体的内容を解説するとともに、蘭洲の「天人合一」論がよく現れた資料でもある。「天人合一」とは、「人ノ氣」はすなわち「天ノ氣」であり、したがって人の中に「天理」が内在するという考え方である。ちなみに蘭洲は、この「天人合一」論にもとづいて道徳的実践を説くだけでなく、これを経世論と結びつけ、一概に「利」を否定する従来の考え方に異論を唱え、商人の天賦の「徳性」を肯定し、商売というものは、社会にとって不可欠なもので、これは「道」をおこなうことの一種だと定義している。このように蘭洲の「天人合一」論は、近世社会における庶民の社会的な存在価値を裏づける源泉ともなった。

なお蘭洲の著述の中では、荻生徂徠の『論語徴』を論駁した『非物篇』が最も有名であるが、『中庸首章解』の内容からみて、蘭洲は単に徂徠学を批判するだけでなく、一朱子学者として、朱子学の諸理論を綿密に再検討し、徂徠学に対抗する理論を展開していたことがわかる。

## 【書誌情報】

『中庸首章解』 1巻1冊

五井蘭洲撰 抄者未詳

〔寸法〕 26.8×19.0。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。10行20～25字。注は1格低くし毎行20～25字。

〔内題〕 なし。冒頭に「蘭洲五井先生著」とのみ記す。



〔外題〕打付け書き「中庸首章解 五井蘭洲 全」。帙題簽「中庸首章解 蘭洲撰 全一函 一本 抄本」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和26.9.10受入 33186」。

〔装訂〕四針眼訂法。全32丁。

〔備考〕漢字仮名交じり文。ところどころ漢語にルビを付す。草書体。蘭洲のものと思われる序跋あり。

〔蔵書票〕「懐 10」「7 209」。

〔付箋番号〕「329」。

(神林)

### 瑣語 (さご)

関係人物名 五井蘭洲

数量 (冊数) 2冊

外形寸法 (cm) 縦26.3×横18.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書11下

画像点数 1

画像番号 04

五井蘭洲が著した漢文随筆。全2巻。「瑣語」とは、「ささいなことば」という意味で、逸聞や瑣事を書き留めた書物を言う。蘭洲は、中国・日本の歴史についてや、読書の際に気がついたこと、身の雑記、などを短い文章で綴っている。

本書は、明和4年(1767)に大坂の井上丹六等が、『質疑篇』と合刻して刊行した原刊本である。第1冊は「瑣語上」と題し、第2冊は「瑣語下」と題する。巻末に中井竹山の「瑣語跋」を附する。

例えば、なぜ儒者は「功利」をいやしむのか、という質問に答えて、次のように書いている。「孝子仁人の若きは、国に功有り、人に利有り。亦た何ぞ之を鄙しまんや。(孝行者や仁徳者は、国に対しても功があるし、人に対しても利益がある。どうしていやしむことがあるだろうか)」。功利そのものは悪いことではなく、功利をむさぼることがよくないのだ、と言う。また、「神機火槍」という、火縄銃ではない、<sup>ひうちいし</sup>燧石の新式銃を詳しく紹介している文などには実学的な学風を窺うことができる。

なお、懷徳堂文庫は、この明和4年刊本の他に、天保3年(1832)大坂河内屋宗兵衛等再刻本の『瑣語』も蔵する。また、『瑣語』は『日本儒林叢書』第1巻(東洋図書刊行会、

1927年)にも収められている。その他、懷徳堂文庫には中井履軒著の『瑣語疑文』という著作も収められている。この本は、『瑣語』についての疑問を履軒が記録したもので、さらに竹山の朱筆が入っている。

【書誌情報】

『瑣語』 2巻2冊

五井純禎著 明和4年 大坂井上丹六等刊本

〔寸法〕26.3×18.2。郭内20.0×13.3。

〔版式〕左右双辺。有界。9行20字。跋は6行9～10字。

〔版心〕「瑣語上(～下)(葉数)」。

〔内題〕「瑣語」。

〔外題〕「瑣語 上(～下)」。

〔刊記〕「明和四年丁亥三月 大坂心齋橋筋 松村九兵衛 中橋筋北久太郎町 井上丹六」。

〔印記〕「北山文庫」「穆記図書」「大阪大學圖書之印」「吉田鋭雄蔵書」「古林□」。受入印「昭和31.3.15受入 114084(～114085)」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕各冊表紙右下に「古林來□□藏」と打付け書き。各冊、青色・藤色の不審紙あり。各冊、墨筆で書入れおよびそれに朱筆で句点。北山文庫。

〔蔵書票〕「121.46 SAG 1(～2)支哲」。

〔付箋番号〕「29856(～29857)」

(杉山)

古今通(こきんつう)

関係人物名 <sup>ごいらんしゅう</sup>五井蘭洲

数量(冊数) 7冊

外形寸法(cm) 縦24.8×横16.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書56下

画像点数 1

画像番号 05

五井蘭洲が『古今和歌集』(以下『古今集』)に施した注釈。『古今通』自体の成立は宝暦2～4年(1752～54)頃と推定される。『古今通』には写本が数本あり、懷徳堂所蔵のこの本は、蘭洲の原文に<sup>かとうかげのり</sup>加藤景範が<sup>さんぼ</sup>刪補を加えたもので、巻頭に蘭洲の序、ついで景範の附言があり、全8巻が7冊に綴じられている。書写年代・書写者は未詳。『古今通』8巻は、真名序

を除く『古今集』の全20巻に注釈を施す。各巻の内容は以下の通り。『古今通』巻1…『古今集』仮名序、『古今通』巻2…『古今集』巻1・2・3（春上・下・夏）、以下同様に、巻3…巻4・5・6（秋上・下・冬）、巻4…巻7・8・9・10（賀・離別・羈旅・物名）、巻5…巻11・12・13（恋1・2・3）、巻6…巻14・15（恋4・5）、巻7…巻16・17・18（哀傷・雑上・下）、巻8…巻19・20（雑体・大歌所御歌ほか）。蘭洲には『古今通』のほか『万葉集註』（『万葉集』への注釈）、『源語註』『源語提要』（『源氏物語』への注釈）、『勢語通』（『伊勢物語』への注釈）などの著がある。

『古今通』執筆の意図は、自序によれば、『勢語通』執筆の過程で『古今集』を勘案し、家伝の藤原定家の遺著（『顕註密勘』）や藤原顕昭の注、『古今榮雅抄』、契沖『余材抄』などを参照したが、満足がゆかず、諸説のすぐれているものを抄出し、また自分の見解をも加え、一人娘に残したのだという。『古今集』注釈史上、契沖の『余材抄』は、中世の旧注時代に幕を引く画期的な注釈で、賀茂真淵『古今和歌集打聴』、本居宣長『古今和歌集遠鏡』もそれを契機に成立したが、真淵・宣長と同時期に契沖を参考にしている点で『古今通』も近世的な注釈といえる。ただ蘭洲には、文芸は政治教化に役立つべきだとの儒教的文学観があり、『古今通』にも彼の価値観が盛られていたようである。懷徳堂蔵本は加藤景範の刪補が加えられたものだが、他の写本には刪補の手が入る以前の蘭洲の原文を見ることができ。例えば、『古今集』巻11恋1の「から衣日もゆふ暮になる時はかへすがへすぞ人はこひしき」に対して、蘭洲の原文に「人の子が詠んだのなら親を思うもの、臣下が詠んだのなら君主を思う歌である。契沖が『古今集』の恋歌はすべて男女の恋歌だ、というのは信じがたい」とある。恋歌を男女の恋愛への仮託にすぎないと見なし、そこに人倫や教戒の「真情」を読み取る、これが朱子学者蘭洲の注釈態度である。景範はこのような儒学的文学観が濃厚な箇所を削除している。

#### 【書誌情報】

『古今通』 8巻7冊

五井純禎著 加藤景範刪補 天明五年序 抄（抄者未詳）

〔寸法〕 24.8×16.7。郭内18.6×13.3。

〔書式〕 四周単辺、有界、無魚尾、白口の紙を使用。9行15～20字。

〔内題〕 「古今和歌集（巻数） 通（巻数）」。

〔外題〕 書題簽「古今通一（～七）」。帙題簽「古今通 全一函 七本 蘭洲撰 竹里補 抄本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 各冊第1葉表に「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和26.9.10 受入 33196（～33201）」。

〔装訂〕四針眼訂法。第1冊57葉、第2冊82葉、第3冊94葉、第4冊81葉、第5冊83葉、第6冊95葉、第7冊89葉。

〔備考〕小口書「古今一（～七）」。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕「懐14」「74 203」。

〔付箋番号〕「528（～533）」。

(矢羽野)

### 勢語通（せいごつう）

関係人物名 五井蘭洲

数量（冊数） 4冊

外形寸法（cm） 縦30.5×横19.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書60下

画像点数 2

画像番号 06

五井蘭洲が日本古典の歌物語『伊勢物語』に施した注釈。蘭洲の自筆本で、内巻上下・外巻上下の4冊からなり、宝暦元年（1751）の成立。明治44年（1911）、懷徳堂記念会より刊行された懷徳堂遺書の中に上下2冊で翻刻されている。

当時多くの注が、『伊勢物語』の各段に登場する「男」を在原業平と見、『伊勢物語』全体を元服から臨終に至るまでの業平の一代記とする中で、蘭洲は「男」は必ずしも全てが業平を指すわけではないと考えた。そして『伊勢物語』の内容を分析し、〈業平自身の記述にかかる歴史的事実の部分〉と〈業平以外の者の手になる虚構の部分〉とに二分して、前者を内巻とし後者を外巻とした。蘭洲によれば、男女の色恋沙汰が書かれた部分の多くは業平の真の事跡ではなく、人倫に無益なものに見なされて内巻からは弁別される。自序に「我家の『伊勢物語』として、一人娘に読ませる」とあるように、教育に有益な独自の『伊勢物語』を編纂するとの意図があり、その意味で『勢語通』は純粋な注釈を超えた著述といえる。

中でも大きな特色は、彼の業平観である。蘭洲は業平を〈高貴の血筋に生まれ忠孝の徳をそなえながら、皇室の威勢が藤原氏に奪われた世にあって不遇をかこつ義氣奮発の人〉とみなし、中国古代の不遇の忠臣・屈原くつげんになぞらえる。「文章は実をしるすべきもの」（『蘭洲茗話』）という文学観をもっていた蘭洲は『伊勢物語』に託された業平の憂国慷慨ゆうこくこうがいの「真情」を解明する。例えば、むかし言い寄った女に男が贈った歌「いにしへのしづのおだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな（倭文を織る糸を巻いた苧環（おだまき 糸玉）から糸を次々に繰り出すように、昔の関係を今に戻すことができればなあ）」（第32段）、この恋の歌に対して、蘭洲は「昔は藤原氏以外の諸氏から政府の要職に就いたのだから、藤原氏全盛

の現状を変えて昔に戻したいという意味である。明言がはばかられるので男女のことに託して言うのである」と注している。

なお、蘭洲は日本古典に通じた儒者で、『勢語通』のほか、『万葉集註』、『源語註』、『源語提要』、『古今通』などの著がある。

【書誌情報】

『勢語通』 4冊

五井純禎著 寶暦元年奥書 手稿

〔寸法〕 30.5×19.7。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。7～14行20～25字。注は2格低くし小字で30字前後。

〔内題〕 「伊勢ものかたり 内の巻の上 通第一」など。

〔外題〕 書題簽「勢語通内巻上（～下）」「勢語通外巻上（～下）」。「帙題簽「勢語通 全一函 四本 蘭洲手稿」。

〔奥書〕 「(漢字・変体仮名で) 宝暦元年 冬 しはす筆を冽庵の南窓にとる」。

〔印記〕 各冊、表紙に「懷徳堂圖書記」、見返しに「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。ただし、内巻下・外巻下には「天生寄進」は無し。第一葉表に「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和28.3.26受入 78879(～78882)」。

〔装訂〕 四針眼訂法。内巻上32葉(内、序3葉)内巻下29葉、外巻上52葉、外巻下20葉、全133葉。

〔備考〕 小口書「伊内一(～二)」「伊外一(～二)」。「青色の不審紙あり。懷徳堂遺書」。

〔蔵書票〕 「遺 7 23」。

〔付箋番号〕 「211(～214)」。

(矢羽野)

## 2-4 三宅春樓関係資料

宝暦八年定(ほうれきはちねんさだめ)

関係人物名 <sup>みやけしゅんろう</sup> 三宅春樓

数量(冊数) 1通

外形寸法(cm) 縦14.9×横55.5

画像点数 1

懷徳堂に寄宿していた学生を対象として学寮に掲示された定書。宝暦8年(1758)、懷徳堂二代目学主中井斂庵の死去に伴い、三宅春樓が学主に、中井竹山が預り人に就任した際、制定された。懷徳堂の基本精神を端的に表明するものであり、安永7年(1778)の定とともに最も代表的な規定の一つである。全文は次の通り。

一、書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事

但し、大人小子の辨は、之有るべく候。座席等は、新旧長幼、學術の浅深を以て面々推讓致さるべく候。

一、寄宿の書生、私の他出一切無用為るべき事。

但し、扱る無きの要用、或は其の宿先より断り之有る節は、格別と為すべく候。

一、寄宿の書生、講筵の謝儀は、十五歳より差し出さるべき事。

但し、小兒迄も講筵列座は勿論の義に候。

第1条は、懷徳堂の書生間の交わりについて、貴賤貧富を問わず同輩とすべきこととする。但し、大人と子供の区別はあり、また、座席については、新旧（新参か古参か）、長幼、学問の進度などを指標として、互いに譲り合うこととしている。第2条は、寄宿生について、私事による外出は認めないとする。但し、やむを得ぬ用事やその宿先（勤務先・実家など）から断りがあった場合は例外としている。第3条は、同じく寄宿生について、その謝礼は15歳から納めることと規定する。

(湯浅)

#### 宝暦八年定約附記（ほうれきはちねんていやくふき）

関係人物名 三宅春楼

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦29.7×横21.5

画像点数 3

享保20年（1735）に制定された「播州大坂尼崎町学問所定約」（初期懷徳堂の定約）をもとに、そこに漏れている事柄や実情に合わなくなっている点を、宝暦8年（1758）、三宅春楼が学主就任に際して書き加えた「附記」。末尾には、「三宅才二郎（春楼）謹書」の署名に続き、「五井藤九郎（蘭洲）、中井善太（竹山）、徳二（履軒）」など33名の連署が見える。内容は、すでに規定されていた学主世襲の禁を解く（第1条）、学主と預り人との関係（第2条）、学主預り人の候補の見立て（第3条）、異学者を招かず（第4条）、医書詩文集を講ずるを許す（第5条）、などについての規定である。

このうち、第1条は、初代学主三宅石庵の子<sup>しゅんろう</sup>春楼がこの年三代目学主に就任したことに配慮したものと思われる。また第5条は、懷徳堂で講ずべき文献について、『懷徳堂内事記』享保11年（1726）10月の項に見える学則と同じく、「四書五経道義の書のみ」と規定する。ただし、余力があれば「詩賦文章」あるいは「医術」を、関心のある人に非公式で講じたり、会読したり、あるいはまた、詩や文章の会などを設けることは例外として認めている。そし

て、三宅石庵も、内々に医書や詩集などを講じたこともあるとしている。享保11年の学則や享保20年の「定約」の規定に比べ、教授内容がやや柔軟になっていることが分かる。

(湯浅)

## 2-5 中井竹山関係資料

### 易断 (えきだん)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 5冊

外形寸法 (cm) 縦24.2×横16.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍5上 (経部、易類)

画像点数 1

画像番号 07

中井竹山の『周易』に対する注釈書。一般に、竹山は詩文に優れ、その弟の履軒は経学に優れていたとされるが、竹山の経書注釈には、『易断』のほかに、『詩断』『礼断』『四書断』がある。中でも『易断』は最も内容の完備したものとされており、「善按」「余按」「愚按」(私が考えるに、という意味。「善」は竹山の名、積善による)として、竹山独自の注釈も記されている。

『周易』は、その本文に当たる「経」と「経」の解説に当たる「伝」とからなる。そして「伝」は、「彖伝」2篇、「象伝」2篇、「文言伝」1篇、「繫辞伝」2篇、「説卦伝」1篇、「序卦伝」1篇、「雑卦伝」1篇の計10篇にわけられ、これを「十翼<sup>じゅうよく</sup>」と言う。朱子以前の注釈書では、この「十翼」のうち、「彖伝」「象伝」「文言伝」は、「経」の中に割り付けて解釈されてきたが、朱子の『周易本義<sup>しゅうえきほんぎ</sup>』は、「経」を前に置き、「十翼」を後に置くという具合に、「経」と「伝」を完全にわけて注釈した。竹山は、内題に「周易上経本義」と記していることから、その意識としては朱子に従っているが、実際に『易断』全5冊は、第1冊から第4冊までが「彖伝」「象伝」「文言伝」を含む「上経・下経」、第5冊が「繫辞伝」「説卦伝」「雑卦伝」という朱子以前の構成のままになっている。ちなみに弟の履軒は、『周易逢原』において、この朱子の見解をさらに飛躍させ、大胆なまでにテキストの改訂を行っている。履軒の『周易逢原』は、平成9年(1997)に懷徳堂文庫復刻叢書10として復刻刊行されている。

『易断』は基本的に注釈の部分だけが毎半葉10行の罫紙に記されている。竹山の他の経書注釈が、履軒の『雕題』と同様、いずれも刊本の欄外に記されていることから、おそらくこの『易断』は、初め刊本の欄外に記されていたものを、竹山が浄書して一冊にまとめたものと考えられる。ただし浄書した後も校定をくり返したため、訂正箇所が非常に多く、一説に

同書は定本ではなく草稿であるとする。

なお『易断』第5冊の巻末に「明年三年丙戌季冬廿七日卒業」とあるが、これは「明和三年（1766）」の誤りであろう。

【書誌情報】

『<sup>えきだん</sup>易断』 5巻5冊

中井竹山著 手稿

〔寸法〕24.2×16.7。郭内18.5×14.1。

〔書式〕四周単辺、有界の紙を使用。10行18～20字。版心に「(黒魚尾) 卷之 (横二線)」とある。

〔内題〕「易断一 (～五)」。

〔外題〕書題簽「易断 一 (～五)」。帙題簽「易断 竹山手稿 全一函 五本」。

〔奥書〕巻末に「明年三年丙戌季冬廿七日卒業」とある。

〔印記〕各冊の冒頭に「天生寄進」「懷徳堂圖書記」。受入印なし。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕欄外に小字で書入れあり。ところどころ付箋に書入れあり。行間に墨筆で文字を訂正、挿入している。

〔蔵書票〕「遺 1 28」。

〔付箋番号〕「1 (～5)」。

(神林)

詩断 (しだん)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 4冊

外形寸法 (cm) 縦25.1×横13.9

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍8上 (経部、詩類)

画像点数 1

画像番号 08

『詩経』に対する中井竹山の注釈書。全8巻。『詩経』は中国古代の歌謡を集めた本で、儒教の經典のひとつである。その『詩経』に対して、南宋の朱熹が注釈を施したものが『詩集伝』である。この本は、明代に六順堂が『詩経奎壁集註』という名で刊行した朱子『詩集伝』に対して、中井竹山が句読を施し、かつ欄外に自らの注釈を書き入れた手稿本である。

書名について、内題は「詩経」となっているが、書き題簽は「詩集伝」となっており、朱熹による序文「詩経集註序」に対し、竹山は「注」<sup>まさ</sup>に「伝」に作るべし」と書き入れて



いる。つまり、竹山はこの本を『詩集伝』としてとらえていた。しかし、中井竹山の注釈書という意味では、この本は『詩断』と名付けるのが妥当であろう。

構成は、第1冊「詩集伝 春」と名付け、序と国風を収め、以下第2冊「夏」は国風、第3冊「秋」は小雅、第4冊「冬」は大雅と頌を収める。

詩経本文の押韻字には、字の左上に朱で共通の印を付けている。第1冊のみ、注に句読が入っている。また、欄外に諸儒の説を引用したり、「竹山曰」として自らの主張を述べている。

孔子刪詩説について、孔子が三千篇を刪って三百篇にしたのではない、と竹山はいう。孔子の時代に伝わっていた詩はすでに三百余篇であり、孔子はその中から刪去したのだ、とする。しかも、現在伝わっている三百余篇は、孔子の三百余篇とは異なると考えている。

また、弟の履軒はその『詩経』注釈において「魯頌」を「僭詩」であるとして刪っている。しかし、竹山は「魯頌」冒頭に「魯は「頌」有りて「風」無し。深く疑う可し」と書き入れをして、疑いを残しながらも刪ってはいない。

なお、この注釈は動植物の和名を記してある点が特徴的である。例えば、「雉鳩」には「邦名 美佐伍」と注し、「蕨」には「邦名 和良飛」などと注をしている。

#### 【書誌情報】

『詩経（詩断）』 8巻4冊

南宋朱熹撰 六順堂黄振宇刊本 中井竹山首書句読 手稿

〔寸法〕 25.1×13.9。郭内12.5×11.1。

〔版式〕 四周双辺。無界。9行17字。注は双行17字。

〔版心〕 「詩経奎壁集註（黒魚尾）（篇名）（巻数）（葉数）」。

〔内題〕 「詩経」。朱熹序には「詩経集註序」とあり、竹山はそれに「注當作傳」と書入れ。

〔外題〕 書題簽「詩集傳 春」「詩集傳 夏」「詩集傳 秋」「詩集傳 冬」。帙題簽「『詩断』全一函 四本 竹山手稿」。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104608（～104611）」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 『懷徳堂文庫図書目録』では『詩経』の書名で著録。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 1 29」。

〔付箋番号〕 「12（～15）」。

（杉山）

## 礼断 (れいだん)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 5冊

外形寸法 (cm) 縦24.6×横13.9

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍10上 (経部、礼類、礼記之属)

画像点数 1

画像番号 09

中井竹山の『礼記』についての注釈書。全10巻。『礼記』は、中国古代の社会規範である「礼」についての記事を集めた本である。『礼記集註』は、その『礼記』に対して、元の陳澧<sup>ちんこう</sup>が注釈を施した本である。この注釈は朱子学の立場から『礼記』に注釈を施したもので、明代の『五経大全』<sup>ごきょうたいぜん</sup>のひとつ『礼記大全』は、この陳澧『礼記集註』をもとにして作られたものである。この本は、書林宝善堂が刊行した重刊監本『礼記集註』の欄外に、竹山が先人の注釈や自分の注釈を書き入れたものである。全書に竹山による書き入れがあり、諸儒の説を引くほか、「竹山曰」として自説を書き入れている。また、何らかの理由で失われた葉を、手書きで補っていることがしばしばある。

なお、帙の中に明治辛卯 (明治24年 [1891]) の次のような文書が入っている。「禮記集註五冊／吾懐徳堂圖書存者亡幾竹山先生手澤／存焉者経籍中唯有是一書而已矣永／為家寶什襲珍藏／明治辛卯之夏／中井生成文甫謹識 (印) / 吉田 雲正弼謹書 (印)」

これにより、本書が明治2年 (1869) の懐徳堂閉鎖の後も、中井家で大切に保存されていたことが分かる。

### 【書誌情報】

『禮記集註 (禮断)』 10巻5冊

元陳澧撰 書林寶善堂重刊本 中井竹山首書 手稿

〔寸法〕 24.6×13.9。郭内12.0~14.3×11.3~13.8。

〔版式〕 四周双辺 (四周单辺の葉もあり)。有界。10行18字。注は改行して1格低くし双行17字。

〔版心〕 「礼記 (巻数) (黒魚尾) (篇名) (黒魚尾) (葉数)」あるいは「憲臺禮記 (黒魚尾) (篇名) (巻数) (黒魚尾) (葉数)」など。

〔内題〕 「禮記集註」。

〔外題〕 書題簽「禮記集註 □□□」「禮記集註 □之四」「禮記集註 五之六」「禮記集註 七之八」「禮記集註 九之十 尾」。帙題簽「礼断 全一函 五本 (礼記集註) 竹山手稿」。

〔刊記〕「書林寶善堂雲齋鄭世魁梓行 重刊監本禮記集註」。

〔印記〕「天生寄進」「懐徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104612 (～104616)」。各冊裏表紙裏に印記の痕跡らしきものあり。

〔装訂〕五針眼訂法。

〔備考〕各冊書根に「礼記 □之□」「礼記 三之四」「礼記 五之六」「礼記 七之八」「礼記 九之十 尾」と墨書。全書に青い不審紙あり。『懐徳堂文庫図書目録』には『禮記集註』の書名で著録。懐徳堂遺書。

〔蔵書票〕「遺 1 30」。

〔付箋番号〕「596 (～600)」。

(杉山)

### 春秋左伝比事蹄 (しゅんじゅうさでんひじてい)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 縦27.4×横17.5

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍12上 (経部、春秋類、左伝之属)

画像点数 1

画像番号 10

中井竹山が、中国宋末元初の呉化龍ごかりりゅうの著『左伝蒙求さでんもうきゅう』に対して施した注釈。自筆稿本。宝暦6年(1756)付の自序があり、竹山27歳頃の著作。自序に次いで「凡例十一則」を付し編纂の体例を掲げる。奥書に「明和六丑年(1769)二月かいはんじんきたきゅうたろうまち 開版人北久太郎町四丁目日本屋丹六」とあり、この稿本は出版に際しての版下と考えられるが、出版には至らなかった。呉化龍の『左伝蒙求』は、児童教育書『蒙求もうきゅう』の形式に倣い、『春秋左氏伝』242年間の様々な出来事を一句四字の題句に要約し、類似の句を対にして並べた書で、「平王遷都 隠公摂位」に始まる計656句から成る。自序に、呉化龍の『左伝比事』に注釈したというが、これは『左伝蒙求』を改名したものと思われる。『春秋左伝比事蹄』(以下『比事蹄』と略す)の「比事」とは『礼記』経解篇の言葉「属辞比事あひせ(辞を属せ事を比ぶ)は『春秋』の教えなり」にもとづき、類似の事件を並べくらべるの意味。また「蹄」とは、うさぎを捕らえるわなのことで、『莊子』外物篇の比喻「蹄は兎をうるに在る所以、兎を得て蹄を忘る」にもとづき、真理を得るための手段の意味。『比事蹄』の書名は、この書が初学者の『左氏伝』理解の手掛かりになればという意図を示している。『比事蹄』成立の経緯が自序に記されている。竹山がまだ幼い頃、師の五井蘭洲が、呉化龍の『左伝比事』を「暗誦せよ」と手渡した。竹山は、この書の有益なることを知ったが、惜しいことに、四字に要約された題句についての解

説や注釈が無く、当時の学力では意味を容易に理解できなかった。蘭洲から「試みにこれに注釈をつけよ」と命ぜられ、題句に関係する『左氏伝』の文を抜粋して書き留めていった。しかし、学力不足のため作業を中断。その後、児童に教えた際、てほどの次の教材にと思いつき、旧稿を整理補正して完成させたという。竹山は『春秋』三伝（『春秋』の3種の解釈『公羊伝』『穀梁伝』『左氏伝』）のうち、原理的観念的解釈を主とする『公羊伝』『穀梁伝』よりも、歴史事実に詳しい『左氏伝』を重視した。多くの事柄を網羅した『比事蹄』は、竹山の経学の原点をなす著作といえる。

【書誌情報】

『春秋左傳比事蹄』 3巻3冊

中井積善著 寶曆6年 手稿 版下原本

〔寸法〕 27.5×17.5。郭内21.4×14.8。

〔版式〕 四周単辺。無界。11行26字。本文および注は1格低くし毎行25字。注は双行。

〔版心〕 白口。黒魚尾。

〔内題〕 「春秋左傳比事蹄（巻数）」。

〔外題〕 書題簽「左傳比事蹄 上（～下）」。第2冊・第3冊のみ表遊紙に「春秋左傳比事蹄 中（～下）」と墨書。帙題簽「左傳比事蹄 全一函 三本 竹山手稿」。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 各冊、第1葉表に「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「天生寄進」、本文冒頭に「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104645（～104647）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。第1冊68葉（内、自序6葉、凡例2葉、標題3葉、本文57葉）、第2冊63葉（内、標題3葉、本文60葉）、第3冊56葉（内、標題3葉、本文53葉）、全187葉。

〔備考〕 第1冊巻頭に宝曆6年（1756）付けの中井積善「比事蹄自序」あり、「積善之印」「子慶」の印あり。巻末に刊記の下書き「明和六丑年二月 作者 尼崎町老丁目 中井善太 開板人 北久太郎町四丁目 本屋丹六」。各冊本文および欄外に墨筆で書入れあり。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 1 39」。

〔付箋番号〕 「31（～33）」。

（矢羽野）

四書句辨（ししょくべん）

関係人物名 中井竹山

数量（冊数） 1冊

外形寸法 (cm) 縦26.3×横16.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍21上 (経部、四書類)

画像点数 2

画像番号 11

四書に見られる字句の似通った表現だけを抜粋した書。中井竹山の手稿本。例えば本書の冒頭には、『大学』の「天子より以て庶人に至るまで」という句が挙げられているが、これに続き『孟子』公孫丑篇下の「天子より庶人に達<sup>いた</sup>るまで」、同・滕文公篇上の「天子より庶人に達<sup>いた</sup>るまで」とを列挙し、各句の下には、各々の出典を明記している。その出典は略号によって記され、例えば「聖經」とは『大学』の「経」の部分<sup>いた</sup>を指す。これは、朱熹の『四書集注』成立後、『大学』が孔子の言葉を記した「経」1章とその経を解釈した「伝」10章に分けられたことによる。また「上孟」「下孟」とは、『孟子』を大きく前半と後半に分けた言い方で、『論語』についても同様に、「上論」「下論」と記されている。また検索に便利のように、「～章」として、引用箇所<sup>いた</sup>の冒頭部分を明記している場合もある。このように、以下、『大学』『論語』『孟子』『中庸』の順に、同一あるいは類似した表現があれば、随時それを列挙している。

ちなみに、富永仲基に『出<sup>しゅつじょうご</sup>定後語』という仏典研究の方法を論じた書物があり、その中でたとえ同じ言葉であっても、誰が、いつ、どのような意味で発言したか、すなわち「三物五類」によって理解しなければならないとしている。あるいは竹山も同様の趣旨で、たとえ同類の表現であっても、そこに違いがあることを見極めようとし、その準備段階としてこの『四書句辨』を編纂したとも考えられる。

【書誌情報】

『四書句辨』 1巻1冊

中井竹山撰 手稿

〔寸法〕 26.3×16.0。郭内20.8×14.0。

〔書式〕 左右双辺、有界、白口、黒魚尾、横一線の紙を使用。10行17～21字。出典は小字で双行。

〔内題〕 「四書句辨」。

〔外題〕 書題簽「四書句辨」。帙題簽「四書句辨 竹山手稿 全一函 一本」。扉にも「四書句辨」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104674」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全27丁。

〔蔵書票〕「遺 1 62」。

〔付箋番号〕「332」。

(神林)

竹山先生首書近思録 (ちくざんせんせいしゆしよきんしろうく)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 4 冊

外形寸法 (cm) 縦26.8×横17.8

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍74下 (子部、儒家類、性理之属)

画像点数 2

画像番号 12

『近思録』に対する中井竹山の注解書。寛文13年 (1673) 京都吉野屋権兵衛刊の宋・葉采<sup>しょうさい</sup>集解『近思録』を使用して、欄外に他説や自分の説を書き入れている。

『近思録』は朱子と呂祖謙<sup>りよそけん</sup>との共著で、初学者に対する朱子学の入門書と位置づけられる書。全622条を「道体」「為学」等の14門の項目に分類し、朱子学の基本的な理念について解説する。竹山は諸儒の説を引いてその内容を注釈しているが、その中では『朱子語類』等から引いた朱子の説が圧倒的に多い。これは竹山自身がやはり基本的に朱子学者であったことを示すものであろう。その他の儒者の説としては李退溪<sup>りたいけい</sup> (1501~1570) の学説を引いている点が注目される。李退溪は李氏朝鮮の朱子学者で、江戸期の儒学にも大きな影響を与えたとされる。また、竹山は「万年先生曰」「春楼曰」「宅氏曰」などと三宅石庵・春楼父子の学説も所々引用している。

以上のように本書においては諸儒の説を引くことが多く、竹山自身の見解は決して多くない。実際のところ、全編で「竹山曰」と冠されるのは8条ほどに過ぎない。しかし、その中には竹山独自の観点が示されるものもある。例えば、巻1「道体類」において程伊川の「既に是れ塗轍<sup>とてつ</sup> (車のわだちのこと) なれば、却って只だ是れ一箇の塗轍のみ」の語に見える「塗轍」について、諸学者は「理が実現された道徳」の意としたうえで、「理」が道徳に従って表れることを「好事 (好いこと)」と解するが、その見解は正しくないと竹山は批判する。竹山自身の見解が多くないのは、独自の見解を提示するよりも朱子の意を祖述することが懐徳堂学主としての自身の任務だと彼が考えていたことを表すものかもしれない。

なお『近思録』は、懐徳堂でテキストとしても用いられていた。天明2年 (1782)、竹山が学主に就任した当時の懐徳堂カリキュラムでは、一月のうちに2日・7日の夜は『近思録』の講義が行なわれていた。

【書誌情報】

『きんしりく ちくざんせんせいしゆしよきんしりく近思録 (竹山先生首書近思録)』 14巻4冊

宋朱熹・呂祖謙同輯 宋葉采集解 寛文13年 京都吉野屋権兵衛刊本 中井積善首書 手稿

〔寸法〕 26.8×17.8。郭内20.0~20.4×14.7~14.9。

〔版式〕 四周双辺。無界。9行18字。注双行。ただし、「序」は7行15字。「跋」は9行17字。

〔版心〕 「(黒魚尾) 近思録 (巻数) (葉数)」。

〔内題〕 「近思録巻之一 (~十四)」。

〔外題〕 第1冊「近思録 一~二」。第2冊「近思録 三~五」。第3冊「近思録 六~九」。第4冊「近思録 十~十四」。帙題簽「近思録 全一函 四本 竹山首書」。

〔刊記〕 第4冊の巻末に「徒維禁灘寛文癸丑年 石渠堂重校梓 姑洗月焉逢敦牂日 柳馬場通二條下町 吉野屋権兵衛刊行」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「葑山堂藏」。受入印「昭和29.12.22受入 104648 (~104651)」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 第1冊表紙右上に「道體類 一卷 為學類 二巻」と朱書打付け書き。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 1 40」。

〔付箋番号〕 「40 (~43)」。

(藤居)

### 中庸懷徳堂定本 (ちゅうようかいとくどうていほん)

関係人物名 三宅石庵、中井竹山

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦28.0×横18.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍17下 (経部、四書類)

画像点数 2

画像番号 13

三宅石庵の「中庸錯簡説」に基づいて定められた懷徳堂独自の『中庸』のテキスト。「中庸錯簡説」とは、朱熹が定めた『中庸』の章立てに誤りがあり、第16章は、本来、第24章の後ろにあるべきだとする説。これは、「誠」という概念を『中庸』の中心に据える懷徳堂学派の学説によるものである。「誠」は第20章以降に頻繁に現れる概念で、これを境に『中庸』

の主題を、前半は「中」、後半は「誠」と分けることができる。ところがこの「誠」は、前半部分に属する第16章に唐突に一度だけ出てきている。そこでこの第16章を前半部分から抜きさることで、「誠」の概念が整然と解明されると同時に、第15章の末尾の「子曰く、父母は其れ順なるかな」も、第17章の冒頭の「子曰く、舜は其れ大孝なるか」とうまくつながる。また第16章を、後半部分に属する第24章の後ろに挿入することで、第24章の末尾の「至誠は神の如し」と第16章の冒頭の「鬼神の徳たる、其れ盛んなるかな」、ならびに第16章の末尾の「夫れ微の顕なる、誠の四<sup>おお</sup>可からざる、此の如きかな<sup>かく</sup>」と第25章の冒頭の「誠なる者は自ら成るなり。而して道は自ら<sup>みちび</sup>道くなり」もうまくつながり、「誠」の意義も明確になる。

本書は、このことを示すために、従来の第15章、第17章、第24章、第16章、第25章の計5章を、それぞれ第15章、第16章、第23章、第24章、第25章と称して、その冒頭に列挙し、その後には『中庸錯簡説』の全文を付し、最後に「皇和天明三年歳次癸卯重陽節・津国大阪府懐徳書院教授竹山居士中井積善撰并書」と記している。天明3年(1783)とは、中井竹山が預り人から学主となった翌年であり、懐徳堂の指導者として「中庸錯簡説」を改めて手写していることがわかる。懐徳堂文庫所蔵の『中庸懐徳堂定本』は、巻末に中井蕉園の識語が付されており、これは寛政12年(1800)に竹山の手稿本をもとに前川虚舟(利渉)が刻成したものの拓本である。

#### 【書誌情報】

『中庸懐徳堂定本』附「中庸錯簡説」 1巻1冊

中井竹山撰 拓本

〔寸法〕28.0×18.0。

〔版式〕無郭無界。5行10字。「中庸錯簡説」は每折6行。行12字。朱子と張栻の往復書簡部分は1格低くし毎行11字。中井蕉園の識語は全13行。毎行19字。

〔内題〕「懐徳堂考定中庸」。冒頭に「中庸定本」と1葉に1文字ずつ記す。

〔外題〕書題簽「中庸定本」。帙題簽「懐徳堂考定中庸 附 中庸錯簡説 拓本 全一函 一帖 石庵考定 竹山編並書」。

〔刊記〕「懐徳堂考定中庸」に「大日本 津国浪華後学 中井積善子慶 書於薜荔窩」。「中庸錯簡説」に「皇和天明三年歳次癸卯重陽節 津国大阪府懐徳書院教授 竹山居士中井積善撰并書」。蕉園の識語に「寛政十二年庚申冬十二月 曾弘謹識」。巻末に「前川利渉鑄」。

〔印記〕表紙に「懐徳堂圖書記」。扉に「大阪大學圖書之印」「懐徳堂圖書記」。初折の裏に「天生寄進」。「中庸懐徳堂定本」の冒頭に「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和26.12.22受入 104595」(以上、朱印)。「中庸定本」の4字の前に「懐徳堂(割印)」。「水哉館」。「中庸定本」の4字の後に「幽人之印」「積徳之印」「懐徳堂(割印)」。



「懷徳堂考定中庸」の冒頭に「懷徳堂（割印）」「往者余弗及來者吾不聞」。「懷徳堂考定中庸」の最後に「積善印記」「竹山居士」「懷徳堂書院教授」「懷徳堂（割印）」。「中庸錯簡説」の冒頭に「懷徳堂（割印）」「雖無文王猶興」。「中庸錯簡説」の最後に「積善印記」「子慶」「懷徳堂（割印）」。「蕉園識語」の冒頭に「懷徳堂（割印）」。「蕉園識語」の最後に「天骨之印」「吳海漁隱」「懷徳堂」「虚」「舟」（以上、黒印）。

〔装訂〕 折り本。全16折。

〔備考〕 帙の中の文書に「竹山手筆をもとに、寛政12年前川虚舟が刻成したものからとる」とある。なお冒頭の「中庸定本」の4字は中井履軒の手筆をもとにしている。

〔蔵書票〕 「遺 1 21」。

〔付箋番号〕 「681」。

(神林)

#### 中庸錯簡説 (ちゅうようさっかんせつ)

関係人物名 三宅石庵、中井竹山

数量 (冊数) 1軸

外形寸法 (cm) 縦28.1×横285.4

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍17下 (経部、四書類)

画像点数 1

画像番号 14

朱熹以来の『中庸』テキストの章の並びに、誤りがあるとする懷徳堂独自の学説を述べたもの。この説は三宅石庵によって立てられ、中井竹山が補完した。「錯簡」とは、文章が間違っていて前後しているという意味。紙が発明される以前の書物は、竹や木の簡に文字を記し、それを並べてひもで綴じたため、一旦、そのひもが切れると簡の順序は交錯してしまい、これを「錯簡」と言ったのがこの語の由来である。

『中庸』は、もともと五経の一つである『礼記』の中的一篇であったが、宋代の頃から重要視されるようになり、朱熹はこれを『論語』『孟子』、そして同じ『礼記』の中的一篇である『大学』と合わせて注釈をした。これが『四書集注』である。『礼記』中の『中庸』は章に分けられていないが、朱熹はこれを全33章に分けた。これについてまず異論を唱えたのが伊藤仁斎である。仁斎は『中庸』を大きく二つにわけ、第1章から第15章までの「上篇」が真の『中庸』であり、第16章以下の「下篇」は孔子の教えを補う内容ではあるが、すべて『中庸』の原文ではないとした。中でも「下篇」に属する第16章と第24章については、孔子の教えに反するものであるとしている。この仁斎の見解に対して、石庵は、仁斎が最も疑問視した第16章のあるべき場所が間違っていると考えた。そして本来、この第16章は、同じく

仁齋が疑問視した第24章の後ろに置くべきだとした。懷徳堂文庫所蔵の『中庸錯簡説』は、こうした石庵の説を、竹山が補い手写したもので、冒頭に朱熹と張<sup>ちやうしよく</sup> 栻の往復書簡を挙げ、次に「積善、謹みて按ずるに云々」として、この議論の問題点を示し、立説の経緯ならびにその根拠を述べ、最後に「(第16章を第24章の後ろに置けば) 文意はなはだ順、珪瑁<sup>けいぼう</sup>あい合<sup>すこし</sup>い、毫<sup>くいちがい</sup>も齟齬するなし」とまとめ、巻末に「安永紀元壬辰之冬・大阪後学中井積善謹識」と記している。

なお、この「中庸錯簡説」は、後に武内義雄によって、仁齋の説と合わせて補完され、『易と中庸の研究』(『武内義雄全集』巻3所収、角川書店、1979年)の中にまとめられた。

【書誌情報】

『中庸錯簡説』 1巻1軸

中井竹山撰 手稿

〔寸法〕 28.1×285.4。郭内23.8×270.0。

〔書式〕 四周花枠。有界。全90行。毎行9～11字。朱子と張栻の往復書簡部分は1格低くし毎行10～11字。

〔内題〕 「中庸錯簡説」。

〔外題〕 書題簽「中庸錯簡説 竹山先生撰并書」。帙題簽「中庸錯簡説 全一函 一卷 竹山撰並書」。

〔奥書〕 巻末に「安永紀元壬辰之冬 大阪後学中井積善謹識」。

〔印記〕 巻頭に「懷徳堂圖書記」「懷徳堂(割印)」「竹酔日吾以降」「天生寄進」「大阪大學圖書之印」。巻末に「臣積善」「子慶」「竹山居士」「懷徳堂」。受入印「昭和29.12.22受入 104594」。

〔装訂〕 卷子本。

〔蔵書票〕 「遺 6 20」「財団法人懷徳堂記念会印」。

〔付箋番号〕 なし。

(神林)

社倉私議 (しゃそうしぎ)

関係人物名 中井竹山

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦27.3×横17.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書11下

画像点数 2

画像番号 15

中井竹山が「社倉」について論じた経済政策の上申書。安永3年(1774)上申。「社倉」とは、飢饉に備えて米を貯蓄しておいたり、その米を農民に貸し付けたりする制度。竹山は、播州龍野藩の藩主脇坂侯に、この制度を実施することを提起した。これはその上申書の手稿本である。

寛政6年(1794)跋の拙修齋叢書本には、巻末に附録として「社倉之事」という文がつけられている。これは、拙修齋叢書本『社倉私議』を刊行する際、彼の著書である『草茅危言』の中に社倉の概要を説明した文章があったため、それを附録としてつけたものである。しかし、この手稿本にはそれがない。そのかわりに朱子の文集から、社倉に関する記録などを書き抜いた「社倉事目 勅命并跋語附」がつけられている。

この本は全56葉からなり、1葉から24葉までは「社倉私議」、25葉から56葉までは「社倉事目 勅命并跋語附」となっている。

竹山が提起した「社倉」の実施法は、次のようである。毎年、藩と民間から掛米を1000石ずつ拠出し、それを社倉に積み立てる。藩主はその掛米を借り上げ、藩の借金の返済にあてる。藩主は借り上げた掛米の利足米を、毎年社倉に出し、それを利米とする。5年後には、利米が2000石になるので、それを社倉の元米とする。この社倉の元米を民間に貸し付けたり、窮乏の際に使う。後にこの政策は、竹山の弟子の小西小西澹齋こにしたんさいにより、龍野藩で実施された。

吉田鋭雄「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」(『懷徳』17号)が、「(『社倉私議』の)手稿本は散佚して遺書中にない」と記していることから、当時この手稿本は懷徳堂の蔵書ではなかった。この本には「月明荘」の印記が2カ所見られ、反町茂雄の弘文荘を経た本であることが分かる。その他に「上野蔵書」の蔵書印、「上野精一氏寄贈」の寄贈印があることから、上野氏(元懷徳堂記念会理事、朝日新聞社社主)が弘文荘から買い、それを懷徳堂記念会に寄贈したものであると考えられる。なお、懷徳堂文庫は、この手稿本の他に、寛政6年(1794)跋の拙修齋叢書刊本『社倉私議并附録』も蔵有する。

#### 【書誌情報】

『社倉私議』 1冊

中井竹山著 安永3年上申 手稿

〔寸法〕 27.3×17.7。郭内20.5×13.6。

〔書式〕 四周双辺、無界、白口の紙を使用。9行18～23字。

〔内題〕 「社倉私議」。

〔外題〕 書題簽「社倉私議 竹山履軒両先生 自書 卓識」。帙題簽「社倉私議 中井積善自筆草稿」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 1葉表に「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「上野蔵書」。24葉裏に「積

善」(黒印)、「月明荘」。25葉表に「上野蔵書」。56葉裏に「月明荘」。1葉表に「上野精一氏寄贈」の寄贈印。受入印「昭和32.1.14受入 119163」。

〔装訂〕仮綴じ。全56葉。1～24葉は「社倉私議」。25～56葉は「社倉事目 勅命并跋語附」であり、朱熹の社倉に関する記録などを書き抜いている。

〔備考〕帙題籤右下に「上野蔵書」小印。

〔蔵書票〕帙右下に「財団法人懷徳堂記念会印」「79 15」。表紙右下に「財団法人懷徳堂記念会印」。懷徳堂遺書。

〔付箋番号〕「194」。

(杉山)

### 草茅危言 (そうぼうきげん)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 5冊

外形寸法 (cm) 縦22.1×横15.6

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書12上

画像点数 1

画像番号 16

中井竹山による経世の論。時の老中・松平定信まつだいらさだのぶの求めに応じて献上したもの。中井竹山手稿本。この本はその草稿本であると思われる。「草茅」は、草むら、転じて民間・在野の意。「危言」は、『論語』憲問篇の「邦、道有れば、言を危けわしくし行ないを危しくす」(国に正しい道が行われている時は、言葉も行動も厳しくしてよい) という、孔子の言葉に基づいたもの。在野の士・竹山が、太平の世にあつて自分の意見を忌憚なく述べた、という趣旨の命名と思われる。自序には、「愚ぐ(自分を謙遜して言う)の茲の編ひを腹稿ふくこう(あらかじめ腹の中で文章の大体をまとめておくこと)すること久し」とあるので、この書に著した内容については、以前から構想していたようである。

著作としてまとめられた経緯については、西村天因『懷徳堂考』に詳しい。それに拠れば、天明8年(1788)6月4日、柴野栗山しばのりつざん(寛政の三博士の一人)の推挙により、竹山は大坂滞在中の松平定信に召見され、政務について諮問された。その後、「以来何事に依らず存じ寄り候そうろう義ども、追々申し上げ」るよう、定信から伝えられた。その内命に従って、自らの国家・社会・学問等に対する意見を著し、同年、最初の一巻を献上した。全5巻の完成は寛政3年(1791)である。なお、松平定信は、竹山との会見の前年、天明7年(1787)に老中に就任している。老中が直接、市井の儒者に諮問するというのは、極めて異例のことであり、当時の竹山の評価がいかに高かったかを物語っている。後の寛政の改革において、『草茅危

言』は多大な影響があったとされている。

なお本書は、昭和17年(1942)、懷徳堂記念会から、刊本が出版されている。

【書誌情報】

『<sup>そうぼうきげん</sup>草茅危言』 5冊

中井竹山撰 寛政元年自序 寛政8年脇屋愚山跋 手稿

〔寸法〕22.1×15.6。郭内19.8×13.2。

〔書式〕左右双辺、無界白口、無魚尾の紙を使用。9行18~32字。

〔内題〕なし。

〔外題〕「草茅危言 宮」「草茅危言 商」「草茅危言 角」「草茅危言 徴」「草茅危言 羽」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和27.3.13受入 文67475 圖」。

〔装訂〕四針眼訂法。原装薄表紙。後に厚表紙を付している。

〔備考〕切り貼り多数あり。

〔蔵書票〕「遺 1 50」。

〔付箋番号〕「909~ (913)」。

(寺門)

竹山先生国字牘 (ちくざんせんせいこくじとく)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 9冊

外形寸法 (cm) 縦24.3×横16.5

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書12下

画像点数 3

画像番号 17

中井竹山が知人や門人から問われた学問・政治・経済など種々の問題について答えた手紙(漢字片仮名交じり文)を集めたもの。「牘」とは手紙のこと。「尺牘」「書牘」とも言う。原本は、懷徳堂文庫蔵であるが、竹山自筆の部分と他人が写した部分とが混在している。全84篇。内11篇を欠く。また、全9冊の内、1冊は「続編」であり、本編に漏れたもの8篇および附録「社倉の事」1篇を収録する。さらに、これらとは別に『竹山先生国字牘附卷』1冊があり、「斎藤高寿与竹山先生書」3篇等を収録するが、筆写未詳である。明治44年(1911)、懷徳堂記念会発行の『懷徳堂遺書』には、原本の内30篇を選んで活字翻刻したものが収めら

れている。本書には、懷徳堂関係の公式記録類からは窺い知ることのできない具体的な情報や、学問・政治・経済などに対する竹山の率直な意見が記されており、懷徳堂の全体像を知るための貴重な資料である。

例えば、読書について、単なる「博学」はたいてい「雑学」になって役に立たない。肝心なのは、四書五経の内のどれでもよいから、一部ずつ自らの務めとして毎日読み、読み終えたらまた繰り返して読むことだ、と目的の定まらない読書（乱読）を戒め、経書の熟読・精読を勧めている（「答藤江生」）。

また、「為A所B」の語法について、「為」を去声（現代中国音の第4声）に読み、「所」字を「被」「見」（～らる）という受け身に理解して「Aの為にBせらる」と読むのは本邦諸儒の誤解であり、正しくは、「AのBする所と為る」と読むのが正しいと説く（「答魚石」）など、懷徳堂学派の漢学の知識や基本的姿勢を表す資料が多い。

【書誌情報】

『竹山先生国字牘』 9冊

中井竹山撰 天明2年 手稿

〔寸法〕 24.3×16.6。郭内18.7×12.5。

〔版式〕 左右双辺、有界、白口、線魚尾の紙を使用。9行25字。各冊の目録部分のみ無郭無界の紙を使用。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 第1冊から第8冊は「竹山先生国字牘 一（～八）」。第9冊のみ「竹山先生国字牘続編」。ただし全て替表紙。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 各冊の目録部分に「大阪大學圖書之印」「懷徳堂図書館」「天生寄進」。第9冊1葉表に「大阪大學圖書」。受入印「昭和27.3.13受入 67480（～67487）」。第9冊のみ受入印「昭和29.12.22受入 104664」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 第7冊原表紙に打付け書きで「答大室第一書」、第8冊原表紙に打付け書きで「答藤江貞蔵書」と墨書。

〔蔵書票〕 「遺 1 51」。

〔付箋番号〕 「412（～420）」。

（湯浅）

非徴（ひちょう）

関係人物名 中井竹山

数量（冊数） 8冊（1冊欠）

外形寸法（cm） 各縦27.2×横17.8

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書13上

画像点数 5

画像番号 18

中井竹山の主著で荻生徂徠の『論語徴』を批判したもの。竹山の手稿本は8冊からなり、1冊～5冊目に各2巻、6・7冊目には各3巻、8冊目には4巻の計20巻を収録している。天明4年（1784）、五井蘭洲の『非物篇』とともに、懐徳堂蔵版で刊行された。『非物篇』の精神を継承し、その続編に当たるとの意識から、表紙題簽には「続編非徴」と記された。ただし、その後、手稿本の第1冊目（学而・為政の2巻を収録）は失われ、1988年に懐徳堂文庫復刻叢書1として復刻刊行された際には、懐徳堂所蔵の刊本でその部分を補っている。

全体は、巻頭の「総非」という総論に始まり、以下、学而篇から堯曰篇<sup>ぎょうえつえん</sup>までの各章について、『非物篇』の内容を補いながら注釈を加えている。その基本的姿勢は、荻生徂徠批判で一貫しており、例えば、「総非」では、「非に曰く、吁嗟徂来（徂）物氏、學術の病、其の症、自ら大いに名を<sup>もと</sup>奸むるに在り」と、物氏（徂徠）の学問の弊害が「名」をあげることにつとめるという尊大な態度にあることを指摘し、また、その根本的な原因は、徂徠が純粋な学術的態度からではなく、伊藤仁斎への対抗意識から『論語』注釈を行ったことにあると説いている。さらに、徂徠の学は時の政事や風俗を乱し、志に燃えた若き学生たちに「妖妄邪誕<sup>と</sup>の癩」（あやしく乱れたなおりにくい病）を植えつけるものである、と厳しく批判している。

本書には、権威に屈することのない強烈な批判精神が見られると言える。もっとも徂徠批判については、朱子学の正統化を意図した寛政異学の禁という時代の潮流も無関係ではない。しかし、こうした批判精神は、『非物篇』や『非徴』にのみ突出した現象ではなく、竹山の弟の中井履軒にも、また、それに続く学者たちにも貫かれた、懐徳堂精神の一つであった。

なお「物」とは、徂徠のことを指す。徂徠が物部氏の流れを汲む者として中国風に「物茂卿」と称していたことによる。また「非徴」とは、その徂徠の『論語徴』を「非」難するという意味である。

#### 【書誌情報】

『<sup>ひちよう</sup>非徴』 3巻8冊（8冊中第1冊闕）

中井竹山撰 手稿

〔寸法〕27.4×17.6。郭内20.4×13.5。

〔書式〕四周双辺、有界、白口、黒魚尾の紙を使用。10行20字前後。版心に「(黒魚尾) (篇名/葉数) 懐徳堂」、各篇の冒頭のみ篇名を記す。

〔内題〕内題「非徴卷之三」(卷之一、二闕)。

〔外題〕書題簽「非徴」。打付け書き「続編」。

〔印記〕表紙に「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。表紙裏に「懷徳堂圖書記」。1葉表に「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104622(～104628)」。

〔装訂〕四針眼訂法。第2冊(卷3・4)33葉、第3冊(卷5・6)38葉、第4冊(卷7・8)36葉、第5冊(卷9・10)30葉、第6冊(卷11～13)33葉、第7冊(卷14～16)28葉、第8冊(卷17～20)38葉。

〔備考〕墨筆で返り点、送り仮名。各篇の頭に朱筆で圈点。本文に朱筆で読点。

〔蔵書票〕「遺 1 33」。

〔付箋番号〕「519(～525)」。

(湯浅)

### 蒙養篇(もうようへん)

関係人物名 中井竹山

数量(冊数) 2帖

外形寸法(cm) 縦32.6×横13.4

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書22下

画像点数 3

画像番号 19

中井竹山が年少者向けに分かりやすく「人の道」を箇条書き(漢字仮名交じり文)にした書。全53条。草稿では「奠陰消息」と題していたが、後に「蒙養篇」と改称した。明治44年(1911)に、懷徳堂記念会から『懷徳堂五種』の一つとして活字翻刻されている。読者対象は、主として年少者(町人)であるため、そこに説かれる倫理は、家庭内の倫理、学習の心得、商業倫理などが中心であり、特に、「孝」の精神を説く条が多数を占めている。また、習字の手本を意図して「候文」で記されている。

例えば、「孝」については、冒頭の第1条に、「父母によくお仕えするのを孝といい、年長者によくお仕えするのを悌と名付ける」と「孝」「悌」をまず第一の徳目として掲げている。そして第2条で、「孝悌の二字は日夜心がけて、一生忘れてはならない」とそれを強調している。また、第16条では、「孝」について具体的に、「親に仕えるというのは、(口先だけではなく)手足の働きを第一とすべきである。子は親の恩愛に甘えて孝行を怠りやすい。よくよく心がけねばならない」、第30条では「一つのことを行うにも、それが親の心に叶うかどうかをよくよく考えねばならない」と説くなど、懷徳堂で「孝」が重要な理念として掲げられていたことが分かる。



また、商業活動にともなう「利」について、第25条に、「商人が商業活動によって得る利益は、武士の知行（土地支配による利益）、農民の作徳（年貢を納めた後に残る純益）に相当する。それらはみな商・士・農それぞれの「義」であり「利」ではない。ただし、分不相応の高い利益を貪るような気持ちを「利欲」といい、これはよこしまな誤った道に落ちるものであり、義に背く行為である」と述べ、第26条でも「町家（商家）は利欲が肝心と考えるのは、大いなる誤りである」と説く。このように竹山は、商業活動を、商人の「義」と論じ、それ自体は決して非難されるべきものではないと断言した。ここには、「義」と「利」についての柔軟な思考が窺える。これも、大坂の町に生まれた懐徳堂の大きな特色の一つである。

**【書誌情報】**

『蒙養篇』<sup>もうようへん</sup> 2冊

中井竹山撰 手稿

〔寸法〕 32.7×13.5。郭内29.5×12.7。

〔書式〕 四周双辺、有界、版心のない紙を使用。2行6～7字。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 「蒙養篇一」「蒙養篇二」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 各冊に「天生寄進」「懐徳堂圖書記」。第2冊末に「積善印記」「竹山居士」。受入印なし。

〔装訂〕 折り本仕立て。

〔備考〕

〔蔵書票〕 各冊表紙に「遺 12 161」。第1冊表紙に「遺 161 竹山先生書 蒙養篇一 懐徳堂蔵」。第2冊表紙に「遺 161 竹山先生書 蒙養篇二 懐徳堂蔵」。

〔付箋番号〕 なし。

(湯浅)

**逸史 (いっし)**

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 13冊

外形寸法 (cm) 縦29.3×横19.9

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書30上

画像点数 1

画像番号 20

中井竹山が著した徳川家康の一代記。竹山の手筆定稿。自序に拠れば、完成までに「三紀

(36年間)」を要し、その間に五たび稿を変え、天明年間(1781~1788)に完成したという。最後に加えられた「進牋」が寛政11年(1799)であるから、最終的な完成までは、およそ50年の歳月を要したことになる。竹山が最も力を尽くした著述であると言えよう。ただし、「題辞」(全体の概要・主題を述べたもの)が明和7年(1770)に書かれていることから、ほぼその頃に原型が出来上がり、その後推敲を重ねていったものと思われる。その後、寛政8年(1796)に竹山の高弟・脇屋蘭室(脇愚山)が、序文を書いている。寛政10年(1798)、竹山の子・蕉園が江戸に下った際、『逸史』の副本を携えさせて、親交のあった儒者達に見せたことが契機になり、同年11月、同書を幕府に献上するよう命が下った。本書は、寛政11年(1799)に献上したものの副本である。後に『逸史』は、嘉永元年(1848)に並河寒泉によって刊行されているが、本書は、その際の底本となった。

『逸史』は、表面的には徳川家康を賛美し、徳川幕府に阿ったもののようにも見えるが、決してそうではない。自序によれば、大坂の人々が豊臣勲臣で、家康の功績を正当に評価せず、悪口ばかり言うので、この書を著したとのことである。また、「進逸史牋」の本文一行目、「英」字の最終画が書かれていないことも注目される。これは書き誤りではなく、中国の避諱の習慣(帝王の諱を憚って、その字を書く場合は、最終画を書かないこと、欠画という)に倣ったものである。ここでは恐らく、後桃園天皇(1758~79)の名(英仁)を憚ったものであろう。この欠画を「進逸史牋」冒頭部に用いることによって、竹山は自らの尊皇の立場を明らかにしているものと思われる。

なお、竹山が幕府に上呈した『逸史』献上本は、現在、江戸幕府以来の貴重古書・古文書などを管理する内閣文庫に収められている。また、献上の経緯の詳細を記した「逸史献上記録」が『懐徳』13号に翻刻されている。

#### 【書誌情報】

『逸史』 13巻13冊

中井竹山撰 寛政11年 手稿

〔寸法〕29.3×19.9。郭内25.4×16.8。

〔書式〕四周双辺。10行20字。版心に「逸史(巻数)幾年(葉数)懐徳堂」と記す。

〔内題〕「逸史」。

〔外題〕「逸史」。打付け書き「幾年至幾年 子(丑・寅…)」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懐徳堂図圖書記」「大阪大學圖図書之印」。受入印「昭和29.12.22 受入104629(～104641)」。

〔装訂〕康熙綴。

〔蔵書票〕「遺 8 35」。

〔付箋番号〕なし。

(寺門)

**逸史進牋草稿** (いっししんせんそうこう)

関係人物名 中井竹山

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦26.2×横16.8

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書30下

画像点数 1

画像番号 21

中井竹山がその著『逸史』を幕府に献上するに際して記した上奏文の草稿等をまとめたもの。「牋」は漢文の上奏文のこと。「逸史を進むるの牋」草稿、「進牋ノ和解(牋の趣旨を和文で詳説したもの)」等からなる。寛政8年(1796)に『逸史』を完成した竹山に対して、寛政10年(1798)11月、同書を献上するよう命が下る。竹山は献上するにあたり、新たに「逸史を進むるの牋」および「自序」を作成して『逸史』に添付した。その作成の過程で、草稿と「和解」、さらに『逸史』本文の表記の可否についての質問状を添付して、有識者や大坂の奉行所等に意見を求めたようである。質問状には所々付箋が貼られ、その回答が記されている。こうして広く他者の意見に耳を傾け、十分に推敲を重ねた上で、最終的に「牋」を完成させたのである。

実際に『逸史』清書本と対照してみると、やはり所々異なっているところが見られる。興味深い例を挙げれば、草稿段階では「一葵傾日(ひまわりの花が太陽の方に傾くように、人民が君主の徳を仰ぎ従う意)」となっていた句が、清書本では「藿葉傾日(意味は一葵傾日とほぼ同じ)」と書き改められている。これは、草稿の「葵傾」の二字を、葵が傾く、すなわち徳川家(三つ葉葵は徳川の家紋)の没落を願ったものと曲解されることを危惧して、改めたものであろう。幕府献上に際して、一字一句に至るまで注意をはらっていた様子が窺える。

**【書誌情報】**

『進逸史牋』1巻 『進牋ノ和解』1巻 『進牋草稿』1巻 1冊

中井竹山撰 寛政11年 手稿

〔寸法〕26.2×16.8。郭内20.3×14.2。

〔書式〕『進逸史牋』『進牋草稿』は四周双辺、有界の紙を使用。10行20字。

『進牋ノ和解』は左右双辺、有界の紙を使用。9行21～29字。

〔版心〕『進逸史牋』『進牋草稿』は版心に「懷徳堂」と記す。

『進牋ノ和解』は白口。無魚尾。

〔内題〕薄表紙に打ち付け書き。「進逸史牋」「進牋ノ和解」「進牋草稿」。

〔外題〕書題簽「逸史進牋草稿」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104643」。

〔装訂〕四針眼訂法。原装『進逸史牋』3葉、『進牋ノ和解』9葉、『進牋草稿』3葉の3部の書を合本し、厚表紙を付けている。

〔備考〕『進逸史牋』には句読点、『進牋ノ和解』には余白・欄上への書入れ、付箋の貼りつけ、『進牋草稿』には返り点・送り仮名・句読点あり。

〔蔵書票〕「遺 1 37」。

〔付箋番号〕「389」。

(寺門)

#### 逸史自序進牋質疑 (いっしじじょしんせんしつぎ)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦23.9×横16.8

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書30下

画像点数 1

画像番号 22

中井竹山が幕府に『逸史』を献上する際、新たに添付することになった「進逸史牋」「自序」の表記や押韻等についての質問状。作成時期は、本文中に「男(息子)曾弘(竹山の子・蕉園の名)、去年東下ノ時」という記述があるので、寛政11年(1799)であることは間違いない。ちなみに、蕉園は寛政10年(1798)、『逸史』の副本を携えて江戸に赴いている。同書の上部には朱筆で、下部には墨で書かれた、質問に対する回答が、付箋で貼りつけられている。付箋の筆者について、西村天因『懷徳堂考』は「林祭酒(当時の大学頭、林述斎のこと)の朱批(朱筆で書かれた意見)、古賀精里(竹山の友人で、寛政三博士の一人)の墨批(ぼくひ)とも覚しきものあり」と述べている。実際、下部の付箋には、上部の付箋の意見を受けて、「イカニモ祭酒ノ通可ナラン」という記述がある。すなわち竹山は、まず林述斎に意見を求め、次いで下部の付箋の筆者(古賀精里か)に意見を求めたと推測される。

三者の間答で興味深い例を挙げれば、駢儷文(一句四字六字の、対句を多用する韻文)について、竹山が自己の考えを示して意見を求めた箇所、述斎が「コレマデ合点セザリキ。

この此説ニテ始メテ發明（よく分からなかったことが明らかになる）シタリ」と述べている。竹山には『詩律兆』という、詩の韻律に関する著述があるが、この問答から察すると、韻文全般に対して大学頭を上回る学識を有していたようである。この資料からは、『逸史進牋草稿』と同様、竹山が『逸史』献上に際して周到な準備をしていたことを窺い知ることができる。

## 【書誌情報】

『逸史自序進牋質疑』 1冊

中井竹山撰 寛政11年 手稿

〔寸法〕 23.9×16.8。郭内18.7×12.9。

〔書式〕 左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。9行20～31字。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「逸史自序進牋質疑」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104644」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全9葉。

〔備考〕 欄上に朱筆の付箋、欄脚に墨筆の付箋あり。

〔蔵書票〕 「遺 1 38」。

〔付箋番号〕 「390」。

(寺門)

## 懷徳堂記 (かいとくどうき)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1帖

外形寸法 (cm) 縦27.5×横108.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書40上

画像点数 2

画像番号 23

中井竹山が撰した碑文の拓本。享和元年(1801)刻。「懷徳堂記」は、寛政8年(1796)の懷徳堂再建に際して竹山が撰した文であり、懷徳堂内にも掲示されていた。この文を石に刻した碑を拓本に取ったものが本資料であり、碑文は竹山が自ら書したものである。なお、碑の現物の所在は未詳である。

本資料は、まず懷徳堂の設立から説き起こし、「懷徳」の名称に因んで学者の心構えを説く。次いで寛政年間の懷徳堂焼失と復興に言及し、同志や学生らの献身的な協力を讃える。

そして孔子の意志に倣<sup>なら</sup>って教育を行っていくことを宣言し、学問に志のある者を歓迎すること、聖賢<sup>せいけん</sup>を誘<sup>そし</sup>る者の入門を拒むことなどを述べ、弟子たちに向けては学習に励むべきことを指示する。竹山は「懷徳書院揭示」や「定」などの規定を作成し、学生たちの生活態度を厳しく戒めた。本資料は、これらの規定より更に進んで、竹山が理想とする学生について具体的に語っており、懷徳堂の再建後において、竹山の考えがますます強く反映されていったことを示している。

なお懷徳堂文庫には、本資料以外にも、「懷徳堂記帖」（三宅石庵の「懷徳堂」題字を有す）および、「懷徳堂記額」（懷徳堂の講堂に掲げられていたもの）が収められている。また「懷徳堂記」は、竹山の文集である『奠陰集』にも収められている。

(井上)

### かはしまものかたり

加藤竹里、中井竹山、中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦26.8×横17.9

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書61上

画像点数 3

三宅石庵・磬庵の門人である加藤景範<sup>かとうかげのり</sup>（号は竹里<sup>たかさと</sup>、字は子常）が、山城国葛野郡川島村<sup>かわしまむら</sup>（京都桂の近辺）に住む義兵衛<sup>ぎへえ</sup>の行状を和文で記したもの。表紙題簽には変体仮名で「かはしまものかたり」と記され、巻首に「革島語序」とする中井履軒の序があり、巻末に「明和辛卯（8年 [1771]）十一月」の中井竹山の跋がある。本文27丁、跋4丁からなる。懷徳堂蔵板。内容は、明和7年（1770）、養母に対して孝養をつくしたことにより「孝子」として幕府から表彰された義兵衛の行状を和文で紹介・顕彰するもの。岩崎象外の挿絵を5点付している。川島村は竹山の妻の実家（革鳴家）の所在地で、竹山もしばしばこの地を訪れて義兵衛の孝状を知り、その表彰を領主鷹司家などへ働きかけた。また、竹山自身、『孝子義兵衛記録』を著したほか、『子華孝状<sup>しかこうじょう</sup>』では、懷徳堂に学んだ稲垣子華（浅之丞）の孝状を紹介し、また、龍野藩儒の股野玉川<sup>こうふめいせいへん</sup>の『孝婦鳴盛編』に跋文を記し、龍野に住む女性「よし」を孝婦として賞賛するなど、積極的な孝子孝婦顕彰運動を展開している。懷徳堂における「孝子」の顕彰については、すでに中井磬庵の『五孝子伝』（1739）があるが、本書も、「孝」に重きを置く懷徳堂の倫理観を表した重要資料である。また、当時、江戸幕府が編纂を進めていた『孝義録』との関係も注目される。

なお、懷徳堂文庫には、この加藤景範関係の資料として、その書簡を集めた『加藤竹里書簡集』自筆本二帖、五井蘭洲・中井竹山・履軒などの詩文を竹里が編集した『国儒雑著』3

冊などが収められている。

【書誌情報】

『かはしまものがたり』 1巻1冊

加藤竹里撰 中井履軒序 中井竹山跋 岩崎尚之画 明和8年 刊本

〔寸法〕26.8×17.9。

〔書式〕無郭無界。7行23字前後。版心に「(圈点) (葉数)」を記す。

〔内題〕「革島語序」「(変体仮名で) かはしまものかたり」。

〔外題〕書題簽「(変体仮名で) かはしまものかたり」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「懷徳堂圖書記」「懷徳堂蔵」。受入印なし。

〔装訂〕四針眼訂法。全34葉。内、序3葉、本文24葉(岩崎象外の挿絵5点を含む)、  
附録3葉、跋4葉。

〔蔵書票〕「懷 135」「78 270」。表紙裏にも「78 270」。

〔付箋番号〕付箋破損。

(湯浅)

詩律兆 (しりつちょう)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 縦25.2×横17.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書65下

画像点数 3

画像番号 24

中井竹山が漢詩中の近体詩の詩作法を整理集成した百科事典的な書。安永5年(1776)に大坂加賀屋善蔵等によって懷徳堂蔵版として刊行されている。第1冊は巻1から巻3、第2冊は巻4から巻6、第3冊は巻7から巻11までを収めている。

巻1から巻9までは五言律詩、七言律詩及び七言絶句を平仄<sup>ひょうそく</sup>(漢字の発音上の区別)別に整理し順序よく並べる。その詩句例は唐宋元明各時代の著名な詩から選んでいる。そして、巻10は余考として体格等について述べ、巻11は付録として詩論8篇を収めている。例えば、巻1冒頭では五言律詩の正格で恒調の例として杜甫の「兗州の城楼に登る」、李白「塞下の曲」、岑参<sup>しんじん</sup>の「左省の杜拾遺<sup>さしやう</sup>に寄す<sup>としゅうい</sup>」等、11首を取り上げている。また、巻11の詩論の中では、「大出子友に答うの書」が興味深い。この中で竹山は日本の詩人が音韻に疎いことや中国の詩に対する知識の浅いことを批判する。一方、竹山自身は懷徳堂において唐宋明の詩を

広く門人に読ませ、詩作にあたっては音韻に注意し、平易を心懸けさせ、字句の法に乖くもの、体裁のよくないものは添削を加えるという。そして、十分に詩作の基礎ができた上で詩の格調について論じ、他人の作の模倣を戒めていると説く。

懐徳堂では宝暦8年(1758)から詩の講会が始まっており(「宝暦八年定約附記」第5条による)、漢詩文の実作も行なわれていたようである。『詩律兆』自序も宝暦8年に書かれており、懐徳堂で使用するためのテキストとして、この『詩律兆』も生まれたものと考えられる。当時の知識人は、漢詩、特に近体詩を作成できることが教養として求められていた。本書の存在は、竹山が一代の優れた文人であったことを表すものである。

【書誌情報】

『詩律兆』 11巻3冊

中井積善著 安永5年 大坂加賀屋善藏等刊本 懐徳堂藏版

〔寸法〕25.2×17.7。郭内20.0~20.4×13.5~13.8。

〔版式〕四周双辺。「自序」は無界。6行9字。「凡例」は有界。10行19字。「目録」は有界。「余考」は有界。10行20字。「附録」は有界。10行20字。上記以外は各詩を区切る界はあるが、詩中は無界。各巻末の解説も無界。12行22字。

〔版心〕「詩律兆(黒四角魚尾)(巻数)(篇名)(葉数)懐徳堂」など。

〔内題〕「詩律兆巻之一(~十一)」。

〔外題〕第1冊「詩律兆 序凡例目録五律上中下 卷之一至三」。第2冊「詩律兆 七律上中下 卷之四至六」。第3冊「詩律兆 七絶上中下餘考附録 卷之七至十一終」。帙題籤「詩律兆 竹山撰 全一函 三本 板本」。

〔刊記〕第3冊の巻末に「發行 書肆 京三條通升屋町 出雲寺文次郎 同寺町 通松原 勝村治右衛門 同三條柳馬場 堺屋仁兵衛 江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛 同二丁目 須原屋新兵衛 同淺草芽町二丁目 須原屋伊八 同芝神明前 岡田屋嘉七 尾州名古屋本町通 永樂屋東四郎 同小牧町 美濃屋伊六 紀州若山駿河町 阪本屋喜一郎 大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛 同心齋橋通安土町北 加賀屋善藏 板」とある。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「大阪大學收藏圖書印」(表紙裏にあり)。「天囚書室」「懐徳堂圖書記」「碩園記念文庫」「大阪大學圖書」「讀我書屋主人」。受入印なし。

〔装訂〕四針眼訂法。第1冊全62葉(ただし、最終葉は裏表紙に貼り付けられる)。第2冊全43葉。第3冊全69葉。

〔備考〕第1冊中の「自序」に「宝暦戊寅三月」の日付。第3冊巻末に「安永丙申仲冬」の日付の中村有則による跋あり。



〔蔵書票〕各冊表紙右下に「懷 44」「63 104」。第1冊表紙右上に「4 101」、第2冊表紙右上に「4 102」、第3冊表紙右上に「4 103」。

〔付箋番号〕「858 (～860)」。

(藤居)

### 奠陰文集並詩集 (てんいんぶんしゅうならびにししゅう)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 20冊

外形寸法 (cm) 奠陰文集、詩集ともに縦26.1×横17.3 ただし文集第8冊のみ縦26.1×横17.9、詩集第2冊のみ縦25.7×横17.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書74下

画像点数 2

画像番号 25

宝暦から享和期に至る約50年間 (18世紀後半) にわたる中井竹山の詩文集。「奠陰」とは淀川の南の意。竹山の住居すなわち懷徳堂は、大坂北船場の尼崎町一丁目にあった。これはまさに淀川の南岸にほど近い。彼の詩文集が「奠陰」と名づけられたのはその住居の所在に基づく。

懷徳堂文庫所蔵の手稿本は、その整理時の誤りから文集入りの帙を第1函、詩集入りの帙を第2函としている。しかし、「先詩後文」が本来の順序であり、正されるべきであろう。20冊のうち詩集は8冊、文集は12冊。その中に詩千四百余、文四百三十余を収める。この手稿本は詩文おのおの製作年代順に並べられており、詩文の一つ一つからその時々の竹山の思いや交流関係の移り変わりを窺うことができる。また、『奠陰集』は明治44年 (1911)、懷徳堂記念会により『懷徳堂遺書』の一つとして活字翻刻されている。こちらは詩集が古詩、近体詩等に、文集が論、説、伝等に体別分類によって編集されている。

『奠陰集』中には三百人近い人名を見ることができ、懷徳堂の学主・預り人として活躍した竹山の交流関係の広さが窺い知られる。例えば、『詩集』巻5には「混沌社諸友と墨江の舟中に遊びて作る」と題した詩があり、竹山と混沌社との親密な関係が窺える。また、『詩集』巻2や巻3には幕府大番頭で大坂城在番であった堀田出羽守正邦<sup>ほった でわのかみまさくに</sup>に贈った詩が数首収められており、預り人として精力的に武家と接触していた竹山の姿勢が窺える。

竹山の詩の題材は広汎で、例えば、『詩集』巻2「日本武尊」<sup>やまとたけるのみこと</sup>「楠中將」<sup>くすのきちゅうじょう</sup>のように歴史上の人物に材を取ったもの、同じく巻2「千里鏡」のように当時はまだ珍しい存在であった望遠鏡を題材としたものなど多種多様にわたる。その中でも印象的なのは自らの家族に対して贈った歌である。『文集』巻4「女布美の埋銘」<sup>むすめふみのまいめい</sup>で竹山は幼くして亡くなった娘に対す

る痛切な心情を記している。逆に弟の履軒に子が生まれたときには五首もの慶びの詩を贈り、それらは『詩集』巻2に収められる。竹山の家族への思い入れがわかるようである。『奠陰集』にはこれらの他、『中庸錯簡説』『非物篇序』（共に『文集』巻8）なども収められている。

【書誌情報】

『奠陰文集 並 詩集』 20巻20冊

中井積善著 手稿（遺） 写本

文集 12巻12冊

〔寸法〕 26.1×17.3。第8冊のみ26.1×17.9。郭内20.2～20.8×13.8～14.3。

〔書式〕 第1冊、第2冊は左右双辺、有界、白口、黒魚尾の紙（以後①と称する）を使用。10行22字前後。第3冊は①を使用。ただし、第3、4葉の間に①を付箋としてさしはさむ。第4冊は①を使用。ただし、第16～19葉は左右双辺、無界、白口、黒四角魚尾、版心下部に「懷徳書院藏」と記した紙（以後、②と称する）を使用。7行13字前後。第5冊は左右双辺、有界、白口、黒魚尾の紙（①とは小異あり。以後、③と称する）を使用。ただし、第10～13葉は②を使用。10行20字。第25～32葉は左右双辺、有界、白口、黒四角魚尾の紙（以後、④と称する）を使用。10行20字。第6冊は④を使用。ただし、第24～26葉、第35～36葉は、四周双辺、有界、白口、黒四角魚尾、版心下部に「懷徳堂」と記した紙（以後、⑤と称する）を使用。10行20字前後。第7冊は左右双辺、有界、黒四角魚尾、版心に「大日本史 懷徳堂藏」と記した紙（以後、⑥と称する）を使用。11行17字。ただし、第9～12葉、第15～27葉は④を使用。10行20字。第13、14葉は②を使用。10行20字。第28～36葉は⑤を使用。10行20字。第8冊は四周双辺、無界、白口、黒四角魚尾の紙（以後、⑦と称する）を使用。10行20字。ただし、第11葉は⑤を使用。第21～24葉は左右双辺、有界、黒四角魚尾、版心に「逸史 懷徳堂」と記した紙（以後、⑧と称する）を使用。10行20字前後。第9冊は⑤を使用。10行20字。ただし、第21、22葉は⑦を使用。10行20字。第32～34葉は無郭無界の紙を使用。10行20字。第10冊は⑤を使用。10行20字。第11冊は⑤を使用。10行20字。ただし、第10葉のみ⑧を使用。10行20字。第12冊は⑤を使用。10行20字。ただし、第10葉のみ⑧を使用。10行19字。

〔内題〕 「奠陰集卷之一（～十二）」。

〔外題〕 外表紙に書題簽「奠陰集 一（～十二）」。内表紙に竹山自筆打付け書き「奠陰集 一（～十二）」。帙題簽「奠陰集 全二函 第一函 十二本 竹山手稿」。

〔刊記〕 なし。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 受入印「昭和28.3.26受入 78883 (～78894)」(内表紙裏にあり)。「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「天生寄進」。

〔装訂〕 四針眼訂法。第1冊全29葉。第2冊全40葉。第3冊全31葉。第4冊全35葉。第5冊全32葉。第6冊全38葉。第7冊全36葉。第8冊全33葉。第9冊全37葉。第10冊全41葉。第11冊全42葉。第12冊全34葉。

〔備考〕 なし。

〔蔵書票〕 「遺 1 43」。

〔付箋番号〕 「827 (～838)」。(ただし、第11冊が「838」、第12冊が「837」となっている)

### 詩集 8巻8冊

〔寸法〕 26.1×17.3。第2冊のみ25.7×17.1。郭内20.1～20.8×13.6～13.8。

〔書式〕 第1冊、第2冊は①を使用。10行22字前後。第3冊は③を使用。10行22字前後。ただし、第14～21葉は④を使用。10行20字前後。第4冊は④を使用。10行20字前後。第5冊は⑦を使用。10行20字。ただし、第3、4葉は④を使用。10行20字前後。第6冊は⑦を使用。10行20字。ただし、第31葉のみ⑤を使用。10行20字。第7冊は⑤を使用。10行20字。第8冊は⑤を使用。10行20字。

〔内題〕 第1冊「奠陰集卷之」。第2冊「奠陰集」。第3～8冊「奠陰集卷之三(～八)」。

〔外題〕 外表紙に書題簽「奠陰集詩 一(～八)」。内表紙に竹山自筆打付け書き「奠陰集詩 一(～八)」。ただし、第2冊のみ内表紙はなく、替表紙を外表紙としてその上に竹山自筆の題箋を貼付。帙題簽「奠陰集 全二函 第二函 八本 竹山手稿詩集」。

〔刊記〕 なし。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 受入印「昭和28.3.26受入 78895 (～78902)」(内表紙裏にあり)。「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。

〔装訂〕 四針眼訂法。第1冊全48葉。第2冊全54葉。第3冊全27葉。第4冊全27葉。第5冊全29葉。第6冊全31葉。第7冊全40葉。第8冊全30葉。

〔備考〕 なし。

〔蔵書票〕 「遺 1 43」。

〔付箋番号〕 「819 (～826)」。

(藤居)

## 安永七年六月定（あんえいしちねんろくがつさだめ）

関係人物名 <sup>なか いちくざん</sup> 中井竹山

数量（冊数） 1面

外形寸法（cm） 縦30.7×横66.4

画像点数 1

懐徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、中井竹山が定めた最も代表的な規定。全8条。『懐徳』11号の中井木菟麻呂「懐徳堂遺物寄進の記」中に「懐徳堂壁署三面」の一つとして翻刻されており、その中で木菟麻呂は、「学校預り人（中井）桐園が毎休日の朝、寄宿生を講堂に集めて、読み聴かせられるのがきまりであった」と述べている。

第一条は、書生の面々互いに申し合わせて行儀を守り、かりそめにも箕踞（足を投げ出して座る）・偃臥（<sup>えんが</sup>ごろんとよこになる）などしてはならないとする。第二条は、学問に関する談義や典雅な話題の他は、無益の雑談を慎み、場所柄をわきまえ、卑俗な談義は堅く停止と規定する。第三条は、病気でもないのに、みだりに昼寝・宵寝をしてはならないとする。第四条は、学業の余暇には、習字・算術・試作・訳文など、各々に応じて心懸けることを説く。第五条は、休日やそのほかの余暇には、和訳の軍書や近代の記録物などを心懸けてよむべきこととする。第六条は、囲碁や将棋などは社交のため、また気分転換のためならば差し支えはないが、休日以外は日中そのような雑芸に関わってはならないとする。第七条は、互に行き届かないことについては、同輩が互いに心をつかい、切磋することとするが、それが行き過ぎてトラブルになった場合には、第八条で、早々にその旨を申し出ることとしている。

総じて、学校側からの高圧的な規定と言うよりは、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。また、寄宿生の生活態度が極めて厳格に規定されていたことも分かるが、一方で、そうした規定が必要となるような実状のあったことも示唆されていて興味深い。

- (1) 書生の面々互に申し合せ行儀正敷相い守り、仮初にも箕踞・偃臥等致す間布き事。
- (2) 学談・雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄、不相応の俗談、堅く停止と為すべき事。
- (3) 当病持病等之子細も無之分昼寝宵寝堅可為無用事
- (4) 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事。
- (5) 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事。
- (6) 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の気を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども、休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候、無用と為すべく候事。
- (7) 銘々行届き申さず候事は同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事。

(8) 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事。

(湯浅)

**懐徳堂瓦当拓本 (かいとくどうがとうたくほん)**

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1 帖

外形寸法 (cm) 縦14.9×横14.5

画像点数 1

懐徳堂の瓦当 (軒丸瓦の先端部分) を拓本にとったもの。現在は、「懐徳堂絵図屏風」(懐徳堂遺物) のうち第10版に貼り込まれている。懐徳堂の講堂は、ごく初期には茅葺きであり、寛延4年(1751)の改築の際に瓦葺きとされたのではないかと考えられる。しかし、寛延4年に改築された懐徳堂は、寛政4年(1792)の火災により焼失した。本資料に用いられた軒丸瓦は、寛政7年(1795)より8年(1796)にかけての懐徳堂再建に際して新たに作られたもので、瓦当には「學」字が打ち出されている。

竹山らは、寛政年間の焼失を機として懐徳堂の敷地拡大と聖堂の建設などを行おうと企て、いったん幕府から許可された。しかし後に何度も工事の規模縮小を求められ、最終的に幕府から与えられた手当金は、類焼前の規模への復旧にも足りない300両に過ぎず、不足分は同志らの寄付によって賄うという有様であった。このような困難な状況下でありながら特にこのような軒丸瓦を作らせたことによっても、竹山が懐徳堂再建にかけた意気込みと、その理想を窺い知ることができよう。

本資料に用いられた軒丸瓦の現物は既に失われており、この拓本は、再建された懐徳堂の一端を知るための貴重な資料であるとされる。また本資料は、懐徳堂記念会のシンボルマークとしても用いられている。

(井上)

**懐徳堂記類 (かいとくどうきがく)**

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1 面

外形寸法 (cm) 縦56.2×横191.9

画像点数 1

中井竹山が、懐徳堂の創建から焼失・再建に至るまでの経緯を漢文で記したもの。享保9年(1724)に開学した懐徳堂は、寛政4年(1792)の大火により焼失したが、竹山の奔走に

より、寛政7年(1795)に幕府から再建の許可を得、その翌年、総経費700両余で落成した。竹山は、この寛政8年(1796)の懐徳堂再建に際して「懐徳堂記」を撰し、それを自ら木額に書き付けて講堂南側東寄りの壁面に掲げた。全52行の本文の後に「寛政八年丙辰之秋 書院教授中井積善謹撰并書」と署名されている。

内容は、懐徳堂の設立から説き起こし、「懐徳」の名称に因んで学者の心構えを説き、次いで寛政年間の懐徳堂焼失と復興に言及し、同志や学生らの献身的な協力を讃える。そして孔子の意志に倣<sup>なら</sup>って教育を行っていくことを宣言し、学問に志のある者を歓迎すること、聖賢を誘<sup>そし</sup>る者の入門を拒むことなどを述べ、弟子たちに向けては学習に励むべきことを指示するなど、再建後における竹山の理想を明快に表明したものとなっている。

竹山は「懐徳書院掲示」や「定」などの規定を作成し、学生たちの生活態度を厳しく戒めた。本資料は、これらの規定より更に進んで、竹山が理想とする学生について具体的に語っており、懐徳堂の再建後において、竹山の考えがますます強く反映されていったことを示している。

なお、懐徳堂文庫には、本資料以外にも、「懐徳堂記」碑文の拓本、および「懐徳堂記帖」(三宅石庵の「懐徳堂」題字を有す)が収められている。また「懐徳堂記」は、竹山の文集である『奠陰集』にも収められている。

(湯浅)

#### 懐徳堂義金簿 (かいとくどうぎきんぼ)

関係人物名 中井竹山

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦28.4×横21.3

画像点数 2

画像番号 26

安永9年(1780)から天明4年(1784)までの5年間の義金積み立てとその使途、および貸付とその利息などを記録したもの。筆者不明。所々に中井竹山の書き入れがある。冒頭に「天明元丑年(1781)十二月 懐徳堂同志」の趣意書を掲げた後、同志の義捐金および氏名列記している。懐徳堂は、官許学問所となるに際して、建物の敷地は幕府からの恩賜によったが、校舎の普請については、五同志などの義捐金によっていた。また、懐徳堂の経営については、受講生の学費には多くを期待せず、やはり、五同志を中心とする同志会の醸<sup>きよきん</sup>金とその運用利益によっていた。ところが、開講してから55年の後、その醸金が減少してきた状況を踏まえ、「只今にては御修覆料(基金)一向に手薄く相成り之有り候」として、「此の節迄相集まり申し候同志義金」を帳面に記したとの次第を「趣意書」に記載している。これに

続く、義金名簿には、白木屋彦太郎の「銀六貫目」を最高に、「銀三百目」までの義金が記され、その総額は18貫94匁に上っている。また、そこから3回分の学校修復費900匁と旧返済費600匁とを差し引いた残金16貫594匁のうち、16貫を月6朱から8朱の利息で貸し付けている状況も記されている（当時、米1石は約60匁。上方人足の労賃は1日1人1匁2分程度）。懐徳堂の財政運営の一端を窺うことのできる貴重な記録である。

なお、義捐金名簿には、「白木屋彦太郎」の他、「小西新右衛門」「鴻池宗太郎」「播磨屋九郎兵衛」「尾崎屋七右衛門」「升屋平右衛門」「米屋助右衛門」「千種屋彌左衛門」などの名が見える。

(湯浅)

### 懐徳堂内事記 (かいとくどうないじき)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦28.2×横19.3

画像点数 1

享保9年(1724)5月から、天明3年(1783)3月に至る約60年間の、懐徳堂内の学事に関する事項を年代順に書いたもの。中井竹山の自筆で、竹山が預り人兼任の頃から書き始めたものであるとされる。本文は全40丁。『懐徳』12号に「懐徳堂旧記」の一つとして活字翻刻されている。内容は、教授陣の顔ぶれ、授業カリキュラム、謝礼の支払いに関する規定、同好会のメンバーや、堂内の掲示、諸規定の改訂など学事に関わる66条が記載されている。特に、創建当時の懐徳堂玄関に、その基本精神を記した壁署(定書)3箇条(原本は現存せず)が掲げられていたこと、享保11年(1726)10月5日に、三宅石庵による『論語』の講義が日講として開始されたこと、その他の講師として、並河五一郎(誠所)、井上左平(赤水)、五井蘭洲が出講したこと、日講で読まれたテキストが「四書(『大学』『中庸』『論語』『孟子])」「書経』『詩経』『春秋胡伝(『春秋』に対する宋の胡安国の注)』『近思録』などであったこと、天明2年(1782)、二代目学主三宅春楼が死去したが、遺言がなかったため、同志会の推挙によって中井竹山が学主兼預り人に就任したこと、その開講において竹山が『論語』学而篇第六章を講じたことなど、懐徳堂の教育システムと実態を知る上で貴重な記録が数多く見られる。

なお、懐徳堂の対外的状況を記録したものに「懐徳堂外事記<sup>がいじき</sup>」がある。これは、享保11年(1726)から安永9年(1780)に至る大坂奉行所や町内との折衝を記録したもので、『懐徳堂内事記』と並んで、懐徳堂の実態を知るための基本資料となっている。

(湯浅)

葛子琴刻印 (子慶氏印 積善印信印) (かつしきんこくいん (しけいしいん せきぜんいん  
しんいん))

関係人物名 <sup>かつしきん</sup>葛子琴、中井竹山

数量 (冊数) 各1顆 石印

外形寸法 (cm) 子慶氏印 縦5.2×横5.2×高さ2.8 積善印信印4.5×4.5×2.8

画像点数 4

画像番号 27

混沌社社友の葛子琴 (1739~1784) によって作成された中井竹山の印。「子慶」は竹山の字、「積善」は名である。「印信」とは印のこと。共に石印であるが、「子慶氏」印の方は上部のみ木製である。

葛子琴、本姓の葛城氏を修して葛という。名は張。橋本氏。貞元を通称とする。父橋本貞淳<sup>じゅん</sup>は医者で、彼自身も医を業とした。彼は混沌社において最も秀れた詩人と評価されており、混沌社の盟主片山北海<sup>かたやまほっかい</sup> (1723~1790) をして「浪華の詩、必ず子琴を推す」と言わしめている。また、子琴は詩作に秀でるだけでなく、篆刻にも巧みであった。彼は篆刻の方面では古体派の高芙蓉<sup>こうふよう</sup> (1722~1784) に師事していた。古体派は、秦漢時代に作られた古銅印の醇朴な味わいのある作風をその特徴としている。芙蓉はその友人や門弟から「印聖」と仰がれ、その復古体の印風は我が国の篆刻史上、一時期を画すると言われている。子琴はよく師の刀法を受け継ぎ、その作風は流麗婉約 (なだらかで美しく品のあること) と評され、高芙蓉の社中においても傑出した存在であった。

竹山は明和年間 (1764~1771) 後半から混沌社社友の多くと交流を始め、以後、社友とはならなかったものの親密な関係を保ち、自身も詩作に励んでいる。竹山の『奠陰詩集』巻4に「季秋 (9月) 始めて寿王・子明・公翼・安道・子琴・千秋、六子を邀<sup>むか</sup>え、書堂に宴す」という序のある七言古詩がある。寿王から千秋までの6名はすべて混沌社の社友で、この中の「子琴」は言うまでもなく葛子琴である。彼らを懐徳堂の宴に招いているということは、すなわち竹山と混沌社との交流の深さを物語るものであろう。恐らくこのような交流の中から、葛子琴が竹山のために自身が作成した篆刻を提供するような関係が築かれていったのだと考えられる。なお、『奠陰詩集』巻5には「篆刻歌 葛子琴に贈る」と題する詩が収められており、子琴の篆刻を竹山が高く評価していたことが窺える。

(藤居)

朱文公大書拓本 (しゅぶんこうたいしょたくほん)

関係人物名 中井竹山



数量（冊数） 4 幅

外形寸法（cm） 各縦127.8×横33.6（拓本本体） 各約192×37（表装を含む全体）

画像点数 4

画像番号 28

朱子の書の摸刻を拓本にとり軸装したもの。全4幅。底本となった朱子の四行書は、徳川将軍家の所蔵品であったが、中井竹山がこれを借用し、大坂の篆刻家で竹山の門人でもあった前川虚舟まえかわきょしゅうが2枚4面の刻板に摸刻した。この刻板からさらに拓本をとり、掛軸の形に表装したものが本資料である。「懐徳堂遺物」の一として昭和14年（1939）に中井木菟麻呂から重建懐徳堂へ寄贈され、後に刻板そのものも寄贈された。

本文には「読聖賢書」「立修齊志」「存忠孝心」「行仁義事」（聖賢の書を読み、修齊の志を立て、忠孝の心を存し、仁義の事を行う）とある。これは、人間が学問を修め実行に移す際の姿勢を、卑近な事柄から順を追って示したものである。まず「聖賢の書」すなわち儒家の経典を読み、ついで「修身齐家しゅうしんせい か（我が身をととのえ我が家をととのえる）」を行うという志を立て、また君親に対して生まれつき持っている「忠孝の心」を失わず、最終的には「仁義の事」を実践する、という意味である。

懐徳堂は、官許学問所として、幕府の認めた官学である朱子学を奉じ、荻生徂徠以降に盛んとなった朱子批判には反対の立場をとっていた。竹山が将軍家よりこの四行書を借り受けて摸刻させたことは、朱子学を奉じる懐徳堂の立場をより鮮明にする行為でもあったと考えられる。

（井上）

宋六君子図（張子・周子・程伯子・程叔子・司馬子・邵子）（そうろっくんしず（ちょうし・しゅうし・ていはくし・ていしゅくし・しばし・しょうし））

関係人物名 中井竹山しとみかんげつ、蔀閔月なかいらんごう、中井藍江

数量（冊数） 6 幅

外形寸法（cm） 張子 縦29.1×横115.8 周子29.3×115.8 程伯子29.7×115.8

程叔子29.2×115.8 司馬子29.1×115.8 邵子29.7×115.8

画像点数 6

画像番号 29

中国・宋代の6人の学者、周敦頤しゅうとんい・程顥ていこう・程頤てい・張載ちようさい・司馬光しばこう・邵雍しょうように関する絵に、頼春水らいしゅんすいが賛をつけたもの。春水は号で、名は惟寛（一説に惟完らいさんよう）、頼山陽の父として名高い。春水は当時、広島藩儒であったが、かつて大坂に学び、詩社混沌社（中井竹山も同人であった）に入り、また、大坂・新天満町に塾を開いて在坂の儒者達と交遊するなど、以前から竹

山・懷徳堂と深い繋がりがあつた。また、春水の妻と中井碩果（竹山の子）の妻とは姻戚関係にあつた。絵は、周敦頤・程顥・程頤しとみかんげつを蔀 関月が、張載・司馬光・邵雍を、関月の弟子・中井藍江なかいらんこうが書いている。

画材として特にこの6人が選ばれているのは、朱子がこの6人の絵に賛文を書いていることによる。原画の所在は未詳であるが、賛文は、『朱子文集』巻85に、「六先生画像賛」と題して収められている。春水の書いた賛は、これを筆写したものである。

賛が書かれたのは寛政9年（1797）。懷徳堂は寛政4年に全焼し、寛政8年に再建落成している。おそらく、堂の再建を祝って、これらの画と賛とが作成され、竹山に贈られたものと思われる。もとは懷徳堂講堂の東側梁上に掲げられていた。保存状態が余り良くないため、かなり変色劣化しているが、大阪大学創立70周年記念事業によるCGでは、可能な限り当初の色彩を再現するよう画像処理が施された。

（寺門）

#### 堂聯（どうれん）

関係人物名 中井竹山

数量（冊数） 1枚（上聯欠）

外形寸法（cm） 縦107.4×横18.1

画像点数 1

画像番号 30

懷徳堂の講堂南面の二つの柱に掲示されていた聯。中井竹山の揮毫きごうによる。署名の「漢翁おう」は竹山の号。「聯」とは、漢文の対句を二つに分けて書き、柱・門などの左右に掛けたもので、上句を上聯、下句を下聯と言う。この聯は、本来、「經術心之準繩、文章道之羽翼」（けいじゆつ経術は心の準繩、じゆんじやう文章は道のうよく羽翼）という上下二句から成っており、各々一枚の紙に筆写され、左右相対して掲げられていた。現在、懷徳堂文庫に伝わっているのは、向かって左側にあつた下聯「文章道之羽翼」のみであるが、大阪大学創立70周年記念事業で公開されたCGでは、竹山の筆跡をもとに、上聯「經術心之準繩」の部分が復元された。

「經術」とは儒学の經典に関する学術、「準繩」とは水平を測るみずもりと直線を決める墨繩すみなわ。転じて、規則・標準の意。「羽翼」とは、鳥の羽と翼。転じて、鳥の羽のように左右から補佐することである。この聯に対する解説が、竹山の書簡を集成した『竹山先生国字牘』に見える。その中で竹山は、若年の頃から学問修行の主旨は「經術」「文章」の二つにあり、この二つを極めなければ大成とは言えない。「羽翼」は単なる補佐という意味ではなく、まさに鳥を飛ばすことのできる翼の意味であり、飛翔させる道具として喩えたものである。宋代の儒者は、久しく廃絶しかけていた聖学を後世に伝え、正しい道を飛翔させたが、それは

文章によってである。その文章が美しかったからこそ、時間・空間を越えて飛翔したのである、と解説し、自ら「修身の事業はこの一聯にあり」と、この聯の内容を極めて重視している。竹山が記したこの聯は、文章を軽視する当時の風潮を批判し、「経術」と「文章」とが表裏一体の関係にあることを宣言しているのである。

(湯浅)

### 中井竹山肖像画 (なかいちくざんしょうぞうが)

関係人物名 <sup>なかいらんこう</sup> 中井藍江、中井竹山

数量 (冊数) 1 幅

外形寸法 (cm) 縦129.8×横55.9

画像点数 1

中井竹山の肖像画。中井藍江<sup>らんこう</sup>の筆による紙本墨画。中井竹山の賛が記されている。この肖像画は竹山の詩文集『奠陰集』によると、寛政10年(1798)正月16日の初講の日の宴席で書画の競作が催され、その席で佐倉藩侍読・渋井子要<sup>しぶいしやう</sup>(竹山の弟子)が、藍江に竹山の講義姿を描かせたものである。竹山69歳の晩年の姿である。藍江はこの年32歳、蔀関月<sup>しどみかんげつ</sup>の門に学び、山水や人物を描くのに長じ、儒学を竹山に学んでいた。竹山の容貌は、『懷徳堂考』に、「竹山五十一歳の時には體量(体重)二十四貫目(約90kg)」とあり、かなりの肥満体であったようである。この肖像画は左後方からのものであるが、やはり、顔の輪郭・身体の線ともにふっくらと丸みをおびて描かれている。母の喪が明けた天明7年(1787)には20貫目(約75kg)まで痩せたようだが、この肖像画から見るかぎり、晩年には再び肥満体に戻っていたようである。

上部の賛は、「皋比坐断 四十餘年 淺陋之學 豈究天人 微力閑道 襄斥異言 愚者一得 竝聖不愆」とあり、「皋比<sup>こうひ</sup>(教師)に坐断<sup>さだ</sup>まりて四十餘年、淺陋<sup>せんろう</sup>の学、豈に天人を究めんや。微かに閑道<sup>つと</sup>に力め、襄<sup>あ</sup>げて異言<sup>しりぞ</sup>を斥く。愚者の一得、聖<sup>ま</sup>を竝<sup>あやま</sup>ちて愆<sup>あやま</sup>たず」と訓読できる。すなわち、講義の席に着いて40年余り、見聞の狭い自分の学問では、天意と人道との関係を明らかにするなど思いもよらない。自分はただ、正しい道に微力を尽くし、大声を張り上げて誤った言葉を斥けるだけである。しかし、たとえ自分のような愚者でも、千回考えれば一つは得るところがある。後世、必ずや自分を正しく評価してくれる聖人が現れるであろう、との意味である。

この賛では「淺陋・微力・愚者」と、繰り返し謙遜した言い方が用いられてはいるが、逆に自己の信念を貫こうとする竹山の心情を読み取ることができよう。

(寺門)

### 入徳門聯 (にゆうとくもんれん)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1 聯

外形寸法 (cm) 縦88.0×横10.5

画像点数 1

中井竹山の筆になる竹製の聯。漢文の対句を二つに分けて書き、それを家の入り口、門、壁などに左右相對して掛けたものを「聯<sup>れん</sup>」あるいは「対聯 (たいれん・つうれん)」と言う。懷徳堂の外門に入ると、講堂に通ずる庭「已有園<sup>いゆうえん</sup>」があった。この竹聯は、その庭の組格子の中門の左右に掛けられていたものである。この門の上に竹山の筆で「入徳之門」と記した額がかけられていたことから、この聯を特に「入徳門聯」と呼ぶ。一本の竹を縦に二つに割り、各々の表面に石灰で「力学以修己」「立言以治人」と白書している。

これは、「学<sup>つと</sup>を力めて以て己を修め、言を立てて以て人を治む」と読む。全体が特定の古典に直接基づくものではないが、「力学」は努力して学ぶこと、「修己」は自己を修養すること、「立言」は他者に伝えるべき立派な言説・学説を樹立すること、「治人」は人を統治することで、各々中国の古典に由来する語である。

この対聯は、こうした古語を組み合わせたもので、自己の修養努力と、それを基にした社会的活動 (経世) の重要性を説く内容となっている。竹山自身、この聯について解説し、自ら修養努力して、それでも時に逢わなければ、その業は「修身齊家 (自身を修めて一家をととのえる)」に止まって「治国平天下 (一国を治めさらに天下を平定する)」には至らないが、書物を著して言を立て、進むべき道を明らかにして世を正すという功績は、実際に為政者となって政教を行うにも匹敵するものがある、と述べており (『竹山国字牘』所収「応宮川侯尊命、大書呈上懷徳堂諸聯附説)、世を正すという自らの気概をこの語に込めていることが分かる。

(湯浅)

### 文恵先生襄事録 (ぶんけいせんせいじょうじろく)

関係人物名 中井竹山

数量 (冊数) 1 冊

外形寸法 (cm) 縦15.8×横42.6

画像点数 3

画像番号 31

中井竹山の葬儀の記録。「文恵先生」とは竹山の諡<sup>おくりな</sup>で、「襄事」とは事を成し遂げること、すなわち葬式を言う。懷徳堂文庫には、「中井家歴代葬儀記録」として、中井翫庵・翫庵夫

人・中井蕉園・中井竹山・中井履軒・中井柚園・柚園夫人・中井碩果・碩果夫人・中井桐園夫人の10種の葬儀録が収められている。また「中井竹山葬儀記録」として、『文恵先生襄事録』のほかに、「御悔名簿」「香儀簿」「竹山先生三虞朝夕奠」が残されている。この内、「中井竹山葬儀記録」は、中井家歴代の記録の中で、最も詳細に記された代表的な記録である。

竹山は、享和4年(1804)2月5日に75歳で没した。竹山は、この数年前から体調を崩していたが、享和3年(1803)8月4日に長男の蕉園を亡くし、次いで同月13日には娘のとじを亡くすなど、精神的な追い打ちもあり、年が明けて間もなく息を引き取った。『文恵先生襄事録』には、葬儀の次第はもちろん、棺桶の大きさから同日の料理の献立に至るまで、事細かに記録されている。また葬儀の参列者や葬儀当日の役割分担についても記されており、この資料から儒葬の具体的内容だけでなく、懐徳堂内外の人間関係についても知ることができる。

なお本記録は、『懐徳』54号に、山中浩之・小堀一正「中井竹山葬儀記録」として、「御悔名簿」「香儀簿」とともに翻刻されている。

(神林)

## 2-6 中井履軒関係資料

### 深衣図解 (しんいずかい)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦24.7×横45.9

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍10下(経部、礼類、礼記之属)

画像点数 3

『礼記』の深衣篇および玉藻篇に基づいて、深衣の制度を考証し図解したもの。中井履軒の手稿本。深衣とは、中国古代の服で、衣と裳とをつなげて仕立てたもの。本書は、履軒手製の紙製深衣とともに、深衣の制度を明快に解説する内容となっている。全1巻15丁。巻末に「明和二年(1765)乙酉孟冬」の跋がある。懐徳堂文庫には、この明和2年手稿本の他、並河寒泉が題簽を付けた懐徳堂遺書本もある。

全体は、執筆の動機を述べた序に続き、『礼記』深衣篇および玉藻篇の本文の解説、図解、跋文から成る。解説部分では、深衣篇の本文を、数句ずつ区切りながら掲げ、各々について一字下げて履軒の解説を記している。ただし、深衣篇が儒教的な意義を説いている部分については、「牽強附会の蕪説」で制度とは関係がないから論じないと説くなど、履軒の目的があくまで制度の実証的な復元にあり、儒教的な意味づけにはなかったことが分かる。また、玉藻篇については、「深衣は瓦を三にす。斉を縫うは要を倍す」という記述に基づき、「袖口

围二尺四寸ならば則ち要围七尺二寸。要を倍すれば則ち丈四尺四寸有り」と解説するなど、具体的数値を挙げて復元に努めている。これに続く、図解では、「裁縫の図」として「袖」「身」「袷えり」「衿えり」「衽えり」「釣辺」などの図、深衣全体の「前図」「背図」、さらには「穿図せんず」として、衣を着た際の全体がややふくらんだ様子をも図示している。最後に跋文で、「深衣は燕服なり」と、深衣が古代中国の士大夫の燕服（ふだん着）であることを論じている。

古来、深衣の制度については諸説があり、中国では、清の黄宗羲（1610～1695）が、朱子・呉澄・王廷相など五家の図説を列举してその誤りを指摘する『深衣考』を著し、江永が深衣の制度を『礼記』玉藻の文によって考証した『深衣考誤』を撰しているが、本書はそれらに匹敵する業績であると言える。

#### 【書誌情報】

『深衣図解』 1冊

中井履軒撰 明和2年 手稿

〔寸法〕 24.7×16.1。郭内18.6×12.5。

〔版式〕 左右双辺。有界。9行19字。後半の図および解説のみ無界。

〔版心〕 白口。線魚尾。

〔内題〕 「深衣図解」。

〔外題〕 「深衣図解」。

〔刊記〕 卷末に「明和二年乙酉孟冬 履軒幽人」。

〔印記〕 1葉表に「大阪大學圖書之印」「懷徳堂図書館」「天生寄進」「大阪大學圖書」。

1葉表および題簽に「履軒圖書」。卷末に「既雨既處」「尚徳積載」。受入印「昭和29.12.22受入 105002」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全15葉。内、図解部分5葉。

〔備考〕

〔蔵書票〕 「遺 4 231」。

〔付箋番号〕 「625」。

(湯浅)

#### 服忌図 (ふくきず)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦27.5×横18.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍11上 (経部、礼類、三礼総義之属)

画像点数 2

## 画像番号 32

「高祖父母」より「玄孫」に至る親族のそれぞれにつき、服喪<sup>ふくも</sup>の期間などを一覧にした図表およびその解説書。中井履軒の手鈔本。水哉館遺書の一。巻首に宝暦戊寅（8年 [1758]）の「前引」を付す。宝暦8年は、竹山・履軒兄弟の父である中井齎庵の没年に相当する。このため本資料は、履軒らが服喪の必要に迫られて行った研究の一部であろうと推定されている。「前引」によると、経書に見える服喪の制度にはそもそも不合理な点があり、伝承の過程で混乱が生じた可能性もある。また日本の服喪制度は、その対象とする範囲や期間も、経書のそれとは異なる。現在では、衰麻<sup>しま</sup>（服喪中で最も軽いもの）は名目のみ存する有様で、忌と喪とは混同されるに至った。履軒はこのような現状を憂い、日本の制度に適した『服忌図』を作成したという。つまり本資料は、単に経書の規定に盲従しようとするのではなく、日本の民情・慣習に適合した独自の服喪規定を定めようとする点に特徴がある。これは齎庵<sup>そうさいしせつ</sup>『喪祭私説』の傾向を継承するものといえよう。

本資料には、その草稿ではないかとも考えられる「擬服図<sup>ぎふくず</sup>」（年次未詳）が付されているが、そこに記されている「服」の期間は『服忌図』のそれとは異なっており、この問題についての履軒の考えの変遷の跡を窺わせる。また宝暦10年（1760）には、竹山および履軒による『喪祭私説』の補正も行われている。齎庵の死を契機として、竹山・履軒兄弟の間で葬送・服喪についての研究が推進されたことが、これらの資料から窺える。

なお懷徳堂文庫には、『服忌図』を付録する鈔本『喪祭私説』が収められている。この抄本の抄者は未詳であるが、懷徳堂において『喪祭私説』と『服忌図』とが深い関係を有すると理解されていたことが、この抄本からわかる。

## 【書誌情報】

『服忌圖<sup>ふくきず</sup>』

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 27.5×18.2。

〔書式〕 無郭無罫の紙を使用。10行22字。

〔版心〕 なし。

〔内題〕 「服忌図」。

〔外題〕 題簽「服忌図」、帙題簽「服忌図 履軒手稿 全一函 一本」。

〔奥書〕 宝暦戊寅（1758、「前引」末尾の紀年）

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書」「大阪大學圖書之印」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105006」。

〔装訂〕 四針眼訂法。表紙を除き全8葉（原表紙1葉、前引2葉、本文5葉）。

〔備考〕 改装本。原表紙は保存。原表紙の題簽「服忌図」（履軒の手か）。全葉に丸入

紙。改装時に首書を裁ち落としてしまった箇所あり。「擬服圖」1枚(24.1×28.0、登録番号なし、印記なし)を付す。

〔蔵書票〕「遺 4 235」。

〔付箋番号〕「312」。

(井上)

### 中庸天楽楼定本 (ちゅうようてんらくろうていほん)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦25.7×横18.2

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍21下(経部、四書類)

画像点数 3

画像番号 33

朱熹以来の『中庸』テキストに錯簡があるとする懐徳堂学派の「中庸錯簡説」を受けて考定された中井履軒独自の『中庸』テキスト。本書完成以前は、履軒も中井竹山の『中庸懐徳堂定本』によっていたが、完成後は、履軒の私塾である水哉館で、このテキストを使っていたと考えられる。履軒の『中庸逢原』は、この『中庸天楽楼定本』に従って注釈をしている。本書は、『中庸』の第16章を第24章の後ろに置いている点では『中庸懐徳堂定本』と同じである。しかし『中庸懐徳堂定本』が朱子の分章に従って全33章に分けているのに対して、本書は、配列は同じであるものの、章の分け方が異なり、全28章となっている。これは単にいくつかの章を統合したのではなく、例えば第2章から第11章までを一つの章にまとめる一方で、第13章や第18章をそれぞれ二つの章にわけると、その分章は複雑である。また経文の字句を移動させたり、訂正したり、削除したりと、たとえ経典といえども改めるべきものは改めようとする履軒の合理的批判精神が窺われる。懐徳堂文庫所蔵の『中庸天楽楼定本』は、天明年間(1781~1788)に含英堂から刊行された官本『四書正文』を切り貼りして作られている。この切り貼りの作業はたいへん見事で、一部、補写している箇所もあるが、極力、刊本を利用しようとしており、匡郭の微妙なズレはあるものの、一見しただけでは、まるで『中庸天楽楼定本』という一冊の刊本のように見える。

なお、本書は、平成6年(1994)に懐徳堂文庫復刻叢書7として、『中庸雕題』『中庸雕題略』などと併せて復刻刊行されている。また『中庸雕題略』の巻末には、『中庸天楽楼定本』の前段階として作成された『中庸水哉館定本』が付されている。

#### 【書誌情報】

ちゅうようてんらくろうていほん  
『中庸天楽楼定本』 1巻1冊



中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 25.7×18.2。郭内20.6×15.3。

〔版式〕 四周双辺。無界。10行20字。

〔版心〕 「四書正文（黒魚尾）中庸（葉数）」（第1葉のみ「中庸正文（黒魚尾）（葉数）」）。

〔内題〕 「中庸 天楽楼定本」。

〔外題〕 打付け書き「中庸天楽楼定本」。帙題簽「中庸天楽楼定本 全一函 一本 履軒手稿」。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 「天楽」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入104985」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全12丁。

〔備考〕 天明年間の官板『四書正文』（含英堂刊）を切り貼りして考定したもの。補写部分、朱筆訂正箇所あり。

〔蔵書票〕 「遺 3 219」。

〔付箋番号〕 なし。

(神林)

### 孝経大義（こうきょうたいぎ）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦25.0×横18.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍24上（経部、孝経類）

画像点数 4

画像番号 34

和刻本『孝経大義』に対して中井履軒が書き入れを行い、ほぼ全面的に訓点を改めたもの。水哉館遺書の一つ。『孝経大義』は、宋の朱熹が削定した『孝経刊誤』に元の董鼎が注を施したもので、日本において広く読まれた『孝経』注釈書である。履軒が用いた『孝経大義』テキストは、明刊本（成化22年 [1486] 刊本）を覆刻した和刻本（正保4年 [1647] 刊本）であり、全体に訓点が施されていた。しかし履軒は、その訓点の大部分を抹消し、新たに自己の見識による訓点を施したのである。また本テキストには、履軒のものと思われる書き入れが散見する。しかし、単なる誤字の訂正や「註大謬」などとのみ指摘するものが大部分を占めており、本書の内容に全く無関係な書き込みすら見られる。要するに、これらの書き入

れからは、『孝経』や『孝経大義』に対する履軒の思想的立場は窺えない。本テキストにおいて示された履軒の訓点は、後に『水哉館読法礼記』や『水哉館読法書経』などにおいて示されるものとの一致も多く認められる。中井履軒独自の訓読法を示す資料としての本テキストは、量的には決して多くない『水哉館読法礼記』や『水哉館読法書経』を補うものとして貴重である。なお、本テキストの題簽は、中井柚園の筆に係るものである。

【書誌情報】

『孝経大義』<sup>こうきょうたいぎ</sup> 1巻1冊

朱熹刊誤 董鼎註 正保4年刊本（覆明成化22年刊本） 中井履軒首書 手稿  
〔寸法〕25.8×横18.0。郭内20.9×横15.9。

〔版式〕四周单辺。無界。9行17字。

〔版心〕「(大黒口)(花魚尾)孝経新註(葉数)(花魚尾)(大黒口)」。

〔内題〕「孝経大義」。

〔外題〕題簽「孝経大義 全」(中井柚園筆)。帙題簽「孝経大義 履軒首書 柚園題簽 全一函 一本」。

〔刊記〕「正保四年仲秋吉旦」。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書館之印」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 105069」。

〔装訂〕五針眼訂法。表紙・裏表紙を除き、全55葉（序および目録5葉、本文49葉、識語等1葉）。

〔備考〕懷徳堂遺書。各葉に丸入紙が施されている。天を1mm程度裁ち落とした形跡がある。入紙補修の際に裁ち落としたものか。表紙裏に使用されている用紙が入紙用紙と酷似しているため、表紙も改装されている可能性が高い。小口書も見られないうが、地を裁ち落とした際に失われた可能性もある。紙背から首書をしている（装訂された状態では判読できない）部分がある。

〔蔵書票〕「遺 左7 291」。

〔付箋番号〕「333」。

(井上)

七経雕題（しちけいちょうだい）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 全56冊（欠20冊）

外形寸法（cm） 易 縦27.0×横19.0 書27.5×19.0 詩27.5×19.4 春秋25.8×18.2 論語・孟子・大学・中庸23.5×13.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍27下 (経部、諸経総義類)

画像点数 1

画像番号 35

中井履軒の経書研究に関する最初の成果を示す注釈書。その内訳は、『周易雕題』『尚書雕題』『詩雕題』『左氏雕題』『礼記雕題』『学庸雕題』『論語雕題』『孟子雕題』の計8種であるが、現在、『礼記雕題』は散逸している。計8種類であるにもかかわらず、なぜ「八経」ではなく「七経」なのかという点については、「大学」と『中庸』が、もともと『礼記』の中的一篇であったことから、『学庸雕題』を『礼記雕題』に含めて数えていた可能性が考えられる。ただ履軒自身、『七経雕題』の中に、『学庸雕題』『論語雕題』『孟子雕題』を合わせて「四書雕題」と記し、「七経雕題」と記す箇所は見られないことから、あるいは『七経雕題』編纂の時点では「七経」という意識を持っていなかった可能性もある。

「雕題」とは、『礼記』王制篇の「南方を蛮と曰う、<sup>ひたい きざ</sup>題を雕み趾を交え、火食せざる者有り」により、本来、額に入墨するという意味であるが、ここでは転じて刊本に記した頭注を言う。履軒は『七経雕題』の他に、例えば『史記雕題』『莊子雕題』『古文真宝雕題』など多数の注釈書を残している。

その際、主として用いられた底本は、当時通行していた朱子の注釈書の刊本である。例えば、『周易』は朱子の『周易本義』を、『尚書』は朱子の門人で娘婿でもある蔡沈の『書集伝』を、『詩経』は朱子の『詩集伝』を、『大学』『中庸』『論語』『孟子』は朱子の『四書集注』を用い、ただ『春秋』については、朱子の『春秋』に関する注釈書がないため杜預の『春秋経伝集解』を用いている。このことから履軒の学問が朱子学をその出発点としていくことがわかる。

履軒の注釈態度は、欄外に注釈を記すだけでなく、刊本の誤字脱字はもちろん、場合によっては、経文の字句までも改める、という徹底したものであった。また和刻本については、その句点、返り点、送りがなに至るまで、納得できないものはすべて胡粉（白色の顔料）で丁寧に塗抹し、その上に訂正を記しており、これによって履軒の訓読法を知ることができる。

なお、履軒の経学研究は、その後、『七経雕題略』を経て、『七経逢原』として集大成された。

#### 【書誌情報】

『七経雕題』 全36冊

\*主に版本の上欄外の空白を利用して自説を記すとともに、履軒が考える内容のまとめごとに、各冊をとじ直している。首書中、墨筆・朱筆で字句を塗抹・訂正・挿入している箇所あり。本文中にも訓点・送り仮名などの書入れあり。また各篇の冒頭は、版心の上部を塗抹して、篇名等の見出しを記す。

## (1) 『周易本義 (周易雕題)』 4巻3冊

朱熹本義 延宝3年 寿文堂刊本 中井履軒雕題 手稿

〔寸法〕 27.0×19.0。郭内21.3×16.2。

〔版式〕 四周単辺。無界。8行16字。注は1格低くし双行15字。

〔版心〕 「倭板周易 (黒魚尾) (篇名) (横二線) (葉数) 山崎嘉点」。

〔内題〕 第1冊は「本義序例」。第2冊は「周易上經 (～下經) 朱熹本義」。第3冊は「上象傳 (～雜卦傳) 朱熹本義」。

〔外題〕 「周易 本義 (以下判読不能)」「周易 上下 (同上)」「周易 十翼 (同上)」。

帙題簽「周易雕題 全七函 第一函 三本 履軒自筆首書 七經雕題ノ内」。

〔刊記〕 「延宝三年乙卯春三月寿文堂刊行」。

〔印記〕 「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第2冊のみ「積」「徳」。受入印「昭和27.12.22受入 77584 (～77586)」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 第2冊の巻頭に「周易雕題 津国 中井積徳処叔父纂」とある。

〔蔵書票〕 「遺 3 188」。

〔付箋番号〕 「682 (～684)」。

## (2) 『書集伝 (尚書雕題)』 10巻6冊

蔡沈伝 刊行年未詳 中井履軒雕題 手稿

〔寸法〕 27.5×19.0。郭内20.3×13.8。

〔版式〕 四周単辺。無界。序・目録は有界。6行16字。序は6行14字。注は1格低くし双行19字。

〔版心〕 「書經集註 (黒魚尾) (巻数) (白魚尾) (葉数)」。(ところどころ花魚尾、双魚尾、無魚尾。)

〔内題〕 「書經集傳 卷之一 (～六)」。(「集註」を「集傳」に訂正。)

〔外題〕 「書經集註」(第1冊のみ題簽なし)。帙題簽「尚書雕題 全七函 第二函 六本 履軒自筆首書 七經雕題ノ内」。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1冊のみ「積」「徳」。受入印「昭和27.12.22受入 77587 (～77592)」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 題簽に、各冊が収める篇名を明記 (第1冊のみ打付け書き)。第1冊の巻頭に「尚書雕題 津国 中井積徳処叔父纂」とある。蔡沈の序文の後に、履軒自筆の序文を付す。また巻末において、書序について論じている。

〔蔵書票〕「遺 3 189」。

〔付箋番号〕「685 (～690)」。

(3) 『詩經集傳 (詩彫題)』 15巻7冊

朱熹伝 刊行年未詳 中井履軒彫題 手稿

〔寸法〕27.5×19.4。郭内20.4×14.0。

〔版式〕四周単辺。無界。序・目録は有界。6行16字。序は毎行14字。注は1格低くし  
双行19字。

〔版心〕「詩經集註 (黒魚尾) (巻数) (白魚尾) (葉数)」。

〔内題〕「詩經集傳 (巻之一 (～七))」。(「集註」を「集傳」に訂正。)

〔外題〕「詩經集註」。帙題簽「詩彫題 全七函 第三函 七本 履軒自筆首書 七經  
彫題ノ内」。

〔刊記〕なし。

〔印記〕「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1冊のみ  
「積」「徳」。受入印「昭和27.12.22受入 77593～77599」。

〔装訂〕五針眼訂法。

〔備考〕題簽に各冊が収める篇名を明記。第1冊の巻頭に「詩彫題 西成 中井積徳  
処叔父纂」とある。朱子の序文の後に「讀詩綱領」を付す。また巻末において、詩  
序について論じている。

〔蔵書票〕「遺 3 190」。

〔付箋番号〕「691 (～697)」。

(4) 『春秋經伝集解 (左氏彫題)』 30巻15冊

杜預集解 宝暦5年 中江久四郎刊本 中井履軒彫題 手稿

〔寸法〕25.8×18.2。郭内20.2～20.8×14.8。

〔版式〕左右双辺。有界。9行19字。注は双行。

〔版心〕「左伝 (黒魚尾) (巻数) (圈点) (葉数)」。(各巻の冒頭のみ葉数の代わりに  
「那波師曾句讀」とある)

〔内題〕「春秋左傳 卷一 (～卷三十)」。(第1巻のみ、内題の末尾に「杜氏集解」と  
ある。)

〔外題〕「春秋左氏伝 一二 (～廿九三十終)」。帙題簽「左氏彫題 全七函 第四函  
七本 履軒自筆首書 七經彫題ノ内」「左氏彫題 全七函 第五函 八本 履軒自  
筆首書 七經彫題ノ内」。

〔刊記〕「宝暦五乙亥歳正月之吉 京師三條街堀川東江入街 書林 中江久四郎梓」。

〔印記〕「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1冊のみ

「積」「徳」。受入印「昭和27.12.22受入 77600 (~77614)」。

〔装訂〕四針眼訂法。包角あり。

〔備考〕表紙右上に藍筆で篇名を記す。第1冊の巻頭に「左氏雕題 津国 中井積徳 処叔父纂」とある。扉に「左氏雕題例言」を付す。巻末に宝暦四年十一月十七日の那波師曾の跋文あり。

〔蔵書票〕「遺 3 191」。

〔付箋番号〕「698 (~712)」。

(5) 『礼記集説 (礼記雕題)』 (20冊全欠)

(6) 『四書集註 (四書雕題)』 5冊

朱熹集註 三刻兩錢堂刊本 中井履軒雕題 手稿

1. 『学庸章句 (学庸雕題)』 2巻1冊

〔寸法〕23.5×13.7。郭内12.0×11.3。

〔版式〕四周单辺。無界。9行17字。序は1格低くし行16字。注は双行17字。

〔版心〕「三刻兩錢四書 (書名) (巻数) (葉数)」。

〔内題〕「大学 朱熹集註」「中庸」。

〔外題〕書題簽「大学 中庸」。帙題簽「七經雕題ノ内 全七函 第六函 論語雕題二本 学庸雕題一本 履軒自筆首書」。

〔刊記〕『孟子雕題』の巻末に「書林兩錢堂熊存宇精刻新板」。

〔印記〕「積」「徳」「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。

受入印「昭和27.12.22受入 77615」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕巻頭に「四書雕題 津国 中井積徳処叔父纂」とある。

〔蔵書票〕「遺 3 192」。

〔付箋番号〕「713」。

2. 『論語集註 (論語雕題)』 10巻2冊

〔寸法〕同上。

〔版式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「論語 卷之一 (~十) 朱熹集註」。

〔外題〕書題簽「論語上 (学而~郷党の各篇名)」「論語下 (先進~堯日の各篇名)」。

帙題簽「七經雕題ノ内 全七函 第六函 論語雕題二本 学庸雕題一本 履軒自筆首書」。

〔刊記〕同上。

〔印記〕「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印  
「昭和27.12.22受入 77616 (～77617)」。

〔装訂〕同上。

〔蔵書票〕「遺 3 193」。

〔付箋番号〕「714 (～715)」。

3. 『孟子集註 (孟子もうししちゅう彫題)』 7巻2冊

〔寸法〕同上。

〔版式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「孟子 卷之一 (～七) 朱熹集註」。

〔外題〕書題簽「孟子上 (梁惠王～離婁の各篇名)」「孟子下 (万章～尽心の各篇名)」。帙題簽「七經彫題ノ内 全七函 第七函 孟子彫題二本 履軒自筆首書」。

〔刊記〕同上。

〔印記〕「履軒圖書」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印  
「昭和27.12.22受入 77618 (～77619)」。

〔装訂〕同上。

〔蔵書票〕「遺 3 194」。

〔付箋番号〕「716 (～717)」。

(神林)

### 七經彫題略 (しちけいちょうだいらく)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 計20冊

外形寸法 (cm) 縦23.0～24.0×横16.0～16.5

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍27下 (經部、諸經総義類)

画像点数 1

画像番号 36

中井履軒の『七經彫題』の概略を記した注釈書。初め履軒は、「彫題」と称して、刊本の欄外に注釈を記していたが、紙幅に限りがあり、新旧の大量の注釈が入り乱れて、自分以外の者には読めなくなってしまったので、その概略を別冊に記すことにした。しかし概略とは言え、本書は、『易彫題略』冒頭の「七經彫題略辨言三則」に、「我を知り、我を罪するは、これこの編 (『七經彫題略』) に在るか」と言うほどの自信作であった。

その内訳は、『易』(七經彫題略之一)、『尚書』(七經彫題略之二)、『詩』(七經彫題略之

三)、『左氏春秋』(七経雕題略之四)、『礼記』(七経雕題略之五)、『中庸』(七経雕題略之六)、『論語』(七経雕題略之七)、『孟子』(七経雕題略之八)の計8種である。また『七経雕題』中には、明確に「七経」と記される箇所はなかったが、本書では、すべての内題に「七経雕題略」と明記されている。8種類の注釈書をなぜ「七経」と数えたのかという疑問は残るが、少なくとも履軒自身が「七経」の意識をもって『七経雕題略』を編纂したことは間違いない。『七経雕題』との最大の違いは、『学庸雕題』が『中庸雕題略』となり、『大学』が「七経」から完全にはずされてしまった点である。実は「七経」中、履軒が最も重視していたのは、『論語』『孟子』『中庸』の三書であった。履軒の『孟子逢原』公孫丑篇上に、「夫子晩年『六経』を緒正す。固より垂教の意無きにあらず。然れども秦漢以降、『礼』『楽』已に泯滅し、『詩』『書』欠乏紛乱し、以て夫子の功を見る無し。『易経』は存すと雖も亦た功無く、『春秋』も亦た孔子の筆にあらず。故に孔子の道を伝うるものは、唯だ『論語』『孟子』『中庸』の三種のみ」と述べているが、『大学』は名前さえも挙がっていない。この点については、伊藤仁斎も「大学非孔氏遺書辨」を著し、「四書」を「三書」に改めるべきであると主張している。

なお、履軒の経学研究は、本書を経て、後に『七経逢原』として集大成された。

#### 【書誌情報】

『七経雕題略』 全20冊

\*本文の1～2句を挙げて、自説を述べる。藍筆で句点。墨筆で塗抹、胡粉を用いて修正、および朱引きする箇所あり。

(1)『周易雕題略』 3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕23.0～24.0×16.0～16.5。郭内18.6×12.5。

〔書式〕四周単辺、無界の紙を使用。9行20字。

〔版心〕白口。無魚尾。横一線。各篇の冒頭のみ藍筆で篇名。

〔内題〕「七経雕題畧一之一(～三) 易之上(～下)」。

〔外題〕書題簽(藍筆)「易雕題畧 上(～下)」。帙題簽「『七経雕題畧 易三本 典 謨接一本 全四函 第一函 四本 履軒手稿』」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1冊のみ「大阪大學圖書」。受入印「昭和28.3.26受入 78903(～78905)」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕第1冊の巻頭に「七経雕題畧弁言三則」を付す。第1冊の内題につづけて「易 据朱子本義」とある。第3冊の巻末に「易雕題附言」を付す。



〔蔵書票〕「遺 3 198」。

〔付箋番号〕「718 (～720)」。

(2) 『<sup>しょうしよちようだいいりやく</sup>尚書雕題略』 2冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「七経雕題畧二之一 (～二) 書之上 (～下)」。

〔外題〕書題簽 (藍筆)「尚書雕題畧 上 (～下)」。  
帙題簽「七経雕題略 全四函 第二函 五本 履軒手稿 尚書二本 詩三本」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。  
受入印「昭和28.3.26 78906 (～78907)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の内題につづけて「虞書 据蔡氏集傳」とある。  
第2冊の卷末に「雕題附言」を付す。

〔蔵書票〕「遺 3 199」。

〔付箋番号〕「674 (～675)」。

(3) 『<sup>しちようだいいりやく</sup>詩雕題略』 3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「七経雕題畧三之一 (～三) 詩之上 (～下)」。

〔外題〕書題簽 (藍筆)「詩雕題畧 上 (～下)」。  
帙題簽「七経雕題略 全四函 第二函 五本 履軒手稿 尚書二本 詩三本」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。  
受入印「昭和28.3.26 78909 (～78911)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の内題につづけて「詩 据朱子集傳」とある。  
第3冊の卷末に「雕題附言」を付す。

〔蔵書票〕「遺 3 200」。

〔付箋番号〕「676 (～678)」。

(4) 『左氏雕題略』<sup>さしちょうだいりやく</sup> 3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「七経雕題畧四之一 (～三) 左之上 (～下)」。

〔外題〕書題簽(藍筆)「左氏雕題畧 上 (～下)」。帙題簽「七経雕題略 左氏春秋三本 礼記三本 全四函 第三函 六本 履軒手稿」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1冊のみ「大阪大學圖書」。受入印「昭和28.3.26 78912 (～78914)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の巻頭に「左氏雕題例言」を付す。第1冊の内題につづけて「左氏春秋 据杜氏集解」とある。

〔蔵書票〕「遺 3 201」。

〔付箋番号〕「668 (～670)」。

(5) 『礼雕題略』<sup>れいちょうだいりやく</sup> 3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「七経雕題畧五之一 (～三) 禮之上 (～下)」。

〔外題〕書題簽(藍筆)「禮雕題畧 上 (～下)」。帙題簽「七経雕題略 左氏春秋三本 礼記三本 全四函 第三函 六本 履軒手稿」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和28.3.26 78915 (～78917)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の内題につづけて「禮記 據陳氏集説」とある。

〔蔵書票〕「遺 3 202」。

〔付箋番号〕「671 (～673)」。

(6) 『中庸雕題略』<sup>ちゅうようちゅうだいりやく</sup> 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「七経雕題畧六 中庸」。

〔外題〕 書題簽（藍筆）「中庸雕題畧」。帙題簽「履軒手稿 七経雕題畧 全四函 第四函 五本 中庸一本 論語二本 孟子二本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和28.3.26 78918」。

〔装訂〕 同上。

〔備考〕 内題に続けて「中庸 据朱子章句」とある。卷末に「中庸水哉館定本」を付す。

〔蔵書票〕 「遺 3 203」。

〔付箋番号〕 「663」。

(7) 『ろんごちやうだいいりやく論語雕題畧』 2冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「七経雕題畧七之一（～二） 語之上（～下）」。

〔外題〕 書題簽（藍筆）「論語雕題畧 上（～下）」。帙題簽「履軒手稿 七経雕題畧 全四函 第四函 五本 中庸一本 論語二本 孟子二本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和28.3.26 78919（～78920）」。

〔装訂〕 同上。

〔備考〕 第1冊の内題につづけて「論語 據朱子集註」とある。

〔蔵書票〕 「遺 3 204」。

〔付箋番号〕 「664（～665）」。

(8) 『もうしちやうだいいりやく孟子雕題畧』 2冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「七経雕題畧八之一（～二） 孟之上（～下）」。

〔外題〕 書題簽（藍筆）「孟子雕題畧 上（～下）」。帙題簽「履軒手稿 七経雕題畧 全四函 第四函 五本 中庸一本 論語二本 孟子二本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和28. 3.26 78921（～78922）」。

〔装訂〕 同上。

〔備考〕 第1冊の内題につづけて「孟子 据朱子集註」とある。

〔蔵書票〕 「遺 3 205」。

〔付箋番号〕 「666～（667）」。

（神林）

### 七経逢原（しちけいほうげん）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 計33冊

外形寸法（cm） 縦24.5×横16.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍28上（経部、諸経総義類）

画像点数 1

画像番号 37

中井履軒の経書研究の集大成と言える注釈書。履軒の経学研究は、初め、『七経雕題』としてまとめられたが、履軒はその後も増補改訂を重ね、約30年間にわたる蓄積を『七経雕題略』にまとめ直した。しかし、「略」であることに満足できず、最後の完成体として『七経逢原』を編纂したのである。ここに履軒は初めて「水哉館学」と署名し、本書において独自の学を築いたことを表明している。本書は、履軒の存命中、その高弟である三村崑山<sup>みむらこんざん</sup>、早野橘<sup>はやの</sup>、竹島簀山<sup>たけしまきざん</sup>らにのみ拝借することを許したという。また、この三人は、書風も履軒に類似していたため、すべて『逢原』の原本に擬して手写したという。

「逢原」とは、『孟子』離婁篇下の「其の原<sup>みなもと</sup>に逢<sup>あ</sup>う」にちなむ。その内訳は、『周易逢原』『夏書逢原』『古詩逢原』『古詩得所編』『古詩古色』『左伝逢原』『論語逢原』『孟子逢原』『中庸逢原』『大学雑議』の計10種である。ただし『大学』は、「大学逢原」ではなく「大学雑議」として格下の扱いを受けており、また『古詩逢原』『古詩得所編』『古詩古色』は、いずれも『詩』に関するものとしてひとまとめにできるので、実質は計7種類となる。「七経」

という名称とその内訳との関係は、「雕題」「雕題略」ではなお不明瞭であったが、この「逢原」では、ようやく名実（『易』『書』『詩』『春秋』『論語』『孟子』『中庸』）が合致したと言える。本書は、履軒の經学研究の到達点を示す資料として極めて貴重であるだけでなく、「雕題」「雕題略」と本書とを対比することにより、その研究の展開を具体的に見ることができる。

なお、『古詩逢原』の序文によれば、履軒がまだ30代後半の頃、『逢原』という著述があったが、くり返し修正を加えるうちに大変読みづらくなったので、注釈を刊本の欄外に記すことにし、これを『雕題』と名付けたと言う。ここで言う『逢原』とは、「原『逢原』」とも言うべき著作であり、いわゆる『七經逢原』とは別ものと考えられる。

【書誌情報】

しちけいほうげん  
『七經逢原』 全33冊

\*各冊の内題の下に「水哉館学」と明記。藍筆で句点。朱筆で經文を訂正。

(1) 『周易逢原』 3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕24.5×16.0。郭内18.3×12.4。

〔書式〕左右双辺、有界の紙を使用。9行20～23字。注は1格低くし小字で毎行25～30字。（『古詩古色』のみ木簡19枚を並べ、両端を韋編で結んだ絵柄の用紙。毎行20字。また「風・小雅・大雅・頌」の1葉目のみ赤・青・黄のカラー。ただし「附録」「蛇足」は普通用紙。）

〔版心〕白口。無魚尾。横一線。各篇の冒頭のみ朱筆で篇名。

〔内題〕「周易逢原 水哉館学」。

〔外題〕書題簽「周易逢原 上（～下）」。帙題簽「周易逢原 七經逢原ノ内 全十函 第一函 三本 履軒手稿」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104890（～104892）」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕第1冊に「據朱子本義」とある。

〔蔵書票〕「遺 5 178」。

〔付箋番号〕「660（～662）」。

(2) 『夏書逢原』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「尚書逢原 水哉館学」。

〔外題〕 書題簽「夏書逢原 全」。帙題簽「夏書逢原 履軒手稿 全十函 第二函 一本 七經逢原ノ内」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104893」。

〔装訂〕 同上。

〔備考〕 第1冊に「据蔡氏集傳」とある。

〔蔵書票〕 「遺 5 179」。

〔付箋番号〕 「659」。

(3) 『古詩逢原』 8冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「古詩逢原 水哉館学」。

〔外題〕 書題簽「古詩逢原 一（～八）」。帙題簽「七經逢原ノ内 古詩逢原 全十函 第三函 八本 履軒手稿」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。表紙にも「懷徳堂圖書記」。受入印「昭和29.12.22受入 104894（～104901）」。

〔装訂〕 同上。

〔備考〕 各冊、白い紙で包まれ「古詩逢原」と墨書打ち付け書き。右上に朱筆の「○」印。各冊表紙右上に「風上 二南・衛・邶」「風中 鄘・鄭・齊・唐・魏」「風下 秦・陳・檜・曹・豳・王」「小雅上 鹿鳴・南有嘉魚・彤弓」「小雅下 閔予小子・小旻・北山」「大雅上 文王・行葦」「大雅下 蕩・節南山」「頌 周頌・商頌・附栝」と打ち付け書き。第1冊に「据文公集傳」とある。表紙裏にも各巻が収める全篇名を明記。

〔蔵書票〕 「遺 5 180」。

〔付箋番号〕 「651（～658）」。

(4) 『古詩得所編』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 「古詩得所編上」「古詩得所編中之上」「古詩得所編中之下」「古詩得所編下」。

〔外題〕 書題簽「古詩得所編 全」。帙題簽「古詩得所編 履軒手稿 全十函 第四函 一本 七經逢原ノ内」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104902」。

〔装訂〕 同上。

〔蔵書票〕 「遺 5 181」。

〔付箋番号〕 「650」。

(5) 『古詩古色』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「古詩古色」。帙題簽「七經逢原 古詩古色 履軒手稿 七經逢原ノ内 全十函 第五函 一本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104903」。

〔装訂〕

〔備考〕 卷末に「附録」として「夏書・論語・孟子」に言及、「蛇足」として「註解諸書正本」を付す。

〔蔵書票〕 「遺 5 182」。

〔付箋番号〕 「649」。

(6) 『左伝逢原』 6冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 同上。

〔書式〕 同上。

〔版心〕 同上。

〔内題〕「左氏逢原 水哉館学」。

〔外題〕書題簽「左伝逢原 一之三」「左伝逢原 四之六」「左伝逢原 七之八」「左伝逢原 九」「左伝逢原 十」「左伝逢原 十一之二」。帙題簽「七経逢原ノ内 七経逢原 全十函 第六函 六本 履軒手稿 左伝逢原」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104904 (～104909)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の巻頭に「春秋議」を付す。第1冊に「据杜氏集解」とある。各冊表紙右上に「隠・桓・莊」「閔・僖・文」「宣・成」「襄」「昭」「定・哀」と打ち付け書き。

〔蔵書票〕「遺 5 183」。

〔付箋番号〕「640 (～645)」。

(7) 『論語逢原』 4冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「論語逢原 水哉館学」。

〔外題〕(カバーのため見えないがおそらく) 書題簽「論語逢原 一 (～四)」。

帙題簽「論語逢原 全十函 第七函 四本 履軒手稿 七経逢原ノ内」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。表紙のカバーにも「懷徳堂圖書記」。受入印「昭和29.12.22受入 104910 (～104913)」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕各冊、白い紙で包まれ、その上から「論語逢原 一 (～四)」と打付け書き。

第1冊の巻頭に「集註序説」を付す。第1冊に「據朱子集註」とある。

〔蔵書票〕「遺 5 184」。

〔付箋番号〕「636 (～639)」。

(8) 『孟子逢原』 7冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。



〔内題〕「孟子逢原 水哉館学」。

〔外題〕書題簽「孟子逢原 一（～七）」。帙題簽「孟子逢原 全十函 第八函 七本  
履軒手稿 七經逢原ノ内」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受  
入 104914（～104920）」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕第1冊の卷頭に「集註序説」を付す。第1冊に「據朱子集註」とある。

〔蔵書票〕「遺 5 185」。

〔付箋番号〕「629（～635）」。

(9)『中庸逢原』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「中庸逢原 水哉館学」。

〔外題〕書題簽「中庸逢原」。帙題簽「中庸逢原 履軒手稿 全十函 第九函 一本  
七經逢原ノ内」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受  
入 104921」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕「章句序」から始まる。卷末に「中庸 天楽楼章句」を付す。

〔蔵書票〕「遺 5 186」。

〔付箋番号〕「628」。

(10)『大学雜議』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕同上。

〔書式〕同上。

〔版心〕同上。

〔内題〕「大学雜議」。

〔外題〕書題簽「大学雜議」。帙題簽「大学雜議 履軒手稿 七經逢原ノ内 全十函  
第十函 一本 七經逢原ノ内」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104922」。

〔装訂〕同上。

〔備考〕巻末に「大学 天楽楼章句」を付す。

〔蔵書票〕「遺 5 187」。

〔付箋番号〕「627」。

(神林)

### 史記雕題 附 史記削柿 (しきちょうだい つけたり しきさくし)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 29冊

外形寸法(cm) 縦27.5×横19.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍47上(史部、正史類)

画像点数 2

画像番号 38

中井履軒による『史記』の注釈書。『史記雕題』の名は、履軒自身の命名ではなく、『七経雕題』にちなんで、後人がつけたもの。江戸時代に最も流布した八尾版『史記評林』<sup>しきひょうりん</sup>の欄外に、履軒が注釈を書き入れ、また、訓点の書き改めや、文字の誤脱等の訂正を行ったものである。『史記』130巻は前漢の司馬遷<sup>しばせん</sup>が著した歴史書であるが、後漢時代には、既に10巻が散逸していたことが分かっている。ただし、その10巻が具体的にどの部分なのかは伝えられておらず、しかも、現行の『史記』は、後世の書き加え等を経て、130巻が揃っていたため、どの巻が偽作なのかという文献学の問題が議論されてきた。履軒も当然、この問題に関心を持っていた。八尾版は本来、50冊本であったが、履軒はその綴じ糸を外し、自身が偽作と考える部分を抜き出し、『史記評林』の序跋類等と併せて2冊にまとめ、題簽の「評林」の二字を削って、自ら「史記削柿」と書いている。そして、『史記削柿』以外の部分を27冊に綴じ直している。ただし、「日者列伝」<sup>にっしやれつでん</sup>(従来、後世の偽作と考えられてきた巻の一つ)については、「其の文辞惜しむべき」、つまり、文章が優れているという理由を明記して、『削柿』には入れていない。

履軒は『史記』を、『論語』『孟子』『莊子』に次いで、文章の規範になるものと評価していた(西村天囚『懷徳堂考』)。「日者列伝」の扱いから察すると、『削柿』を取り分けたことには、文献学的な目的の他に、『史記』の精華を選別するという意図もあったのであろう。「削柿」という言葉には、「余計なものを削り落とす、木札を削る」の意味がある。命名は、

司馬遷の手によらない部分を削り落とすという意図、あるいは、題簽の文字を削ったことに因ったものと推測される。

本書は、『史記』の注釈として、清・梁玉繩<sup>りょうぎよくじょう</sup>の『史記志疑<sup>しぎ</sup>』とともに「和漢史記参考書の双璧」（池田四郎次郎『史記研究書目解題稿本』）と高く評価され、『史記』研究必備の注釈書となっている。

【書誌情報】

『史記評林（史記削柿）』 29冊

明凌稚隆輯校 明李光縉増補 延宝2年 洛陽八尾甚四郎刊本 中井履軒首書 手稿。

〔寸法〕 27.5×19.0。郭内23.0×16.5。

〔版式〕 四周単辺。無界。12行19字。注は双行19字。上層の評林注は毎行7字。

〔版心〕 「(黒口) 寛文壬子刊 史記卷幾 (黒魚尾) (篇名) (葉数) 八尾友春」。

〔内題〕 「史記評林」。

〔外題〕 題簽「史記評林 一 (～廿七)」。

〔刊記〕 「延宝二甲寅曆仲夏吉辰 洛陽寺町通本能寺前 八尾甚四郎友春重刊」。

〔印記〕 「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104927」。

〔装訂〕 原裝50冊のものから、「史記評林首」および「三皇本紀」・「秦本紀」巻尾・「孝景本紀」・「孝武本紀」・「漢興以來將相名臣年表」・「禮書」・「樂書」・「律書」・「陳涉世家」補論・「三王世家」・「傳斬蒯成列伝」・「扁鵲倉公列伝」巻尾・「龜策列伝」を取り分けて『史記削柿』2冊とし、残りを27冊に改装している。

〔備考〕 余白・欄外に書入れ、訓点の塗抹・書き改め、朱筆の傍線、不審紙多数。後人によって付けられたと思われる付箋全14枚あり。

〔蔵書票〕 「遺 右7 208」。

〔付箋番号〕 「126～(185)」。

(寺門)

後漢書雕題 (ごかんじょちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 60冊

外形寸法 (cm) 縦27.2×横19.4

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍47上 (史部、正史類)

画像点数 1

## 画像番号 39

江戸時代出版された和刻本『後漢書』の欄外に、中井履軒が注を書き入れたもの。『後漢書雕題』という書名はどこにも書かれていないが、履軒の注釈は『七経雕題』にならって、『○○雕題』と呼ばれていることから、本書の呼称もその例に従った。この本の各冊には「有不爲齋」の蔵書印があり、懷徳堂が重建される以前には、伊藤介夫（号は有不爲齋）が所蔵しており、後に同氏から寄贈されたことが分かる。

『後漢書』は、南北朝時代・宋の范曄が後漢時代について著した紀伝体の歴史書である。『後漢書』の注釈としては、唐・章懐太子のものが高い評価を受けており、この本も同注を併載したものである。この本の書き入れで、履軒は章懐太子の注に数多く異を唱え、また、『後漢書』本文の文字の誤りを指摘している。履軒の中国史書に対する注釈には定評があり、『史記雕題』は『史記』注釈の（中国のものも含めて）白眉とされている。従って、『後漢書雕題』の注釈の価値もまた、非常に高いものであることが予想される。現在、『後漢書』の注釈を集成したものとしては、清・王先謙『後漢書集解』があるが、今後、『後漢書雕題』が検討されることによって、従来の『後漢書』解釈が大幅に改められる可能性が極めて高い。

また、これら個々の語句に対する注釈とは別に、履軒は『後漢書』中の人物について批評するなど、歴史評論的立場からの書き入れを数多く行っている。例えば、巻3「章帝紀」末尾の余白に「顕宗は苛察の累有りといえども、竟には明主と称すべし。肅宗は温雅の美有りといえども、竟には闇主を免れざるなり」と書き入れ、後漢の第2代皇帝・顕宗明帝を名君、第3代・肅宗章帝を暗君と評している。

## 【書誌情報】

『後漢書（後漢書雕題）』附『補志』 120巻60冊

劉宋范曄撰 唐章懐太子李賢注（志）晋司馬彪撰 梁劉昭注 江戸期摺日本古活字覆元大徳刻本重刻 中井履軒首書 手稿

〔寸法〕 27.2×19.4。郭内21.3×17.1。

〔書式〕 四周単辺。無界。9行17字。注は双行17字。

〔版心〕 「(小黒口) (黒魚尾) 後漢記幾 (黒魚尾) (葉数)」。

〔内題〕 「范曄 後漢書」。

〔外題〕 「後漢書」。目録題簽「第幾本 (部門名) 第幾巻 (篇名)」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天樂」「有不爲齋」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和27. 3.13受入 67365~67424」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 各冊に、余白・欄外に書入れ、訓点の塗抹・書き改め、朱筆・墨筆の傍線、不

審紙多数。

〔蔵書票〕「遺 右7 208」。

〔付箋番号〕「126 (～185)」。

(寺門)

### 三国志雕題 (さんごくしちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 40冊

外形寸法 (cm) 縦27.0×横17.3

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍47上 (史部、正史類)

画像点数 1

画像番号 40

中井履軒が、中国の歴史家である陳寿 (ちんじゅ) (233～297) の著した史書『三国志』に対して施した注釈。村上勘兵衛・秋田屋山本平左衛門が寛文10年 (1670) に刊行した和刻本の欄上に、『三国志』本文および裴松之 (はいしょうし) (372～451) 注の語法・誤字・脱文・衍字 (えんじ) (余分に紛れ込んだ不要な字) などの問題について自己の見解を書き入れた自筆本である。ただし、『史記』『後漢書』など他の史書に対する履軒の注釈が、考証や論評にも及ぶ詳細なものなのに対し、『三国志雕題』は表現や字句の問題に限られ、履軒の歴史観は窺えない。

なお、本書とは別に、その下書きを記した『三国志雕題草本』と題する文献もある。

#### 【書誌情報】

『<sup>さんごくし</sup>三国志 (三国志<sup>さんごくしちょうだい</sup>雕題)』 65巻40冊

晋陳寿撰 劉宋裴松之注 明陳仁錫評 中井履軒首書 手稿

〔寸法〕27.0×17.4。郭内20.9×14.9。

〔版式〕四周単辺。無界。10行20字。注は1格低くし毎行19字。

〔版心〕「三国志 (黒魚尾) 魏書 (～呉書・蜀書) (巻数) (葉数)」。

〔内題〕「三国志」。

〔外題〕「三国志 魏一 (～呉十八之廿畢)」。帙題簽「三国志雕題 魏 (～蜀・呉) 全五函 第一函 七本 履軒首書」。

〔刊記〕「寛文拾曆庚戌三月吉祥日 書肆 二条通村上勘兵衛 京極通秋田屋山本平左衛門 板行」。

〔印記〕各冊、第1葉に「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「有不爲齋」。受入印「昭和27.3.13受入 67425 (～67464)」。

〔装訂〕五針眼訂法。

〔備考〕各冊に墨書の書入れ、本文注文訓点の塗抹あり。小口書「三国 魏一（～廿四、蜀一～六、呉一～十）」。水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 7 209」。

〔付箋番号〕「557（～589）」。

（矢羽野）

### 三国志雕題草本（さんごくしちょうだいそうほん）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦22.7×横16.3

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍48上（史部、正史類）

画像点数 1

画像番号 41

中井履軒が、『三国志雕題』の下書きを記したもの。『雕題』にはない貴重な見解を見ることが出来る。例えば、陳思王（曹操の子の曹植。陳王に封ぜられ、死後に「思」と諡された）の死去を記す「陳思王植、薨ず」という記述に対して、『雕題』は「『思』疑うらくは衍文ならん」と記すだけであるが、『草本』は「『思』の字は当に削るべし。此に未だ諡を称す可からず」とし、死去の記事に死後に贈られる諡を記すべきではないとの見解を述べている。

また、履軒の歴史観を述べた論評も多い。例えば、朱子学の大義名分論では劉備の蜀は正統の政権とされるが、履軒は、次のように、劉備の言行にしたたかな野心を読み取り、曹操らと同等の一政権と見ている。あるとき、曹操の庇護を受けていた劉備は、曹操に軟禁されていた皇帝から「曹操を誅殺せよ」との密勅を受け、曹操に反旗を翻す。朱子はこの劉備の行動を正当視するが、履軒は、「劉備の行動は裏切りだ。忠義の挙兵などではない」「曹操が死んでも、また別の曹操が現れる。劉備がもし曹操暗殺に成功したなら、彼も第二の曹操になったはずだ」と評す。竹山の若い頃の詩に、「陳寿蜀を細けて温公（司馬光のこと）惑い、吾が紫陽（朱子のこと）を待ちて筆始めて直し」という句が見え、魏を正統政権とした陳寿・司馬光を批判して朱子を信奉する見方が窺える。履軒もかつては竹山同様の史観に立っていたようであるが、その後、大義名分の觀念論を離れ、時代の客観的状況や人情に基づく『三国志』観に到達したのである。

#### 【書誌情報】

『三国志雕題草本』 1冊

〔寸法〕22.8×16.1 郭内18.4×12.9

〔書式〕 左右双辺、有界、黒魚尾、白口の紙を使用。9行。1行字数は一樣ならず。

見出しは大字で掲げ、見出しに関する見解は双行にて記す。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「三国志雕題草本」。ただし題簽に洋紙を用い、履軒の手になる題簽にあらず。帙題簽「三国志雕題草本 全一函 一本 履軒手稿」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」。受入印。「昭和29.12.22 受入 105032」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全49葉。

〔備考〕 水哉館遺書。

〔蔵書票〕 「遺 4 258」

〔付箋番号〕 「379」

(矢羽野)

#### 戦国策雕題 (せんごくさくちようだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 15冊

外形寸法 (cm) 縦27.7×横18.9

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍50下 (史部、古史類)

画像点数 2

画像番号 42

中井履軒による『戦国策』の注釈書。寛保元年 (1741)、京都で出版された『戦国策譚たん 概しゅう』の欄外に注釈を書き入れされたものである。この本の来歴については、一冊目冒頭にある、伊藤介夫の識語いとうかいふに詳しい。それによれば、本書の書き入れは、履軒の『戦国策雕題』を早野橋隧はやのきつすいが手写し、三村崑山みむらこんざんが校讎こうしゅう (文字に誤りがないか確認すること) したものであるという。早野橋隧・三村崑山は、いずれも履軒の高弟であったことから、この書き入れは、履軒の自筆原本に拠ったものと思われる。

伊藤介夫かいふは、その父が早野橋隧はやのきつすいの門に学び、また、三村崑山の子・政五郎と交遊があったことから、懷徳堂に強い関心を持ち続けていたらしい。彼は散逸してしまった懷徳堂関係の書籍の収集保存に努め、本書も「松雲堂」という古本屋に売られていたものを発見して購入したとある。またこの他にも、懷徳堂関係の書籍を多数蔵有しており、後に重建懷徳堂に寄贈されたものも少なくない。

本書は、その写本が少ないこともあって、これまであまり注目されてこなかったが、例え

ば、安井小太郎やすい ことろうによって富山房漢文大系ふざんぼう『戦国策正解』に摘録され、「往往精当不易ノ説アリ」(永久に朽ちることのない詳細で正当な説が見える)と高く評価されるなど、今後の『戦国策』研究に資する可能性を秘めている。

なお、『戦国策雕題』の原本の所在は未詳であるが、写本としては、この他に国立国会図書館・無窮会図書館むきゅうかい・大阪天満宮御文庫等にある。その中でも特に注目に値するのは、大阪天満宮御文庫のものである。同書は大阪の儒者・近藤南州こんどうなんしゅうの筆写によるもので、その識語には、南州は明治29年(1896)、履軒自筆原本の所蔵者(南州は「某氏」とのみ記す)から借りて筆写したとあり、当時自筆本が存在していたことを示している。

#### 【書誌情報】

『戦国策譚せんごくさくたんしゅう 椒』 10巻序1巻附1巻15冊

宋鮑彪校注 元呉師道重校 明張文權校輯 寛保元年 平安書林刊本 中井履軒首書 早野橋隧転写 三村昆山加筆 伊藤介夫識語

〔寸法〕 27.7×18.9。郭内24.6×15.5。

〔版式〕 四周单辺。無界。10行20字。注は双行20字。

〔版心〕 「(黒魚尾) 戦国策 (巻数) (葉数)」。

〔内題〕 「戦国策譚椒」。

〔外題〕 題簽「戦国策 幾之幾」。

〔刊記〕 「寛保元辛酉仲夏穀旦 平安書林 吉田四郎右衛門 葛西市郎兵衛等」。

〔印記〕 「恭齋」「伊藤穌印」「介夫」「有不爲齋」「懷徳堂圖書記」。受入印なし。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔蔵書票〕 「有 1667」「懷 83」。

〔付箋番号〕 「962 (~976)」。

(寺門)

#### 河図累碁 (かとりいき)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦30.1×横18.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍58下 (史部、地理類)

画像点数 1

画像番号 43

中井履軒手製の中国歴史地図集。「河図」とは、太古、伏羲ふっぎ氏の時、黄河から現れた龍馬が背に載せていたという図のことで、聖王出現ずいしゅうの瑞祥。「累碁」は碁石を積み重ねることで、



非常に危うく崩れやすいことの譬え。『戦国策』に「物至れば而ち反る。冬夏是なり。致至れば而ち危うし。累基是なり」とある。つまり、名君が現れて中国を統治しても、やがて元の乱世に戻り、また名君が現れて善政を回復するという中国の歴史を暗示した命名である。

地図は同じ履軒の『治水潤論』と同じく、永日堂版「大明一統二京十三省図」という一色刷の地図を使用し、履軒が書き入れを施している。全体は、「禹貢九州図」、「禹貢五服図」（いずれも伝説時代、舜が統治していた頃の地図）、「周詩列国図」（周代、『詩経』の詩が作られた頃の地図）、「春秋列国図」（春秋時代の地図）、「戦国七雄図」（戦国時代の地図）、「楚漢際図」（始皇帝没後、漢が天下統一する前の地図）、「漢郡国図」（漢の郡国制を図示したもの）、「三国割拠図」（三国時代の地図）、「両晋南北図」（西晋～南北朝時代の地図）、「唐十道藩鎮図」（唐の節度使制度を図示したもの）、「五代図」、「宋」、「大明一統二京十三省図」（明代の地図）、「清」の、計14の地図からなる。基にした地図が明代のものなので、各地代の地名・川筋と異なっている場合が多い。そこで、必要に応じて塗抹を施し、その上に書き入れをしたり、川筋についても、藍色の墨で書き改めている。ただし、本資料は地図のみで、『治水潤論』のように解説文に相当するものは記されていない。

【書誌情報】

『河図累基』 1冊

中井履軒著 文化4年 竹島箕山転写

〔寸法〕 30.1×18.2。

〔書式〕 永日堂版「大明一統二京十三省圖」の用紙を使用。版心に「永日堂」と記す。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「河圖累基」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105067」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔蔵書票〕 「遺 4 289」。

〔付箋番号〕 「737」。

(寺門)

治水潤論 (ちすいかつろん)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦30.3×横18.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁漢籍63上（史部、政書類）

画像点数 2

画像番号 44

中井履軒が中国古代の治水について考察し、併せて当時（履軒の時代）の中国において、どのような治水政策を行なえばよいかを論じたもの。履軒の自筆本。「濶論」は、大まかな議論、または誇大な議論の意などがあるが、履軒は諧謔<sup>かいぎやく</sup>を込めて命名したのであろう。

本書は4編の論文と、それに対応する4枚の地図とからなる。地図はいずれも永日堂から出された「大明一統二京十三省図」という一色刷の地図に手を加えたものである。「黒弱論」では、禹<sup>う</sup>（古代の聖王舜の賢臣）の治水事業の最大の功績は、黄河の上流に流れ込む、黒水・弱水の二つの川を治めたことにあるとし、「龍門論」で、第二の功績は龍門<sup>かいさく</sup>の開鑿であることを論じている。「堯時の汎濫図」では、禹以前の洪水の様子を、また「禹黒弱を導き龍門<sup>うが</sup>を鑿つる図」では、禹の治水の成果を、それぞれ図示している。「黒弱論余論」では、積石<sup>せき</sup>（黄河の上流の地名）で黄河上流の流れをせき止めれば、水は南北に分流して黄河に流入せず、下流の洪水は永久になくなると述べ、それを「塞積石図」で図解している。ただし、この方法はあまりにも大胆で費用もかさむ。そこで「復古論」では、次善策として黄河を万里の長城のルートに導き、華北平原を通らせずに渤海へと注がせる方法を提案し、「古道を復するの図」でそれを図示している。履軒によれば、この次善策でも、2000年間は水害の恐れがないとのことである。

黄河は古来、氾濫を繰り返し、歴代の為政者を悩ませてきた。従来、その対策として、堤防の構築、川底の浚<sup>しゅんせつ</sup>、川幅を狭めて水流を速くするなど、様々な策が講じられてきた。しかし、それらの策は専ら黄河の下流域に施された対症療法に過ぎず、履軒のような上・中流に施す根本的な解決策は、ほとんど考えられてこなかった。ここに示された履軒の治水理論は、その適否についての評価はともかく、極めて奇抜で大胆なものであることは間違いのない。この資料からは、履軒の柔軟な思考の一端を窺うことができよう。また、履軒が単に古典の注釈に埋没していただけではなく、その学識を行政に生かそうとしていたことをも知ることができる。

【書誌情報】

『治水濶論』<sup>ちすいかつろん</sup> 1冊

中井履軒著 文化4年

〔寸法〕30.3×18.2。

〔書式〕無郭無界の紙を使用。11～14行24～37字。注は小字で41～43字。2葉裏・3葉表裏・4葉表・6葉裏・7葉表・8葉裏・9葉表は、永日堂版「大明一統二京十三省圖」を使用。版心に「永日堂」と記す。

〔内題〕なし。

〔外題〕書題簽「治水濶論」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 105068」。

〔装訂〕五針眼訂法。全9葉。

〔蔵書票〕「遺 4 290」。

〔付箋番号〕「380」。

(寺門)

### 小学雕題 (しょうがくちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 2冊

外形寸法 (cm) 縦26.6×横19.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍79下 (子部、儒家類、家訓勸学郷約之属)

画像点数 2

画像番号 45

『小学』に対する中井履軒の注解書。寛文4年(1664)京都田村五郎右衛門刊の『小学句読』<sup>くとう</sup>を使用して、欄外に自分の説を書き入れたものである。表紙には2冊ともに「小学雕題」と書かれた題簽<sup>だいせん</sup>が貼られている。明治15年(1882)、大阪柳原喜兵衛等刊の『小学雕題』として翻刻されている。この翻刻本には河野春颯<sup>かわのしゅんぱん</sup>の批評と市村元貞<sup>いちむらげんてい</sup>の訓点とが付される。

『小学句読』は明の陳選<sup>ちんせん</sup>が著した『小学』の注解書。『小学』は朱子の門人劉子澄<sup>りゅうしちやう</sup>が朱子から指導を受けて編纂した書で、初学者に対する朱子学の入門書と位置づけられている。内篇4巻、外篇2巻から成り、履軒は内外2篇にわたって『雕題』を施している。また、『小学』は経伝からの引用の書であり、履軒は経書で篇名の記されていないものなどにそれぞれ篇名を施してその出典を明確にしている。

履軒の注解は『漢書』『三国志』の史書や『尚書大伝』『管子』『顔氏家訓』などの資料を縦横に引用しており、その博覧強記ぶりを窺うことができる。また、自説の主張も明確である。例えば、「小学書題」における陳選の注に小学と大学との区別を不明確に解する箇所があるのに対して、履軒は「大学は自ら大学の工夫有り」と述べ、小学と大学との機能は初学者向けとそれ以上のレベルの者向けというようにおのずから区別されるべき点があることを強調している。また、巻2「明倫」において『礼記』祭義篇から引かれた曾子の語に「是れ売薬の能書きなり(薬売りの自己宣伝である)」とかなり手厳しい言葉を投げかけている。

このように履軒は注釈だけでなく、その本文自体に対しても自由に批判する精神をもっていたことが窺える。

なお、懷徳堂文庫（北山文庫）には、中井竹山が『小学』に対して注釈を加えた書『国読こくどく 刪正小学』4冊も収められている。これは嘉永3年（1850）大阪加賀屋善蔵刊で、『小学句読』の欄外に竹山の説を記したものである。

【書誌情報】

『小学（小學しょうがく 雕題しょうがくちようだい）』 6巻2冊

宋朱熹撰 明陳選句読 寛文4年 京都田村五郎右衛門重校刊本 中井積徳雕題手稿

〔寸法〕 26.6×19.0。郭内19.9～20.3×14.4～14.7。

〔版式〕 四周双辺。無界。9行18字。注双行。ただし、「序」は四周双辺。無界。7行14字。

〔版心〕 「(上黒魚尾) 小學 (巻数) (葉数)」。

〔内題〕 「小學句讀序」。「小學卷之一（～六）」。

〔外題〕 書題簽「小學句讀 内（第2冊は外）」。各冊表紙右下に書題簽「小學雕題」。

帙題簽「小学雕題 全一函 二本 履軒首書」。

〔刊記〕 第2冊の巻末に「寛文四年甲辰孟冬上浣 二條通大恩寺町 田村五郎右衛門重校梓」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「大阪大學圖書之印」「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」。受入印「昭和29.12.22受入 104955（～104956）」。

〔装訂〕 五針眼訂法。

〔備考〕 各篇第1葉の黒魚尾上部を朱で塗抹してその部分に篇名を墨書。水哉館遺書。

〔蔵書票〕 「遺 3 212」。

〔付箋番号〕 「620（～621）」。

（藤居）

天経或問雕題（てんけいわくもんちようだい）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 3冊

外形寸法（cm） 縦27.2×横18.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍82下（子部、天文算法類）

画像点数 3

## 画像番号 46

『天経或問』に対する中井履軒の注解書。享保15年(1730)江府書林松葉軒<sup>よろずや せいべえ</sup>萬屋清兵衛刊の『天経或問』を使用して、欄外に自説を書き入れたものである。底本の『天経或問』は清の<sup>ゆうげい</sup>游芸の著書で、中国の伝統的な天文学を踏まえながら、西洋の新しい天文学の知識を紹介する書である。この書の基本的立場は、その序に「天は理と気とのみ」とあるように朱子学的な天文学であったため、江戸期の儒者らにも広く読まれていた。

履軒は麻田剛立<sup>あきだ ごとりゅう</sup>との交流から天文学に対しても大いに関心を持ち、天体の動きや宇宙の構造等について、剛立のもつ新しい天文学知識への理解を深めていた。例えば、『天経或問』「天体」の項の本文では、黄道と赤道との交点が東から西へ移動する(履軒自身は本文を訂正して、西から東へと移動するとしている)周期を二万五千余年とするという。しかし、履軒は「麻子新測<sup>ましんそく</sup>の歳差<sup>さいさ</sup>(黄道と赤道との交点が毎年黄道に従って移動する年差)は二万六千年、一周の後、凡そ新測はみな是と云う」と述べる。この「麻子新測」とは剛立独自の实测方法を指しており、履軒の剛立説に対する傾倒ぶりを窺うことができる。また、『天経或問』「七曜離地」において、「若し人<sup>も</sup> 星上<sup>も</sup>に従いて地を視れば、決して一塵<sup>ごち</sup>の如きは見る<sup>あた</sup>こと能わず」とあるが、この後半部分に履軒は朱で傍点を施している。履軒は自己の存在を地球上だけに限定せず、より大きな立場から見ようとする視点を有していた。このことから履軒の壮大な相対主義的思想を見て取ることができよう。彼のこのような観点は『莊子』の世界観の影響もあったと考えられるが、机上の空論だけではなく、当時としては最新の天文学との交渉によってもたらされた実証的な根拠を持ったものでもあったことがわかる。

なお、『天経或問』への関心は履軒の師五井蘭洲<sup>ごいらんしゅう</sup>の頃からすでに存しており、新知識に対する幅広い関心を懷徳堂学派が持っていたことを表している。

## 【書誌情報】

『天経或問<sup>てんけいわくもん</sup> (天経或問<sup>てんけいわくもんちょうだい</sup> 雕題)』 2巻 函1巻 3冊

清游藝撰 西川正休訓点 享保15年 江府書林松葉軒萬屋清兵衛刊本 中井積徳雕題 手稿

〔寸法〕27.2×18.1。郭内19.7~20.2×13.6~13.8。

〔版式〕左右双辺。無界。10行20字。注双行。ただし、「鈔序」は左右双辺。有界。7行15字。

〔版心〕「天経或問(序)(葉数)松葉軒」など。

〔内題〕「天経或問(序/天/地)」。

〔外題〕第1冊「天経或問 序 圖」。第2冊「天経或問 天」。第3冊「天経或問 地」。帙題簽「天経或問雕題 全一函 三本 履軒首書」。

〔刊記〕第3冊の巻末に「享保十五年 庚戌十一月 日本橋通一丁目 江府書林松葉

軒萬屋清兵衛鐫」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104976 (～104978)」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 3 214」。

〔付箋番号〕「851 (～853)」。

(藤居)

### 世説新語補雕題 (せせつしんごほちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 10冊

外形寸法 (cm) 縦26.5×横18.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍101上 (子部、小説家類)

画像点数 2

画像番号 47

『世説新語補』に対する中井履軒の注解書。元禄7年(1694)京都林九兵衛刊の李卓吾<sup>りたくご</sup>の批評や訓点などがついた『世説新語補』を使用して、欄外に自説を書き入れたものである。底本の『世説新語補』は六朝期の劉義慶<sup>りゅうぎけい</sup>編『世説新語』と明の何良俊<sup>かりょうしゅん</sup>編『何氏語林』<sup>かしごりん</sup>とから内容を取捨選択したもの。『世説新語』の記事が漢から晋までに止まるので、その一部を削って、六朝から元に至る時期の逸話を含む『何氏語林』の一部を補い、明の王世貞<sup>おうせい</sup>が一書に編した。従って、『世説新語補』は『世説新語』とはその内容が異なっている。『世説新語補』は江戸時代初期に日本へ輸入された。江戸期に広く流行したのはこの『世説新語補』であって『世説新語』ではなかった。

履軒は『世説新語補』に対して「世説 元もと他書を抄す、而して節ほほ<sup>よろ</sup>宜しきを失う」(巻17)という。すなわち、『世説』中の逸話は他の書物から抄録されたものなので、本来の意味から外れたものも含まれるという。このように履軒は『世説』に対してやや批判的であったが、その「雕題」は全編にわたって詳細に施されている。履軒の注解は『三国志』『晋書』などの史書や『列子』『論衡』『文選』『太平御覧』などの資料を縦横に引用しており、その博覧ぶりが窺える。

その中でも仏教に対する記述が目される。魏晋六朝期など仏教が盛んであった時期の記事を含む『世説新語補』には仏教徒に関する記述も多い。履軒は基本的に仏教に対しては批

判的で、例えば、「凡そ浮と凶し氏し（仏教の僧侶）礼義を拝せず名分を知らず」（巻3）と述べ、仏教徒が儒教風の礼をわきまえていないという。ただ、仏教関連の記述に対して、履軒は『大明三蔵法数』（巻5）『法華経』（巻18）などの仏典を引いて解釈したり、「苦集滅道 之しを四諦（4つの真理）と謂う」（巻5）などと仏教の教義を解説している。履軒もある程度仏教の知識を持ち、その「雕題」に生かしていたことが窺える。

【書誌情報】

『李卓吾批點世説新語補（世説新語補雕題）』 20巻10冊

劉宋劉義慶撰 梁劉孝標注 明何良俊・明王世貞刪定 明張文柱校注 元祿7年  
京都林九兵衛刊本 中井積徳雕題 手稿

〔寸法〕26.5×18.0。郭内22.3～23.6×13.8～14.0。

〔版式〕四周単辺。無界。9行18字。注双行。ただし、「世説新語補序」は四周単辺。無界。5行10字前後。「世説新語序」は四周単辺。有界。5行12字前後。「刻世説新語補序」は四周単辺。有界。6行13字。

〔版心〕「批點世説補（巻数）（葉数）」。ただし「序」「附」「目録」は「批點世説補（黒魚尾）（巻数）（葉数）」。

〔内題〕「李卓吾批點世説新語補卷之一（～二十）」。

〔外題〕「世説新語補一（～十）」。帙題簽「世説新語補 全一函 十本 履軒首書」。

〔刊記〕第10冊の巻末に「元祿七年 之吉 京東洞院通夷川上町 林九兵衛梓行」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」（表紙裏にあり）。「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「天樂」。受入印「昭和29.12.22受入 104963（～104972）」。

〔装訂〕五針眼訂法。

〔備考〕各冊表紙に篇名を朱書（第1冊「徳行上下 言語上」第2冊「言語中下 政事 文學上」第3冊「文學中下 方正上」第4冊「方正下 雅量上下 識鑒」第5冊「賞譽上下 品藻上」第6冊「品藻下 規箴上下 捷悟 夙慧」第7冊「豪爽容止 自新 企羨 傷逝 棲逸」第8冊「賢媛 術解 巧藝 寵禮 任誕上」第9冊「任誕下 簡傲 排調上下 輕詆上」第10冊「輕詆下 假譎 黜免 儉嗇 汰侈 忿狷 讒險 尤悔 紕漏 惑溺 仇讎」）。第1冊表紙に「薛千仞云士大夫家年少子弟必不宜使讀世説未得其雋永先習其簡傲不可不慎」と朱書。水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 左7 211」。

〔付箋番号〕「339（～348）」。

（藤居）

### 莊子雕題 (そうじちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 10冊

外形寸法 (cm) 縦27.5×横19.5

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍105下 (子部、道家類)

画像点数 2

画像番号 48

『莊子』に対する中井履軒の注解書。寛文5年(1665)風月庄左衛門刊の『莊子麴齋口義』を使用して、欄外に自分の説を書き入れたものである。『莊子』逍遙遊篇から天下篇に至る全33篇にわたって詳細な書き込みがなされている。本書は、1998年に懐徳堂記念会から懐徳堂文庫復刻叢書11として復刻刊行されている。

底本の『莊子麴齋口義』は宋の林希逸による『莊子』の注釈書で、その三教一致(儒教、仏教、道教には共通の教えがあるとする考え)の注釈態度が江戸期に受け入れられて盛行していた。ただ、履軒は林希逸の注釈態度に対しては基本的に批判的立場をとっており、独自の見地から『莊子』を注釈する。すなわち、履軒は莊子や老子の道家思想を正統たる儒教から見れば異端だと捉えており、そのような異端の思想を儒教と合致するように牽強附会の解釈を施すのではなく、字句に即した素直な解釈をすることによって、その内容を理解すべきだと考えた。このような履軒の考えは「莊子を読むときは、只だ莊子を以て之を解すれば可なり」(齊物論篇の『雕題』)という彼の言葉からも窺うことができよう。

履軒は『莊子』を異端と捉えてはいたが、その文章には一定の評価を与えていたようである。あるとき、履軒は弟子から文章の手本とする書物について問われた。履軒はまず『論語』を推し、次に『孟子』を挙げ、さらに続いて『莊子』の名を挙げている。また、彼は自らの住居の一室を「天楽楼」と名づけた。これは『莊子』天道篇の語句によるものである。これらの事実からも履軒の『莊子』に対する一種の思い入れを窺うことができる。

なお、懐徳堂文庫には、履軒自筆の『莊子雕題』が書き込まれた『莊子麴齋口義』の他、履軒の高弟三村崑山(1761~1825)手写による『莊子雕題』が書き込まれた『莊子麴齋口義』も収められている。

#### 【書誌情報】

『莊子麴齋口義 (莊子雕題)』 10巻10冊

宋林希逸撰 附新添莊子十論 李士表撰 寛文5年 風月庄左衛門刊本 中井積徳  
雕題併修正訓点 手稿

〔寸法〕27.5×19.5。郭内24.5~25.0×16.9~17.3。



〔版式〕 四周単辺。無界。第1冊のみ8行15字。第2～10冊は8行16字。注双行。ただし、第1冊中の「序」「發題」は四周単辺。無界。6行10字。第10冊中の「莊子後序」「莊子跋」「新添莊子論」は四周単辺。無界。11行17字。

〔版心〕 「(黒魚尾) 莊子 (巻数) (葉数) (黒魚尾)」。

〔内題〕 「莊子麴齋口義卷之一(～十)」。

〔外題〕 「頭書 莊子 一(～十)」。帙題簽「莊子雕題 全一函 十本 履軒首書」。

〔刊記〕 第10冊の巻末に「寛文五年乙巳歳孟秋吉祥日 風月庄左衛門開板」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」(表紙裏にあり)。「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」「天樂」。  
受入印「昭和27.3.13受入 文67465(～67474) 圖」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 各冊表紙右上に篇名を墨書。第1冊「内篇 逍遙遊 齊物論」第2冊「内篇 養生主 人間世 徳充符」第3冊「内篇 大宗師 應帝王 外篇 駢拇 馬蹄」第4冊「外篇 胠篋 在宥 天地」第5冊「外篇 天道 天運 刻意 繕性」第6冊「外篇 秋水 至樂 達生 山木」第7冊「外篇 田子方 雜篇 知北遊 庚桑楚」第8冊「雜篇 徐無鬼 則陽 外物」第9冊「雜篇 寓言 讓王 盜跖 說劍」第10冊「雜篇 漁父 列御寇 天下」。各篇第1葉の黒魚尾上部を朱で塗抹してその部分に篇名を墨書。水哉館遺書。

〔蔵書票〕 「遺 左7 210」。

〔付箋番号〕 「349(～358)」。

(藤居)

## 柳文 (りゅうぶん)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦24.2×横16.4

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍112下(集部、別集類)

画像点数 3

画像番号 49

中井履軒が唐の柳宗元(773～819)の詩文集『柳河東集』から愛誦の文20篇を抄写したもの。『柳河東集』中の「伝」から3篇、「説」から4篇、「戒」から1篇、「雜題」から1篇、「序」から3篇、「記」から8篇の順で抜き出している。『柳河東集』では「説」が巻16、「伝」が巻17に収められているので、やや順序が異なる。「玄挙の幽泉寺に帰るを送るの序」

までの12篇に対して、履軒は句点を施している。

実際に履軒がどのような『柳河東集』のテキストを見ていたかは明らかではない。ただ、懷徳堂文庫には鶴飼石齋<sup>うかいせきさい</sup>が訓点を施した寛文4年(1664)京都中江久四郎刊『柳河東集』が収められており、あるいはこの種のテキストを使用していたのかもしれない。履軒は『柳河東集』からほぼ忠実に文章を抄写している。ただ若干、テキストの文字を改めている箇所がある。例えば、有名な「蛇を捕る者の説」である。その文中に「非死而徒爾」の句があり、一般に「死するに非ざれば徒<sup>うつつ</sup>のみ」(死んだのでなければ転居しただけだ)と訓んでいる。この部分の「而」を履軒は「則」と改める。「則」の方が「而」よりも条件を表すこの部分の意をよく捉えている。また、「今以蔣氏觀之尤信」の句があり、「今蔣氏を以て之を觀れば、なお信なり」(今蔣さんの話しからすると、やはり本当だ)と訓む。この部分の「尤」を履軒は「猶」と改める。「尤」「猶」ともに発音が同じなので訓みも通用するが、「やはり」の意味とするためには「猶」の方が妥当である。これらの例から、文章の意味を明確にすることを重要視していた履軒の読解態度を窺うことができる。

西村天因『懷徳堂考』によると、あるとき、弟子から文章について問われた履軒は、『論語』『孟子』『莊子』等をその手本とすべきだと答える一方、世間で大家とされている韓愈<sup>かんゆう</sup>や柳宗元の文章は学ぶに及ばないと述べたという。ただ、このように柳宗元の文章を抜き出した『柳文』があるところから、実際には柳宗元の文も履軒自身はよく読み込んでいたようである。

【書誌情報】

『柳文』 1巻1冊

中井積徳輯 自鈔

〔寸法〕24.2×16.4。

〔書式〕無郭無界の紙を使用。10行17字。

〔内題〕なし。

〔外題〕外表紙左肩に書題簽「柳文」。内表紙左肩に打付け書き「柳文(自筆題簽であろう)」。帙題簽「柳文 全一函 一本 履軒手鈔」。

〔刊記〕なし。

〔奥書〕なし。

〔印記〕受入印「昭和29.12.22受入 105051」(表紙裏にあり)。「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。

〔装訂〕四針眼訂法。全22葉。

〔備考〕内裏表紙として「始得西山宴游記」の書き損じ1葉を使用。水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 4 273」。

〔付箋番号〕「626」。

(藤居)

### 唐詩選国字解 (とうしせんこくじかい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦23.6×横14.8

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍132下 (集部、総集類)

画像点数 2

画像番号 50

中井履軒が『唐詩選』中の五言絶句74首、七言絶句14首を取り上げて平易に解釈したもの。まず、白文で絶句を記し、その後に漢字片仮名まじり文で解釈を施す。解釈の後に「○」印を施してさらに解説を付すものもある。五言絶句に4首、七言絶句に3首、解釈文のない絶句がある。最後の「峨眉<sup>がびさんげつ</sup>山月の歌」も絶句のみで解釈文はない。恐らく本書は未完であろう。

『唐詩選』は江戸時代初期に日本に伝来したらしいが、これが注目され始めたのは荻生<sup>おぎゅうそ</sup>徂<sup>ら</sup>が評価し、徂<sup>ら</sup>の<sup>はっとりなんかく</sup>高弟服部南郭 (1683~1759) が享保9年 (1724) に南郭校訂『唐詩選』を出版してからであった。また、南郭の『唐詩選国字解』が寛政3年 (1791) に出版されていて、履軒の書名と同名である。懷徳堂学派は徂<sup>ら</sup>徂<sup>ら</sup>学派とは対立する立場であったので、あるいは履軒は南郭の同書を意識していたのかもしれない。

試みに履軒の注釈と南郭の注釈とを比較してみると、両者の間には異なる点も多い。例えば、七言絶句中の杜<sup>としんげん</sup>審<sup>そわん</sup>言「蘇<sup>そ</sup>縮<sup>しゆく</sup>書記に贈る」である。これは杜<sup>としんげん</sup>審<sup>そわん</sup>言が遠方に赴任してゆく友人に贈った詩で、詩中に「紅粉<sup>まき</sup>楼中 応<sup>かぞ</sup>に日を計うべし、燕<sup>えん</sup>支<sup>し</sup>山下 年<sup>な</sup>を経ること莫<sup>な</sup>かれ」(ご婦人の住む高樓中では君の帰る日を心待ちにしている、燕<sup>えん</sup>支<sup>し</sup>山のふもとでいつまでも年を過ぎしなさんな)とある。地名の「燕<sup>えん</sup>支<sup>し</sup>」は「臙<sup>えん</sup>脂<sup>し</sup> (婦人の顔料)」の産地で、「紅粉 (同じく婦人の顔料)」と対句になっている。作者は友人に対して、赴任地の女性に心を奪われていつまでも留まっていたはならないと注意している。この対句の趣向を履軒は理解して「燕<sup>えん</sup>支<sup>し</sup>山ヨリ出ル燕<sup>えん</sup>支<sup>し</sup> (臙<sup>えん</sup>脂<sup>し</sup>) ハ婦人ノ粧ヲスルモノユヘ妬<sup>ねた</sup>意<sup>い</sup> (嫉<sup>あや</sup>妬<sup>ま</sup>心) ヲフクマセテ云タル計ナリ」と述べる。一方、南郭はこの趣向については触れていない。履軒の見解の鋭さを見てとることができよう。履軒の『唐詩選国字解』には現代から見れば誤りと言わざるを得ない注釈も散見されるが、彼の『雕<sup>てう</sup>題<sup>てい</sup>』と同様、上記のような創見も多く見ることができる。

なお、懷徳堂文庫には履軒自筆の『唐詩選国字解』の他、古<sup>ふる</sup>林<sup>ばやし</sup>来<sup>らい</sup>蘇<sup>そ</sup>館<sup>かん</sup> (未詳) 旧蔵で、履軒撰『唐詩選国字解』の七言絶句14首のみを抄写した『李<sup>り</sup>選<sup>せん</sup>唐詩<sup>たうし</sup>訳<sup>やく</sup>解<sup>かい</sup>』も収められている。

【書誌情報】

『<sup>とうし せんこく じかい</sup>唐詩選國字解』 1巻1冊

中井積徳撰 手稿

〔寸法〕 23.6×14.8。郭内18.7×12.4

〔書式〕 左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。9行20字前後。注双行。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 外表紙左肩に書題簽「唐詩選國字解」。帙題簽「唐詩選国字解 履軒手稿 全一函 一本」。

〔刊記〕 なし。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「懷徳堂圖書記」(表紙にあり)。「懷徳堂圖書記」。受入印「昭和29.12.22受入 105044」。「大阪大學圖書之印」。「天生寄進」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全22葉。

〔備考〕 表紙上部に「□外□ 三 表紙付」と書いた紙を貼付。水哉館遺書。

〔蔵書票〕 「遺 4 268」。

〔付箋番号〕 「328」。

(藤居)

古文真宝前後集雕題 (こぶんしんぼうぜんこうしゅうちょうだい)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 前集 縦27.3×横18.7 後集 26.7×18.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍141上下 (集部、総集類)

画像点数 2

画像番号 51

『古文真宝前後集』に対する中井履軒の注解書。前集は宝暦3年(1753)京都秋田屋平左衛門刊『<sup>かいほんだい じしよじゆせんかい</sup>魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』(「魁本大字諸儒箋解」は大きな文字で刊刻された大型本で、学者による注釈が付されたもの)、後集は安永4年(1775)京都上坂市兵衛刊の『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』を使用して、欄外に自説を書き入れている。『古文真宝前後集』は宋末元初<sup>こうけん</sup>の黄堅の編とされる。前集は漢から宋までの有名な詩を収め、後集は戦国末、楚<sup>くつげん</sup>の屈原から宋までの文章を収めている。日本には室町時代初期に伝来し、江戸時代に入っても読まれた。荻生徂徠らが俗本だとして批判したが、屈原・陶淵明<sup>とうえんめい</sup>・韓愈<sup>かんゆ</sup>・蘇東坡<sup>そとうぼ</sup>らの名文が収録されており、以後も広く行なわれた。

懷徳堂文庫所蔵の履軒自筆『古文真宝前集雕題』が書き込まれた『魁本大字諸儒箋解古文

『真宝前集』には、墨筆の書き入れ以外に朱筆の書き入れも多く見られ、その中には所々「<sup>ぎょうき</sup>仰斎先生曰」として懷徳堂門人の早野仰斎（1745～1790）の説が引かれている。この朱筆の部分は筆勢も異なることから、履軒壮年時の書き入れである可能性がある。

『古文真宝』の内容について、履軒は独自の観点から鋭い批判を展開している。例えば、『前集』巻上の冒頭に「勸学の文」8編が収められている。その中の5編について履軒は「利もて誘う」と述べ、学問を勧めるために利益で誘っていると批判する。大阪の商人達の援助によって支えられていた懷徳堂としては、正当な商業利益を否定することはなかった。ただ、履軒は水哉館にあって懷徳堂とは少し距離を置く立場であったことから「利」批判の言が生まれてきたのであろう。また、『前集』において、<sup>こうざんこく</sup>黄山谷「<sup>しせん</sup>子瞻 <sup>たく</sup>海南に謫せらる」、韓愈「諸葛亮が隨州に往きて書を読むを送る」「酔うて張秘書に贈る」などの詩に対して、履軒は「悪詩」と述べてその批判的立場を明確にしている。

なお、懷徳堂文庫には履軒自筆の『古文真宝前後集雕題』が書き込まれた『魁本大字諸儒箋解古文真宝前後集』の他、中井蕉園手写による『古文真宝後集雕題』が書き込まれた『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』も収められている。

【書誌情報】

『<sup>かいほんだい</sup>魁本大字諸儒箋解古文真寶 <sup>ぜんしゅう</sup>前集 (古文真寶前後集 雕題)』 3巻1冊

元黄堅輯 寶曆3年 京都秋田屋平左衛門重刊本 中井積徳首書併句読 手稿

〔寸法〕27.3×18.7。郭内20.9～21.3×16.1。

〔版式〕四周单辺。無界。10行21字。注双行。ただし、「叙」は四周单辺。無界。7行11字。

〔版心〕「(上黒魚尾) 古文前集 (巻数) (葉数) (下黒口)」。

〔内題〕「魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之上 (中/下) 前集」。

〔外題〕「寶曆新刻 古文前集 (摩耗しており判読しがたい)」。帙題簽「古文真宝雕題 前集 全二函 第一函 一本 履軒首書」。

〔刊記〕巻末に「寶曆三癸酉春再刻 京極通圓福寺前 秋田屋平左衛門」。「秋田屋平左衛門」の下部に履軒自筆で「板」と加える。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104973」「水哉館」「僊坡圖書」。

〔装訂〕五針眼訂法。

〔備考〕題簽下部に書題簽「古文真宝前集」。水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 3 213」。

〔付箋番号〕「191」。

『<sup>かいほんだいじしよじゆせんかい</sup>魁本大字諸儒箋解<sup>こぶんしんぼう</sup>古文眞寶<sup>こうしゅう</sup>後集<sup>こぶんしんぼうぜんこうしゅうちようだい</sup>(古文眞寶前後集 雕題)』 2巻2冊

元黄堅輯 安永4年 京都上坂市兵衛 重刊本 中井積徳首書 手稿

〔寸法〕26.7×18.2。郭内20.7~21.3×15.3~15.5。

〔版式〕四周単辺。無界。9行20字。注双行。ただし「序」は四周単辺。無界。7行12字。

〔版心〕白口「古文(巻数)(葉数)(下黒口)」。

〔内題〕「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之上(~下) 後集」。

〔外題〕「安永新刻 古文眞寶 乾(~坤)」。題箋下部に打付け書き「後集」。帙題箋「古文眞寶後集雕題 全二函 第二函 二本 履軒首書」。

〔刊記〕第2冊の巻末に「京都堀川四條下町 安永四歳乙未五月再版 上坂市兵衛」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104974(~104975)」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕水哉館遺書。

〔蔵書票〕「遺 3 213」。

〔付箋番号〕「189(~190)」。

(藤居)

#### 天楽楼書籍遺蔵目録(てんらくろうしょせきいぞうもくろく)

関係人物名 中井履軒、<sup>たけしまきざん</sup>竹島箕山

数量(冊数) 1冊

外形寸法(cm) 縦12.1×横34.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書2上

画像点数 2

画像番号 52

中井履軒が開いた私塾<sup>すいさいかん</sup>水哉館に収蔵されていた書籍の目録。「天楽楼」は、履軒が居住していた借家の二階にあった部屋の名。表紙に「天保五年(1834)甲午十月下旬」とあるのは、この目録が作成された時期を表すものと思われる。また、目録末尾に「<sup>たけしまこう</sup>竹島衡校正」とあるから、履軒の弟子・<sup>たけしまきざん</sup>竹島箕山が校正したものであることが分かる。裏表紙にある「<sup>なかい いな</sup>中井威奈太郎」(履軒の孫・中井桐園(幼名は<sup>いな</sup>鯨太郎)と思われる)が、この目録の作成者であろう。

履軒没後、水哉館は子の<sup>いな</sup>桐園に引き継がれていたが、天保5年(1834)、桐園が亡くなり、

水哉館は閉じられる。桐園は、その2年前の天保3年(1832)、中井碩果の養子として懷徳堂に入っていたが、この時はまだ12歳であった。水哉館に残されていた履軒の遺書遺物は、桐園が成人するまでは、履軒の門人たちが保管することに決まる。この目録は、その際に作成されたものであろう。凶書は「一番イ」から「廿番子(ネ)」の本箱別に、詳細に記録されており、「一番イ」から「十番ヌ」は広屋氏(広屋得左衛門か)が保管し、「十一番ル」から「廿番子」は西村庄兵衛が預かるということが記されている。また、履軒が書き入れをした本には、「頭書」「雕題」等と記しており、さらに、紛失してしまった本や、貸出し中の本の名・貸出し先等についても、明確に記録されている。校正者・竹島箕山は、履軒の門人であり、履軒の雕題類を見ることを許されていた人物でもある。恐らくは履軒の蔵書についても熟知していたであろうことから、この目録は履軒の蔵書の全容をほぼ正確に伝えていると思われる。履軒の書籍所蔵状況やどのような本に書き入れをしていたのかを知る上で、貴重な資料である。なお、同目録と併せて、目録作成の際に用いられたと思われる紙片2枚も保存されている。

なお、本目録の翻刻は、『天楽楼書籍遺蔵目録』について—懷徳堂資料のデジタルアーカイブ化に向けて—(寺門日出男、湯浅邦弘、神林裕子、井上了)として、『懷徳』69号(2001年)に掲載されるとともに、懷徳堂データベースに収録された。

**【書誌情報】**

てんらくろうしよせきいぞうもくろく  
『天楽楼書籍遺蔵目録』 1冊

中井桐園手録 竹島箕山校正 天保5年 抄

〔寸法〕 12.1×34.1。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。行数字数不定。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 打ち付け書き「天楽楼書籍遺蔵目録」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105098」。

〔装訂〕 袋帳綴。

〔備考〕 書名が記され、一部が切り取られた紙片二枚が付属。

〔蔵書票〕 「遺 304」。

〔付箋番号〕 「850」。

(寺門)

**華胥国新曆**（かしょこくしんれき）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦23.9×横16.4

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書11上

画像点数 2

画像番号 53

中井履軒の曆書。履軒が自分の住まいを「華胥国」という伝説の理想郷に見立てて著した一連の著作の中の一つである。履軒は、現実からの逃避ではなく、現実を超えた架空の場に身を置くことで、日常世界の既成概念に束縛されることなく現実を捉えなおそうとした。本書も、この理想郷に相応しい、新しい天体観をもって創案され、いち早く太陽暦を取り入れている。その背景となっている西洋天文学の知識は、主として清の游芸が撰した『天経或問』から得られた。『天経或問』とは、中国の伝統的天文学を基盤に西洋の天文学を紹介した書物で、履軒はこれに注釈を加えて『天経或問雕題』を著している。また新曆を作成するに当たっては、江戸時代を代表する天文学者、麻田剛立との交流によるところも大きかった。

曆は、通常、農期を明記することを目的に作られるが、この履軒の新曆には、貞享改曆以来（貞享曆は貞享2年（1685）から宝暦3年（1753）まで用いられた）、非科学的な迷信記事を多く載せる当時の曆への反発もあった。そのため、この新曆は、合理的現実主義者である履軒らしい、至って簡潔なものになっている。具体的には、享和元年（1801）の曆を、上下二段組に編集し、上段には太陽暦の日付を、下段にはそれに対応する太陰暦の日付を記している。上段では、1年を12カ月に分けず、太陽暦の節目となる二十四節気に従って、立春を1年の始まり、すなわち春の第1日とし、以下、立夏を夏の第1日、立秋を秋の第1日、立冬を冬の第1日といった具合に1年を四季で分けているため、春は93日、夏・秋・冬は各91日、1年は計366日となる。一方、下段では、従来どおり12カ月を立て、太陰暦の節目となる朔・西弦・望・東弦を明記し、立春の次の朔を1年の始まり、すなわち正月の一日とし、以下、朔を毎月の月初めとしているため、正月・三月・五月・七月・八月・十月・十二月は各30日、二月・四月・六月・九月・十一月は各29日、1年は計355日となる。また二十四節気および朔望に当たる日については、最上段に干支を記している。

なお、履軒は、本書に先んじて、安永9年（1780）に、「華胥国曆書」（『有間星』巻一）を作成している。この「華胥国曆書」ならびに『華胥国新曆』は、平成2年（1990）、懐徳堂文庫復刊叢書3として、『華胥国物語』などとともに復刻刊行されている。

（湯浅）



## 水哉子 (すいさいし)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 2冊

外形寸法 (cm) 1冊目 縦23.5×横17.3 2冊目24.7×16.1

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書12上

画像点数 1

画像番号 54

中井履軒の自筆随筆集。「水哉」は、『孟子』<sup>りろう</sup>離婁篇の「水なる哉、水なる哉」という文に基づいたもので、履軒の私塾の名(水哉館)にも用いられている。本書は、履軒が読書の際に気づいたことを書きためたもので、例えば、「畠」という国字の由来や豊臣秀吉の逸事など、極めて広範な内容のものである。

本書の表紙裏側に「天生寄進」の印があることから、履軒の曾孫にあたる中井木菟麻呂(号は天生)が所有していたものであることが分かる。『水哉子』は、昭和5年(1930)、関儀一郎<sup>せき</sup>によって刊行されている(『日本儒林叢書』第7巻所収)。この刊本の校訂は木菟麻呂が行ない、校語も記しているが、それによれば、履軒自筆の『水哉子』としては、もともと草稿本と正本との二種類があった。懐徳堂文庫所蔵のものは、その内の草稿本と思われる。木菟麻呂は正本を所有しておらず、草稿本と古本屋で入手した写本、大阪府立図書館所蔵の写本等とを併せて、刊本(日本儒林叢書本)を校訂した。

草稿本と刊本とを比較してみると、草稿本では、各章の配列は雑然としているのに対し、刊本では個々の章の内容により、<sup>ふうさい</sup>覆載(天地)・<sup>しよぶつ</sup>庶物(色々な物)・<sup>きぶつ</sup>器服(道具)・<sup>さいし</sup>祭祀(祭礼)・異端・記述・雑の3巻7篇に整然と分類されている。また、草稿本では、推敲の跡が随所に見られ、各章の下にはそれぞれ、○・△のどちらか一方の記号がつけられている。これらの記号は履軒が正本を作成する際につけたものらしく、○のついたものは刊本に採られているが、逆に△のついたものは採られていない。以上のような相違点と、『天楽楼書籍遺蔵目録』に「『水哉子』五冊」とあることとを併せて考えると、履軒はこの草稿本を基に、正本『水哉子』五冊を作成したものと思われる。なお、同目録でこの草稿本については明記されていないが、「先生真蹟草稿色々」という記録があり、おそらくその中に含まれていたのではないかと思われる。

## 【書誌情報】

『水哉子』 2冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕第1冊 23.5×17.3。郭内18.7×14.2。

第2冊 24.7×16.1。郭内18.6×13.0。

〔書式〕 第1冊 左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。12行21～26字。

第2冊 左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。9行18～25字。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「水哉子一（～二）」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104995（～104996）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。一冊目37葉。二冊目39葉。

〔備考〕 欄外に加筆多数。不審紙・塗抹。各章毎、欄脚に「○・△」の記号。第1冊に「出伝疑小史」等の付箋。

〔蔵書票〕 「遺 4 225」。

〔付箋番号〕 「753（～754）」。

（寺門）

#### 履軒古風（りけんこふう）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 2冊

外形寸法（cm） 縦24.4×横16.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書13下

画像点数 1

画像番号 55

中井履軒の詩集。自筆稿本。第1冊には巻1～3を、第2冊には巻4を綴じてある。巻頭自序に「幽人（履軒自身をさす）は古風の詩賦を喜びて誦し」とあるように、履軒は、押韻・対句・平仄の格律の厳格で窮屈な今体詩を好まず、今体詩が成立する以前の詩体で作詩した。ここに収められた作品は、そのような古体の詩、および賦（散文的で、しかも韻を踏む、韻文と散文の中間的な文体）と呼ばれる作品で、折りに触れて作った作品をまとめたものである。自らの感懐、書物の読後感、他者への贈答など作品の主題はさまざまである。

例えば「孝思詩三首」は、人の善行を聞くのを喜んだという履軒が稲垣子華（いながきしか）の孝行を称えた詩である。稲垣は、中井鬢菴の弟子で、故郷美作の老父のために仕官を辞して孝養を尽くした人物である。宝暦13年（1763）、美作の村人が彼の孝状を役所に報告し、公儀より表彰を賜ることになった。詩にいう、「〔お上より表彰を受けて〕友朋は咸喜び、躬ずから賜を受くるが如し。幽人積徳（幽人は履軒の号、積徳はその名）は式に此の詩を作り、遥かに稲生（稲垣を指す）に貽り、其の美を称頌し、以って四方に伝え、民をして興

起せしむ」と。この稲垣の表彰に関しては、竹山も「稲垣<sup>あきのじょう</sup>浅之丞 純孝記録」「子華孝状」を著し、後者は懷徳堂で刊行している。開学以来、人倫道德とくに孝を重視した懷徳堂の精神が履軒にも受け継がれていることを示している。

また、かく生きようという履軒の決意を述べる作品に「履軒<sup>りけんぎん</sup>吟」がある。そもそも履軒という号は、儒教經典の一つ『易』の履の卦に見える「道を履むこと坦坦。幽人、貞ならば吉。(意味は、踏みゆく道が平坦ならば、踏む者の心も平然として動揺せぬ。貧賤にある賢者は平坦の道を歩むのみ、志を正しく保てば吉である)」(解釈は中井履軒『周易逢原』による)からとったものである。「履軒吟」は、その履の卦を踏んで言う「中にして下位にあり、剛にして能く<sup>よ</sup>屈す。我は其れ夙夜、道を履むこと之れ坦、貞にして之れ吉を享く。優なるかな優なるかな(あくせくしない様子)、聊か以って歳を卒え日を度らん」と。正に履の卦のような、無欲恬淡たる生き方の宣言である。

【書誌情報】

『履軒<sup>りけんこふう</sup>古風』 4巻2冊

中井積徳著 安永2年 手稿

〔寸法〕24.4×16.0。郭内18.6×12.3。

〔書式〕左右双辺、有界、無魚尾、白口の紙を使用。第1冊は、9行20字前後。第2冊は9行15～20字。

〔内題〕「履軒古風」。

〔外題〕第1冊 書題簽「履軒古風 旧一二之卷合于此」。ただし「履軒古風」は藍筆で書き、「旧一二云々」は墨書。第2冊 書題簽「履軒古風 三」と藍筆で書く。帙題簽「履軒古風 履軒手稿 全一函 二本」。

〔印記〕各冊、第1葉表に「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。第1冊のみ第1葉表に「履軒圖書」、第3葉表に「大阪大學圖書」、「自序」に「既雨既處」「尚徳積載」。受入印「昭和29.12.22受入 104997(～104998)」。

〔装訂〕四針眼訂法。第1冊40葉(巻1～3)40葉(内、序2葉、本文38葉)、第2冊(巻4)44葉。

〔備考〕小口書「古風」(第1冊)、「古風三」(第2冊)。第1冊は書題簽に「旧一二之卷合于此」とあるが、実際には巻1・2・3の合冊。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕「遺 4 226」。

〔付箋番号〕「1021(～1022)」。

(矢羽野)

## 履軒数聞 (りけんすうぶん)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦18.5×横12.3

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書13下

画像点数 3

画像番号 56

中井履軒が和漢の度量衡などについて論じた小冊。その議論の対象は、井田制、貨幣制度、天体・測時法にまで及ぶ。中井履軒の自筆本であるが、数次にわたる訂正・加筆の跡も残されており、未定稿である可能性もある。「万鍾弁」(『敝帚続編』所収)や『経界図』などとともに、荻生徂徠の『度量衡考』に対する批判ともとれる議論が随所に見られる。懐徳堂文庫には、刊本『度量衡考』の欄外などに履軒が自説を書き入れ、徂徠の説に逐一反駁した『度量衡考雕題』という資料なども現存しており、おそらくは『履軒数聞』も、徂徠『度量衡考』の影響下に作成されたものであろう。

また注目すべきこととして、「禹貢五服」の図において「当時ノ王畿円径千里也、方千里ニアラズ」などとし、「圈子重画」の説を主張していることがあげられる。これは、例えば「荒服」の二千五百里は、伝統的な経学が主張する二千五百里四方ではなく、半径二千五百里の圏内であるとするもので、このように理解すれば「道里均平」(首都への距離が「荒服」内なら均しくなること)だと履軒は主張する。これは、履軒独特の極めて合理的な理解と言えよう。

なお懐徳堂文庫には、履軒自筆本『履軒数聞』の他、履軒の弟子・竹島簀山の手写した『履軒数聞』も収められている。また『履軒数聞』の抄本は多数が現存し、所在も広範囲に及んでおり、履軒の著述の中でも比較的ひろく読まれたものと考えられる。

## 【書誌情報】

『履軒数聞』 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 24.3×16.2。郭内18.5×横12.3。

〔書式〕 四周単辺、無界、白口、無魚尾の紙を使用。9行20字。

〔内題〕 「履軒数聞」。

〔外題〕 題簽「数聞」。帙題簽「履軒数聞 履軒手稿 全一函 一本」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懐徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105031」。

〔装訂〕四針眼訂法。全62葉（白紙2葉を含む）。角幅あり。

〔備考〕懷徳堂遺書。小口書「數聞」。別紙1枚（約21.7cm×12.3cm）を付す。

〔蔵書票〕「遺 4 257」。

〔付箋番号〕「993」。

(井上)

### 履軒弊帚（りけんへいそう）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 3冊

外形寸法（cm）正編 縦24.4×横16.1 続編 24.5×15.6 季編 24.4×15.8

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書13下

画像点数 1

画像番号 57

中井履軒の漢文による文集。正・続・季の3編からなり、ともに自筆稿本。『弊帚』とは「弊れた帚」の意味。魏の文帝（曹丕）の「典論論文」（『文選』所収）に、「里語に曰く、『家に弊帚有り、之を千金に享す』と。斯れ自ら見ざるの患なり」とあり、自ら過大評価し自分の短所を知らないことを意味する当時の俗諺にもとづく。正編は履軒40歳頃の成立、続編には享和3年（1803）付の自序があり72歳の成立、季編には文化4年（1807）付の自序があり、履軒76歳に成ったものである。正編に25篇、続編に71篇、季編には11篇の文章を収める。関儀一郎『続日本儒林叢書』に翻刻されている。

履軒は、『論語』を「天地間第一の文章」と称して理想の文章とし、それに次いで『孟子』『莊子』『左伝』『史記』を文章の模範とした。正編の自序に、履軒自身が好む古文は、世間のいわゆる古文と異なり、韓愈と同系のものである、自分の文章を自分では高く評価するが世間はそれを認めない、と述べ、それに続けて「其の雑著を輯むるに及び、自ら命けて『弊帚』と曰うは、蓋し自ら其の用に中らざる者なるを知れども千金を享けんとするの心は則ち未だ消えざればなり」と結んでいる。弊帚千金の俗諺は〈身の程知らず〉の意であるが、履軒は自分の文章は千金に値するとの自己評価を『弊帚』の名によって標榜したのである。みづから簡潔素朴で骨太な「古文」を書いた履軒の、文章に対する自負が強く表れている。

『弊帚』所収の文章は、時事・歴史・道義など多岐にわたる議論の他、画賛、評伝、随筆など多様である。例えば、続編所収「義貞論」には履軒晩年に到達した歴史観が窺える。大義名分論からすれば、新田義貞は忠臣、足利尊氏は謀反人、その評価に異議を容れる余地はない。しかし、履軒はいう、「其の世を論じ、其の情を釋ぬれば、則ち五十歩が百歩を笑うもの有り。（略）尊氏の兵は関東に起こり、王命を拒み逆（謀反人）となる。義貞は王命を

奉じ徂征して順（忠臣）となる。其の事は相反するも、<sup>しか</sup>而れども其の心は則ち一なり」と。観念的な大義名分論によらず、客観的な時代状況と人情とを踏んでなされた歴史観が見て取れる。

【書誌情報】

『履軒弊帚』正編・続編・季編 3冊

中井履軒著 手稿

〔寸法〕 正編 24.4×16.1。郭内18.6×12.4。

続編 24.5×15.6。郭内18.3×12.3。

季編 24.4×15.8。郭内18.2×12.0。

〔書式〕 正編 左右双辺、有界、無魚尾、白口の紙を使用。9行25字前後。

続編 左右双辺、有界、無魚尾、白口の紙を使用。9行20字。

季編 竹節欄、版心なしの紙を使用。9行20～25字。

〔内題〕 正編「履軒弊帚」、続編「弊帚續編」、季篇「弊帚季編」。

〔外題〕 正編 書題簽「履軒弊帚 旧一二之卷合于此」。ただし、「履軒弊帚」は藍筆にて書き、「旧一二云々」は墨書。帙題簽「履軒弊帚 履軒手稿 全一函 三本」。

続編 書題簽「弊帚續編」。

季編 書題簽「弊帚季編」。

〔印記〕 正編 第1葉表に「大阪大學圖書之印」「履軒圖書」「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。第3葉表に「大阪大學圖書」。「自序」末尾に「履道坦二」（「二」は繰り返しを意味する記号）「幽人貞吉」。受入印「昭和29.12.22受入 104992」。

続編「懷徳堂圖書記」「天生寄進」「大阪大學圖書之印」。第2葉表に「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104993」。

季編「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。第1葉裏に「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104994」。

〔装訂〕 四針眼訂法。正編47葉（内、序2葉）、続編82葉（内、序1葉）、季編36葉（内、序半葉）。

〔備考〕 正編巻頭に「履軒幽人自序」。続編巻頭に「享和癸亥孟秋」の序。季編巻頭に「文化丁卯之夏書」の序。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 4 223」。

〔付箋番号〕 付箋なし。

(矢羽野)

**度量衡考雕題**（どりょうこうこうちょうだい）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 2冊

外形寸法（cm） 縦26.0×横17.6

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書17下

画像点数 1

画像番号 58

荻生徂徠『度量衡考』の欄外に、中井履軒が注釈を書き入れたもの。履軒の自筆書き入れ本である。徂徠は、「度（物差し）」「量（枘）」に関しては生前『度量考』を著していたが、「衡」すなわち秤に関する研究は、徂徠の弟・北溪<sup>ほっけい</sup>が著した。それに、『度量考』を校訂したものを併せて、享保19年（1734）に刊行されたものが、『度量衡考』である。

履軒の書き入れは、総じて『度量衡考』の誤りを批判するものが多い。例えば、「量考」の中で、周代の枘の容量を求める際に、徂徠は『周礼』<sup>しゅうらい</sup>の記述を根拠としているが、履軒は、「蓋し、斯の翁（徂徠を指す）『周礼』を崇奉<sup>すうほう</sup>して護身<sup>つね</sup>仏と為すが故に、毎に回護<sup>かいご</sup>（守る）して敢えて一言も出さず、殊<sup>こと</sup>に其の劉歆<sup>りゅうきん</sup>の書たるを知らざるなり」と述べ、『周礼』は後漢の劉歆の偽作なのだから、それを根拠とすることが、そもそも間違いであると批判している。ちなみに、偽作者が劉歆か否かはともかく、『周礼』を後世の偽作とするのは、有力な通説である。

江戸時代の日本にあっては、実際に中国で発掘された物差しや秤を対象にするという、考古学的方法を採り入れることは、当然不可能であった。そのため、徂徠はもちろん、それを批判した履軒の研究方法も、古典籍の記述だけを頼りに研究する、文献考証学的方法論という点では共通している。しかし、履軒の厳密かつ客観的な資料批判の姿勢は、徂徠の学問以上に評価できるだろう。

**【書誌情報】**

『度量衡考（度量衡考雕題）』 3巻2冊

荻生徂徠・荻生北溪著 享保19年 松會三四郎西村新七等刊本 中井履軒首書 手稿

〔寸法〕 26.0×17.6。郭内20.7×14.6。

〔版式〕 四周双辺。有界。9行20字。頭注は毎行6字。

〔版心〕 「(黒魚尾) 度考／量考／衡考 (葉数)」。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 「度量衡考 上（～下）」。

〔刊記〕 「享保十九年甲寅正月穀旦校畢 松會三四郎 西村新七等」。

〔印記〕「天樂」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104979（～104980）」。

〔装訂〕四針眼訂法。上冊76葉。下冊92葉。

〔備考〕欄外に朱筆の書き入れ。本文に朱引き。

〔蔵書票〕「遺 3 215」。

〔付箋番号〕「391（～392）」。

（寺門）

### 度量考提要（どりょうこうていよう）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦26.3×横18.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書17下

画像点数 1

画像番号 59

中井履軒が荻生徂徠『度量考』の要点を抄録し<sup>あんご</sup>按語（説明や証明のために添えた言葉）をつけたもの。中井履軒の自筆本。「度」とは物差し、「量」とは枘、「提要」とは要点を提示した本のことで、『度量考』は、中国歴代の度量制度の変遷について考察したものである。

散見する履軒の按語は、徂徠を批判するものが多い。例えば、「度考・周漢尺」で、徂徠は『資治通鑑外紀』という本の記述を根拠にしているが、履軒はそれが遥か後世になって著されたいい加減な書物で、古代の制度を論じる根拠にならないと述べ、徂徠の姿勢を「強弁<sup>きょうべん</sup>牽合（強引に資料をつなげた議論）」と批判している。ただし、ここに見える徂徠批判は、徂徠の個々の説に対するものに限られており、例えば竹山の『非徴』が徂徠の人格や学問の姿勢そのものをも攻撃するのとは異なる。こうしたところにも、懷徳堂学主としての竹山と、比較的自由的な立場にあった履軒との違いを見ることができる。

ところで、なぜ履軒は、敢えてこのような抄録を作成したのだろうか。その理由について履軒自身は何も述べていないが、あるいは『度量考』の長々しい文章が気に障って、その要旨を抜き出したのかもしれない。西村天囚『懷徳堂考』には、古賀精里<sup>こがせいり</sup>（寛政三博士の一人）が自作の文章を履軒に見せたところ、履軒はそれを添削して、3枚分の文章をわずか半枚に縮めたという逸話が載せられている。このように履軒は達意の文章を好んでいたため、徂徠の文章が冗漫に思えて、本書を作成したのではないかと推測される。

#### 【書誌情報】

『度量考提要』<sup>どりょうこうていよう</sup> 1冊



荻生徂徠著 中井履軒按語 手稿

〔寸法〕 26.3×18.1。郭内20.8×14.3。

〔書式〕 左右双辺、有界、白口、単魚尾の紙を使用。10行24字。注は双行不定字。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「度量考提要」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105060」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全20葉。

〔備考〕 原装薄表紙のものに、重建懷徳堂に寄贈されて以降、厚表紙を重ねたものと思われる。薄表紙に書外題「度量考提要」。

〔蔵書票〕 「遺 4 283」。

〔付箋番号〕 付箋破損。

(寺門)

### 通語 (つうご)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 縦24.5×横16.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書28下

画像点数 1

画像番号 60

中井履軒が書いた日本歴史についての史論。中井履軒の手稿本で全10巻。成立は、明和7年(1770)から8年頃とされている。本書は、履軒の没後、天保2年(1831)に履軒門人の早野橘蔭(号は反求)によって公にされた(西村天囚『懷徳堂考』)。その後、天保14年(1843)に大坂書林河内屋記一兵衛により版本が刊行されており、拙修齋叢書にも活字本が入っている。また、明治17年(1884)に、並河寒泉の門人森訥が標注を施し出版した『標注通語』という本もある。

全体の構成は以下の通り。第1冊は「保元語(保元の乱)」「平治語(平治の乱)」「平語上・下(治承の内乱)」。第2冊は「東語上(源氏政権)」「東語中(摂家将軍)」「東語下(北条氏政権)」。第3冊は「元弘語(建武新政)」「延元語(南北朝内乱)」「南語(南北朝合体)」。

保元平治の乱から、南北朝の合体までの歴史について、自らの史論を述べている。各巻の冒頭と末尾に「野史氏曰く」として論贊を記す。尊王斥霸の立場から、儒家的な仁政思想、名分論を説く。南北朝については、南朝正統説を採っている。

なお、懷徳堂文庫は、この履軒手稿本を底本とした鈔者不明の写本、および中井柚園手写本を蔵する。この柚園写本は、天保13年（1842）の清水中洲序、および早野橋隧序を付す。また、この柚園写本を底本として、天保14年（1843）に大坂書林河内屋記一兵衛により刊行された版本も蔵する。

【書誌情報】

『<sup>つうご</sup>通語』 10巻3冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕 24.5×16.2。郭内18.6×12.3。

〔書式〕 左右双辺、有界、白口の紙を使用。各巻第1葉のみ版心に篇名を記す。9行20字。

〔内題〕 「通語」。

〔外題〕 書題簽「通語 一之四」「通語 五之七」「通語 八之十」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」「履軒圖書」「天生寄進」。受入印「昭和29.12.22受入 104988（～104990）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 全書に藍筆で句読が入っている。まれに青い不審紙が貼られている。水哉館遺書。

〔蔵書票〕 「遺 4 222」。

〔付箋番号〕 「1035（～1037）」。

(杉山)

越俎弄筆（えっそろうひつ）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦24.4×横16.2

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書43上

画像点数 4

中井履軒の医書。履軒の手稿本。自序によれば、履軒は、麻田剛立<sup>あさだごうりゅう</sup>が獣体解剖を行い、人体との対照確認を行おうとするのを、「<sup>かたわら</sup>旁に在りて膝を抱えて寓目（注視）」したという。この経験を基に、履軒は、自ら人体解剖図15葉を彩色筆写し、これに解説を加えた。「越俎」とは、自分の本分を越えるという意味、「弄筆」とはたわむれに書くという意味である。本書は、本来麻田剛立によって執筆されるべきものであったのに、剛立が研究に忙しく著述の暇

がなかったから、自ら分を越えて執筆したとの意が込められている。履軒の実証的精神が漢学という枠をはるかに越えて、医学にまで及んでいたことを示す資料である。本書は、平成2年(1990)に刊行された『華胥国物語』(懷徳堂文庫復刻叢書3)の中に『有間星』『華胥国新曆』などととも影印収載された。

内容は、自序に続き、15葉の人体解剖図が記される。まず第1葉から5葉では、「去皮膜(皮膜を去る)」の状態、次に「去肋而見肺(肋を去りて肺を見る)」、さらに「去肺而見隔膜及心(肺を去りて隔膜及び心を見る)」、「去隔膜而見肝(隔膜を去りて肝を見る)去腸而見腸脈(腸を去りて腸脈を見る)」、「去肝而見胆(肝を去りて胆を見る)抉腸而見腸膜(腸を抉りて腸膜を見る)」のように、解剖の手順に沿って内臓の様子を記し、第6・7葉では、内臓を前後から見た様子、第8~13葉では、「心・肺脈」「心背」「氣道」「肝胆」「脾脂」「精通」の各局部を記し、第14葉では「紫白脈大略」として大動脈・大静脈の大略を記し、第15葉では「経筋・肉筋」として筋肉の様子を記して終わる。そして、この図に続き、履軒は、各々について、漢字仮名混じりで解説文を記した後、「凡そ図記するは通人大抵の模様なり。精くわくいはば人々にて小異あるべし。小異に依りて大同を疑うなかれ」と締めくくっている。本書の成書は、安永2年(1773)3月。それは、前野良沢・杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年のことであった。

【書誌情報】

『越俎えつそろうひつ弄筆』 1冊

中井履軒撰 安永2年 手稿

〔寸法〕24.4×16.2。郭内、図版は18.5×12.3。本文は18.7×12.4。

〔書式〕左右双辺、有界、白口、無魚尾の紙を使用。図版は四周単辺、無界、白口、無魚尾の紙を使用。9行21~24字。

〔内題〕「越俎弄筆」。但し、「越俎載筆」と記した後、胡粉(白色の顔料)で塗抹し、その上に「越俎弄筆」と訂正している。なお、『天楽楼書籍遺蔵目録』に附属していた紙片には、「越俎載筆 全」「越俎弄筆 全」と併記されている。この紙片と目録との具体的関係は未詳であり、推測の域を出ないが、本来、『越俎弄筆』は、草稿段階で「越俎載筆」と称されていたのが、定稿の際に「越俎弄筆」と改称され、水哉館(天楽楼)には、その草稿本(「越俎載筆」と定稿本(「越俎弄筆」とが併存していた可能性も指摘できる。

〔外題〕書題簽「越俎弄筆」。帙題簽「越俎弄筆」。

〔刊記〕「安永二年季春」。

〔印記〕表紙に「履軒圖書」。1葉表に「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。2葉裏に「既雨既処」「尚徳積載」。3葉表に「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入

105030」。

〔装訂〕四針眼訂法。全19葉。内、序2葉、図版部分全7葉計15枚、本文10葉。

〔備考〕欄外に書入れ有り。

〔蔵書票〕「遺 4 256」。

〔付箋番号〕「849」。

(湯浅)

### 老婆心 (ろうばしん)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 5巻+付録1巻

外形寸法 (cm) 縦33.0~35.0×横175.0~410.0

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書43下

画像点数 2

画像番号 61

中井履軒が、人体に与える砂糖の悪影響などについて和文で論じた警世書。懐徳堂文庫所蔵の自筆本は、奉書紙数枚を継いだ卷子本であり、全5巻。付録として、履軒撰「しがらみ」1巻を付すが、これは後人の抄写に係るものである。天保5年(1834)以前に紛失していたが、昭和14年(1939)、伊藤介夫氏の遺族から重建懐徳堂に寄贈された。

第1巻「長きまどい」では、近二百年間に、乳幼児の病気が増加し、特に富家の子ほど夭折する例が多いことを嘆く。第2巻「夢のさめかた」では、その原因を最近用いられるようになったものに求め、茶や煙草は無害であり、木綿は食用にされないから、砂糖が原因だと断定し、砂糖の使用・輸入を厳禁すべきであると説く。第3巻「くすしめく」では、砂糖が病気を起こす原因を、砂糖の慈潤効果によって臍管内の<sup>おけつ</sup>淤血が乾くことが妨げられることに求める。第4巻「のこるうたがい」では、砂糖が天然痘の一因となることを論じる。第5巻「へびのあし」では、麻疹・<sup>かんしやく</sup>癩瘡が砂糖に起因すること、喘息が新穀(今年熟し、明年の熟す時期までの穀物)・新酒(冬に醸し、翌年5月までの酒)に起因することを論じ、砂糖の害を強調する。

懐徳堂においては、いわゆる陰陽五行説に基づく伝統的な医学を排斥する傾向が強いが、本資料において表明される履軒の身体観・病原観は特に斬新である。今日の医学的な観点からは首肯できない議論であるが、日本医学思想上において注目すべきものであり、これが履軒の独創であるか否かということも含め、今後の研究が待たれる。

なお懐徳堂文庫には、やはり履軒の手鈔に係る『老婆心』(線装1冊、懐徳堂遺書)が架蔵されており、これは本資料の草本と考えられる。また、本資料の全文を翻字したものが

『懷徳』20号に掲載されている。

【書誌情報】

『老婆心』<sup>ろうぼしん</sup> 5巻附録1巻6軸

中井履軒撰 本文は手稿 附録は抄者未詳

〔寸法〕第1巻33×173。第2巻33×206。第3巻33×202。第4巻33×319。第5巻33×横410。附録35×横189。

〔書式〕無郭無界の紙を使用。行数字数不定。

〔内題〕「長きまとひ」「夢のさめかた」「くすしめく」「のこるうたかひ」「へひのあし」「しからみ」。

〔外題〕「老婆心 附しからみの記」(帙題簽)。内帙に「老婆心」の打付け書き。

〔奥書〕なし。

〔印記〕帙に「懷徳堂圖書記」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。各冊冒頭に「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和27.3.13.受入 67490 (~67494)」。 (ただし第5巻・附録ともに受入印「昭和27.3.13.受入 67494」となっている。)

〔装訂〕卷子本。

〔備考〕

〔蔵書票〕帙に「遺 左7 246」。

〔付箋番号〕「3-3」。

(井上)

有間星 (あらまほし)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 縦24.5×横16.5

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書61下

画像点数 2

画像番号 62

中井履軒が世に「あらまほし」きことを書き付けた仮名文の随筆。原本は4巻を合本とした3冊から成る。全75丁。平成2年(1990)に刊行された『華胥国物語』(懷徳堂文庫復刻叢書3)に収載された『有間星』は、この履軒手稿本を底本として影印されたものである。

特に注目されるのは、全4巻の内の第一巻を占める「華胥国曆書」である。そこでは、「庚子歳」すなわち安永9年(1780)、履軒が転居してその住まいを「華胥国」になぞらえた年の曆が記載されている。この曆は太陽曆を採用し、正、四、六、八、十一月が各31日、二、

三、五、七、九、十、十二月が各30日の計365日としている。後に、山片蟠桃は『夢ノ代』で、「華胥国曆」を作るが、それは、この『有間星』の「華胥曆」に基づくものであった。また、同じく履軒の『華胥国新曆』は、享和元年（1801）の曆であり、同じく太陽曆を採用しながら、そこでは、一年を四季に分け、一年366日を月を分けずに記している。こうした曆の作成には、麻田剛立との交遊が大きな影響を与えている。履軒は、麻田剛立の動物解剖に立ち会って『越俎弄筆』を執筆し、また『履軒数聞』の中で、剛立が実測した地球や月、太陽の周径、地球からの距離などを「麻子測法」として記すなど、剛立から医学・天文学的知識を吸収したことが知られる。

【書誌情報】

『有間星』 4巻3冊

中井履軒著 手稿

〔寸法〕 24.5×16.5。巻1のみ郭内18.4×12.5。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。巻1（第1冊）のみ四周単辺、無界、白口、線魚尾の紙を使用。巻1（第1冊）は曆表、巻2・3（第2冊）は9行20字前後、一部、欄外に注あり。巻4（第3冊）は9行22字前後。

〔内題〕 「(変体仮名で) あらまほし」。

〔外題〕 「有間星 一」「有間星 二三」「有間星 四」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入 105010（～105012）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。第1冊（巻1）16葉（内、曆表部分13葉）、第2冊（巻2・3）38葉、第3冊（巻4）20葉。

〔蔵書票〕 「遺 4 238」。

〔付箋番号〕 「646（～648）」。

(湯浅)

華胥国物語 (かしよこくものがたり)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦24.5×横16.5

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書62上

画像点数 2

画像番号 63

中井履軒が、理想の国の有様を流麗な仮名文で記した物語。全18丁。平成2年(1990)、履軒自筆稿本を影印し、懷徳堂文庫復刻叢書三として刊行された。

題名の「華胥国」とは、中井履軒の住居の号。安永9年(1780)、履軒は米屋町(南本町一丁目)の借家に転居し、その住居に「華胥国门」の扁額<sup>へんがく</sup>を掲げ、自らを華胥国王に擬した。『列子』<sup>れっし</sup>黄帝篇<sup>こうていへん</sup>に記された故事によれば、「華胥国」とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝が夢の中で遊んだという理想国で、そこでは身分の上下がなく、民には愛憎の心がなく、利害の対立もなく、自然のままであったという。また黄帝は、この夢から覚めた後、大いに悟るところがあり、その後、28年間、天下は大いに治まって、ほとんど華胥国の如くであったという。さらに黄帝が崩御した際、民は黄帝の治を慕って泣き叫び、その悲しみは200年間続いたという。

履軒は、この故事を基に、自らの理想を説いた。『華胥国物語』は、華胥国内に位置する南柯国<sup>なんかこく</sup>の君主が質素儉約に努め、租税を軽減し、均田制を採用し、僧侶を還俗させて庶民教育にあたらせ、新田を開発するなどの善政を行っていく様子を描いたものである。したがって、『華胥国物語』は寓話によって理想的な政治の在り方を説いた経世の書である。懷徳堂文庫には、履軒の曾孫に当たる中井木菟麻呂が同書を刊行したときに彫らせた版木10枚(各22.6×43.5)も残されている。

なお履軒は、その住まいで「華胥国」を冠した書を相次いで執筆している。経世についてはこの『華胥国物語』、天文学では『華胥国曆』、歌文では『華胥国歌合』<sup>うたあわせ</sup>などである。

【書誌情報】

『華胥国物語』<sup>かしょこくものがたり</sup> 1冊

中井履軒撰 手稿

〔寸法〕24.5×16.7。

〔書式〕無郭無界の紙を使用。9行20字前後。

〔内題〕「華胥国物かたり」。

〔外題〕「華胥国物語」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和27.12.22受入 文77620図」。

〔装訂〕四針眼訂法。全18葉。

〔備考〕外表紙は後補。

〔蔵書票〕「遺 4 239」。

〔付箋番号〕「847」。

(湯浅)

華胥国物語版木→155頁参照

解師伐袁図 (かいしばつえんず)

関係人物名 岩崎象外、中井履軒

数量 (冊数) 1 幅

外形寸法 (cm) 縦205.3×横58.7

画像点数 1

猿蟹合戦を主題として、岩崎象外が絵を描き、中井履軒がこの絵に賛を書いたもの。賛は『春秋左氏伝』の文体を巧みに模倣している。成立時期は未詳。賛は以下の通り (原文は句読点なし)。

経、四十有七年春、王六月丁戌、大雨雪。夏七月、解師伐袁。

甲亥、入袁、獲袁侯。戊丑、用袁侯于解山。秋十月。

傳、四十七年六月、大雨雪、書不時也。七月、解伐袁、獲袁侯、復讐也。初解子之未生也、其母適野、見袁侯在樹上食柿也。從而請一顆。袁侯怒、擇未熟者而投之、中龜而卒。解子胎方盈、自闕出、匍匐橫行而歸。長而好勇、善擊劍、恆弩目戟手罵曰、「袁侯親讐也。我必復之。」每罵未嘗不噴沫也。歲時黍以為糧。是歲、大雪、無柿栗。袁大饑。於是興師。麻石遇諸塗、問「將何之。」解子曰「伐袁。復讐也。」「所齋者何。」曰「黍團。為天下最。」麻石請從。許之。牛異、刀前、金咸、栗子亦至、謂之如初。皆從焉。壬酉、圍袁。金咸与栗子、宵孔壁而入。金咸匿于衾中、刺袁侯、栗子爆其爐。袁侯一夕三遷。丙子、解子親以師門焉。牛異伏于門側、麻石刀前先登。袁侯懼欲奔、方出門、遇牛異而滾焉。麻石下而壓之、刀前挾之、去其指。解子揮劍、三擊剄之、逐滅袁族。戊丑、用袁侯以祭其母也。

この『解師伐袁図』は、『懷徳堂先賢墨迹』(文教社、1912)などに収められている。また賛は「紀俗傳猿鳴復讐事」という題で、土屋栄編『近世名家小品文鈔』(小林喜右衛門、1882)の中にも収められている。

なお、中井履軒戯著として、『昔昔春秋』という書物が出版されている。この本は、猿蟹合戦・桃太郎・花咲爺などの昔話を組み合わせて翻案し、『春秋左氏伝』の文体で書いたものである。しかし、これは中井履軒の著作ではないというのが定説である。

(杉山)

紙製深衣 (かみせいしんい)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1 領



外形寸法 (cm) 丈125.0 幅150.6

画像点数 2

画像番号 64

中井履軒手製の深衣の模型。明和2年(1765)秋、中井履軒は、深衣しんいを作製した。深衣とは、中国古代の服で、衣うわぎと裳もすそとをつなげて仕立てたもの。懐徳堂文庫所蔵の中井竹山肖像画(中井藍江筆らんこう)で竹山が着用しているのが、これである。履軒は、中国古代の礼制を記した『礼記らいき』の記述に基づき、身、裳、袖そで、衽えりなどのそれぞれの寸法を記しながら、この深衣の雛形ひながたを反古紙ほんごしを使って試作した。表面(胸側)には、「身長二尺二寸」「裳長四寸五尺」などの書き込みの他、襟と袖口、裾については黒で彩色し、その上に「純(布の端)」と白書するなど、実物を忠実に再現しようとしている。また、裏面(背側)には、「明和二年(1765)季秋 履軒幽人製」と記してある。全体に薄く小さな文字が透けて見えるのは、反古紙を使用しているためである。

また履軒は同年冬、『礼記』深衣篇や玉藻篇ぎよくそうの内容を考証して『深衣図解』を著した。ここでは、深衣について具体的に図を交えて解説し、また深衣が古代中国の士大夫の燕服えんぷく(ふだん着)であることを論じている。この紙製深衣と『深衣図解』とは、とかく中国の礼が観念的に捉えられてきたことに対し、自分の目で確認し、また他者にもそれを明瞭な図解によって示そうとするもので、履軒の実証的な精神を表している。

(湯浅)

#### 左九羅帖(さくらじょう)

関係人物名 中井履軒

数量(冊数) 1帖

外形寸法 (cm) 縦28.5×横17.1

画像点数 4

中井履軒が著した本草書ほんぞう。動植物をわかりやすく描き、その傍らに名称を記す体裁によって、その動植物の名称を示す。その筆致は極めて写実的であり、履軒の本草への関心を伝える資料であるとともに、履軒の画才を窺わせる資料ともなっている。履軒が本草に関心を持っていたことは、履軒抄本『本草目録』(大阪大学懐徳堂文庫蔵)の存在によっても窺える。履軒は、動植物の名称の混乱を憂え、これを正すために本資料を著したと考えられる。例えば本資料の冒頭には、サクラおよびウグイスが描かれているが、その傍らには「樺」および「青鳥」と記されている。日本で「サクラ」には「桜」字をあてるのが一般的であり、竹山・碩果らは「桜」ではなく「海棠」の字をあてるべきだとした。履軒はこれらを目をみな非とし、「樺」が正しいとするのである。なお、並河寒泉が晩年「桜ノ宮」に住み「樺翁」と号

したのも、従祖父である履軒の説に基づくとされる。

なお、大阪府立中之島図書館に弘化5年(1848)片山重信抄本『樺帖』が収められているが、これは本資料を底本として筆写されたものである。また、関西大学図書館蔵『絵攜』は、本資料の付録であったと考えられ、『天楽楼書籍遺蔵書目』にも『左九羅帖』と『絵攜』とが録されている。しかし、本資料のみが中井家に伝えられ、『絵攜』は佚したものである。

(井上)

### 聖賢扇 (せいけんおうぎ)

関係人物名 中井履軒、中井柚園

数量 (冊数) 1握

外形寸法 (cm) 上弦長54.5 幅16.4

画像点数 2

中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたもの。原本は失われて存しないが、文政3年(1820)に履軒の子柚園が写したものが残されており、その扇面の記載は、『懐徳』17号付録の吉田鋭雄「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」に翻刻されている。

以下、履軒の評を、表面・裏面を対照させて各々記す。なお、[ ]内は裏面の細書。( )は筆者(湯浅)の注記。漢字を現行字体にし、送りがなを加えるなど、表現の一部を改めた。

#### 表面……裏面

- ・孔孟 (孔子と孟子) ……伊丹極上御膳酒 [賞賛に詞なし]
- ・漢以来の俗学……諸国の酒 [上酒もあり粗酒もあり、処により時によりて様々差別あり、但よきというには限りあり、あしきは限りなし]
- ・老荘……薩摩あわもり [たまたまに一盞の賞玩、但酒宴に出されぬ]
- ・釈 (仏教) ……チンタ [夷狄人はうまがるげな]
- ・道家……薬保命酒 [名目は結構なれど取りあぐる人なし]
- ・神道……濁膠 [古代はこれにて事すみたるか]
- ・禅……焼酎 [暑中或いは積気おさえに一杯はよき事もあるべし。畢竟は毒と心得たるがよからん]
- ・程朱 (北宋の程明道・程伊川と南宋の朱熹) ……伊丹並諸白 [どちらからみても江戸づみづみ、但並酒の古道具を用いて造られたる故、すこしのうつり臭あり。又実が滴うて足がよわい。ここが御膳酒におよばぬ所]
- ・明諸儒 (明代の儒者) ……火入酒 [損じたる酒をなおすが手段。但酔き味はなおりたるよ

うなれど灰の気が鼻をつく。さらは酒はなおりたるやあらずや]

- ・陽明（明の王陽明）……贗伊丹酒 [急度伊丹極上御膳酒と印はあれど、実は並酒に焼酎を合わせたものと見えたり。やはりビイドロの猪口にてまいるべし。間してはいけまい]
- ・仁斎（伊藤仁斎）……新酒 [下戸がすく]
- ・徂徠春台（荻生徂徠と太宰春台）……鬼ころし [あらき<sup>ばかり</sup>計にて酒ともおもほらず（ママ）]

このように、本資料では、孔子孟子の正統儒学が「伊丹極上御膳酒」として絶讃される一方、漢代以降の儒者、宋代・明代の儒者については徐々に評価が厳しくなり、また、儒家以外の老荘や仏教、神道、禪宗などには手厳しい評価が下され、さらに、荻生徂徠と太宰春台は「鬼ころし」と酷評されている。諸学に対する履軒の評価、特に反徂徠の立場を明快に示す資料であると言えよう。

(湯浅)

#### 先君子逢原笈蓋表書（せんくんしほうげんおいふたおもてがき）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1枚

外形寸法（cm） 縦約6×横約2

画像点数 1

画像番号 65

『七経逢原』を納めていた本箱の蓋の表面に、履軒が貼りつけていた紙。「笈」は本箱、「蓋」はふたのこと。この表書の内容は、西村天因『懷徳堂考』等で触れられていたが、今回の調査で初めてその存在が確認された。現在は、変色し、一部虫食いのある表書1枚が、「先君子逢原笈蓋表書」と墨書された白い包み紙によって包装されている。ただし、『懷徳堂考』では、この紙は蓋の表ではなく、裏に貼られていたとしている。『天楽楼書籍遺蔵目録』によれば、『七経逢原』を収める「三番」の本箱には、他に『七経雕題』『通語』『越俎弄筆』等も入っており、また「三番」は、「秘書」「二枚戸錠前」と注記されていて、履軒にとって最も重要な書籍を収蔵した本箱だったことがわかる。

紙の上部中央に大字で記された「假山畚」とは、音読みすると「かさんほん」、すなわち「貸さん本」となる。ただし、「貸さん」は「貸さない」（貸さぬ）の意にも取れるし、「貸そう」（貸さむ）の意にも取れる。下部にある小字で書かれた「武怒通」の三字は、「む」「ぬ」（のどちらにも）通ず」と読み、「假山畚」は「貸さぬ本」の意にも取ってもよいし、「貸す本」の意で取ってもよいということを暗示している。つまり、「貸さぬ」という貴重な本であるが、「貸そう」という気持ちも履軒にはあるという謎が理解できる者には、この本箱内の本を貸してやろうという意である。いかにも遊び心の豊かな履軒らしい謎か

けである。従来、履軒は自己の著述を他人に見せることを頑<sup>かたく</sup>なに嫌ったとされてきたが、この資料を見る限り、理解できる者には積極的に見せよう（貸そう）としていたのではないかと考えられる。

(寺門)

#### 天図（紙製）（てんず（かみせい））

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1面

外形寸法（cm）直径45.0

画像点数 1

中井履軒が天の構造を示すために作成した天体図。懐徳堂文庫には、中井履軒手製の2種類の『天図』が収められており、一つは周囲に金箔を施したこの紙製の天体図で、もう一つは木製の回転式模型である。いずれも、履軒が曆を作成する際の基礎となったと考えられるもので、伝統的な「天<sup>てん</sup>円<sup>えん</sup>地方<sup>ちほう</sup>」（天空の形状は円形で大地の形状は四角い）の考えに基づいて、円形を成している。

紙製の『天図』は、図の真ん中に大きく「天圖」と記し、中央の「氣」を二十八宿<sup>にじゅうはっしゅう</sup>（黄道に沿って天球を28に区分し、星座の所在を明らかにしたもの）が取り巻いている。二十八宿の各名称を記した「星天」の外には、「星天即動天矣、即天穀矣」（「星天」は地球の周囲を動く「天」の穀<sup>から</sup>である）と記されている。また、本図は厚手の板に貼り付けられていて、壁に吊り下げられるようになっている。

(神林)

#### 天図（木製）（てんず（もくせい））

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1面

外形寸法（cm）回転板：直径25.5 台板：縦31.1×横19.0

画像点数 1

中井履軒が作成した木製回転式の天体模型。本図は、四角い台板の上に取り付けられている。赤く塗られた中央の円盤が太陽の光熱の及ぶ範囲を示しており、中心には別紙で太陽とその周囲を回転する紙製の「水胞」「金胞」が取り付けられ、太陽の隣にはこれまた別紙で作られた地球とその周囲を回転する紙製の「月胞」が取り付けられている。赤い円盤の外側には、輪状に切られた木枠に、内側から「火胞」「木胞」「土胞」が記され、その外側の輪は、36等分され、そこに二十八宿の所在が示されている。また各輪に付けられた小さな革ひもに

よって各輪を回転させ、白い小円で示された火星、木星、土星が、地球の周囲を運行する様子を確かめることができる。

ここで注目されるのは、本図が示す宇宙構造が、同じく履軒手製の『方図』と異なる点である。『方図』が地球を中心とした天体構造を示しているのに対し、本図は、中心に太陽を置き、水星、金星、地球、火星、木星、土星、二十八宿という配列になっており、一見、本図が地動説に基づいて作成されたかのように見える。ところが実際に中央の赤い円盤を回転させると、回転板の軸が地球にあるため、太陽は地球を中心として回転する。このことから、履軒が地動説と天動説との折衷案を採っていることがわかる。このように履軒は、『天経或問』などの書物や、麻田剛立あきだごうりゅうなどの一流の天文学者との交流から、天文学に関する知識を習得すると同時に、その知識に基づいて、模型を作るなどし、宇宙を実感しようとしたのである。

また履軒は、宇宙のような極大の世界を解明することに熱心であったが、その一方で、極小の世界にも多大の関心を寄せており、顕微鏡を使った観察記録を記した「顕微鏡記」も残されている。こうした履軒の科学的著作は、まさに朱子の「格物致知」かくぶつちち（各々の物事の本質までつきつめて知識を深めること）が実践された成果と言えよう。

(神林)

#### 方図 (ほうず)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1面

外形寸法 (cm) 縦45.5×横46.0

画像点数 1

中井履軒手製の天体図。「方」とは大地・国土のことであるが、本図は、同じく履軒手製の「天図」とともに宇宙の構造を示すもので、伝統的な「天円地方」えんえんちほう（天空の形状は円形で大地の形状は四角い）の考えに基づいて、四角い厚紙を用いて作られ、周囲には金箔が施されている。また「方図」は厚手の板に貼り付けられ、壁に吊り下げられるようになっている。「方図」の中心には「虚」に包まれた地球があり、これを「月胞」「日胞」「星胞」「天」の層が同心円状に取り巻いている。そして「月胞」には月を、「日胞」には太陽を、「星胞」には二十八宿にじゅうはっしゅう（黄道に沿って天球を28に区分し、星座の所在を明らかにしたもの）の星座の形を描いている。ただし、このように地球を中心据えていることから、本図が天動説に基づいていることがわかる。

また注目されるのは、「天」の外に「華胥国王曰是ヨリ外ハ我イマタ往タル事ナキ故シラズ」と記されている点である。「華胥国王」とは履軒自身のことで、履軒は自分の住まいを

「華胥国」という伝説上の理想郷に見立て、自身を「華胥国王」と称していた。「往タル事ナシ」とは、観測が及ばないというぐらいの意味であろう。履軒は、実証主義的立場から、「天」の外にさらなる宇宙が存在するか否かについて、観測などによって確認ができない以上、安易に結論を出さず、敢えて未詳としているのである。また逆に言えば、履軒は、観測可能な範囲を「天」と定義したのである。このほか、外天には「此図土木火三胞膜未悉」（土胞・木胞・火胞については未詳）とも記されている。このように、本図において、「土胞」「木胞」「火胞」を図示できなかったことについて、「未悉」と明記するあたりにも、履軒の誠実な学問態度が窺われる。なお地球と「土胞」「木胞」「火胞」の位置関係については、木製回転式「天図」に示されている。

(神林)

#### 潮図 (ちょうず)

関係人物名 中井履軒

数量 (冊数) 1面

外形寸法 (cm) 縦32.1×横44.4

画像点数 1

月の位置によって変化する潮汐の満干を示す中井履軒手製の模型。薄手の板に貼り付けられた厚紙の中心に地球を置き、それを包む形で「虚」「月胞」「日胞」が広がる。この内、「虚」と「月胞」は別紙で作られ、「月胞」の上に描かれた月が地球の周囲を回転するようになっている。地球を取り巻く青い部分は海水で、青い下地が多く露出している地点では満潮が、そうでない地点では干潮が起こっていることを示す。回転部分の中央が楕円形にくり抜かれているため、これを回転させると、満潮箇所は月の後を追うように地球の表面を移動する。毎日、約12時間に1回、満干が起こるのは、実は月の公転ではなく地球の自転によるのだが、本図は、履軒が月は地球の周囲を1日で1周すると考えていたことを示している。潮汐の干満が月の出入と連動することは、観測によって古くから知られていたが、その原理を解明したのはニュートン力学であり、地球の表層部分が、月側では月の引力が地球の遠心力に勝り、月の反対側では地球の遠心力が月の引力に勝るため、海水が月に対して前後に伸びると説明される。この理論に従えば、満潮は常に月が南中したとき起こることとなるが、実際は地形や海深の影響を受けて複雑な動きをするため、例えば日本近海では月の南中より約6時間遅れて観測される。この『潮図』を見ると、満潮と月が直角に位置しており、『潮図』がいかにか厳密に作成されているかがわかる。

この満干現象の発生原理を履軒がどう考えていたのかについては、履軒の潮汐論を受けた山片蟠桃が「潮汐八月ニ随フテ干満ス。何ノ謂ヲシラザレドモ、ソノ由縁ナキニシモアラズ。

月ハ地ヲ心トシテメグリテ間断ナシ。尤地ニ近シ。ユヘニソノカラ以テ海水ヲ推スナリ」(『夢の代』天文第一)と述べているのが参考となる。確かに履軒の『潮図』では、海水が押されゴムまりのようにひしゃげている。また、干満に及ぼす太陽の引力の影響についても、蟠桃は岩橋善兵衛の『平天儀図解』を引いて「朔望ノ前後ハ潮平日ヨリ干満甚シ。コレ日ノカラ添ルナリ」(同前)と言及している。こうした履軒や蟠桃の潮汐研究は、単なる科学的興味によるものではなく、当時の海上運送に関わる実学研究であり、履軒が熱心に暦を作成したのも、一つには潮汐の満干周期を知るためと考えられる。

(神林)

### 中井履軒肖像画 (なかいりけんしょうぞうが)

関係人物名 中井履軒、<sup>みむらこんざん</sup>三村崑山

数量 (冊数) 1 幅

外形寸法 (cm) 縦117.5×横36.0

画像点数 1

中井履軒の肖像画。筆者未詳。描線の様子からみて、下絵の段階のものであると推定される。上部に履軒の墓誌銘の拓本が貼られている。懷徳堂文庫には、同一の構図の肖像画がもう一枚蔵されているが、そちらの方は、膝や机の位置がやや不自然であり、恐らくこの肖像画から模写されたものではないかと考えられる。西村天因『懷徳堂考』によれば、「履軒の容貌は魁秀<sup>かいしゅう</sup>」で顔の輪郭が非常に大きく、また両眼の大きいことが、その特徴であったという。この肖像は、西村天因『懷徳堂考』の伝える風貌によく合致している。

上部の墓誌銘は、履軒の高弟・<sup>みむらこんざん</sup>三村崑山の撰によるもの。一句四文字の韻文で、「<sup>たか</sup>卓いかな<sup>そ</sup>厥の才、<sup>あつ</sup>醇いかな<sup>しゅし</sup>厥の学。洙泗の源を探り、末流の濁れるを澄ます。古を攷ふること精微にして、識<sup>つし</sup>先覚を超ゆ 嚴なるも克く裕く 高潔にして俗を絶つ 千歳まで朽ちず 永く懿徳を欽まれん」と訓読できる。おおよそ以下のような意味であろう。履軒先生の才能は何と高く、学問は何と厚いことか。先生は孔子の学問(洙泗は、洙水とその支流の泗水に挟まれた土地のこと。孔子の生地であり、没した地でもある。転じて孔子の学問を言う)の本源を探究して、現世の学問の濁りを取り除かれた。経書や史書などの注釈は精緻で、その学識は先人の学問を遥かに越えている。その人となりは厳格ではあるが寛大で、無欲で心が気高く、世俗とかけ離れていた。その徳はいつまでも朽ちることなく、後世の人々に敬われるであろう。

(寺門)

### 白鹿洞書院揭示拓本（はくろくどうしょいんけいじたくほん）

関係人物名 中井履軒

数量（冊数） 1枚

外形寸法（cm） 縦41.3×横167.0（残存部分）

画像点数 1

画像番号 66

白鹿洞書院揭示とは、朱子が白鹿洞書院を再建する際に定めた学生心得。後に朱子学の普及とともに、中国をはじめとする近隣諸国の学校において、教育の大綱として利用され続けた。朱子学を宗とした懐徳堂も例外ではなく、天明2年（1782）に中井履軒がこれを抄写して堂内に掲げた。本資料はその拓本である。

白鹿洞は、もと唐の貞元年間（785～805年）に江西省星子県の西北の廬山にある五老峰に設けられた書齋の名で、そこに隠居した李涉と李渤の兄弟が、常に白い鹿を従えていたことにちなんでつけられたものである。白鹿洞は、五代の末に一度滅んだが、北宋に入って復興され、四大書院の一つに数えられ、隆盛を誇った。しかし宋の南渡の際、再び衰亡し、朱子が南康軍の知事としてこの地を訪れるに及んで、その荒廃を嘆き、淳熙6年（1179）にこれを修復し、学生を集め、自らも講義を行うなどして復興に努めた。

揭示の内容は、教学の原則を古典の中から引用して構成したものである。学問の基本となる「五つの教え」については、『孟子』から「父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り」（滕文公上篇）と。この「五教を学ぶ順序」については、『中庸』から「博く之を学び、審らかに之を問い、慎しみて之を思い、明らかに之を辨じ、篤く之を行なう」（第20章）と。その要点として、「身を修める要」については、『論語』から「言忠信、行篤敬」（衛霊公篇）、『易』から「忿を懲らし忿を窒ぐ」（損卦象伝）、および「善に遷り過ちを改む」（益卦象伝）と。また「事柄に対処する要」については、『漢書』から「其の義を正して其の利を謀らず、其の道を明らかにして其の功を計らず」（董仲舒伝）と。「人に対応する要」については、『論語』から「己の欲せざる所を、人に施すこと勿かれ」（衛霊公篇）、『孟子』から「行いて得ざる者有れば、諸を己に反求す」（離婁上篇）と、引いている。

後世、「白鹿洞書院学規」とも呼ばれているが、朱子の跋文によれば、拘束力の強い「学規」という呼称を嫌っており、「揭示」とするのが朱子の本意である。

なお、懐徳堂所蔵の拓本は、「父子有親君臣、有義夫婦有別、長幼有序朋友」の部分が破断により残欠となっており、周辺部も劣化していたが、大阪大学創立七十周年記念事業で公開されたバーチャル懐徳堂では、履軒の筆跡をもとにデジタル画像として復元したものが使用された。

（神林）



## 2-7 富永芳春・富永仲基関係資料

## 富永芳春尺牘（とみながほうしゅんせきとく）

関係人物名 富永芳春

数量（冊数） 1通

外形寸法（cm） 縦28×横16.5

画像番号 67

道明寺屋吉左衛門（富永芳春）が、懷徳堂を経済的に支援した同志に宛てて書いた文書。「尺牘」とはあるが、内容は懷徳堂運営資金の預手形である。小さく折り畳んだ預手形を包み紙で包んである。包み紙に「道明寺屋吉左衛門文銀貳目辰十二月廿日預り手形入」とあり、預手形には「預り申銀子之事／文銀貳貫目也／右の銀預り申所実正也。何時にても此手形にて返弁可仕候。爲後証仍如件。／元文元年丙辰十二月廿日 道明寺屋吉左衛門（印）／学問所同志中」と記されている。印にある「徳通」は、懷徳堂五同志の一人である道明寺屋吉左衛門の名である。

懷徳堂が享保11年（1726）に官許を得て以後、謝礼についての定めをつくっている。それによれば、学問所の運営資金は、聴講者の応分の謝礼のほか、五同志および新旧同志による一定額のきよきん贖金によって維持され、不足分は旧来の同志による寄付金の利息を運営費に充て、元金は相続料として永久に伝えてゆくことになっていた。富永芳春は懷徳堂の前身である多松たしょうどう堂の設立以来、懷徳堂の経済的支援や運営に携わってきた。この手形の日付にある元文元年（1736）は、三宅石庵が享保15年（1730）に没した後、中井齋庵が学主兼預り人として学問所運営に手腕を振るっていた時期で、富永芳春が齋庵当時の学問所の経営に果たしていた役割の一面を窺うことができる。

(矢羽野)

## 翁の文（おきなのおふみ）

関係人物名 とみながなかもと 富永仲基

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦27.3×横19.6

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書19上

画像点数 2

画像番号 68

富永仲基の主著の一つ。神道、儒教、仏教を批判し、「誠の道」を説いたもの。ある老人が語った話として著述しているため、『翁の文』と名付けている。本書は、延享3年（1746）大坂富士屋長兵衛刊本を、大正13年（1924）に京都小林忠治郎が影印したものであり、その

影印に用いられた原本は現在国立国会図書館に収められている。巻首に林師良の序、全機居士（川井立牧）の序、伴礼玄幹の序、伴のなかもとの自序を附す。巻末に、内藤湖南の跋、亀田次郎の識語が影印されている。本文は全体で16節からなる。

富永仲基の立場は、特定の教説にとらわれることなく、それぞれの教説を相対化することであった。そして、自らが主張するのは、当時実際に認められていたところの道徳、すなわち「誠」であった。

仲基は本書の中で「加上説」を説く。「加上説」とは、『翁の文』第9節に「古より道をとく法をはじむるもの、必ずそのかこつけて祖とするところありて、我より先にたてたる者の上を出んとする」とあるように、新しい教説をたてる者は、先行の教説を凌駕しようとして、より古い権威を持ち出してくる、という説である。その結果、一見古いように見える教説が、実は後出の説であることもあり得る、と言うのである。例えば、次のような例を挙げている。孔子や墨子が堯・舜の王道を主張したのは、当時もてはやされた齊の桓公や晋の文公の霸道の上を行こうとしたためである。その後、楊朱が黄帝を尊重したのは、孔子や墨子の主張のさらに上を行こうとしたものである。持ち出された権威は、齊の桓公・晋の文公よりも堯・舜の方が古く、堯・舜よりも黄帝の方が古い。しかし、教説としては、霸道の説よりも孔子・墨子の説の方が新しく、孔子・墨子の説よりも楊朱の説の方が新しいのである。

また、仲基は本書で、インドの仏教、中国の儒教、日本の神道を比較して次のように言う。仏教の特徴は「幻術」である。インドでは幻術を好むので、教説の中に幻術を交えている。儒教の特徴は「文辞」である。中国では弁舌を好むので、教説も文辞が巧みである。神道の特徴は「神秘・秘伝・伝授」である。日本では、人を教え導くときに「秘伝」などといって隠そうとする。それぞれの教説は、それぞれの民族性の制約を受けており、絶対的なものではないということである。

なお、『翁の文』は『日本古典文学大系97近世思想家文集』（岩波書店、1966）に原文が収められており、『日本の名著18 富永仲基 石田梅岩』（中央公論社、1972）には現代語訳が収められている。

#### 【書誌情報】

『翁の文』 1冊

富永仲基著 延享3年 大坂富士屋長兵衛刊本 大正13年 京都小林忠治郎 影印

〔寸法〕27.3×19.6。郭内19.0×14.0。

〔版式〕四周単辺。無界。7行18字前後。

〔版心〕「翁之文（葉数）」。序は「序ノ一（～六）」。

〔内題〕「翁能文」。

〔外題〕「翁之文」。

- 〔刊記〕「大正13年6月28日、京都市小林忠治郎刊」。  
 〔印記〕「懷徳堂圖書記」。受入印なし。  
 〔装訂〕四針眼訂法。  
 〔備考〕国立国会図書館蔵亀田次郎旧蔵本の縮写景印本である。  
 〔蔵書票〕「懷 132」「34 173」。  
 〔付箋番号〕「882」。

(杉山)

### 出定後語 (しゅつじょうごご・しゅつじょうこうご)

関係人物名 富永仲基

富永仲基が著した仏教思想史論。2巻2冊。延享2年(1745)11月刊(丹波屋理兵衛開版)。延享元年(1744)8月の自序がある。延享2年・文化2年などの再刊本がある。その構成は、上巻が「教起の前後 第一」から「四諦・十二因縁・六度 第十三」まで、下巻が「戒第十四」から「雜 第二十五」までの、全25章。

本書は、仏教思想の歴史的発展過程を、<sup>かじょうせつ</sup>加上説という仲基の独創的な理論を用いて分析したものである。加上説とは、先発の学説に対して後から加えられる(加上される)学説は、自説が先発の学説より優れたものであることを主張しようとし、より古い時代にその起源を求めるなど、先発の学説より複雑になるとする考え方。この考えによって仲基は、釈迦の所説は先行する諸学説に加上されたものであり、またその釈迦の所説に対して後に諸説が次々と加上されていったとする。また仲基は、仏典を研究するに当たって、ある概念を指す言葉が、「人」(話し手や聞き手)、「世」(用いられた時代)、「類」(意味の種類)の「三物」によって異なることを考慮しなければならないとした。加えて、儒教や仏教といった外国から伝来した思想と国民性との関係に注目した。

仲基には継承者がなく、その学問は長らく埋もれていたが、重建懷徳堂で講師を務めた内藤湖南は、『出定後語』を山片蟠桃の『夢の代』、三浦梅園の『三語』と並べ、近世日本における貴重な独創的思想の書であるとして高く評価した。

(竹田)

### 論語徴駁 (ろんごちょうばく)

関係人物名 <sup>いかりせつけい</sup>井狩雪溪、富永仲基

数量(冊数) 5冊

外形寸法(cm) 縦23.2×横16.7

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍15下(経部、四書類)

画像点数 3

画像番号 69

井狩雪溪いかりせつげいの著。荻生徂徠の『論語徴』を論駁することを主旨とした『論語』注釈書である。全10巻。本書の扉に「井狩雪溪子述・赤羽原虚郷写」とある。

まず巻頭に「総論」を置き、『論語』がくじ学而篇以下、圈点の下に「～章」として各章の冒頭部分を挙げ、次に一格を下げて問題となる『論語徴』の冒頭部分を挙げ、さらに一格を下げて雪溪の注釈を記している。そして巻末には五井蘭洲が雪溪に宛てた書簡「与井狩雪溪子書」が収められている。この書簡によれば、『論語徴駁』を書き上げた雪溪が、これを蘭洲や富永仲基に見せて批評を求めたようである。この『論語徴駁』において、特に重要な点は、断片的ではあるが、「仲基云」として、22ヶ条にわたって富永仲基の説が見られ、仲基の経学的一端を窺い知ることができる点である。この仲基の『論語徴』批判の文章は、『懐徳』11号の吉田鋭雄「富永仲基の論語徴駁説」に翻刻されている。仲基の著述は散佚しているものが多いが、この『論語徴駁』を通じて、仲基もまた蘭洲・竹山と同じ反徂徠の立場にあったことが分かる。

結局、『論語徴駁』は、蘭洲の『非物』や竹山の『非徴』のように出版されることはなかったが、徂徠学批判の先駆けとも言える貴重な資料である。

【書誌情報】

『論語徴駁』ろんごちようばく 10巻5冊

井狩雪溪撰 抄

〔寸法〕23.2×16.7。

〔書式〕無郭無界の紙を使用。9行16字。注は1格低くし毎行15字。

〔内題〕「論語徴駁卷一（～十）」。

〔外題〕書題簽「論語徴駁 甲乙」「論語徴駁 丙丁」「論語徴駁 戊己」「論語徴駁 庚申」「論語徴駁 壬癸 卷之九、十」。帙題簽「論語徴駁 井狩雪溪撰 仲基補説 全一函 五本 抄本」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天囚書室」「碩園記念文庫」「懐徳堂圖書記」。受入印なし。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕扉に「井狩雪溪子述 論語徴駁 志羽原虚郷寫」。第5冊の巻末に五井蘭洲の「与井狩雪溪子書」を付す。

〔蔵書票〕「懐 134」「6 48」。

〔付箋番号〕「979（～983）」。

（神林）

## 2-8 山片蟠桃関係資料

## 幸我の償（夢の代）（さいがのつぐない（ゆめのしろ））

関係人物名 <sup>やまがたばんとう</sup> 山片蟠桃

山片蟠桃（1748～1821）が子孫への教訓として綴った随筆。享和2年（1802）の自序、文政3年（1806）の跋文がある。天文・地理・神代・歴代・制度・経済・経論・雑書・異端・無鬼上・無鬼下・雑論の12編からなる。明治時代にその一部が初めて版行された。

初め蟠桃は、孔子の弟子である幸我が昼寝をし、それを孔子が責めた話（『論語』公治長）にちなみ、『幸我の償』（幸我のように昼寝をしようとした不肖の弟子が、その償いとして書いたもの）と題した。『論語』公治長篇に「宰予、昼寝ぬ。子曰く、<sup>きゆうぼく</sup>朽木は雕るべからず、<sup>ほ</sup>糞土の牆は圯るべからず。予に於てか何ぞ誅めん（宰予晝寝。子曰、朽木不可雕也、糞土之墻不可圯也。於予與何誅）」と見えるのがそれである。しかし後に履軒の意見によって『夢の代』と改題した。

蟠桃（本名・長谷川有躬）は、<sup>ますやべっけ</sup>升屋別家の伯父・久兵衛の養子となり、本家升屋に奉公するかたわら懷徳堂に通い、中井竹山・履軒に学んで二人を生涯の師と仰いだ。享和2年に『夢の代』を書き始めたが、完成に至るまでにたびたび竹山・履軒に校閲を請い、その指導を受けて加筆を行っている。

『夢の代』は、全体として<sup>るいしよ</sup>類書（百科全書）的な構成を取るが、全編にわたって、升屋の番頭として活躍した蟠桃の徹底した実証的合理主義の立場が示されている。特に徹底的な無鬼論を主張、靈魂の存在を強く否定した点はよく知られている。また蟠桃は、朱子学的立場に立って「<sup>かくぶつちち</sup>格物致知」を重視しつつ、同時に西洋天文学の知識を受容して地動説を受け入れ、儒教的な「天」と西洋天文学の対象とする「天体」とを結合した。

重建懷徳堂の顧問でもあった内藤湖南は、蟠桃の『夢の代』を、富永仲基の『出定後語』、三浦梅園の『三語』と並べて、近世日本における貴重な独創的思想の書であるとして、高く評価した。

（竹田）

## 2-9 草間直方関係資料

## 三貨図彙（さんかずい）

関係人物名 <sup>くさまなおかた</sup> 草間直方

草間直方が著した、我が国における最初の貨幣史。寛政5年（1793）頃に執筆を開始し、文化12年（1815）に脱稿。全42冊。原本は、大阪府立中之島図書館に寄託されている。

直方は、京都の<sup>ますやただえもん</sup>枳屋唯右衛門の子として生まれ、後に<sup>べっけ</sup>鴻池家の別家・草間家の女婿となっ

た。文化5年(1808)に独立して両替屋を経営、商人として山片蟠桃と同時期に大坂で活躍した。通称・鴻池伊助。また蟠桃と同じく、懷徳堂で中井竹山・履軒に学んだ。

『三貨図彙』は、直方が晩年隠居してから著したもので、古代から江戸時代に至るまでの金・銀・銭(銅銭)の三貨について、その歴史を図入りで紹介し、また物価の変動について歴史的考察を加えた書である。その構成は、冒頭の第1～第20冊が三貨を図示しつつその起源と変遷について述べた部分、以下、米価を中心とした物価論や、貨幣の品位と物価の変動とについて述べた「物価之部」第1～10、量目・斛・為替などについて述べ、また新井白石の『宝貨事略』などの資料を収めた「付録之部」第1～9、文政8年(1825)までの10年間の物価変動などを記した「遺考之部」第1～3と続く。

直方の独自の物価論は、自律的な自由市場経済を主張するもので、幕府による米価の統制に対して批判的であった。大商人・鴻池家の経済活動を背景に、実務に裏づけられて成立した『三貨図彙』は、実効的な知識の集成であり、他家への貸し出しを禁じられていたという。

明治7年(1874)に『大日本貨幣史』が編纂される際に、本書は貴重な資料として活用された。

(竹田)

## 2-10 中井蕉園関係資料

蕉園首書周易(しょうえんしゅしよしゅうえき)

関係人物名 中井蕉園

数量(冊数) 5冊

外形寸法(cm) 縦23.0×横16.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍3上(経部、易類)

画像点数 2

画像番号 70

中井蕉園による『周易』の注釈書。享保9年(1724)京都今村八兵衛刊本を用いて、その欄外に注釈を書き入れている。全24巻。この『周易』のテキストは、『周易伝義』<sup>しゅうえきでんぎ</sup>とも呼ばれ、明の永楽年間(1403～24)に編纂された『周易大全』<sup>しゅうえきたいぜん</sup>を底本とし、「上経・下経」「繫辞伝」「説卦伝」「序卦伝」「雑卦伝」という構成になっている。またその書名は、文字通り、程子の『伊川易伝』<sup>いせんえきでん</sup>と朱子の『周易本義』<sup>しゅうえきほんぎ</sup>を合わせたものという意味である。この『伊川易伝』と『周易本義』は、易学に新しい局面を開いた書物であり、宋代以降の程朱学者にとって、両者の説をいかに統合していくかが一つの大きな課題であった。蕉園はこのテキストの体裁を踏襲するとともに、内容的にも、『周易大全』によっており、『周易大全』から、朱子の説を中心に、宋元の儒者の説を数多く引用している。

また蕉園は、『詩集伝』『礼記集説』『春秋左氏伝』、そして『四書集注』にも書き入れをしているが、いずれも蕉園独自の注釈というよりは、大半が中井履軒の『七経雕題』あるいは『七経雕題略』からの引用である。これに対してこの『周易』の書き入れは、中井竹山の『易断』や履軒の『周易雕題』『周易雕題略』と内容的に重なる部分が少なく、他の書き入れ本のように、「叔父曰」あるいは「伯父曰」という形で、履軒や竹山の説を引く箇所が見られない。このことから、蕉園が必ずしも履軒の説に全面的に従わず、独自の解釈を模索していたと推測できる。

【書誌情報】

『周易伝義』<sup>しゅうえきでんぎ</sup> 24巻首1巻5冊

程頤伝 朱熹本義 享保9年 今村八兵衛刊本 中井蕉園首書 手稿

〔寸法〕 23.0×16.0。郭内16.8×12.5。

〔版式〕 四周単辺。無界。7行16字。注は1格低くし小字で双行19字。

〔版心〕 「易經集註（黒魚尾）（巻数）（葉数）」。

〔内題〕 「周易卷一（～二十四） 程朱傳義」。

〔外題〕 書題簽「周易傳義 乾至小畜 一」「周易傳義 履至頤 二」「周易傳義 大過至解」「周易傳義 損至旅 四」「周易傳義 巽至未濟 兩繫説序雜 五」。帙題簽「周易伝義 全一函 五本 蕉園書入」。

〔刊記〕 卷首末に「享保九甲辰年正月吉辰 二條通柳馬場西江入町 今村八兵衛板」。

〔印記〕 「蕉園帳中之秘」「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學之印」。受入印「昭和29.12.22受入 104691（～104695）」。第1冊のみ「大阪大學圖書」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 蕉園の首書は、基本的に問題となるテキストの上欄外に記し、内容ごとに改行する。首書中、墨筆・朱筆で字句を塗抹・訂正・挿入している箇所あり。またテキスト中にも圈点・句読点などの書入れあり。

〔蔵書票〕 「遺 2 77」。

〔付箋番号〕 「299（～303）」。

（神林）

蕉園首書詩經集註（しょうえんしゅしよしきょうしつちゅう）

関係人物名 中井蕉園

数量（冊数） 4冊

外形寸法（cm） 縦23.0×横16.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍8上（経部、詩類）

画像点数 1

画像番号 71

『詩經集註』に対する中井蕉園の自筆書き入れ本。全15巻。『詩經』は、中国古代の歌謡を集めた本で、儒教の經典のひとつ。『詩經集註』は、南宋の朱熹が『詩經』に対して注釈を施したものである。その享保年間刊本『詩經集註』に対して、蕉園が書き入れを施したものが、この本である。

書名について、刊本の内題は『詩經集註』であるが、蕉園はそれを『詩集伝』と訂正し、「集註当作集伝他做此（「集註」は当に「集伝」に作るべし。他此に倣う）」と書き入れている。さらに、各冊の書き題簽にも「詩集伝」と書いている。つまり、蕉園にとってはこの本は『詩集伝』である。

詩經本文の韻字には、左上に朱で押韻おうえんの記号を附している。朱子の注文には、朱子が毛伝・鄭箋を引用している部分に傍点を施し、朱子が孔疏を引用している部分には圈点を施している。また、欄外には蕉園自身による書き入れがある。その際、「伯子曰」「夫子曰」として中井竹山『詩断』の説を引き、「仲子曰」「履軒先生曰」として中井履軒『詩雕題』『詩雕題略』などの説を引き、「坡案」「坡云」「坡曰」として自説を述べる（中井蕉園の号は仙坡せんぱ）。蕉園による自説の書き入れとしては、テキストの校勘や、朱子の注の批判などがあるが、その数は少ない。しかし、独自の説が少ないのは、この注釈作業を完成させることができなかつたからである。蕉園は、まず『詩經』を読みながら、竹山・履軒たちの説を実に几帳面に書き入れていった。蕉園の手記である『雕蟲自為しょうちゅうじい』によれば、彼は少なくとも24歳、27歳、34歳の時に『詩經』を読んでいる。この本の書き入れはその時になされたものであろう。その後、自説を発展させていくはずだったに違いない。しかし、蕉園は享和3年（1803）、37歳の若さでこの世を去り、この注釈作業はここで中断された。

#### 【書誌情報】

『詩經集註』 15巻4冊

南宋朱熹集傳 享保間刊本 中井蕉園首書 手稿

〔寸法〕 23.0×16.1。郭内16.3×12.1。

〔版式〕 四周単辺。無界。7行16字。注は改行して1格低くし双行19字。序は6行14字。注は双行14字。

〔版心〕 「詩經集註（黒魚尾）（巻数）（白魚尾）（葉数）」。各葉に風名（あるいは什名）、および詩名を朱書。

〔内題〕 「詩經集註」。ただし、蕉園は「集註當作集傳他做此」と書入れ。

〔外題〕 書題簽「詩集傳 温」「詩集傳 柔」「詩集傳 敦」「詩集傳 厚」。帙題簽「詩集傳 全一函 四冊 蕉園書入」。



〔刊記〕なし。

〔印記〕「大阪大學圖書之印」「蕉園帳中之秘」「懷徳堂圖書記」「天生寄進」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104696（～104699）」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕各冊の表紙右上に「風之上」「風之下」「小雅」「大雅 頌」と打付け書き。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕「遺 2 78」。

〔付箋番号〕「8（～11）」。

(杉山)

### 蕉園首書礼記集説 (しょうえんしゅしよらいきしゅうせつ)

関係人物名 中井蕉園

数量 (冊数) 10冊

外形寸法 (cm) 縦23.1×横16.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍10上 (経部、礼類、礼記之属)

画像点数 1

画像番号 72

中井蕉園が『礼記』についての注釈を書き入れたもの。全30巻。『礼記』は、中国古代の社会規範である「礼」についての記事を集めた本である。『礼記集説』は、元の陳澧<sup>ちんこう</sup>が著した『礼記』に対する注釈書である。この注釈は朱子学の立場から『礼記』に注釈を施したものであり、明代の『五経大全<sup>ごきょうたいぜん</sup>』のひとつ『礼記大全』は、この陳澧『礼記集説』をもとにして作られた。懷徳堂文庫所蔵の本書は、享保9年(1724)に京都の今村八兵衛が刊行した刊本『礼記集説』の欄外に、中井蕉園が書き入れを施したものである。『礼記』本文に訓点<sup>くんてん</sup>が施され、また、欄外に書き入れが施されている。書き入れのほとんどは「叔子曰」として履軒の説(『礼記雕題略』)を引用するものである。自説の書き入れが少ないのは、この注釈が準備段階で終わってしまったからである。

蕉園の手記である『雕蟲自為<sup>ちようちゆうじ い</sup>』によると、彼は少なくとも28歳、35歳の時に『礼記』を読んでいる。特に35歳の年すなわち享和元年(1801)は、集中的に『礼記』に取り組んだ1年だったようである。この本の書き入れはその時になされたものだと考えられる。全10冊のすべての版心にその篇名を朱書して、検索しやすくしていることから、その後もこの『礼記』をノートとして書き入れを続けていく予定だったと思われる。しかし、蕉園は享和3年(1803)に37歳の若さでこの世を去り、注釈作業も完成することはなかった。

【書誌情報】

『<sup>らい ましゅうせつ</sup>禮記集説』 30巻10冊

元陳澧撰 享保9年京都今村八兵衛刊本 中井蕉園首書訓點

〔寸法〕 23.1×16.1。郭内16.1～16.5×12.1。

〔版式〕 四周単辺。無界。7行16字。序は6行14字。

〔版心〕 「禮記集註（黒魚尾）（巻数）（線魚尾）（葉数）」。毎葉表の（巻数）下に、各篇名を朱書。

〔内題〕 「禮記集説」。

〔外題〕 「禮記集説 甲（～癸）」。各冊右上に篇名を打付け書き。帙題簽「禮記集説 全一函 十本 蕉園首書」。

〔刊記〕 「享保九年甲辰年正月吉辰 京都二條通柳馬場西江入町 今村八兵衛刊板」。

〔印記〕 「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「蕉園帳中之秘」「天生寄進」。受入印「昭和29.12.22受入 104700（～104709）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 礼記本文に、墨筆で訓点や書入が施されている。また、しばしば緑色の不審紙が貼られている。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 2 79」。

〔付箋番号〕 「016（～025）」

(杉山)

## 蕉園首書春秋左氏伝（しょうえんしゅしよしゅんじゅうさしでん）

関係人物名 中井蕉園

数量（冊数） 15冊

外形寸法（cm） 縦24.6×横14.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍11下（経部、春秋類、左伝之属）

画像点数 1

画像番号 73

中井蕉園が『春秋左氏伝』（儒教經典の『春秋』に対する解釈のひとつ。以下『左氏伝』と略記）の本文および杜預（<sup>とよ</sup>222～284。西晋の学者で、『左氏伝』の注釈である『春秋経伝集解』を著した）の注に関する諸説を欄外に書き付けたもの。自筆稿本。明の金蟠が校訂した永懷堂本『左氏伝』の欄外に、全編にわたって中井履軒『左氏雕題略』の説を「<sup>いわ</sup>雕曰く」として写し、その他、孔穎達（<sup>くようだつ</sup>574～648。唐の学者で、杜預の注の注釈『正義』を選定した）や顧炎武（<sup>こえんぶ</sup>1613～1682。明末清初の学者で、客観的実証的な清朝考証学の祖とされる）などの諸説を書き付け、さらに「<sup>は</sup>坡曰く」「<sup>あん</sup>坡案ずるに」として蕉園自身の見解も記してい

る（蕉園は「仙坡」とも号した。）。

蕉園は詩文の才に優れ、かつ経学（儒教經典を研究する学問）の研鑽に励んだ人物で、端正な細字でなされた『左氏伝』の書き入れからも、その人柄が想像される。履軒の経学において、『左氏伝』に対する説は特に前人未発の卓見とされるが、蕉園はその叔父の学説を丹念に転写することで、その学識を吸収しようと努めたのであろう。「坡曰く」として記される蕉園の説は、杜預や孔穎達の説への批判的な見解が多いが、彼が傾倒した履軒の説に対しても、それとは異なる自説を記している。例えば、『左氏伝』襄公26年の記事に、味方を300人も殺した敵を追撃できない孫蒯そんかいに対して父親の孫林父が「厲之不如（厲にもこれ如かず）」と告げたとある。杜預はこの「厲」を「幽霊」の意味として「幽霊にも及ばぬやつめ」と解釈し、履軒は「厲」を「よからぬ病」の意味として「よからぬ病に罹ったものは多く物乞いになる、『物乞いめ』などとのしる言葉だ」と解釈する。これに対し、蕉園は、『礼記』壇弓篇に「殺厲」の語が見え、その注に「『厲』とは疾病なり」と有るのを根拠に、「『病人にも及ばぬやつめ』と、その臆病さを病人にたとえた言葉だ」と解釈している。

【書誌情報】

『春秋左傳』 30巻15冊

晋杜預集解 明金蟠校訂 永懷堂刊本 中井蕉園首書 手稿

〔寸法〕 24.6×14.0。郭内19.5×11.7。

〔版式〕 左右双辺。有界。9行25字。伝および注は1格低くし毎行24字。注は双行。

〔版心〕 「春秋左傳（黒魚尾）（巻数）（隠公など十二公の名）（葉数）永懷堂」。各葉に十二公の年数を墨書。

〔内題〕 「春秋左傳（巻数）」。

〔外題〕 書題簽「左傳 隠桓一（～哀十五）」。帙題簽「蕉園首書左伝 全一函 十五本」。

〔刊記〕 なし。

〔印記〕 各冊、第1葉表「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「蕉園帳中之秘」「天生寄進」。第1冊のみ本文冒頭に「大阪大學圖書」。

〔装訂〕 四針眼訂法。

〔備考〕 小口書「左 一（～十五）」。各冊 欄外に墨書の書入れあり。また青色の不審紙あり。一部に朱筆で句点を付し、朱引がある。懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 2 82」。

〔付箋番号〕 「601（～615）」。

（矢羽野）

### 東萊博議 (とうらいはくぎ)

関係人物名 中井蕉園

数量 (冊数) 3冊

外形寸法 (cm) 縦18.8×横12.6

懐徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍11下 (経部、春秋類、左伝之属)

画像点数 2

画像番号 74

中国南宋時代の儒学者である呂祖謙 (1137~1181) の著『東萊博議』(『左氏博議』『東萊左氏博議』ともいう) に、中井蕉園が、文字の誤りを正し、批点 (文章の特に注意を要する箇所傍らにうった点) を打ち、簡単な批評を付した。「東萊」は呂祖謙の号。『東萊博議』の和刻本全4冊に書き込みをしたものと思われるが、現在第1冊を欠く。呂祖謙は、朱子と陸象山との学問上の対立の調和をはかり鵝湖の会を催したことで知られるように、折衷調和の学問傾向があるが、一方で実学を強調した。実用を追求する彼の思想は、朱子学と対立した永嘉学派 (功利学派) とも関係が深く、利と義との峻別を批判する点などは、懐徳堂の学風にも通じる。

『東萊博議』は、科学の論文試験対策として、『春秋左氏伝』(以下『左氏伝』) 中の治乱得失 (治世と乱世、成功と失敗) を記した記述を選び、それに対する見解を論述したもので、乾道4年 (1168) 頃の成立という。蕉園はこの書に文章表現上の批正・批評を行っている。例えば、斉の桓公が諸侯を葵丘の地に集め、覇者として同盟を主催したという『左氏伝』僖公9年 (前651) の記事にからめ、呂祖謙は、「天下を治めたものには、みな期する所 (心に堅く誓った目標) があつた。ある程度の到達点に満足するようでは、その到達した地位さえ保持できぬ」と述べ、それを喩えて「駿馬が峻坂 (急な坂) を駆け上がる、その途中で足を休める場所があるか」と表現する。これに対して蕉園は「駿馬と峻坂との比喩は当を失す」と評している。

また、内容についても評を加えている。呂祖謙は卜筮について述べて「聖人はすぐれた『心』で判断し、卜筮に頼ったのではない。後世、人は『心』で判断せず、めったに当たらぬ卜筮に頼るようになってしまった。『左氏伝』中に卜筮の的中が記されているという人があるが、『左氏伝』242年間に的中した記事はわずか数十だけ、的中せず記録されなかったものは数えきれぬ」という。これに対して、蕉園は「確論」と記して賛意を示している。懐徳堂の学者たちは理性的認識を欠いた神秘説を排斥し、『左氏伝』中の神秘的な記述については竹山・履軒もでたらめとして否定している。蕉園も同様の見解を持っていたことが見てとれる。

#### 【書誌情報】

『東萊博議』 4巻4冊（4冊中第1冊闕）

宋呂祖謙撰 寛政11年 浪華書林池田八兵衛刊本 有隣館蔵板 中井蕉園批点 手稿

〔寸法〕 18.8×12.6。郭内15.7×9.6。

〔版式〕 四周単辺。無界。9行22字。頭注は毎行3字。

〔版心〕 「東萊博議（巻数）（葉数）」。

〔内題〕 「東萊博議（巻数）」。

〔外題〕 「東萊博議 地（～玄・黄）」。帙題簽「東萊博議 全一函 三本 蕉園ノ正誤及批点アリ」。

〔刊記〕 「寛政十一年己未歳初冬 有隣館蔵板 浪華書林 池田八兵衛」。

〔印記〕 各冊、第1葉表に「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」「天生寄進」。受入印「昭和29.12.22受入 104748（～104750）」。

〔装訂〕 四針眼訂法。第2冊52葉、第3冊44葉、第4冊42葉（内、跋2葉）。

〔備考〕 卷末に元禄庚辰（13年）の日付の伊藤長胤「書東萊先生博議後」を付す。各冊に墨書の書入れ、朱筆・緑筆の批点、青色・緑色の不審紙あり。小口書「博議 二（～四）」。

〔蔵書票〕 「遺 2 91」。

〔付箋番号〕 「28（～30）」。

（矢羽野）

### 彫蟲自爲（ちょうちゅうじい）

関係人物名 中井蕉園

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦19.3×横13.1

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書12下

画像点数 1

画像番号 75

中井蕉園の備忘録。蕉園の手録で、表紙には「彫蟲自爲 語辭」と自書してある。蕉園は『彫蟲篇』という賦集も残しており、その自序に揚雄『法言』吾子篇が賦を作ることを「童子の彫蟲篆刻なり」「壯夫は為さざるなり」といっているのを引く。つまり、賦を作ることは蟲書や刻符（いずれも秦の書体の名）を彫<sup>ほ</sup>ったり書いたりするような、童子のすることだと謙遜している。「自爲」とは「自分でする」という意味で名付けたのだと思われる。この『彫蟲自爲』は、蕉園がいろいろなことを書き留めた手記である。

前半は、賦の題、印の図案、用語の整理などが記されている。後半は「月課」と題して24歳以降の読書計画が記されている。例えば、「月課」の辛亥の年（寛政5年 [1793]）、27歳の読書計画を見てみる。この年には『詩経』『論語』『孟子』『大学』『中庸』『(春秋) 左伝』『世説（新語）』『近思録』『朱子語類』を読む計画を立てた。もちろん、経書などはすでに読んでいるはずであるが、この年には、『大全』『注疏』『蒙引』などの注釈を讀んでいこうという計画である。その他に、夏には「算詩」すなわち算数と詩作をし、夜には『(資治) 通鑑』を読む予定であった。これらのうち、朱で<sup>ひんてん</sup>圈点が施されていない『世説（新語）』以外は、すべて読破したようである。父竹山の期待に応えようと、日夜読書に励んだ様子が窺える。この計画は、42歳以後の「日夕『大（日本）史』而已（昼も夜も『大日本史』だけを読む）」まで予定されていたが、惜しいことに蕉園は享和3年（1803）に（おそらく肺結核で）亡くなった。37歳であった。

【書誌情報】

『<sup>ちようちゆうじ い</sup>雕蟲自爲』 1冊

中井蕉園手録 手稿

〔寸法〕 19.3×13.1。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。字数行数不定。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 打付け書き「雕蟲自爲 語辭」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 表紙に「懷徳堂圖書記」。表紙裏に「大阪大學圖書之印」「懷徳堂圖書記」。1葉表に「天生寄進」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104741」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全46葉。

〔備考〕 懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕 「遺 2 85」。

〔付箋番号〕 「757」。

(杉山)

越史 (えっし)

関係人物名 <sup>なか いしやうえん</sup> 中井蕉園

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦24.3×横16.5

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書30上

画像点数 1

## 画像番号 76

中井蕉園が著した歴史書。中井蕉園の手稿本。紀伝体きでんたい（年代順ではなく、人物別に著された歴史書）の形式で書かれたもので、「越世家」と「直江兼統・本莊繁長・上条義春・宇佐美定満・本莊慶秀・松原親憲・斉藤柿寄色部」の7人の伝とからなる。現在見られるものは、上杉景勝うえすぎかげかつ（上杉謙信の養子で、豊臣秀吉に仕えた五大老の一人）時代の越後に関するものだけであるが、以下の事実から、もっと広範な時代・地域を含めた歴史書の未完草稿と思われる。

- ・表紙に『越史 上下』とあるが、現存するのは不分巻1冊のみであること。
- ・紀伝体の核になる「本紀」（帝王の伝記）が見あたらないこと。
- ・本文中の至る所に推敲の跡が見られること。
- ・表紙の裏表共に、和文の下書きと思われるものが大量にあること。
- ・その中に「信玄団扇ノコト、ウソナリ」など、武田信玄と思しき名が散見すること。

蕉園には『甲越外史』二巻の著作があるので、あるいは何らかの関係があるものかもしれない。蕉園は中井竹山の第4子として、明和4年（1767）に生まれ、詩文を作ることにかけて天才と評されていたが、享和3年（1803）、37歳で早世した。従来、蕉園の事績については、ほとんど研究されることはなかったが、この資料からは、蕉園もまた、懷徳堂先人の歴史学を継承していたことが窺える。父・竹山は『逸史』を、叔父・履軒は『通語』を、それぞれ著しているが、いずれも単なる歴史記録ではなく、虚伝を排して史実を明らかにし、その上で、歴史上の人物や事件の倫理的批判を行なうことを目的としていた。こうした先人の影響を受け、蕉園もまた、史書編纂に関心を持っていたものと思われる。

## 【書誌情報】

『越史』 1冊

中井蕉園撰 手稿

〔寸法〕 24.3×16.5。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。9行20字。

〔内題〕 なし。

〔外題〕 書題簽「越史」。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」。受入印「昭和29.12.22受入 105060」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全52葉。重建懷徳堂に寄贈されて以降、原装薄表紙の上に厚表紙を重ねたものと思われる。

〔備考〕 薄表紙の書外題は「越史 上下」。薄表紙・本文の余白に、書き加え・推敲の跡多数。

〔蔵書票〕 「遺 2 73」。

〔付箋番号〕「758」。

(寺門)

**雕蟲篇** (ちょうちゅうへん)

関係人物名 中井蕉園

数量 (冊数) 2冊

外形寸法 (cm) 縦26.5×横15.6

画像点数 1

画像番号 77

中井蕉園の賦集。「雕蟲」とは、賦を作ることである。『雕蟲篇』自序が引くように、揚雄『法言』吾子篇が賦について「童子の雕蟲篆刻なり」といっているのにもとづく。すなわち賦を作ることは、蟲書や刻符(いずれも秦の書体の名)を彫<sup>ほ</sup>ったり書いたりするような、童子のすることであるといっている。ただし、自序では次のようにもいっている。「(賦は)之に寓するに道を以てし、惑いを辨じ義を明らかにし、一時を諷諭し、名教に助け有り。豈に雕蟲篆刻もて之を視るを得んや。(中略)而れども人或いは雕蟲篆刻もて之を視ん。乃ち姑<sup>しばら</sup>く命じて「雕蟲」と曰う。」

蕉園は寛政4年(1792)自らの賦才を試みるべく、父竹山に賦題を請い、一晚に賦を10編作った。翌年にそれをもう一度試みた。この本はその20賦を浄書した手稿本である。ゆえに、この2冊の本を『一宵十賦』『後一宵十賦』とも言う。蕉園は文学的才能に恵まれ、後に頼山陽から「文妖」と称されたと言われる。

1冊目は題簽に「雕蟲篇 上」とあり、三村崑山の序、蕉園の序と贅言、および竹山の与えた賦題の後に、「一宵十賦」を収める。2冊目は題簽に「雕蟲篇 下」とあり、贅言、賦題の後に、「後一宵十賦」を収め、巻末に「與脇子善書」2篇、「答尾藤学士書」1篇を収める。

また、懷徳堂文庫は中井蕉園手稿の『一宵十賦前編』を蔵する。この本は草稿であり、中井竹山、履軒の朱批<sup>しゅひ</sup>が入っている。その他、並河寒泉写本の『雕蟲篇 附同自註』2冊も蔵する。

**【書誌情報】**

『雕蟲篇』 2冊

中井蕉園撰 寛政8年 手稿

〔寸法〕26.5×15.6。郭内18.7×12.4。

〔書式〕左右双辺、有界、白口の紙を使用。9行20字。三邨其原序のみ四周单辺、無界の紙を使用。7行16字。



〔内題〕「彫蟲篇」

〔外題〕書題簽「彫蟲篇 上」「彫蟲篇 下」。帙題簽「彫蟲篇 全一函 二本 蕉園手稿」。

〔奥書〕なし。寛政8年丙辰夏5月の三邨其原序あり。

〔印記〕「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「大阪大學圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 104681 (～104682)」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕懷徳堂遺書。

〔蔵書票〕「遺 2 69」。

〔付箋番号〕「446 (～447)」。

(杉山)

## 2-11 並河寒泉関係資料

洪範懷徳堂定本 (こうはんかいとくどうていほん)

関係人物名 並河寒泉

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦23.7×横16.4

懷徳堂文庫図書目録該当頁 漢籍7下 (経部、書類)

画像点数 1

画像番号 78

並河寒泉による『書経』の注釈書。「洪範」は、儒教の経典『書経』の篇名で、その内容は天下統治のための大法を記したものとされている。本書には、「碩園鈔蔵」の印記があり、西村天囚 (本名は時彦。碩園・天囚はいずれも号) が筆写したものであることが分かる。基となった寒泉自筆本の所在は、現在確認されていない。

本書の内容は、大きく二つに分けられる。前半では、洪範の本文を校訂したものが掲げられている。後半は、「洪範総論」と題し、「洪範は周書 (『書経』の内、周代のことを書いた部分) に非ざるを論ず」、「洪範は洛書 (1～9の数字を方形に配した、魔方陣のようなもの) に非ざるを論ず」、「洪範の錯簡 (書物の内容の順序が誤っていること) 並びに偽補 (本物に見せかけて補われたもの) の説」、「洪範は禹の制 (制定) するに非ざるの論」の、4編の論文を載せている。また、附録として、中井碩果 (竹山の第7子)「五行の弁」が巻末に付載されている。

『書経』は、儒家の最も基本的な経典の一つであるが、非常に複雑な文献学的問題を抱えた書でもある。上掲の4編の論文において、寒泉は懷徳堂の先人、竹山・履軒・蕉園・碩果

の意見を引用した上で、それらを総合し、自らの意見を付している。寒泉は懷徳堂最後の教授であるが、この資料から見る限り、懷徳堂先人の学問的業績をまとめようとしていたのではないかと考えられる。

蕉園・碩果の著述は、現在ほとんど残されておらず、その学問についても明らかにされていない。この資料からは、蕉園・碩果もまた、『書経』の注釈を著していたらしいことが窺われ、また、その一端を知ることできる。

【書誌情報】

『こうはんかいとくどうていほん 洪範懷徳堂定本』 1冊

並河寒泉著 西村天囚転写

〔寸法〕 23.7×16.4。

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。10行20字。注は双行20字。

〔内題〕 洪範懷徳堂定本。

〔外題〕 書題簽「洪範定本 全」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天囚書室」「碩園鈔藏」「碩園記念文庫」「懷徳堂圖書記」「大阪大學収蔵圖書印」「大阪大學圖書」。受入印「昭和26.9.10受入 法文19948圖」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全23葉

〔蔵書票〕 「4 42」。

〔付箋番号〕 「947」。

(寺門)

辨怪 (べんかい)

関係人物名 並河寒泉

数量 (冊数) 1冊

外形寸法 (cm) 縦24.4×横17.0

懷徳堂文庫図書目録該当頁 国書42下

画像点数 1

画像番号 79

並河寒泉が、怪異鬼神・狐狸妖怪の存在を否定し、その迷妄を解き明かす目的で著したもので、懷徳堂の特徴的思想「無鬼論」を伝える書物。並河寒泉の手稿本。卷末に弘化4年(1847)の日付がある。書名の『辨怪』は怪異を盲信することの非を辨ずる(筋道立てて明らかにする)との意味である。全体の構成は、「辨怪(辨狐怪・辨談怪・辨信怪)」「破怪(詰破篇・窮破篇・自破篇)」「ごしょうせんてつ いぶん 吾庠先哲遺文」(庠は学校、吾庠とは懷徳堂をさす)の三部からな

る。第一部をなす「辨怪」の「辨狐怪」は、老人が靈狐に憑かれたという当時のある事件について、意見を求められた寒泉がその欺瞞を解き明かすという内容である。それに次ぐ「辨談怪」「辨信怪」は、怪異を談じたり信じたりする原因を説明し、俗信になすむ非を論理的に説く。第二部の「破怪」は、〈怪異を盲信することの非を辨ずる〉との趣意にかなう古今の説話10余条を、詰破篇・窮破篇・自破篇の3篇に分類して掲げている。「詰破」は〈その詐欺性を追及すれば見破れる怪異〉、「窮破」は〈現象を客観的に追究すれば見破れる怪異〉、「自破」は〈惑溺せぬ確固たる見方さえあれば自ずと見破れる怪異〉の意味である。第三部「吾庠先哲遺文」は歴代の懷徳堂の学者が怪異を理性的に看破した実話。五井蘭洲については7条、中井竹山12条、履軒5条、蕉園1条、碩果1条を記録し、懷徳堂学派の無鬼論の系譜を示している。

その竹山の条に記された次の説話は、懷徳堂と荻生徂徠との関係を考える上で注目される。荻生徂徠の舎利記に「江戸麹町の婦人の目から物がこぼれ出た。見ると明らかに舎利（釈迦の骨）である。どうして貝は真珠を生み出すことができ、婦人は舎利を出せたのか。天道は冥冥不可思議で誰もその理由を知りえない」とある。竹山はそれを辨じて、「徂徠が舎利を真珠のようなものと考えていたのはお笑いだ。梵語のシャリとは漢語の骨のこと。そもそも目から舎利が出たという、それが妄誕でたらめで信じるに足りぬ」といったという。懷徳堂の学者は徂徠の学説に対し、経学（儒教經典に関する文献学）や礼制度の分野で批判を行っているが、ここには徂徠の怪異についての見方に対する批判が窺える。

【書誌情報】

『辨怪』 1冊

並河朋來著 弘化四年 手稿

〔寸法〕 24.4×17.0。郭内18.1×12.9。

〔版式〕 四周単辺、有界、黒四角魚尾、白口の紙を使用。9行20字。版心に「一（～四十終）」と記す。

〔内題〕 「辨怪」。

〔外題〕 書題簽「辨怪 並河朋來著 完」。表遊紙「辨怪 全」。帙題簽「辨怪 寒泉手稿 全一函 一本」。

〔奥書〕 「弘化丁未仲冬」。

〔印記〕 「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「碩園珍藏先賢未刻書」「濱和助」「天囚書堂」「碩園記念文庫」。受入印「昭和26.9.10受入 33080」。

〔装訂〕 四針眼訂法。全40葉。

〔備考〕 朱筆で句点、墨筆で訓点を付す。

〔蔵書票〕 表紙右下に「懷 117」「未刻本 4」。右上に「(本函) 式號 (冊数)」

1冊 壹〇九 濱和助。  
〔付箋番号〕「225」。

(矢羽野)

出懷徳堂歌 (しゅつかいとくどうか)

関係人物名 並河寒泉

数量 (冊数) 1幅 紙本

外形寸法 (cm) 縦57.1×横23.9

画像点数 1

明治2年(1869)12月25日、並河寒泉が、廃校となった懷徳堂を去るときに門に貼り付けた歌を書いたもの。原本は門から剝がされて存しないが、後に中井木菟麻呂が寒泉に同じ歌を書いてもらったものが軸装されて現在に残っている。

幕末の慶応年間当時、懷徳堂は並河寒泉が教授、中井桐園が学校預り人であった。この頃、すでに時勢は幕末の動乱期にあたっており、物価の高騰等で懷徳堂の財政も逼迫してきていた。桐園はやむなく文庫2戸を開いて蔵書や書画などを売却した。さらに、明治維新後には新政府が旧幕府から免除を得ていたものに対してその特権を廃止する命を出して、懷徳堂も免税廃止を命じられる。ここに至って懷徳堂の財政はますます窮迫し、桐園はついに『逸史』『通語』『非物篇』『非徴』などの版木までも売却して財政を支えようとした。寒泉は桐園の行為を喜ばず、竹山の署名のあるものを一部買い戻した。財政を支える桐園の努力もむなしく、明治2年に懷徳堂は結局廃校となり、寒泉と桐園とは府下の本庄村に移った。

廃校となった懷徳堂舎を去るときに寒泉は、「堂構于今百四十年、臯比狗統尚綿々、豈凶王化崇文世、席捲講帷村舎遷」の漢詩とこの出懷徳堂歌「百餘り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりていづ 華翁」(144年間続いた学舎も今日限りだと見返りながら門を出る、の意)とを門に残した。「華翁」とは寒泉の還暦以後の号である。また、出懷徳堂歌に「百餘り四十路四とせ」(144年)とあるのは、実際に開学した享保9年(1724)から起算したものではなく、幕府より官許を得た享保11年(1726)より閉校の明治2年までを算出したものである。西村天囚は、『懷徳堂考』で、このときの寒泉の心情を忠臣蔵の大星由良之助が城を明け渡したときの心情になぞらえている。

(藤居)

並河寒泉翁像 (なみかわかんせんおうぞう)

関係人物名 並河寒泉、羽倉敬尚はぐらけいしょう

数量 (冊数) 1軸

外形寸法 (cm) 縦39.0×横54.0

画像点数 1

画像番号 80

懐徳堂最後の教授である並河寒泉の肖像画。この肖像画は、寒泉の宗家である京都並河氏生まれの羽倉敬尚<sup>はぐらけいしょう</sup> (1891~1978) が、寒泉の風貌を後世に伝えるため、中井木菟麻呂<sup>つぐまろ</sup>の記憶に基づいて描かせたもので、画の左右には羽倉の賛がある。肖像画は彩色で、掛物に表装されている。

軸を納める木箱に「寒泉翁下絵」と題した紙袋があり、その紙袋の表に、肖像画完成までの経過説明が記される。羽倉の手になると思われるその説明書きによると、肖像画の下絵を何度も描かせたが木菟麻呂の満足するものができず、最後には塑像を作らせて、木菟麻呂の批評を受けたという。紙袋の中には端座した寒泉の塑像の写真が納められ、写真の裏面には、略図に部位ごとの特徴を書き込んだ木菟麻呂の注意書きがある。「肩ハイカリタル方」「肩は白毛長キ方」「鼻ハ高キ方」「(あごの辺りを指して) コノ辺少シへコミテ、オトガヒ出テタリ」などと指示している。寒泉死没の明治12年 (1879)、外孫の木菟麻呂は24歳で、既に寒泉から学も受けていた。その記憶を正確に伝えたいという木菟麻呂の細心さがよくわかる。

羽倉敬尚は寒泉の後裔が絶えたのに同情して寒泉顕彰に務めた人物で、肖像画の賛にも寒泉の功績を後世に残したいという敬慕の情が読みとれる。以下にその全文を掲げる。「こは前懐徳書院教授 贈正五位並河復一翁の肖像なり。翁名は朋來、号を寒泉といひ、後樺翁と称せり。朋來を鳳來とも書き、又和訓にて登茂樹<sup>とももき</sup>とも記せり。おのれ翁の宗家とゆかりあり、その風貌を伝へむとて翁の外孫中井木菟麻呂等に下画を請ひ早川自照ぬしの筆を煩はしてこを作り懐徳堂記念会に収む。後の人景仰の料となさばこよなき事なりかし。／なには江やなりはひの市に身をつくし 世のよしあしををしへつるかな／昭和十七年七月 浪華のかりのやにて 羽倉敬尚しるす」。

(矢羽野)

懐徳堂永続助成金覚書→153頁参照

懐徳堂蔵書目→154頁参照

## 2-12 中井桐園関係資料

懐徳堂永続助成金覚書 (かいとくどうえいぞくじょせいきんおぼえがき)

関係人物名 <sup>なみかわかんせん</sup> 並河寒泉、<sup>なかいとうえん</sup> 中井桐園

数量 (冊数) 1面

外形寸法 (cm) 縦32.9×横48.2

画像点数 1

画像番号 81

並河寒泉（通称は復一）・中井桐園（通称は修治）が、経営を支援する同志のうち平瀬宗十郎ひらきそうと市郎兵衛いちろうべえから受けた助成金に対して安政6年（1859）に書いた覚え書き。当時、寒泉は教授、桐園は預り人として懐徳堂の運営に当たったが、碩果時代に好転した懐徳堂の経営状態も徐々に衰微し、かつ幕末の世情不安の中、授業料は受講者の応分でよいとする伝統を固く守った懐徳堂の運営は行き詰まりつつあった。その経営困難に当たり、寒泉・桐園は永続助成金という名目で同志から資金援助を受けたのである。

覚書の全文は以下のとおり（／は改行）。「覚／一、銀四拾五貫目也／内 三拾貫目 宗十郎殿より／拾五貫目 市郎兵衛殿より／右者爲懐徳堂永続助成、時節柄格別御配意ヲ以、当未年より來ル亥年迄五ヶ年之間無利足ニ而借用仕、直様其元殿へ元銀御預之上、月五朱之利足、年限中御積置被下、満年之上、元銀厄介可致御約定、辱次第二御座候、利積銀之義者、其節御相談之上、可然様御取計被下度候、右御規定、仍而如件。／安政六未年正月 中井修治／並河復一／平瀬市郎兵衛殿」

これによると、平瀬宗十郎・市郎兵衛から計銀45貫目を5年間無利息にて借り入れ、その元金をそのまま貸し主に預け、5年の年限中に積み置かれた月五朱の利息を懐徳堂が受け取り、元銀は貸し主に返済するという援助方法で、名目は無利息貸付であるが、実質は月5朱を5年間寄付するというものである。同年には、この銀45貫目の他、白山彦五郎から銀20貫目の永続助成金を受けている。

（神林）

#### 懐徳堂蔵書目（かいとくどうぞうしょもく）

関係人物名 並河寒泉、中井桐園、中井木菟麻呂つぐまろ

数量（冊数） 1冊

外形寸法（cm） 縦12.3×横17.6

懐徳堂文庫図書目録該当頁 国書1下

画像点数 1

画像番号 82

懐徳堂蔵書の目録。本体に目録作成者の名は記されていないが、「天生寄進」の印があり、また、帙に「寒泉桐園手録」とあることから、並河寒泉と中井桐園が作成し、そのことを記憶していた中井木菟麻呂つぐまろ（号は天生）が、本目録を重建懐徳堂に寄進する際に、その情報を伝えたものと推測される。作成の時期は未詳であるが、桐園の養父であった中井碩果の没（1840）後から、それほど時の経っていない頃であろう。

この目録によれば、当時の懷徳堂では、本箱に乾・兌などの易の八卦の名や、甲・乙等の十干の名などを付けて図書整理を行っていたことが分かる。ただし、この目録には中井竹山・履軒の自筆書き入れ本が見当たらないことから、懷徳堂所有の全書籍の目録ではなく、塾生の閲覧に供していた図書のリストではないかと思われる。蔵書は、四書五経の儒家の経典を中心に、諸子百家の書、歴史、文学、日本の儒者の著述などにも及び、しかも極めて充実したものであったことが窺える。蔵書中の明・清代の学者の著述は、輸入された中国の出版物が多数含まれているようであるが、これらは当時かなり高額なものであったことは間違いない。西村天囚『懷徳堂考』によれば、中井碩果が学校預り人であった頃、理財に長じていた碩果が、同志からの寄付金もあって懷徳堂の財政を立て直し、多くの蔵書・備品を増やしたとされる。おそらく、この目録に見える図書の多くは、碩果の代に購入されたものであろう。ちなみに、これらの蔵書の大部分は、明治維新前後に懷徳堂の財政が逼迫したため、桐園によって売却されてしまったようである。

## 【書誌情報】

『懷徳堂蔵書目』 1冊

並河寒泉・中井桐園手録

〔寸法〕 12.3×17.6。

〔書式〕 無枠無界の紙を使用。5行不定字。

〔内題〕 「懷徳堂蔵書目」。

〔外題〕 書題簽「懷徳堂蔵書目」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印なし。

〔装訂〕 三針眼訂法。全73葉。原装薄表紙に、厚表紙を付している。

〔蔵書票〕 「遺 2 104」。

〔付箋番号〕 「39415」。

(寺門)

## 2—13 中井木菟麻呂関係資料

## 華胥国物語版木 (かしょこくものがたりはんぎ)

関係人物名 中井履軒、中井木菟麻呂 (なかいつぐまろ)

数量 (冊数) 10枚

外形寸法 (cm) 各縦22.6×横43.5

画像点数 2

## 画像番号 83

中井履軒『華胥国物語』の版木。履軒の曾孫に当たる中井木菟麻呂が同書を刊行したときに彫らせたもの。版面に「明治十九年（1886）二月十日版權免許」「同年五月刻成」の表記が見える。計10枚からなり、各版木の両面に文字が彫られ、表紙および本文18丁分の版面となっている。版木の厚さは2.4cm。匡郭内寸法は縦18.9×横13.9cm、每半葉10行、版心には丁数が彫られている。明治期の版行の様子を知りうる貴重な資料である。

これらは、縦44.0cm×横48.7cm×奥行き26.0cmの木箱の中に横積みで収蔵されており、その木箱の前扉（蓋）には「華胥国物語」「中井氏蔵」、その裏面には「明治十九年五月」と墨書されている。これにより、本資料が版行の後、中井家所蔵品とされていたことが分かる。この版木は昭和54（1979）に、中井家子孫の新田和子氏より財団法人懷徳堂記念会に寄贈され、現在に至っている。なお、『華胥国物語』の内容については、『華胥国物語』の解説参照。

（湯浅）

## 旧懷徳堂平面図（きゅうかいとくどうへいめんず）

関係人物名 中井木菟麻呂

数量（冊数） 1帖

外形寸法（cm） 縦29.5×横21.0

画像点数 1

幕末の懷徳堂の構造を記した平面図。昭和6年（1931）に、中井木菟麻呂が幼時の記憶によって作成したもの。中井終子「安政以降の大阪学校」（『懷徳』9号）に掲載された。一階についてのみの図面であり、二階については省略している。懷徳堂は、寛政4年（1792）の火災によって類焼し、同7年（1795）から8年（1796）にかけて再建された。中井竹山らは、これを機として懷徳堂の敷地拡大と聖堂の建設などを行おうと企て、いったんは幕府から許可された。しかし後に何度も規模縮小を求められ、最終的に与えられた手当金は、類焼前の規模への復旧にも足りない三百両に過ぎなかった。懷徳堂の再建は、実際には寛政7年8月より8年7月にかけて七百両余を投じて行われ、不足分はすべて同志や門下生の協力によるのである。この間の経緯は、「懷徳堂絵図屏風」に貼り込まれた資料などによって知られる。

再建時に作成されたと考えられる「寛政七年懷徳堂再建着工図」（「懷徳堂絵図屏風」のうち）と比較すると、基本的な構造は概ね一致するものの、細部にはかなりの異同が認められる。本資料によると、例えば「寛政七年懷徳堂再建着工図」に見える池の一部や用水溜が幕末までに埋められていたことがわかり、また本資料によって、「寛政七年懷徳堂再建着工図」によっては明らかでない「二階」の専有部分が判るなどする。木菟麻呂の記憶によって作成



されたものとはいえ、幕末当時の懐徳堂を知るためには、上掲「安政以降の大阪学校」と併せ、必ず参照すべき資料といえよう。

(井上)

懐徳堂蔵書目→154頁参照

### 3. 漢籍分類解説

本コンテンツは、「2. 懐徳堂文庫」の検索方法の内、やや専門的な知識を要する「漢籍分類検索」を支援するために作成したものである。①「漢籍目録と分類の歴史」と②「漢籍分類細目解説」とから成る。①では、伝統的な漢籍分類方法である「四部分類」が形成されるに至る過程を中国古代に溯って概説し、②では、四部分類の各「部」「類」「属」について解説し、同時に、本DB中での該当文献を提示するものである。

なお、本コンテンツの担当者は湯浅邦弘、井上了、及び佐野大介（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生、中国哲学専攻）の3名である。

#### 3-1 漢籍目録と分類の歴史

ここでは、各資料の解題や漢籍分類解説をよりよく理解するための基礎知識として、漢籍の目録と分類の歴史について概説する。

漢籍は、通常の図書分類（日本十進分類）とは異なり、伝統的な独特の方法によって分類される。その分類とは、漢籍を「経」「史」「子」「集」の四つに分かつ「四部分類」であり、それは、漢代の七（または六）分類を経て、六朝期に成立し、唐代に完成した。以後、漢籍は、中国・日本を問わず、この四部分類によるのが通常である。大阪大学附属図書館の漢籍、および懐徳堂文庫所収漢籍も、もちろんこの分類法によって配架されている。

#### ●文字文化の開花

中国は、早熟な文字文化の国である。春秋戦国時代（前5世紀～前3世紀）には、多くの思想家が経世の理想を抱き、諸国を遊説しながら互いに議論を戦わせるといふ、いわゆる「諸子百家」の時代を迎えた。かれらの言説は、思想家自身によって、あるいは、弟子門人たちによって著述編纂され、膨大な数の文献が流布していった。

例えば、中国兵法の開祖孫武の著『孫子』は、家ごとに蔵されていたと言われ、また、恵施という思想家は常に車五台分の書籍を引きながら遊説に出かけたと伝えられる。

こうした豊かな文字文化に衝撃を与えたのは、秦の始皇帝による「焚書坑儒」であった。厳格な法治と富国強兵策により中国を統一した始皇帝は、思想統制の一環として、指定書以

外の書物を焼き尽くし（焚書）、無駄口をたたくだけで役に立たない学者を穴埋めにして殺した（坑儒）。さらに、この秦帝国がわずか十五年で滅び行く際、秦の都咸陽に入った項羽は、宮殿をことごとく焼き払った。始皇帝の焚書坑儒や項羽の焼き討ちにより、中国世界は多くの貴重な書籍を失うこととなった。

#### ● 図書整理の開始

しかし、こうした混乱を経て前漢時代（前206～後8）に入ると、資料の整理・収集の必要性が強く求められるようになった。そこに現れたのが、前漢末の学者劉向<sup>りゅうきやう</sup>（前77～前6、本名は更生、字は子政）である。劉向は、成帝（前23～後7）の時代、宮中の蔵書の校訂や目録の作成などを行い、中国目録学の始祖といわれる。

その具体的な作業は、劉向が経伝（儒家の經典やその注釈）・諸子・詩賦の書を、任宏が兵書を、尹咸が数術（占ト）書を、李柱国が方技（医薬）書を担当し、(1) 宮中所蔵の書を基に、内外の異本（伝来の異なるテキスト）を校合（対照して検討）する、(2) 簡牘の乱れを正し、篇目を定める（それまでの書籍は竹簡・木牘に記されていたため、しばしばそれを綴じる際に乱れが生じた。これを錯簡という。また、書名・篇名・巻数などの表記も明確に意識されていなかった）、(3) 誤字・脱字を正す、(4) 書名を定める、(5) 竹簡に書写して定本を作る、などの作業を進めたとされる。

#### ● 目録学の創始

この作業を統括した劉向は、各書物の解題を『別録』という書にまとめた。また、その子の劉歆<sup>りゅうきん</sup>（?～23）は、父の仕事を受け継ぎ、『七略』という図書目録を完成させた。記録に残る最古の図書目録である。残念ながら、この二つの書は現存せず、その内容の詳細を知ることにはできない。ところが、後漢時代（25～220）に『漢書』が編纂された際、その図書目録部分である「芸文志」<sup>げいもんし</sup>が劉歆の『七略』に基づいて編纂されたため、この「芸文志」を通じて、劉向・劉歆父子の業績を推測することができる。

#### ● 『漢書』芸文志の分類

『漢書』芸文志は、劉歆の『七略』を継承し、書籍の分類・整理を行い、当時存在した書籍の名をその分類に沿って列挙した。「芸文志」は現存する最古の図書目録であり、当時の学術の全体像を明らかにするきわめて貴重な資料である。

その「芸文志」は、書籍を、六芸略<sup>りくげい</sup>・諸子略・詩賦略・兵書略・術数略・方技略の六つに分類する（この他、輯略という部分があり、これを併せた七部が劉歆の『七略』に対応したと思われるが、輯略の部分は『漢書』芸文志には直接現れていない）。

各部内は、さらに細目によって分類される。例えば、儒家の經典やその注釈の部である「六芸略」は易・書・詩・礼・楽・春秋・論語・孝経・小学に細分され、諸子百家の書の部である「諸子略」は儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家、小説家に細分される、といった具合である。

「芸文志」にその名を記載された書籍の総数は38種、596家、13,269巻に及んだ。

### ●魏晋の目録と分類

220年、後漢の滅亡によって、中国はふたたび分裂の時代に入る。いわゆる魏晋南北朝(三国六朝)時代である。

この時代、まず魏の鄭默<sup>ていもく</sup>(213~280)が宮中の蔵書に基づいて、『中経』(佚書)という図書目録を著し、また、この『中経』を基に、荀勗<sup>じゆんきよく</sup>(?~289)が『(中経)新簿』を著した。

この『(中経)新簿』は甲乙丙丁の四部によって書籍を大別する。「甲」部は六芸・小学など儒家の經典とそれを読むための字書類、「乙」部は古諸子家・近世諸子家・兵書・兵家・術数などの諸子类、「丙」部は史記・旧事・皇覧簿・雑事などの史書類、「丁」部は詩賦・図讚・汲冢書などの詩文集類であった。その特色は、『史記』・『漢書』以来増加してきた歴史書に配慮して、初めて史書を丙部に独立させ、全体を四部に分類したという点である。採録された書籍の総数は29,945巻。以後、この四部分類法が基本的に踏襲されていくこととなる。

### ●李充の四部分類

また、李充<sup>りじゆう</sup>(323~388)は『晋元帝書目』を著した。この目録は、荀勗の『新簿』に見られた甲乙丙丁の四部分類を継承しながらも、乙部に史書、丙部に諸子を配し、その順序を逆転させた。すなわち、甲=経書、乙=史書、丙=諸子、丁=詩文集、という配列である。史書は時代を経るごとに増加する宿命にあり、その史書に圧迫されて、諸子の書が三番目に追いやられた形となった。

### ●七分類と四分類

このように、六朝期では、四部分類が主流となりつつあったが、王儉(452~489)の『七志』は、漢の劉歆『七略』の体裁を継承し、七部構成(道教・仏教の書を付録として加え、実際には九部)を採った。時代に逆行した感のある目録であるが、王儉は他に『宋元嘉八年秘閣四部目録』も作成しており、その真意は未詳である。なお、王儉の『七志』は、それまでの蔵書整理や目録作成が、ほとんど国家的事業であったのに対して、初の私撰(私家)目録であったという点にも特色が見られる。

さらに、阮孝緒<sup>げんこうちよ</sup> (479~536) は、この王儉『七志』に見える七分類と六朝期に主流となっていた四部分類とを折衷して、『七録』を著した。すなわち、大枠としては、四部分類を採用しつつ、その細目については、劉歆の『七略』や『漢書』芸文志の精神を活かそうとしたのである。この目録は、内外篇七録55部、6,288種、44,526種を著録する。

#### ●『隋書』経籍志の分類

南北朝の分裂時代に終止符を打ったのは、隋 (581~618) であった。分裂時代の混乱により、隋初の蔵書数は激減していたが、隋は書籍の収集に努めて三万巻余を所蔵するに至ったという。この隋の時代の書籍状況を示すのが、『隋書』<sup>けいせきし</sup>経籍志である。唐代 (618~907) に編纂された『隋書』は、南北朝後期から隋に至る学術世界の状況を知る上で重要な資料である。特に「経籍志」は、正史に付された図書目録としては、『漢書』芸文志に次ぐものであった。

この『隋書』経籍志は、李充『晋元帝書目』に見られる分類と序列を継承して、書籍を四部に分類し、それを「経」・「史」・「子」・「集」と正式に命名した。四部内部の細目の内訳や、道教・仏教の書を付録する点などは、阮孝緒の『七録』に類似しており、「経籍志」が『七録』の影響も受けていることが分かる。「経籍志」の「経部」は627部、5,371巻、「史部」は817部、13,264巻、「子部」は853部、6,437巻、「集部」は554部、6,622巻。計2,851部、31,694巻を著録した。

#### ●四部分類の伝統

この経史子集の四部分類は、以後の中国世界において、図書目録の規範とされた。また、わが国においても、平安朝初期の漢籍目録である藤原佐世<sup>すけよ</sup>『日本国見在書目録』(891頃)は、この『隋書』経籍志を踏襲して、全体を四部に分類し、当時日本に伝わっていた漢籍157部、16,790巻を記録している。

このような経緯を経て、漢籍は今も、原則として経史子集の四部分類によって配架されるのである。但し、その細目については、各々の図書館の実状や所蔵漢籍の状況などにより多少の違いが生じている。また、宋代以降、木版印刷の普及にともなって、従来の四部分類にはなじまない総合的書物(複数の部にまたがる、あるいは四部をすべて包括するような書)が出現し、それらに配慮して、特に「叢書」の部という五番目の部を立てる場合もある。さらに、新中国に入ってから、これら漢籍に関する研究書などを、漢籍ではないが漢籍に準ずる書として、特に「新学部」という分類のもとに収録する場合もある。

大阪大学附属図書館では、漢籍の分類に際して、K 1~K 5の記号を使用し、1~5を各々「経」「史」「子」「集」「叢」に対応させている。また、懐徳堂文庫所収漢籍については、

その総目録『懷徳堂文庫図書目録』において、漢籍を「経」「史」「子」「集」「叢」に五分類し、さらに日本十進分類に基づく「新学部」を「漢籍の部」に付録している。

#### 【参考文献】

(中国)

姚名達『中国目録学史』

余嘉錫『目録学発微』

李万健『中国著名目録学家伝略』

顧実『漢書芸文志講疏』

(日本)

内藤湖南『支那目録学史』

清水茂『中国目録学』

鈴木由次郎『漢書芸文志』

興善宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』

### 3—2 漢籍分類細目解説（漢籍分類検索）

#### 【凡例】

- ①各「部」「類」「属」の分類・名称等は、原則として『懷徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、1976年）に依拠する。但し、「類」の下位分類である「属」については、繁瑣を避けるため、懷徳堂DBに関わる部分のみを取り上げることとした。なお、『懷徳堂文庫図書目録』の漢籍分類は、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』に準拠している。
- ②先ず、全体の分類表を以下に掲げる。その際、各「部」「類」「属」毎に、便宜上「1」「1-1」「1-5-1」等の番号を配当する。
- ③その後、その番号に対応した各「部」「類」「属」の解説を記す。
- ④懷徳堂DB収録の該当漢籍がある場合には、各「類」（または「属」）の【懷】の記号の後にその書名を附記する。

部	類	属
1経部	1-1経注疏合刻類	
	1-2易類	
	1-3書類	

	1-4詩類	
	1-5禮類	1-5-1周禮之屬
		1-5-2儀禮之屬
		1-5-3禮記之屬
		1-5-4大戴禮之屬
		1-5-5三禮總義之屬
		1-5-6樂之屬
	1-6春秋類	1-6-1左傳之屬
		1-6-2公羊之屬
		1-6-3穀梁之屬
		1-6-4春秋總義之屬
	1-7四書類	
	1-8孝經類	
	1-9諸經總義類	
	1-10小學類	
2史部	2-1正史類	
	2-2編年類	
	2-3記事本末類	
	2-4古史類	
	2-5別史類	
	2-6雜史類	
	2-7載記類	
	2-8詔令奏議類	
	2-9傳記類	
	2-10時令類	
	2-11地理類	
	2-12職官類	
	2-13政書類	
	2-14書目類	
	2-15金石類	
	2-16史鈔類	
	2-17史評類	

3子部	3-1諸子合刻類	
	3-2儒家類	3-2-1議論經濟之属
		3-2-2性理之属
		3-2-3校訂之属
		3-2-4家訓勸学郷約之属
	3-3兵家類	
	3-4法家類	
	3-5農家類	
	3-6医家類	
	3-7天文算法類	
	3-8術数類	
	3-9芸術類	
	3-10雑家類	
	3-11類書類	
	3-12小説家類	
3-13釈家類		
3-14道家類		
4集部	4-1楚辞類	
	4-2別集類	
	4-3総集類	
	4-4詩文評類	
	4-5詞曲類	
	4-6小説類	

## (1) 経部

四部分類の一。儒教の基本的文献である十三經じゅうさんけいなどの経書、およびその注釈書などをまとめた分類。「経」とは布の縦糸の意である。縦糸が織布の本末を貫通して不動の基幹となっているように、先王の述作した典籍は宇宙を統べる理法を示すと考えられたため、これを「経」と称した。また「経」は先王の著作のみを指し、後学である孔子の言説などは「伝」と呼ばれ、両者は区別された。しかし後には、孔子を尊重する傾向が強まり、孔子の言行録なども「経」と扱うようになった。また漢代には、「経」に対する「緯い（布の横糸の意）」と称する文献群が出現したが、これらは孔子の神格化と密接な関係にあった。



「五経」とは『易』『書』『詩』『礼』『春秋』の五つの経書をあわせた呼称である。ただし「礼」に関する文献には『儀礼』『周礼』『礼記』があり、『春秋』の解釈として『公羊伝』『穀梁伝』『左氏伝』があるので、これらを数えると「九経」となる。また宋代以降、九経に『論語』『孝経』『爾雅』『孟子』を加えた「十三経」という呼称が用いられた。これらは、儒家思想の根幹を成す、最も基本的な文献であるとされる。

#### (1-1) 経注疏合刻類

複数の経書について、本文である「経」と、その注釈である「注」や「疏」などを合刻（合わせて刊行すること）したものの総称。ただし、単一の経について注・疏などを合刻したものは、その経書が含まれる類に分類される。また、経・注・疏などを合刻したものを「合刻本」と呼ぶのに対し、経（注・疏）のみのテキストを「単経本」（「単注本」「単疏本」という。古くは経・注・疏は別行していたが、宋代以降、これらを合刻することが盛んに行われるようになり、単注本・単疏本が刊行されることは少なくなった。なお、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『十三経注疏』がある。

#### (1-2) 易類……【懐】『易断』『蕉園首書周易』

五経の一である『易』およびその注釈書の総称。『易』はもと占いの書物であったと考えられるが、戦国中期までには儒家の経典として採用され、哲学的・道徳的な解釈が施された。その構造は、六十四の卦、各々の卦についての解説である卦辞、卦を構成する三百八十四の爻（こう、陰陽をあらわす記号）についての説明である爻辞から成り、以上の部分を「経」と称する。また、この「経」について孔子が撰したとされる解説が十篇あり、これらを「十翼」と称する。現在では、「経」に「十翼」を付した形のテキストが一般的に行われており、「十翼」をも含めて『易』と通称される。儒家の経典として尊崇されたため『易経』とも呼ばれ、また周代の易書と考えられたため『周易』とも呼ばれる。なお、夏代の易書とされる『連山』・殷代の易書とされる『帰蔵』、およびこれらの注釈書なども、本類に含まれる。

#### (1-3) 書類……【懐】『洪範懐徳堂定本』

五経の一である『書』およびその注釈書などの総称。『書』は本来、周王朝初期の王者の発言を記録した文献であったが、春秋戦国時代を通じて増補が加えられ、伝説時代から春秋末期に至る帝王や諸侯の歴史記録の体裁を整えたと考えられる。聖人である先王の言行録であり、また孔子によって刪定されたと考えられたため、儒家の経典として「尚書」と尊称された。

始皇帝のいわゆる焚書により『書』はいったん亡びたとされ、漢代に入ると、秦の

博士の記憶から口述筆記により復元されたという「<sup>きんぷん</sup>今文尚書」が流布した。また後には、孔子の旧宅に隠匿されていたという焚書以前の「<sup>こぶん</sup>古文尚書」が発見されたが、これは西晋末期の戦乱に際して失われた。

東晋初期に『古文尚書』およびその注釈書である「<sup>こうあんこくでん</sup>孔安国伝」を献上する者があり、これは当時の朝廷によって真正の『尚書』と認められた。唐代に作成された『五経正義』もこのテキストを採用し、以降、このテキストが広く用いられた。しかし、この『尚書』が晋代の偽作に係るものである可能性は古くから指摘されており、清の<sup>えんじやく</sup>閻若璩によって、これが偽作であることが最終的に論証された。

(1-4) <sup>し</sup>詩類……【懐】『詩断』『蕉園首書詩集伝』

五経の一である『<sup>し</sup>詩』（『詩経』とも尊称される）およびその注釈書などの総称。『詩』は、西周時代から春秋時代までの歌謡を集めた、中国最古の詩集である。集録歌謡は、<sup>ふう</sup>風・<sup>が</sup>雅・<sup>しょう</sup>頌の三種に分けられており、風は各国の民謡、雅は宮中で用いられた楽歌、頌は宗廟での祭祀の際に用いられた楽歌とされる。『詩』には周王朝の始祖を讃えた詩が含まれており、また孔子が『詩』を削定したと伝承されたこともあって、『詩』は儒家の経典として採用され、各詩篇の意味について政治的・道徳的な解釈が行われた。

漢代には『詩』の解釈を行う学派として四家があったが、そのうち<sup>もう</sup>毛氏のテキストのみが完全な形で後世に伝わったため、毛氏の伝えた『詩』という意味で『<sup>もうし</sup>毛詩』とも呼ばれる。『毛詩』には、『詩』全体に対する解説として「大序」が、また各々の詩に対する解説として「小序」が付されており、注釈書としては「伝」（毛伝）が付されている。

(1-5) <sup>れい</sup>礼類

儒家の「礼」に関する文献の総称。「礼」に関する経書には、『<sup>ぎらい</sup>儀礼』『<sup>しゅうらい</sup>周礼』『<sup>らい</sup>礼記』があり、これらの他に、通常「経」と扱われない『<sup>だたいらい</sup>大戴礼』等がある。儒家が理想とした周王朝については、その典章制度を周公が制定したと伝承され、『周礼』および『儀礼』は、周公が定めた制度の記録として尊崇された。『礼記』および『大戴礼』は、戦国時代から漢代にかけての儒家たちの礼説をまとめた、一種の叢書である。

(1-5-1) <sup>しゅうらい</sup>周礼之属

三礼の一である『<sup>しゅうらい</sup>周礼』およびその注釈書などの総称。『周礼』は、周王朝の初期に<sup>しゅうこうたん</sup>周公旦（武王の弟）が定めた、理想的な国家制度を記録した文献とされ、古くは『<sup>しゅうかん</sup>周官』と称した。天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官の六篇より成り、それらに列挙された約三百六十の官職について、その定員や職掌を解説する。ただし、「冬官」部分は漢代までに失われ、「考工記」（工人に関する制度を記した文献）により補われ

ている。

歴代の王朝は、孔子が理想とした周（西周）を規範としたため、その制度の記録である『周礼』を尊重し、これを政治機構設立の際の参考とした。その成立については、一般に周公旦の撰と伝承されるが、前漢末の劉歆りゅうきんの偽作であるとの説を初めとして、多くの異説がある。

#### (1-5-2) 儀礼ぎらい之属

三礼の一である『儀礼』およびその注釈書などの総称。『儀礼』は、冠婚葬祭など、周代の貴族の生活・政治に関わる儀式の詳細について記した文献である。これは周王朝初期に周公旦しゅうこうたん（武王の弟）が定めたとされ、もと三千篇あり、各身分の者が行うべき儀礼を記録していたとされる。しかし漢代には、「士」の身分に関わる部分十七篇を存するのみであった。漢代には『士礼』『礼経』などと呼ばれていたが、魏晋の頃より『儀礼』と称されるようになった。南宋の朱子は、三礼中この『儀礼』を最も重んじ、『儀礼』を「経」、『礼記』をその「伝」と考えた。

#### (1-5-3) 礼記らいき之属……【懐】『深衣図解』『礼断』『蕉園首書礼記集説』

三礼の一である『礼記』およびその注釈書などの総称。『礼記』は、春秋末期より漢代にかけての儒者たちが蓄積した「礼」についての文献群を、漢代の戴聖たいせいが整理したものとされる。その内容は、『儀礼』に対する注釈、礼に関する考察、孔子や弟子たちの言行録など、広範な領域に及ぶ。当初は、「経」とはみなされなかったが、後漢以降、次第に権威を増し、唐代に『五経正義』が作成された際には「五経」の一として採用された。

なお、『礼記』中、「大学」および「中庸」の二篇は、後に単行され、「四書」の一つとして尊重された。

#### (1-5-4) 大戴礼だたいらい之属

漢代に編纂された礼書である『大戴礼』およびその注釈書などの総称。『大戴礼』は、春秋末期より漢代にかけての儒者たちが蓄積した「礼」についての文献群を、漢代の戴徳だいたくが整理したものとされる。聖人の手に出る物ではなく、後学の論説を集めたものであるため、一般に「経」とは扱われない。なお清代末期に、「十三経」に『大戴礼』を加えた「十四経」なる呼称が提唱されたが、これは一般には承認されていない。

戴徳の甥に当たる戴聖たいせいの編集によるとされる『礼記』が尊重されたため、『大戴礼』は比較的軽んじられなかった。しかし清朝考証学が勃興してより、古典としての資料価値が一般に認められ、研究が盛んとなった。

#### (1-5-5) 三礼さんらいそうぎ総義之属

三礼のうち、複数の礼書に関する文献の総称。三礼とは、『周礼』『儀礼』『礼記』を指す。後漢以後にこれらを併せて「三礼」と称するようになった。三礼に関する総論の他、『儀礼』を「経」、『礼記』を「伝」として注を施した朱子の『儀礼経伝通解』なども本属に分類される。また、三礼にもとづく実際上の礼儀制度の解説として編纂された、器物や衣服などの図解のたぐいも本属に分類される。

#### (1-5-6) 楽之属

六経の一である『楽』およびその注釈書などの総称。また、楽器を基準とする度量衡の計算法に関する文献をも含む。古代中国においては、度量衡の基準として、一定の音階を発する楽器の大きさを用いたため、音楽と度量衡とは密接に関係すると意識された。また儒家は、人を教化する際に、礼（礼儀）によって道徳的に社会秩序を維持する一方で、楽（音楽）によって人間の情操を養う必要があると考えた。さらに楽は、儀礼・儀式の一部としても重視された。

テキストとしての『楽経』は、漢代には既に存在せず、秦の焚書により失われたと考えられた。しかし、音楽という性質上、テキストとしての『楽経』はそもそも存在しなかったとの説もある。

#### (1-6) 春秋類

五経の一である『春秋』およびその注釈書などの総称。『春秋』は本来、前八世紀末から前五世紀初に至る魯国の年代記であった。しかし後に、孔子が編集して字句を微妙に改め、その微妙な表現のうちに毀誉褒貶（ほめることとそしること）の評価を込めたと考えられたため、孔子の意思を伝える儒家の經典とされた。儒家は、この『春秋』の微妙な表現のうちに込められた孔子の意志を「微言大義」と称し、その表現法を「春秋の筆法」と称した。

この「微言」を解釈するための書として、戦国から漢代にかけて、『春秋』の注釈書である、いわゆる「春秋五伝」（『公羊伝』『穀梁伝』『左氏伝』『鄒氏伝』『夾氏伝』）が作成されたが、後の二者は早くに亡びた。現在まで残存している前三者を「春秋三伝」と総称する。また宋代には、胡安国（こあんこく）が独自の立場から『春秋』を解釈し、『春秋胡氏伝』を作成した。これは胡安国が『春秋』を借りて独特の立場を表明したものであるが、朱子が顕彰したこともあって、朱子学派においては広く用いられた。

#### (1-6-1) 左伝之属……【懐】『左伝比事蹄』『蕉園首書左伝』『東萊博議』

春秋三伝の一である『春秋左氏伝』およびその注釈書などの総称。「春秋左氏伝」とは、『春秋』経に対して左氏が施した「伝」との意である。豊富な史料を用いて『春秋』経に記された事件を解説しており、「春秋三伝」の中で最も歴史記述を重んじ

る。『春秋』の伝として、前漢代には『公羊伝』や『穀梁伝』が尊重されたが、前漢末期以降には『左氏伝』が盛んに読まれた。その著者は、魯の左丘明と伝えられるが、魯の史官の左氏の撰とする説、前漢末期の劉歆の偽作とする説など、多くの異説が提出されている。

なお、「食指が動く」「病膏肓に入る」など、『春秋左氏伝』を出典とする成語は数多い。

#### (1-6-2) 公羊之属

春秋三伝の一である『春秋公羊伝』およびその注釈書などの総称。孔子の孫弟子である公羊高（子夏の弟子）の説を伝えたものと伝承されたが、その成立に関しては異説も多い。

『春秋』の伝はいずれも『春秋』経に込められた孔子の微旨を明らかにしようとするものである。このうち漢代に発達した『公羊伝』を用いる学派は、周に代わって勃興するであろう漢王朝のために孔子が著した経典が『春秋』経だと考え、孔子が予見し『春秋』経に織り込んだ微旨を明らかにしようとした。これは結果として漢王朝を擁護する学説となり、『公羊伝』学派は漢代には大いに栄えたが、前漢王朝の滅亡後には急速に衰えた。しかし、『公羊伝』に独特のものとして見える進歩史観は、清代末期に再び重視され、康有為・譚嗣同・梁啓超などの公羊学派が形成された。

#### (1-6-3) 穀梁之属

春秋三伝の一である『春秋穀梁伝』およびその注釈書などの総称。孔子の孫弟子である穀梁赤（子夏の弟子）の説を伝えたものと伝承されたが、その成立に関しては異説も多い。『穀梁伝』は、『公羊伝』よりもやや遅れて世に出たものであり、『公羊伝』の解釈を批判する箇所も見られる。『穀梁伝』学派は前漢の後期に一時勢力を得たが、前漢の滅亡後には衰えた。

#### (1-6-4) 春秋総義之属

『春秋』に関する文献のうち、「三伝」（『左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』）に直接関わらないものの総称。「三伝」のうち複数に関わるものや、「三伝」とは異なる立場から経文を解釈するもの、また『春秋』を歴史史料とみて、歴史的・地理的な観点から研究を行なったものなどを含む。

唐代以降、「三伝」を離れて経文の意を直接理解しようとする試みが行われるようになり、特に宋代以降、新たな「伝」が多数作成された。これらのうち、胡安国が作成した『春秋胡氏伝』は、朱子がこれを顕彰したこともあって、宋代以降の中国や朝鮮、また江戸時代の日本などにおいても広く用いられた。この『胡氏伝』を「三伝」とあわせて「四伝」と称することもある。

(1-7) 四書類……【懷】『論語問書』『論語徵駁』『論語雕題・略・逢原』『論孟首章講義』『中庸首章解』『中庸天樂樓定本』『中庸懷德堂定本』『四書句弁』

宋代以降に重視されるようになった四種の文献、すなわち『論語』『孟子』『大学』『中庸』、およびその注釈書などの総称。

『論語』は、孔子や門人の言行録であり、もともとは「経」ではなかったが、孔子の権威が高まるにつれて、「経」として扱われるようになった。

『孟子』は、孟子の言行を記したものである。孔子よりも遅れる後儒の言行録であるため、永く諸子（子部儒家類）の書とされてきた。しかし孟子は、聖人に垂ぐ人物として「垂聖」と称され、特に唐代以降には重視されるようになり、宋代に至ると『孟子』も「経」とみなされるようになった。その内容としては、性善説・仁義説・王道思想などを中心とする。

『大学』『中庸』は、もともと『礼記』の一篇であったが、魏晋以降に重視されるようになり、これら二篇（またはこの中の一篇）のみを取り出して論じる者があった。

北宋の二程子、すなわち程明道・程伊川の兄弟は、これら四書を重視し、さらに南宋の朱子がこれら四書の注釈として『論語集注』『孟子集注』『大学章句』『中庸章句』を撰するに至り、これらをあわせて「四書」と称することが一般的となった。朱子の考えによると、二程子の学問は孔子→曾子→子思→孟子という道統（儒学の継承関係の正統）を継ぐものであるとされ、これら四名の思想を伝える文献として、孔子には『論語』、曾子には『大学』、子思には『中庸』、孟子には『孟子』が配当される。こうして宋代以降、それまでの「五経」にかわって「四書」を中心とする学風が起り、元代には、科挙の科目として朱子による四書の解釈が正式に採用されるに至った。

(1-8) 孝経類……【懷】『孝経大義』

十三経の一である『孝経』およびその注釈書などの総称。『孝経』は、孔子とその弟子である曾子との問答という体裁を借り、孝道を道德および民衆教化の根本として説く。

その内容としては、天子・諸侯・卿大夫・士・庶人の五等の階層それぞれの者が行うべき孝道を説きつつ、天・地・人を貫く最高の道德として孝を位置づける。また、孝を民衆教化・統治の要諦とし、親に対する孝を君主に対する忠に移行させるといった政治性も有する。

中国には、親孝行を最高の徳目として重視する伝統があり、その孝を専ら説く唯一の経として『孝経』は重んぜられた。親孝行を推奨するという内容や、比較的短い分量から、儒教の入門書として、また児童教育の書として、中国のみならず日本などに

おいても広く普及した。

なお、「<sup>しんたいはつぶ</sup>身体髮膚、<sup>これ</sup>之を父母に受く。<sup>あえ</sup>敢て<sup>ましやう</sup>毀傷せざるは孝の始めなり」「<sup>あ</sup>身を立て名を後世に揚ぐ」等の句は、『孝経』をその典拠とする。

(1-9) 諸<sup>しやうけいそうぎ</sup>経総義類……【懐】『七経雕題』『七経雕題略』『七経逢原』

経書に関する文献のうち、複数の経書に関わる解説や経義に対する論説、経学の歴史の解説、経典に対する音注、経典のテキスト（書籍・石碑）の文字に関する研究、および経典の注釈書を集めた叢書などの総称。また便宜上、<sup>いしよ</sup>緯書（漢代に出現し経書に対応するものとして盛行した文献群）も本類に分類される。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『<sup>びやっこうつう</sup>白虎通』『<sup>こうせいけいかい</sup>五経大全』『<sup>こうせいけいかい</sup>皇清経解』などがある。

なお、懐徳堂の<sup>なかいりけん</sup>中井履軒の代表的業績である『<sup>しちけいちやうだい</sup>七経雕題』『<sup>しちけいちやうだいろく</sup>七経雕題略』『<sup>しちけいほうげん</sup>七経逢原』は、複数の経典に関わる注釈書であるため、本類に分類される。

(1-10) 小学類<sup>しやうがく</sup>

文字の<sup>けいしやう</sup>形象・<sup>くんこ</sup>訓詁・<sup>おんいん</sup>音韻などに関する文献の総称。これらの知識は経典を理解するために必須であり、経学を学ぶ者がまず学ばねばならない事柄である。従って本類は、経部に分類される。

「小学」とは本来、幼年者に識字教育などを施す教育機関の名であり、「大学」に対するものであったが、ここから転じて、文字に関する学問を「小学」と呼ぶようになった。時代が下ると、さらに金石文（金属や石に彫られた文字）や書法・書品に関する学問も「小学」に分類された。

また、朱子の門人が童蒙教育書『<sup>しやうがく</sup>小学』を撰するにおよび、童蒙教育にかかわる文献までが「小学」の範疇に加えられた。清代にはこうした傾向が批判され、『<sup>しこぜんしよ</sup>四庫全書』はこれらを排除し、本来の文字に関わる文献のみを小学類に収めた。以降、この分類法が一般的に踏襲されている。

なお、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『爾雅』『説文解字』などがある。

(2) 史部<sup>し</sup>

四部分類の一。歴史事実を記した文献や、史論・史評など、歴史に関する文献をまとめた分類。中国における歴史記述の体例としては、<sup>きでん</sup>紀伝体・<sup>へんねん</sup>編年体・<sup>きじほんまつ</sup>紀事本末体の三者が主要なものである。紀伝体は、歴史を紀（帝王の伝記）・伝（その他の人物の伝記）・志（テーマ別分野史）などに分類するもので、『<sup>しき</sup>史記』がこの体裁を用いて以来、歴代の正史などに採用されている。編年体は、事件を年代順に記述したものであり、紀事本末体は歴史を事件の流れを中心に記述したものである。また、これら以外に、

詔令・奏議・伝記・時令・地理・職官・目録などに関する文献も本部に分類されることが多い。中国は歴史を重んじる伝統を有しており、国家によって編纂された正史をはじめ、個人の手になる歴史書・卑史・野史・地方史など、非常に多くの史書が存在する。

(2-1) 正史類……【懐】『史記雕題』『後漢書雕題』『三国志雕題』『三国志雕題草本』

各時代について、正統と認められている史書およびその注釈書など。『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『旧唐書』『新唐書』『旧五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』『元史』『明史』を総称して「二十四史」といい、これに『新元史』を加えたものを「二十五史」という。体裁としては、すべて紀伝体（帝王の本紀と個人の列伝を主とする体裁）を採用している。

これらのうち『史記』のみは、古代より漢代に至る通史であるが、『漢書』以降の正史は全て、一王朝または一時代についての断代史である。また、初期の正史は、個人や家の事業として編纂され、後に正史と認められたものであったが、後には、王朝自らが、国家事業として前王朝の正史を編纂するようになった。これは、自らの王朝が前王朝を正当に継承した政権であることを示すため必要な事業だと考えられた。また辛亥革命後、中華民国は清王朝の正当な後継者を自認し『清史』の編纂を試みた。この未定稿である『清史稿』が公刊されているが、これは一般に正史とは認められず、別史に分類されることが多い。

(2-2) 編年類

正史などが紀伝体で編纂されているのに対し、編年体（記事を時代順に並べる体裁）によって編纂された史書の総称。起居注（天子の毎日の生活を記録した文書）の類もここに含まれる。戦国以前における史書の体裁としては編年体が主流であったが、漢魏以降では紀伝体がオーソドックスな歴史記録の体裁だと考えられるようになった。そうした中で漢魏以降の編年体の史書として有名なものに『資治通鑑』がある。これは戦国より五代末に至る通史であるが、記事を全て年代順に並べる年代記の体裁を取っており、編年類の代表的なものとされる。

なお、『春秋』は本来、魯国の編年史であったと考えられるが、孔子が筆削を加えたと考えられ、経部に分類されたため、本類には含まれない。

(2-3) 記事本末類

記事本末体（事件ごとの終始を説明する体裁）により編纂された史書の総称。ある事件の終始について見る場合、記事本末体は紀伝体や編年体よりも便利である。このため宋代以降、紀伝体や編年体の史書の記事を並べ替え、記事本末体に改編した文献



が編纂されるようになった。例えば記事本末体史書の代表とされる『通鑑記事本末』<sup>つがんきじほんまつ</sup>は、編年体史書である『資治通鑑』<sup>しじつがん</sup>の記事を事件ごとに分類し配列し直したものである。

(2-4) 古史類……【懷】『戦国策雕題』

秦漢以前に編纂された史書の総称。文献の内容や体裁ではなく、編纂された時期による分類であるため、編年体をとる『竹書紀年』<sup>ちくしょきねん</sup>、記事本末体に近い『戦国策』<sup>せんごくさく</sup>、地理書である『山海経』<sup>せんがいきやう</sup>、個人の伝記である『晏子春秋』<sup>あんししゅんじゅう</sup>などは、すべて本類に分類される。

(2-5) 別史類

正史に採用されなかった紀伝体の史書や、編年体の史書などのうち、正史に準ずる価値を有すると認められた文献の総称。正史と雑史との中間的な史書と考えられる。

例えば、古くは『東観漢記』<sup>とうかんかんき</sup>が後漢代に関する正史と見なされてきたが、現在では范曄『後漢書』<sup>はんようごかんしよ</sup>が後漢代についての正史と認められているため、『東観漢記』は正史からは外され、本類に分類されている。他に本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『明史藁』『清史稿』などがある。

(2-6) 雑史類

王朝一代を網羅するに至らない史書や、一時の見聞を記した文献などのうち、資料として価値のあるものの総称。本類に含まれる文献の例として、『揚州十日記』などがある。なお、もっぱら怪異や瑣語のみを記録した文献や、史料的価値が低いと考えられたものなどは、本類ではなく子部小説類に分類される。

(2-7) 載記類

正統とはみなされていない地方政権や特定の地方に関する史書の総称。ある特定の地方政権について記録したもの、ある時代の地方政権群について記録したもの、ある地方についての通史などは、本類に分類される。その代表として、『南唐書』『十六国春秋』などがある。

(2-8) 詔令奏議類

詔令（君主の命令）と奏議（臣下からの上奏）とを集めた文献の総称。この種の文献は、単なる記録文書としてのみならず、後世の君臣が参考とし役立たせるべきものとして重視された。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『唐大詔令集』『歷代名臣奏議』などがある。なお、『書』は、聖人である古聖王の詔令などを記録した文献であるが、儒家の経典として採用されたため経部に分類される。

(2-9) 伝記類

個人の伝記記録を主眼とする史書や、個人の言行録などの総称。個人の伝記は、正

史などの紀伝体史書に収録された場合には「列伝」とされるが、単行されたものは本類に分類される。特定の個人の伝記に限らず、ある基準により集められた複数の人物に関する記録をまとめたものもある。

また、氏族に関する記録・研究なども本類に分類されることが多い。特定の個人の伝記としては『聖蹟図』『朱子行状』などがあり、ある基準により複数の人物についての伝記を集めたものとしては『宋名臣言行録』などがある。

#### (2-10) 時令類

年中行事に関する文献の総称。古来、四時（四季の運行）に応じた年中行事が行われたが、四時の運行は単なる行事・儀式にとどまらず、実際的な為政にまで直接関連するものと考えられた。例えば、植物が枯死する冬は、陰気が盛んな季節であり、罪人の処刑に適した季節と考えられたが、逆に、植物が生育する春や夏に処刑を行うことは、陽気が盛んとなる時期に適合しない行為だと考えられた。このため、これら行事と四時との関わりについての文献が編纂された。その代表として、『四時纂要』などがある。

#### (2-11) 地理類……【懷】『河図累棊』

方域・山川・都市・辺境・名勝などの名称や所在、地方の文化・習俗などを記した記録および研究書の総称。日本や琉球の地理に関して中国人が論述した文献も本類に分類されるが、日本人が日本や中国の地理について記した著作は、「国書」に分類されるため、本類には含まれない。

もともと本類には、方域・山川・風俗・物産についての文献が分類されていたが、後に「地理類」の範疇が拡大され、古跡・人物・芸文などについてもについての文献も含まれるようになった。現在ではこの分類が整理され、人物・芸文などに関する文献は本類に分類されないことが多い。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『読史方輿紀要』『洛陽伽藍記』や、各地の地方志などがある。

#### (2-12) 職官類

王朝の政治機構・官僚制度などについて述べた文献の総称。近代以前における官僚制度は、その王朝の「礼」を具体的に示す、きわめて重要なものと考えられた。このため、各時代の職官について記録・解説した文献が多数作成された。その代表として『大唐六典』『歴代職官表』などがある。なお、周王朝の職官制度を記録した『周礼』は特に重視されたが、これは儒家の經典とみなされ経部に分類されたために本類には分類されない。

#### (2-13) 政書類……【懷】『治水濶論』

王朝の政治・官職・科学・典章・制度などに関する文献などの総称。特定の

王朝に関する文献のみではなく、複数の王朝にわたる記録も含まれる。また、科学に関連するものとして、合格者の名簿なども本類に分類される。特定の王朝の制度に関する文献のうち代表的なものとして、『唐律疏議』『唐会要』などがある。また、複数の王朝に渡る制度沿革を記述した代表的な文献として、『通典』『通志』など、書名に「通」字を冠した十種の文献があり、これらを「十通」と総称する。

#### (2-14) 書目類

書籍目録の総称。伝統的に「文」を尊重する中国では、書籍の蒐集とその目録の作成は、その時代に関する歴史記録の重要な一部分であると考えられた。王朝は文化の保護者であると考えられていたため、文献の蒐集とその目録作成は、国家的事業として進められた。特に、目録作成の成果は、「芸文志」「経籍志」として正史に含まれることも多い。また宋代以降、印刷製本術の発達により個人の蔵書が増加し、個人の蔵書目録も作成され刊行されるようになった。単なる書名の列挙にとどまらず、各書籍の流伝や内容について解説したものも多く、重要な資料として用いられる。

本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『直齋書録解題』『四庫全書総目提要』などがある。

#### (2-15) 金石類

石や金属器などに彫刻され鑄込まれた文字・絵画などに関する文献の総称。「金」とは青銅器や刀剣など金属製の器物を、「石」とは石碑・墓誌・墓室などを指す。また関連して、玉や甲骨（亀甲と獣骨）などに彫刻された文字・絵画に関する文献も本類に分類される。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『金石萃編』『殷虛書契』などがある。

石碑や金属器に記された文字は「金石文」と呼ばれ、歴史記録としての史料性のみならず、各時代の書体研究にとっても高い価値を有する。一方、殷代の甲骨に彫刻された文字は「甲骨文」と呼ばれ、漢字の原形を探る重要な資料となっている。

また中国では、故人の事蹟を石などに刻して墓中に副葬することが行われたが、これは「墓誌」と呼ばれ、人物に関する基本的な史料として用いられる。

#### (2-16) 史鈔類

先行する史書を要約したり、一部を抜粋したりして編纂された史書の総称。孔子は、当時三千篇以上あった聖王の言行録を『書』百篇に削定したとされるが、これは史鈔のはじめとされる。その後、魏晉以降になると、『史記』や『漢書』などの大部の文献について、重要な記事を抜粋した抄録的文献が編纂されるようになった。また、中国は歴史が長く、膨大な史書が存在するため、複数の史書から取材し、複数の王朝の歴史を俯瞰できるよう構成された文献も現れた。

なお、『十八史略』は、先行する正史などから取材・抜粋して編纂された史書であり、史鈔の代表的なものであるが、その価値が高く評価されたため、別史類に分類されることも多い。

### (2-17) 史評類<sup>しひょう</sup>

歴史および歴史書についての評論などの総称。歴史的な事件に関する論や、史体・史法などに関する論（いわゆる史学理論・史学概論などにあたる）を記した文献などが分類される。中国では、古くより歴史を重んじる風潮があり、数多くの歴史書が編纂されたが、歴史記録の多さに対し、いわゆる史学理論を専ら論述する文献は少数に止まる。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『史通』『文史通義』などがある。

### (3) 子部<sup>し</sup>

四部分類の一。思想家・学派の著作物およびその注釈書などをまとめた分類。ただし経学に直接関わる文献は経部に分類され、本部には分類されない。「子」とは、「先生」「師」の意。戦国時代には、多数の思想家（諸子）が多彩な思想活動を繰り広げた。彼らを「諸子百家」と総称する。先秦の諸子百家や、漢代以降の思想家による著作のうち経部に分類されないものを本部に分類する。また思想ではなく、占トや農業など、特定の分野に関する技術についての文献なども、本部に分類される。

#### (3-1) 諸子合刻類<sup>しよしがこく</sup>

子部に分類される文献のうち、複数の思想家・学派の著作物およびその注釈書などをまとめて一部となしたもの。叢書のうち、ある部に分類される文献をまとめて一部となしたものを専叢<sup>せんそう</sup>というが、このうち、子部の専叢が本類に分類される。また、子部の文献のうち複数のものに関わる研究・論考なども本類に分類される。子部の文献を多数まとめたものとして『十二子』『百子全書』などがあり、複数の子部の文献について注釈・研究したものとしては『諸子弁』『諸子平議』などがある。

#### (3-2) 儒家類<sup>じゅうか</sup>

儒家（孔子を宗師として、その言を重んじた者たち）が、その教えの趣旨を明らかにするために著した文献の総称。ただし、経書やその注釈書は経部に分類されるため本類には分類されない。

漢代以降、儒学が正統な思想であると考えられたため、官吏および知識人は、基本的に儒家とされた。本類は、先秦より近代に至る儒家の思想に関わる著作が全て含まれるため、広範な文献が収録される。その内容としては、経世済民に関する思想書、宋代に勃興した性理学<sup>せいりがく</sup>についての文献、儒者の随筆や読書録、家庭および児童教育の

ための文献などがある。

### (3-2-1) 議論経済之属

儒家の手に出る「経済」(経世済民、世をおさめて民をすくうこと)を論ずる文献の総称。その代表として『孔子家語』『荀子』などがある。なお、いわゆる性理学に関わるものや、もっぱら文字・校訂のみについて述べるもの、初学者向けの童蒙書や家訓の類は除外される。また、経部に採用された文献も本属には分類されない。

### (3-2-2) 性理之属……【懐】『竹山首書近思録』

宋代から明代にかけて盛んになった新儒学すなわち性理学に関する著作の総称。天地万物などの根底にある「理」および人間に内在する「性」を中心に論じるところから「性理学」の名がある。性理学の代表的な学説として、各々の大成者の名を取った「朱子学」と「陽明学」と呼ばれる二派がある。本類は、これら二派の思想や、これらの源流となった思想に関する著作が分類される。その代表として『朱子語類』『伝習録』などがある。

元代以降、科学の科目として朱子の学説が正式に採用され、朱子学は隆盛を極めた。また江戸幕府や李氏朝鮮も朱子学を採用した。一方、陽明学は、明代中期以降に広く行われ、江戸時代以降の日本でも、その実践道徳としての性格が中江藤樹・大塩平八郎・勝海舟など広い層から支持者を得た。

### (3-2-3) 校訂之属

複数の文献についての真偽や異同について考察した文献の総称。主として、複数の文献に関する札記(考証・考察・所感などについて述べた短文)をまとめて一部としたものなどが本類に分類され、その代表として『困学紀聞』『日知録』などがある。なお、特定の文献についての考察や研究は、対象となる文献の研究書として分類されるため、本類には分類されない。

### (3-2-4) 家訓勸学郷約之属……【懐】『小学雕題』

儒家的な童蒙教育に関する文献や家訓などの文献およびその注釈書などの総称。童蒙教育に関する文献は、古くは経典を読解するための基礎的なものと考えられ、経部小学類に分類されていたが、現在では本類に分類されるようになった。その代表として『顔氏家訓』『小学』などがある。

### (3-3) 兵家類

軍事思想や軍事技術に関わる文献の総称。中でも『孫子』『呉子』『司馬法』『李衛公問対』『尉繚子』『三略』『六韜』の七種の文献は、宋代以降「武経七書」として重視され、兵法書の代表とされた。

### (3-4) 法家類

法治の原理や運用方法に関する文献の総称。中国の歴代王朝は、儒家の徳治主義をその統治原理として標榜し、反儒家的な法家の思想を排撃した。しかし実際には、儒家の徳治思想のみで大帝国を運営することは不可能でもあり、法家的な政策も王朝によって併用された。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『商君書』『韓非子』などがある。

(3-5) 農家類<sup>のうか</sup>

農学理論や農業技術に関する文献の総称。農政に関する議論から、農作物の栽培法・牛馬の飼育法や養蚕に関する技術的なものまで、広い範囲の文献を含む。農家とは本来、『漢書』芸文志に、当時の九学派の一つとしてあげられている学派の名称である。彼らは農業を重視し、たとえ君主であっても自ら耕作せねばならない、などの極端な農本主義を唱えた。しかし、政治思想としての農家は早くに断絶し、彼らの政治思想を示す文献はすべて失われた。このため、本類の文献として現存するものは、漢代以降に撰された農政に関する議論・農作物の栽培法・牛馬の飼育法や養蚕に関する技術に関する文献のみである。その代表として、『齊民要術』『天工開物』などがある。

(3-6) 医家類<sup>いしか</sup>

医学思想や医療技術、本草学（薬物学）などに関わる文献の総称。古くは房中術・神仙術にかかわる文献も含むことがあり、また獣医学に関する文献も含まれたが、のちにはこれらの混同が批判された。古代中国では、病気とは五臓の気のバランスが崩れた状態だと考えられ、この状態を判断するに際しては脈診が最も重視された。そのための教科書として『脈経』など多くの文献が編集された。この他、本草学に関する基本的な文献である『本草経』や、鍼灸学に関する古典である『靈枢経』などが、本類の代表的な文献である。また、『黄帝内経素問』などは、単なる療法にとどまらない自然哲学的な生命論にまで言及する。これらはいずれも、今日に至るまで中国医学の基本的な文献として尊重されている。

(3-7) 天文算法類<sup>てんもんさんぽう</sup>……【懐】『天経或問雕題』

天文学や数学・算数技術に関する文献の総称。古来、日蝕・月蝕や木星を初めとする惑星などの運行は、人間社会における吉凶と密接な関連を有すと考えられた。また天体の運行は君主による為政の是非をも反映すると考えられたため、天体観測や運行の予測は政治の一部として重要視された。これに関連して、算数技術も、天体の運行を予測し暦を計算する手段として重視された。本類に属する文献のうち、天体観測や暦算に関する文献は「推歩」、また、もっぱら数理算法を述べた文献は「算書」として、それぞれ細分される。代表的なものとして、『周髀算経』『九章算術』などがある。

## (3-8) 術数類

占いなどの技術に関する文献の総称。「易」や陰陽五行思想などを占いの手段として扱う文献は本類に分類されるが、「易」を儒教の経典として研究する文献は経部に分類され、本類には含まれない。家屋や墓などに適した土地を判断する「相宅相墓」、未来を予知する「占卜」などの分野に細分される。代表的なものとして、『五行大義』などがある。

## (3-9) 芸術類

書道・絵画・琴・篆刻・棋・雑技などに関する文献の総称。「芸術」の語は、古くは儒家の重視する射・御・書などの技術を意味することもあり、また「占い」を意味することもあったが、現在ではそうした技術は本類に含まれず、絵画・琴・篆刻・棋・雑技などに関する文献が「芸術」類に分類される。また付随して、各々の分野に関わる人物の伝記や、書品の拓本なども本類に分類される。代表的な文献として、『書史』『芥子園画伝』などがある。

## (3-10) 雑家類

子部のうち、趣旨が単一の思想傾向に限定されない文献や、独立した分類を立てるには文献量が足りないグループの著作などの総称。例えば『呂氏春秋』は、道家や法家などの思想傾向を併せ持っており、これらのいずれかに分類することは問題がある。また、墨家の文献として現存するものは『墨子』一書のみであり、そのだけのために「墨家類」という独立した分類を立てることは一般的ではない。このような文献を「雑家」と総称し、本類に分類する。上記の他、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『淮南子』がある。

## (3-11) 類書類

既存の文献からの引用・抜粋を集めて編纂された文献の総称。漢魏以降、読むべき文献が増加し、また個々の文献量も肥大し、これらの文献すべてを読破することが困難となった。これにより文献の要旨や核心部分を抜粋した文献への需要が生じ、『群書治要』『意林』などの類書が編纂された。

また、詩文を作成するために、特定の単語や熟語などについて、その用例や出典、類似する表現などを検索する必要があるため、このため、頻用される表現につき、用例などをまとめた文献への需要が生じた。このような目的のために編纂された類書に、『芸文類聚』『六帖』などがある。

もっぱら詩文作成の目的のため編纂された類書は、利用者の便のため、音韻によって事項を配列してあることが多い。また、音韻によらず事項の性質によって項目を配列した類書は、一種の百科事典としても利用される。

上記の他、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『太平御覧』『永樂大典』『古今圖書集成』などがある。

(3-12) 小説家類……【懐】『世説新語補雕題』

雑事・異聞・怪異・瑣語きごを述べた文献の総称。「小説」とは本来、経世済民（世をおさめて民をすくうこと）についての大きな議論（「大説」）に対し、取るに足りぬ小さな説、という意味である。転じて、雑事・瑣語などの記録も「小説」と呼ばれるようになった。また、怪異・妖異を記録した文献も本類に分類される。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『世説新語』『聊齋志異』などがある。なお、著者の創作に出る現代的な意味での「小説」は、本類ではなく、集部小説類に分類される。

(3-13) 釈家類

仏教に関する文献の総称。また、キリスト教などの外来宗教に関する文献も、便宜上ここに分類されることが多い。仏教は、後漢時代に伝来し、六朝から唐代にかけて盛んとなり、インドや中央アジアの言語から翻訳された「漢訳仏典」が多数蓄積された。また中国独自の仏教の発展に伴い、中国仏教に独自の文献も多数作成された。本類に含まれる仏典を集大成した叢書として、『大蔵経（一切経）』がある。

(3-14) 道家類……【懐】『莊子雕題』

老莊思想などに関わる文献の総称。本類の代表的な文献は『老子』『莊子』である。これらが唱える無為自然むいしぜんの思想は、政治思想としてよりも、むしろ個人の処世術として受け入れられ、魏晉から六朝にかけて流行した。

なお道教は、民間信仰である神仙思想に起源を持ち、陰陽五行思想や老莊思想などを取り込んで形成された宗教と考えられ、いわゆる道家思想とは異なるものである。しかし便宜上、道教に関する文献も本類に分類される。

本類に含まれる文献のうち代表的なものとして『老子』『莊子』などがあり、神仙思想や道教に関わる文献としては『抱朴子』ほうぼくしなどがある。また本類の文献を集大成した叢書として『道蔵』どうぞうがある。

(4) 集部

四部分類の一。思想や歴史記録には直接関わらない詩文およびその注釈書などをまとめた分類。中国では古来、詩文を作ることは文化人の教養とされ、数多くの詩文が残されている。詞や曲は、詩文に対して軽視され、書目に掲載されることも少なかったが、現在ではその価値が認められ、本部に分類されている。

(4-1) 楚辞類

『楚辞』およびその注釈書などの総称。『楚辞』は、前漢の劉向りゅうきやうが編纂した総集で、



屈原くつげんや宋玉そうぎよくらの作品を集めたもの。このような性格を持つ『楚辞』は、本来ならば総集に分類されるべきであるが、中国では古くから、『楚辞』については一類を立てる伝統となっている。これに先んずる詩集としては『詩』があるが、『詩』が黄河流域の民謡を中心としているのに対し、『楚辞』は南方の楚地方で発達した「辞」と呼ばれる独特の体裁の作品を集めている。『楚辞』は、『詩』に次ぐ中国最古の詩集の一つとされる。

なお、懐徳堂文庫には、重建懐徳堂期に活躍した西村天囚（碩園）の蒐集に係る『楚辞』のコレクションが「楚辞百種」と総称され、「碩園文庫」の中に収められている。

(4-2) 別集類……【懐】『柳文』

個人の詩文集およびその注釈書などの総称。個人の詩文集は、古くは本人の没後に後人が編纂することが一般的であった。しかし後には、本人が生前に自分の著作を編集するという風も起こった。なお、後人の編集に係る別集については、本人の伝記などの資料を付録することも多い。白居易はくきよいの詩文集を集めた『白氏文集』は、その代表であり、日本においても広く読まれた。その他、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『陶淵明集』『晦庵先生朱文公集』などがある。

(4-3) 総集類……【懐】『唐詩選国字解』『古文真宝前後集雕題』

複数の作者に係る詩文集を集めた文献およびその注釈書などの総称。特定の時代の人物の作品をまとめたもの、作品の傾向別にまとめたもの、特定の地方の作者の作品をまとめたものなど、編集方針によってさらに細かく分類される。

特定の時代の作品を集めた文献のうち代表的なものとして『全唐詩』があり、また優れた作品を集めた文献のうち代表的なものとして『文選』がある。これらは日本においても広く読まれた。その他、本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『全上古三代秦漢三国六朝文』『全唐文』などがある。

(4-4) 詩文評類

詩や文を評論した文献の総称。先行する詩句についての評論・解説や詩人の事蹟に関する文献と、文学一般に関わる詩論・文章論に関する文献とに大別される。また、詩句についての印象や読後感を記したのも本類に分類される。詩句に関する文献は、多く時代別・地域別のものをまとめて撰され、文学論に関するものは、理論的な文学評論、および音韻や詩の形式に関する技術論・修辞論的なものがある。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『文心雕龍』『詩品』などがある。

(4-5) 詞曲類

詞や曲およびその注釈書などの総称。詞は、唐代に発生し宋代以降に発展した、詩

よりも形式に自由度の大きい韻文であり、楽曲を伴うものである。曲は、この場合、金元以降に盛んとなった戯曲などを指す。詞は詩から派生した低俗なものと考えられ、また曲は詞よりもさらに低俗なものと考えられていたため、詞を「詩余」、曲を「詞余」と称して賤しまれた。また詩文集など詞曲が付載される場合は、詩文を先とし、詞や曲はすべて末尾に掲載されるのが通例であった。これら詞曲について研究し論評したものは、「詞話」「曲話」と呼ばれ、本類に包括される。本類に含まれる文献のうち代表的なものとして、『西廂記』『琵琶記』などがある。

#### (4-6) <sup>しょうせつ</sup>小説類

文学作品としての小説、およびその注釈書などの総称。著者の創作に関わる部分が大きい、散文形式のいわゆる文学作品が本類に分類され、中でも、『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』の四つの口語小説は四大奇書と総称される。なお、妖異についての記録など、現代では小説に類すると考えられる文献でも、史実の記録という意識の下に撰されたものは、史部または子部小説類に分類され、本類には分類されない。

## 4. 懐徳堂年表

本コンテンツは、懐徳堂の歴史を年表にまとめたものである。懐徳堂関係年表としては、既に図録『懐徳堂—浪華の学問所』（懐徳堂友の会・懐徳堂記念会、1994年）、『龍野と懐徳堂』（龍野市立歴史文化資料館、2000年）などにまとめられており、本稿もそれらを参照したが、ここでは、更に、本DB収録の貴重資料に関わる事項をできるだけ追加し、また、昭和以降の懐徳堂記念会と大阪大学の活動についても盛り込んだ点に特色がある。

なお、懐徳堂関係資料を中心とする歴史については、「附録1 懐徳堂文庫の歴史」参照。

西暦（年号）	記事
1670（寛文10）	五井持軒、大坂で私塾を開く。
1700（元禄13）	三宅石庵、尼崎町で私塾を開く。
1706（宝永3）	中井髻庵の父・玄端、一家を率いて龍野から大坂に移住。
1713（正徳3）	石庵、安土町に私塾「多松堂」を開く。
1716（享保元）	享保の改革始まる。
1717（享保2）	平野郷に「含翠堂」できる。
1724（享保9）	大坂市中大火、いわゆる「妙知焼」。同志ら尼崎町の富永芳春の隠居所跡に学舎を建て、平野に難を避けていた石庵を迎え、「懐徳堂」を設立。
1726（享保11）	懐徳堂に官許の認可がおりる。初代学主に三宅石庵、預り人に中井髻庵が就任。三宅石庵、開学記念講義を行う（『万年先生論孟首章講義』）。
1728（享保13）	荻生徂徠没。
1729（享保14）	五井蘭洲、江戸に出る。
1730（享保15）	三宅石庵没。中井竹山、生まれる。
1731（享保16）	中井髻庵、学主兼預り人となる。五井蘭洲、津軽藩に仕官する。
1732（享保17）	中井履軒、生まれる。
1735（享保20）	懐徳堂の学則「播州大坂尼崎町学問所定約」全7条、制定。

- 1739 (元文 4) 蘭洲、津軽藩を去り大坂に帰る。中井竹山 (10歳)・履軒 (8歳) 蘭洲に学ぶ。中井贅庵『五孝子伝』を記す。
- 1744 (寛保 4) 中井贅庵、「墨菊図」(泉冶筆)に賛文を記し軸装する。
- 1745 (延享 2) 富永仲基『出定後語』刊行。
- 1746 (延享 3) 富永仲基『翁の文』刊行。
- 1751 (寛延 4) 懐徳堂、改築。
- 1751 (宝暦元) 五井蘭洲『勢語通』を著す。
- 1758 (宝暦 8) 中井贅庵没。三宅春楼 (47歳) 学主、中井竹山 (29歳) 預り人となる。「宝暦八年定書」全 3 条、「懐徳堂定約附記」全 5 条できる。
- 1760 (宝暦10) 山片蟠桃、升屋別家伯父・久兵衛の養子となり、升屋本家に奉公を始め、懐徳堂に通学。
- 1762 (宝暦12) 五井蘭洲没。
- 1764 (宝暦14) 懐徳堂寄宿舎が建てられ、中井竹山、寄宿生に対する『懐徳堂書院揭示』を出す。
- 1764 (明和元) 稻垣子華、孝子として幕府から顕彰される。
- 1765 (明和 2) 混沌社結成。中井履軒、反古紙を使って「深衣」を作製、『深衣図解』を著す。
- 1766 (明和 3) 履軒、京都高辻家に招聘される。
- 1767 (明和 4) 履軒帰坂、鰻谷町に住み「水哉館」を開く。五井蘭洲『瑣語』刊行。
- 1771 (明和 8) 懐徳堂で『大日本史』の筆写開始。
- 1773 (安永 2) 中井履軒『越俎弄筆』成書。
- 1774 (安永 3) 中井竹山、『社倉私議』を龍野藩に呈出。草間直方、鴻池家の別家・草間家の女婿となる。前野良沢・杉田玄白ら、日本初の翻訳解剖書『解体新書』を刊行。
- 1776 (安永 5) 中井竹山『詩律兆』刊行。
- 1777 (安永 6) 「安永六年正月定書」全 1 条、制定。
- 1778 (安永 7) 「安永七年六月定書」全 8 条、制定。
- 1780 (安永 9) 「学問所」を「学校」と改称、学問所の人別は町内から離れて別証文になる。中井履軒、米屋町に転居、『華胥国物語』を著す。
- 1782 (天明 2) 三宅春楼没。竹山学主兼預り人となり、『同志中相談覚』を示す。また、高辻胤長の下命により建学私議を上呈。
- 1784 (天明 4) 五井蘭洲『非物篇』、中井竹山『非微』、懐徳堂蔵版で刊行。
- 1785 (天明 5) 大坂に心学明誠社が開設される。

- 1787 (天明7) 松平定信老中主座となり、寛政の改革始まる。
- 1788 (天明8) 松平定信来坂、竹山その諮問に答える。
- 1790 (寛政2) 寛政異学の禁。
- 1791 (寛政3) 『草茅危言』完成。
- 1792 (寛政4) 懐徳堂全焼。竹山、再建願いのため、江戸に下向。蕉園、「一宵十賦」の詩才を示す。
- 1795 (寛政7) 再建の許可が下り、手当金300両下賜される。
- 1796 (寛政8) 再建落成。総経費700両余。中井竹山「懐徳堂記」を撰す。
- 1797 (寛政9) 「宋六君子図」懐徳堂に贈られる。中井竹山隠居。中井蕉園、学校預り人となる。
- 1798 (寛政10) 中井竹山肖像画描かる。100人参加、1人5ヶ年500目の義金募集はじまる。蕉園江戸へ行く。
- 1799 (寛政11) 中井竹山、『逸史』を幕府に献上。
- 1802 (享和2) 山片蟠桃、『夢の代』の初稿『宰我の償』を著し、中井竹山に校閲を求める。
- 1803 (享和3) 中井蕉園没。中井碩果預り人となる。
- 1804 (享和4) 中井竹山没。
- 1804 (文化元) 碩果、教授兼預り人となる。
- 1808 (文化5) 草間直方、独立して今橋で両替屋を経営。通称・鴻池伊助。
- 1813 (文化10) 並河寒泉懐徳堂に入る。履軒の『七経逢原』このころ完成か。
- 1817 (文化14) 中井履軒没。中井碩果教授、並河寒泉預り人となる。草間直方『三貨図彙』、山片蟠桃『夢の代』成る。
- 1820 (文政3) 中井柚園、父履軒の聖賢扇を筆写。
- 1832 (天保3) 中井桐園、碩果の嗣子となり、並河寒泉懐徳堂を出る。
- 1833 (天保4) この年より天保7年にかけて、天保の大飢饉。
- 1834 (天保5) 中井柚園没。『天楽楼書籍遺蔵目録』作成。
- 1837 (天保8) 大塩平八郎の乱。
- 1838 (天保9) 緒方洪庵、適塾を開学。
- 1840 (天保11) 中井碩果没。寒泉懐徳堂に戻って教授となり、桐園預り人となる。
- 1847 (弘化4) 並河寒泉、『辨怪』を著す。
- 1848 (嘉永元) 並河寒泉、『逸史』(中井竹山)を刊行。
- 1854 (嘉永7) 9月、ロシア軍艦ディアナ号大坂港に入港。寒泉・桐園ロシア使節の応対に出る。

- 1855 (安政2) 中井木菟麻呂、生まれる。
- 1857 (安政4) 水戸藩、『大日本史』を懐徳堂に贈る。
- 1859 (安政6) 同志とはかり、懐徳堂永続助成金を集める。
- 1863 (文久3) 永続助成金の再延長を決める。
- 1864 (元治元) 禁門の変。書籍・什器を文庫に収める。
- 1868 (慶応4) 鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争おこる。桐園のみ書院に残り、寒泉は河内稲垣家へ、桐園の家族は中河内竹村家へ避難。
- 1869 (明治2) 財政逼迫し、書院を閉鎖。並河寒泉、「出懐徳堂歌」を残して懐徳堂を去る。
- 1871 (明治4) 並河寒泉、本庄村で寒濤廬塾を開く。
- 1879 (明治12) 懐徳堂最後の教授並河寒泉没。
- 1881 (明治14) 懐徳堂最後の預り人中井桐園没。
- 1886 (明治19) 中井木菟麻呂、『華胥国物語』(中井履軒)を版行。
- 1910 (明治43) 西村天囚、「五井蘭洲伝」を講演、懐徳堂記念会、設立。中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』執筆。
- 1911 (明治44) 府立大阪博物場美術館において懐徳堂展覧会開催。懐徳堂師儒公祭举行される。西村天囚『懐徳堂考』刊行。懐徳堂記念会から『懐徳堂五種』『懐徳堂印存』など復刊される。
- 1913 (大正2) 懐徳堂記念会、財団法人として認可される。
- 1916 (大正5) 大阪市東区豊後町19番地に重建懐徳堂竣工、松山直蔵を教授として招聘。
- 1922 (大正11) 孔子没後2400年記念事業として、孔子祭を举行する。
- 1923 (大正12) 孔子没後2400年記念刊行として、武内義雄講師校訂の『論語義疏』、懐徳堂より出版される。懐徳堂堂友会発足。
- 1924 (大正13) 懐徳堂堂友会、『懐徳』を創刊。
- 1925 (大正14) 『懐徳堂文科学術講演集』『懐徳堂百科通俗講演集第一輯』刊行。西村天囚旧蔵書、碩園記念文庫として懐徳堂に寄贈される。
- 1926 (大正15) 懐徳堂創学200年、重建懐徳堂10周年記念として懐徳堂書庫ならびに研究室竣工。『懐徳堂要覧』刊行。
- 1931 (昭和6) 中井木菟麻呂「旧懐徳堂平面図」作成。
- 1932 (昭和7) 中井木菟麻呂、中井家伝来の懐徳堂関係資料を懐徳堂記念会に寄贈。
- 1936 (昭和11) 中国の精華大学教授劉文典来堂、碩園文庫の調査研究を行う。
- 1939 (昭和14) 中井木菟麻呂、昭和7年に続き、中井家伝来資料を懐徳堂記念会に寄贈。伊藤介夫遺族より、旧懐徳堂図書寄贈される。

- 1942 (昭和17) 重建懐徳堂25周年記念事業として中井竹山『草茅危言』を刊行。
- 1943 (昭和18) 中井木菟麻呂没。
- 1945 (昭和20) 大阪大空襲により書庫部分を除き重建懐徳堂焼失。
- 1949 (昭和24) 懐徳堂記念会、懐徳堂蔵書を大阪大学に寄贈。
- 1950 (昭和25) 懐徳堂記念講演会(大阪大学)開催。
- 1951 (昭和26) 懐徳堂記念会、文化功労者として大阪府教育委員会より表彰され、「なにわ賞」を受ける。懐徳堂記念講座開始。
- 1953 (昭和28) 『懐徳堂の過去と現在』(大阪大学)刊行。
- 1954 (昭和29) 懐徳堂記念会の事務所を大阪市東区北浜三丁目の適塾内に移転し、事務連絡所を大阪大学文学部内に設置。
- 1956 (昭和31) 懐徳堂回顧展開催(大阪阪急百貨店)。
- 1965 (昭和41) 重建懐徳堂開講五十周年記念式典を大阪大学本部松下会館において挙行。
- 1976 (昭和51) 『懐徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部)、刊行。
- 1983 (昭和58) 懐徳堂友の会設立される。懐徳堂古典講座開始。
- 1988 (昭和63) 『懐徳堂文庫復刊叢書』(懐徳堂友の会・懐徳堂記念会)の刊行開始。
- 1994 (平成6) 図録『懐徳堂一浪華の学問所』(懐徳堂友の会・懐徳堂記念会)、刊行。
- 1996 (平成8) 懐徳堂友の会、財団法人懐徳堂記念会に一本化され、発展的に解消。
- 1999 (平成11) 懐徳堂記念会創立90年記念『懐徳堂記念会の九十年』刊行。
- 2000 (平成12) 懐徳堂文庫資料の電子情報化開始。
- 2001 (平成13) 大阪大学創立70周年記念事業の一環として、マルチメディア技術による懐徳堂の顕彰(コンピュータグラフィックスによる旧懐徳堂学舎の復元、貴重資料データベースの公開など)が行われる。8月、懐徳堂文庫全資料、大阪大学附属図書館旧館書庫から新館貴重図書室に総合移転される。

## 5. 懐徳堂研究

本コンテンツは、懐徳堂に関して専門的知識を有する研究者を想定して作成した。懐徳堂研究者に待望されていたのは、貴重資料の公開であり、特に、その内容を翻刻した、いわゆる全文テキストデータの公開である。そこで、ここでは、①『『論孟首章講義』』、②『『天楽楼書籍遺蔵目録』』、③『懐徳堂学派の『論語』注釈』の3つのコンテンツを作成して公開した。

①は懐徳堂初代学主三宅石庵の講義を筆録した『萬年先生論孟首章講義』について、その全文テキストデータおよび現代語訳、解説を提供するものであり、②は中井履軒が懐徳堂を離れて開いた私塾水哉館の蔵書目録『天楽楼書籍遺蔵目録』の全文テキストデータと解説を提供するものである。また、③は懐徳堂学派の中で漢籍の研究がどのように進展していったのかを具体的に提示するために、『論語』泰伯篇曾子有疾章を取り上げ、懐徳堂学派の『論語』諸注釈を検討したものである。これは、『論語』の特定の章を集中的に検討するとの意味で、「定点観測」と仮称して作業を進め、実際の画面でも、「定点観測ボタン」をクリックすると下記のような一覧が提示され、閲覧者が自由にボタンを選ぶことができるようになっている。

	原文	訓読	現代語訳	解説	画像	文庫情報
非物篇	●	●	●	●	●	●
非徴	●	●	●	●	●	●
論語雕題	●	●	●	●	●	●
論語雕題略	●	●	●	●	●	●
論語逢原	●	●	●	●	●	●

なお、本コンテンツは、専門的な内容であるため、各々、他の学術誌にその内容を既に掲載しており、ここでは、本コンテンツの導入部分のテキストを除き全て割愛する。各々については、「懐徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について—デジタルコンテンツとしての位置づけ—」（湯浅邦弘、杉山一也、竹田健二、藤居岳人、井上了、『中国研究集



刊』第27号、45-66頁、2000年12月）、『天楽楼書籍遺蔵目録』について—懷徳堂資料のデジタルアーカイブ化に向けて—（寺門日出男、湯浅邦弘、神林裕子、井上了、『懷徳』第69号、91-107頁、2001年1月）、『懷徳堂学派の『論語』注釈—泰伯篇曾子有疾章について—』（湯浅邦弘、寺門日出男、神林裕子、石飛憲、『中国研究集刊』第29号、103-130頁、2001年12月）を参照されたい。

ここでは、懷徳堂文庫所蔵書籍を取り上げて、懷徳堂資料の内容とその研究上の意義について解説してみよう。

「全文テキストデータ」では、懷徳堂初代学主三宅石庵の講義を記録した『論孟首章講義』と、中井履軒が懷徳堂から独立して開いた私塾水哉館の蔵書目録である『天楽楼書籍遺蔵目録』とを取り上げる。それぞれ、全文の画像・翻刻・現代語訳・解説を自由に閲覧することができる。

「懷徳堂学派の『論語』注釈」では、三宅石庵、五井蘭洲、中井竹山、中井履軒などが『論語』に施した注釈を取り上げる。ここでは、懷徳堂学派の反荻生徂徠の立場や、懷徳堂学派の『論語』注釈が形成されていく過程を、さまざまなウィンドウの組み合わせによって閲覧することができる。

#### ● 論孟首章講義

享保11年（1726）、懷徳堂は江戸幕府から官許を得、大坂学問所として公認された。その際、懷徳堂初代学主の三宅石庵（号は万年）は、『論語』と『孟子』の各首章についての記念講義を行った。その筆記録が、大阪大学懷徳堂文庫に『論孟首章講義』として残されている。

#### ● 『天楽楼書籍遺蔵目録』について

中井履軒は、兄・竹山が懷徳堂学主として活躍したのに対し、懷徳堂から独立して私塾水哉館を開き、そこで膨大な経学研究を行っていった。『天楽楼書籍遺蔵目録』は、その水哉館の蔵書目録である。

#### ● 懷徳堂学派の論語注釈

『論語』泰伯篇の「曾子有疾」章を取り上げ、それに対する懷徳堂学派の諸注釈を一覧することで、懷徳堂学派の反荻生徂徠の立場を明らかにし、また懷徳堂学派の『論語』注釈が成立する過程を具体的に示すことを目的とする。取り上げる注釈は、中国の古注系注釈

(『論語集解』)、新注系注釈(『論語集注』)、『非物篇』、『非徴』、『論語徴駁』、『論語問書』、『論語  
雕題』、『論語雕題略』、『論語逢原』、『論語問書』である。

## 6. 懐徳堂と中国古典の世界

本コンテンツは、懐徳堂について理解を深めてもらうための諸情報を、①「懐徳堂の学則」、②「懐徳堂の精神」、③「懐徳堂と漢語」としてまとめたものである。

これらは、平成12～13年度開講の共通教育科目「中国哲学基礎」（湯浅邦弘）と連動して、大阪大学中国哲学研究室のホームページ <http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/> に展開していた内容を再編したものである。「中国古典の世界」と銘打ったのは、懐徳堂の学問が朱子学（儒学）を根幹とするものであり、そこで講じられていたテキストが四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）を初めとする中国の古典であったこと、また、定書・定約などとして掲示されていた懐徳堂の学則や諸規定も、こうした中国古典の精神を背景として策定されたものであったこと、学問所の名「懐徳」を初めとして中国古典に出拠を持つことばが多く見られること、などによる。

### 6-1 懐徳堂の学則

懐徳堂では、どのような教育が行われていたのであろうか。幸いにも、それを知るためのいくつかの手がかりが存在する。教育制度を含む懐徳堂全般の取り決めについては「定約」が、学舎や学寮における諸規定については「定書」が残されている。また、享保9年（1724）から天明3年（1783）に至る学内の主要な出来事を年代順に記した『懐徳堂内事記』、大坂奉行所や町内との折衝を記した『懐徳堂外事記』なども重要な資料である。さらに、懐徳堂内には、門・柱・壁など至る所に額や聯が掲げられていて、そこにも様々な教訓が記されていたという。

ここでは、これらを参考としながら、特に、「定約」「定書」として明確に規定された諸規定を中心に、懐徳堂の教育の特色について概説してみよう。

なお、原文の引用に際しては、漢字を現行字体に改め、送りがなを補い、漢文表記の部分を書き下すなど、表記の一部に変更を加えている。また、条数を便宜上(1)(2)などの番号によって示す。

#### ● 「壁書」全三条

- 「開講と講師」「謝儀」など数条
- 「播州大坂尼崎町学問所定約」全七条
- 「宝暦八年（1758）定約附記」全五条
- 「宝暦八年（1758）定書」全二条
- 「宝暦八年（1758）定書」全三条
- 「安永六年（1777）正月定書」一条
- 「安永七年（1778年）六月定書」全八条

### ●「壁書」全三条

創建時の懐徳堂の玄関に懸かっていたという壁書で三条からなる。『懐徳堂内事記』享保11年（1726）10月の項に採録されており、末尾に「午十月学問所行司」の署名がある。(1)では、学問の目的について、職業活動の前提としての「忠孝」の重要性を説き、懐徳堂の講義内容も、その主旨を説き進めるのが第一であるから、書物を持たない人も聴講して良いと規定する。また、やむを得ぬ用事があれば、講義の途中でも退出して良いと記す。(2)では、席次について、武家方は上座と一応規定するが、但し書きとして、講義開始後に出席した場合は、武家方と町人との区別はないとする。(3)では、入学について、中井忠蔵（贅庵）までその旨を断ること。但し、贅庵が外出中は、支配人まで申し出ることとしている。

(1) 学問とは忠孝を尽し職業を勤むる等の上に之有るの事にて候。講釈も唯だ右の趣を説きすすむる義第一に候へば、書物持たざる人も聴聞くるしかるまじく候事。

但し、叶はざる用事出来候はば、講釈半ばにも退出之有るべく候。

(2) 武家方は上座と為すべく候事。

但し、講釈始り候後出席候はば、其の差別之有るまじく候。

(3) 始て出席の方は、中井忠蔵迄<sup>まで</sup>其の断り之有るべく候事。

但し、忠蔵他行の節は、支配人新助迄案内之有るべく候。

### ●「開講と講師」「謝儀」など数条

『懐徳堂内事記』享保11年（1726）10月の項には懐徳堂の教育について貴重な記録が残されている。(1)は、享保11年（1726）10月5日に、三宅石庵による『論語』の講義が日講として開始されたこと、その他の講師として、並河五一郎（誠所）、井上左平（赤水）、五井蘭洲が出講したことが記される。(2)では、日講で読まれたテキストが「四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）」「書経」「詩経」「春秋胡伝（『春秋』に対する宋の胡安国の注）」「近思録」などであったことが分かる。(3)は、休日の規定で、毎月「1日、8日、15日、25日」が休み。(4)(5)は、謝礼の規定で、各々分限に応じて行えばよいが、それでは、自然と割

高になり、貧しい者が出席しづらくなるであろうから、次のように申し合わせるとして、五節ごとに「銀一匁」または「二匁」とし、講師方への個別の謝礼は無用とすること、また、礼をつくし気持ちを表して出席するのが第一であるから、貧しい者はその規定にとらわれず、「紙一折」または「筆一對」でも良いこと、とする。

(1) 同年十月五日、老先生（三宅石庵）論語開講。是より日講相始まり、講師は並河五一郎殿、井上左平殿、蘭洲五井先生三人にて、翌十二年丁未四月、五一郎殿東帰、同年暮迄は老先生も日講御手伝ひ之有り。……

(2) 日講の書は、四書、書経、詩経、春秋胡伝、小学、近思録等なり。

(3) 休日は、朔日、八日、十五日、廿五日。

(4) 謝礼の定書控へ

礼式は各分限相応に相務め候事無論に候へ共、人々心任せに仕候へば、自然と事多かき高にも成り行き候て、以来貧学者等は出席も仕難き様に相成るべく候はんか。左候ては本意に背き候事故、今度申し合せ相定め候処、左の通りに御座候。

(5) 日講の謝儀は、五節供前勝手次第、銀壹匁か又は貳匁づつ、支配人新助方迄御指出し成らるべく候事。

右指出さるる候祝儀、年行司支配人と立合ひ、其の惣数を以て、老師並に学問所預り及び助講の衆中等へ分配逐ぐべく披露候。尤も此の壹封の外、面々へ祝儀には及ばず候。只一応拝謝の印だに之有り候へば、礼ととのひ情達し出席仕よく候義第一に候へば、貧学の人其の時の事体を以て、右定め候品をも相減じ、紙壹折又は筆一對等を礼式と相致して然るべく候。又力之有る人たり共、右定め品より相増し候事義は然るべからず候。此の外の日講聴聞に付き一切費用之無く候間、此の段取次の衆より近来出座の方に御申し通し成らるべく候。

#### ●「播州大坂尼崎町学問所定約」全七条

三宅石庵の高弟の中村良斎の手になる「定約」。現在は散逸して伝わらない。『懷徳堂内事記』享保20年（1735）の項に採録されており、『懷徳』第12号付録の「懷徳堂旧記」にも翻刻されている。奥付に「享保廿年（1735）乙卯七月」。「中井忠蔵（磬庵）」ほか10名および「諸同士中」の連名が見える。内容は、(1) 学問所創立と免許、(2) 講談の課目、(3) 学主の招聘、(4) 学主世襲の禁、(5) 同志の会合、(6) 少年の教導などについての規定である。

特に(2)では、懷徳堂の講師陣に対して、懈怠なく講談を行い、講義の内容は「四書五経」を中心とし、それ以外の雑事を講じてはならない、と規定している。また、(6)は、親から頼まれた子供の教導、および学問所への寄宿について記しており、懷徳堂が子供の教育、およびその「寄宿」を認めていたことが分かる。

- (2) 学問所講談懈怠無く相勤め申すべく候。講じ申すべき事は、四書五経、其の外道義の書講談致し、他の雑事講し候儀一切無用に候事。
- (6) 読書手習い其の外子供学び候う事を、親たる人頼み候へば、其の時の学主へ相尋ね、許容の上教導致すべく候。学問所へ寄宿致させたき旨候へば、飯料の定、是れ又賄い方帳面に記し置き候事。

### ●「宝暦八年（1758）定」全三条

懐徳堂に寄宿していた学生を対象として学寮に掲示された定書。懐徳堂教育の在り方を示す代表的な定書。懐徳堂文庫に実物が保管されており、また、『懐徳堂内事記』宝暦八年（1758）の項にも採録されている。(1)は、懐徳堂の書生間の交わりについて、貴賤貧富を問わず同輩とすべきこととする。但し、大人と子供の区別はあり、また、座席については、新旧（新参か古参か）、長幼、学問の進度などを指標として、互いに譲り合うこととしている。(2)は、寄宿生について、私事による外出は認めないとする。但し、やむを得ぬ用事やその宿先（勤務先・実家など）から断りがあった場合は例外とする。(3)は、同じく寄宿生について、その謝礼は15歳から納めることと規定する。

- (1) 書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事

但し、大人小子の辨は、之有るべく候。座席等は、新旧長幼、學術の浅深を以て面々推譲致さるべく候。

- (2) 寄宿の書生、私の他出一切無用為るべき事。

但し、扱ふ無きの要用、或は其の宿先より断り之有る節は、格別と為すべく候。

- (3) 寄宿の書生、講筵の謝儀は、十五歳より差し出さるべき事。

### ●「宝暦八年（1758）定約附記」全五条

享保20年（1735）に制定された「播州大坂尼崎町学問所定約」（初期懐徳堂の定約）をもとに、そこに漏れている事柄や実情に合わなくなっている点を、三宅春楼が学主就任に際して書き加えたもの。「三宅才二郎（春楼）謹書」の署名に続き、五井藤九郎（蘭洲）中井善太（竹山）、徳二（履軒）など三十三名の連署が見える。内容は、(1)すでに規定されていた学主世襲の禁を解く、(2)学主と預人との関係、(3)学主預人の候補の見立て、(4)異学者を招かず、(5)医書詩文集を講ずるを許す、などについての規定である。

このうち、(5)は、懐徳堂で講ずべき文献について、先の『懐徳堂内事記』享保11年（1726）10月の項と同じく、「四書五経道義の書のみ」と規定する。但し、余力があれば「詩賦文章」あるいは「医術」を、関心のある人に内々で講じたり、会読したり、あるいはまた、詩や文章の会などをもうけることは例外として認めている。そして、三宅石庵（万年）も、

内々に医書や詩集などを講じたこともあるとしている。享保11年（1726）の規定に比べ、教授内容がやや柔軟になっていることが分かる。

(5) 四書五経道義の書のみ講談致し、他の雑書講じ候事一切無用と申し候ども、余力に詩賦文章或は医術をも、心懸け候人へ内証にて講じ聞かせ、或は会讀いたし、或は詩会文会等致し候事は、格別の義と存じ候。万年も内証にて医書詩集等講じ聞かせ候事も之有り候。但だ表向きの講談に致す間敷しき事は、定約の通り勿論と為すべく候。

### ●「宝暦八年（1758）定書」全二条

講堂に掲示された定書。「懐徳堂内事記」宝暦8年（1758）の項に採録されている。謝礼についての二条を記す。(1) は、五節ごとの謝礼について、玄関の帳面に記帳することとしている。但し、旧識別懇の方や読書・手跡などの稽古の方は例外としている。また、謝礼は、礼が調い情が通じて出席しやすくなるというのが第一であるから、貧しい者は紙一折、筆一对でも良いとしている。この点は、『懐徳堂内事記』享保11年（1726）10月の項に記載された規定と同じである。(2) では、講義の受講生ではなく、読書や習字の稽古のために通っている人に対し、右の規定を適用せず、特別に頼まれた方のみ謝礼をすることと記す。また、事故の折には、誰でも世話をするが、それに対する格別の謝礼については、一切無用であるとする。

(1) 講談・聴衆、五節供の礼、務められ候方は、玄関に於て帳面に記し置かれ、学主・助講預りへ銘々仰せられ通ひ候には及ず候。尤も謝儀も右の趣に有るべ候事。

但し旧識別懇の方、読書・手跡等稽古の方は、格別と為すべく候。惣して謝儀は、礼調ひ情達し出席致しよき為第一にて候へば、貧学の方は、紙一折・筆一对等を以て礼式とせられ候も苦しからず候。

(2) 読書・手跡等稽古のため通われ候方は、学主にても預りにても、相頼まれ候方のみの謝儀差し出さるべく候事。

但し故障の節は誰にても世話を致すべく候へ共、別段に謝儀等の心遣、一切無用と為すべく候。

### ●「安永六年（1777）正月定書」一条

「安永六年丁酉正月 学校行司」の署名が見える。冒頭の「三八」は貼紙の上に記されており、訂正された可能性がある。受講の謝礼について、先の規定を補足する内容。

三八夜講、二七朝講、定式講筵の謝儀、近来混雑に相成り候。已に來たる者、先規の通り別段に講堂へ御納め成らるべく候。尤も御出席の印を表され候のみにて候。新來の御衆中、普く御承知のため斯くの如く候。以上。

### ●「安永七年（1778年）六月定書」全八条

懐徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、中井竹山が定めた最も代表的な規定である。懐徳堂文庫に実物が保管されており、また『懐徳』11号（昭和8年刊）の中井木菟麻呂「懐徳堂遺物寄進の記」中に「懐徳堂壁署三面」の一つとして翻刻されている。

その中で木菟麻呂は、「学校預り人（中井）桐園が毎休日の朝、寄宿生を講堂に集めて、読み聴かせられるのがきまりであった」と述べている。

(1) は、書生の面々互いに申し合わせて行儀を守り、かりそめにも箕踞（足を投げ出して座る）・偃臥（ごろんとよこになる）などしてはならないとする。(2) は、学問に関する談義や典雅な話題の他は、無益の雑談を慎み、場所柄をわきまえ、卑俗な談義は堅く停止と規定する。(3) は病気でもないのに、みだりに昼寝・宵寝をしてはならないとする。(4) は学業の余暇には、習字・算術・試作・訳文など、各々に応じて心懸けることを説く。(5) は、休日やそのほかの余暇には、和訳の軍書や近代の記録物などを心懸けてよむべきこととする。(6) は囲碁や将棋などは、社交や気分転換のためならば差し支えはないが、休日以外は日中そのような雑芸に関わってはならないとする。(7) は互いに行き届かないことについては、同輩が互いに心をつかい、切磋することとするが、それが行き過ぎてトラブルになった場合には、(8) で、早々にその旨を申し出ることとしている。総じて、学校側からの高圧的な規定と言うよりは、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。また、寄宿制の生活態度が極めて厳格に規定されていたことも分かるが、一方で、そうした規定を必要とする実状にも思いを致すべきであろうか。

- (1) 書生の面々互に申し合せ行儀正敷相い守り、仮初にも箕踞・偃臥等致す間布き事。
- (2) 学談・雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄、不相応の俗談、堅く停止と為すべき事。
- (3) 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事。
- (4) 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事。
- (5) 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事。
- (6) 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の気を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども、休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候、無用と為すべく候事。
- (7) 銘々行届き申さず候事は同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事。
- (8) 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事。



## 6-2 懐徳堂の精神

懐徳堂は享保9（1724）に創設されて以来、幕末・明治維新の混乱によって閉校となるまで、約140年にわたって存続した。大坂の町に支持され続けた懐徳堂の精神とは何だったのか。ここでは、それを「倫理」「批判」「独創」の3つに整理して論じてみよう。

### 1. 「倫理」——「五孝子伝」と「蒙養篇」——

#### ●人の道

懐徳堂の初代学主三宅石庵は、享保11（1726）年、懐徳堂が幕府の許可を得て、官許学問所となったのを記念し、『論語』と『孟子』のそれぞれ冒頭の一章について講義を行った。

その中で石庵は、『論語』学而篇の「学」について「人と生れたるものは、人の道を学ばねばならぬ」と述べた。すなわち、学問とは、単なる読み書きそろばんや、商売上手になるための技術を学ぶのではなく、「人の道」を学ぶことだと宣言したのである。人間は、気質の偏りや耳目の欲によって、その道を失うことがある。それを決して失わないのが「聖人」であり、「学」とは、その「聖人」の道を学ぶことだと言うのである。

では、「人の道」とは具体的に何であろうか。石庵は、当時の身分階級を前提に、「君臣父子夫婦兄弟朋友の五つのものが各々の道にかなう」ことであると説く。つまり、君主は君主らしく、臣下は臣下らしく、父は父らしく、母は母らしく、子は子らしく、夫は夫らしく、妻は妻らしく兄弟朋友は兄弟朋友らしくあることが、「人の道」に他ならないと言う。

あまりに常識的なことを言っているようであるが、これを厳守するのはなかなか難しい。人間の歴史は、この道を踏み外す歴史であったと言ってもよいからである。臣下が君主の位を篡奪したり、子が父を殺めたりという、「人の道」を逸脱する事件は、悲しい現実として存在した。

懐徳堂で重視されたのは、こうした「人の道」であり、特に「孝」という徳目であった。

#### ●中井鏗庵『五孝子伝』

中井鏗庵（名は誠之、通称は忠蔵、竹山・履軒の父、懐徳堂二代目学主）の『五孝子伝』は、鏗庵が実際の事件をもとに記した孝子伝であり、刊記に「元文己未のとし（元文4年[1739]）三月廿三日 誠之しるす」とある。原本は、大阪府立中之島図書館所蔵。明治44（1911）年に『懐徳堂五種』として懐徳堂記念会から復刊されている。

その大意は、次の通りである（なお、(1)～(8)の番号は、便宜的な内容区分であり、後に掲げた『蒙養篇』の原文にほぼ対応している）。

(1) 家で船運の取引をする大坂堀江の居船頭「かつらや太郎兵衛」には、長女「伊知」

十六歳を頭に四人の子供がいた。(2) 太郎兵衛とともに船運を営む沖船頭の「新七」は、秋田から大坂へ米を運ぶ途中、暴風に遭って難破。船を「水船」として帰港させる一方、ひそかに米を横領して換金し、太郎兵衛に分け前を押しつけて逃亡した。太郎兵衛は金に目がくらんでこれを受け取り、その後、事件が発覚して捕縛され、死刑と決まった。

(3) 長女の伊知は、自分たちの生活のために父がやむなく罪を犯したと考え、父の身代わりに自分たちが罰せられることを願う。(4) その思いを妹のまきに打ち明け、嘆願書を作成。他の三人の実子、および養子の長太郎までが同意して、奉行書に出頭した。(5) 奉行所はその願いを一度は却下したものの、大坂城代の備中守太田侯はそれを哀れに思って再尋問した。(6) その結果、子供たちの願いが誠実なものであるのを確認した。(7) この旨を江戸に伝えて伺いをたてたところ、大嘗祭の特赦として、太郎兵衛は大坂三郷払いという軽い罰で済んだ。

(8) 『五孝子伝』は、この事件を聞いた贅庵によって筆録された。長太郎は実子ではないから「五孝子」と記すのはどうかと言う人もあったようであるが、贅庵は、長太郎も同じ心で嘆願したのだから、実の子であるかどうかは問題にならないとし、また、幼少の「とく」八歳、「初五郎」六歳も、幼少のゆえ、尋問に際してその心情をはっきりと答えられなかったものの、姉の心が浸透して同じく出頭したのであるから、彼らを総称して「五孝子」と言うのは当然であるとしめくくっている。

五井蘭洲（純禎、懷徳堂助教）は、この本文の後の識語に「この五孝子の事情は、中井贅庵が記したものである。まことに見るべき内容であり、文章にも誇張がなく、これは五孝子の孝と同様である。これは天性というべきで、古今でも稀なものである（五孝子之状、中井贅庵記、爲實可觀、而文不溢鳴、同五孝子之孝也、蓋得諸天性、而古今之所希矣）」と記して絶讃している。

懷徳堂では、以後も「孝」を重要な徳目として掲げ、孝子を探して顕彰するまでに至り、それはさらに大坂町奉行による孝子顕彰運動となって展開していった。贅庵の『五孝子伝』は、懷徳堂におけるこうした精神を、早くも明確に宣言したものと言える。以下、『五孝子伝』の要点が分かるよう、便宜上、いくつかの段落に分けて見出し語を立て、関係する部分の原文を記してみよう。（但し、原文が漢文表記となっている箇所は書き下してある。）

(1) 孝女あねの名伊知、年十六、次萬幾十四、次とく八ツ、次初五郎六ツなり。父かつらや太郎兵衛、……

(2) 新七……太郎兵衛にむかひて、罪おそろしけれど、かくはからひぬとて、金そこばくとり出で、これおさめいれよといふ。太郎兵衛ひがことするなと見つつ、金に心やうつ

りけん、あなかしこ人にもらすなどて、ふかくかくして、……

(3) あねはことさらにものをもくはず、夜に入てもつやつやめをもあはさで、ためいきふきてひとりごとすなるを、母も三人の子もよくいねたり。おまきなん聞とめて、あねご、やよ、われもかなしくてねむらずといふ。あねききて、さらばものいはんとて、耳もとによりて、父の心はつねにはまめしくて、神佛にもよくつかへたまふに、今かかるつみおかし給ふ事、ひとへにわれらを世にあらせてなどのまよひなるべし。さればわれらがいのちをささげて、父の身がはりにたたんという事を、おほやけにねがい奉らんはいかに、……

(4) 燈をかかげて書けるやうは、おやのかはりに子五人とは申ながら、長太郎は義理ある中の子なり。のこり四人を父のかはりにいのち御とり下され候はば、ありがたく存まらせ候。霜月廿三日としたためて、……長太あやしみたづねて、しかじかのよしをききて、われもくはへよといふに、きかずして、おほやけにいたりつく。

(5) 今はたなにをかねがはん。はやかへりねと……ぜにそこばくたまひてかへれとあるを、親のいのちをこそ乞奉れ、この錢なにかせんとて、おしかへして又なく。……備中守太田侯……なんぢらがねがひ無益の事なり。命かはらんといふも、ふたたび逢見てなどおもふべし。……あねかしこまりて、其ことはりもはじめよりぞんじ知りぬ。めしかへらるるにおいては、逢見ぬこともつゆうらみ奉らじといふ。……誠に死をきわめたるありさまなり。

(6) 長太いかにとのたまふに、……ちちのかはりにて候へば、長太郎がいのちめしあげられ候へとすすみ出たり。とく初五はいかにとのたまふに、徳は色うごき、初五はかしらをふりていなみたるさまなり。これまたあはれと見たまふ。

(7) ことし未の年三月二日、又めしいだされて、太郎兵衛つみ深しといへども、大嘗會の赦としていのちをゆるして、北南天満三郷おひはらはせらるるぞ、非常の大罪、なんぢらがねがひによりてゆるさるべきようなれど、ふびんの事に聞しめしあげらるるによりて、さて去年よりことしまでは、御評議ありて程すぎぬ、子どもらに御たたりなし。……いとま乞せさせよとて、おほやけの庭上にてひきあはさするに、おやは子をいだき、子はおやをささぐるようにして、うれしなきになく、おほやけの君々よりかみなかしも、見とみきくときくものみななく。

(8) 五孝子とするしたるはいかにといふ人あり。長太はもとより同じ心に願ひたれば、かりの子のへだてなし。末ふたりが身にも、あねの心ゆきわたりてしたがふめれば、あねの心のものいはぬなり。五人の人は誠をみつるうつはもののかずなり。みてたる誠はひとつなり。五孝子といふもまたむべならずや。

懐徳堂四代目学主中井竹山の『蒙養篇』は、年少者向けに「人の道」を分かりやすく箇条書きにした書である。全53条。原本は大阪大学懐徳堂文庫所蔵。明治44（1911）年に、懐徳堂記念会から『懐徳堂五種』の一つとして復刊されている。

読者対象は、主として年少者であるため、そこに説かれる倫理は、家庭内の倫理、学習の心得などが中心であり、特に、贅庵の『五孝子伝』にも示された「孝」の精神を説く条が多数を占めている。以下、便宜上、(1)「倫理全般、対父母・対年長者」、(2)「学問」、(3)「商業活動」の三つに内容を分類した上で、関係する条項を列挙する。(但し、原文が漢文表記となっている箇所は書き下してある。また、各冒頭の数字は便宜上加えた条数であり、本文には記されていない。)

(1) 倫理全般、対父母・対年長者

- 1 「父母に善く事ふるを孝といひ、長上に善く事ふるを悌と名付け申し候」
- 2 「孝弟の二字は、昼夜御心掛候て、一生御失念之有るべからず候」
- 3 「父子君臣夫婦長幼朋友を五倫と名付けて、一日も離るべからず候。大切に其の道を守らるべく候」
- 4 「五倫の道と申すは、親義別序信の五事にて候。能々記得申さるべく候」
- 5 「親とは、恩愛の篤きなり。義とは、筋合を違へぬなり。別は、分隔の正しきなり。序は、次第の見事なる。信は、詐を云ざる事にて候」
- 8 「人として人の道をしらず行はずしては、人と生れたる<sup>かい</sup>詮は之無く候」
- 12 「小児は、長者を敬い、其の指図を背くべからず候。侮がましき事、毛頭之有るべからず候」
- 16 「親に事ふるは、手足の働第一たるべし。恩愛を恃みて怠り易し。能々心を用いらるべく候」
- 30 「一事を行ふにも、親の心に叶はざるかを能々考うべし。僅の事も一分に任す事、必ず之有るべからず候」
- 47 「人の大切なる宝は、一心の善に在りと知るべし。金銀珠玉は、山の如く積置ても時有りて尽くべし。一心の善は、一生用ても尽る期の無きなり」
- 48 「長者の接伴に参り候節、よき御接伴などと挨拶致すべく候。是は御馳走などとは申すべからず候。少者の為の設に非ず候故なり。此の心得之れ無き人多く御座候」
- 49 「長者に向て其の年を尋ぬべからず候。是れ無礼なりと『礼記』にも見え候。世間に此の事を洗と心得申さず候」
- 50 「老人長者と同道の節、必ず其の跡に従ひ申すべく候。仮初にも先に立つべからず候」

## (2) 学問

- 7 「人は八歳より学に入るを定法として、夫より年月を追て、人の人たる道を習ひ覚ゆる事にて候」
- 18 「一生学問をして小人となる人多し。無用の骨折と云ふべく候」
- 19 「不学にててもよき人あり、其の人博学なれば愈よく候」
- 20 「博学にててもあしき人あり、其の人文盲なればやはりあしく候」

## (3) 商業活動

- 25 「商人の利は士の知行、農の作徳なり。皆義にて利に非らず候。只非分の高利を貪るを以て利欲とす。是は姦曲に落て義に背き候」
- 26 「町家は、利欲を肝要と心得候は、大なる誤りにて候」

## ● 「孝」と「忠」

親に対して真心を尽くすという「孝」と、主君に対して真心を尽くすという「忠」と。すなわち、親孝行と忠義の心とは、極めて重要な倫理と受け止められていた。「孝」は家庭内・血縁関係内における最も重要な徳目であり、「忠」は公的・社会的な場において最も重視される徳目だからである。懐徳堂でも、創立間もない頃の学舎の玄関には、「学問とは忠孝を尽し、職業を勤むる等の上に之有る事にて候」と記された壁書が掲示されていたという（「懐徳堂の学則」参照）。初代学主三宅石庵が「学」とは「人の道」を学ぶことであると宣言したとおり、懐徳堂では、職業活動の前にまず、それを根底で支える「忠孝」という道德の修得が必要であると考えられていたのである。

しかし、現実には、こうした理念よりは遥かに複雑である。なぜなら、「孝」と「忠」とを突きつめていくと、両者は厳しく対立し、人に二者択一を迫るような場合も生ずるからである。例えば、「徴兵」という場面を想定してみよう。徴兵に応じて国のために戦うということと、親や家族を大事にするということとは両立しないとも言える。あるいは知られざる「親の犯罪」という場面を想定してみよう。親の罪を告発して法秩序に従うのか、親のために罪を隠すのか、子は、選択を迫られるであろう。また現代人が会社と家庭の間で苦悩するのも、これと似た現象かもしれない。

したがって、「孝」「忠」それぞれを違和感なく受け入れていた者も、この二つが厳しく対立するような局面に立たされたとき、初めて倫理道德の深淵を覗き見ることになるのである。また、「孝」と「忠」との意義を信じ、平素真面目に実践している者ほど、その戸惑いは大きいと言える。

しかし、この両者を比較して、人間の本性により近いのはどちらの徳目であろうか。知性

よりも心情として素直に了解できるのはどちらであろうか。それは、やはり「孝」であろう。親子の関係は、いわば人情に基づく自然な関係であり、君臣の関係は、社会の中で後天的に設定されたいわば人為的・契約的な関係だからである。

そこで、古代中国においても、「忠」の意義と正当性は「孝」との関係で説明されることとなった。

「孝」について専論する儒家の經典は『孝経』である。これは、孔子とその門人の曾子との問答を通して、「孝」が徳の根本であることを説いた書である。そこで説かれる「孝」とは、具体的には、父母から授けられた体（身体髪膚）を大切にすることを通して父母を敬愛し、また、宗族の源流である祖先の祭祀に務めることを意味する。

また、『孝経』は、孝が政治や教育の根源であるとも説く。そこで、孝とは、親に仕えることに始まり、君に仕えることを半ばとし、社会で身を立てることをもって終わると定義される（開宗明義章）。ここには、父母に対する敬愛の情を、そのまま君主に対する忠誠心に移行させようとする意識が認められる。別の箇所でも『孝経』は、父に仕えるようにして君に仕えよ、「孝」の心でもって君にお仕えすれば、それが「忠」になると説いている（士章）。

こうした「孝」と「忠」の理解は、氏族の連合体によって構成されていた古代日本社会にも適合し、『孝経』は『論語』とともに、長く重視されていくこととなった。また、戦前戦中の日本において、こうした「忠孝」観念は、国家主義的体制のもとで、極めて重視されるに至った。

懐徳堂では、中井齋庵の『五孝子伝』、竹山の『蒙養篇』とも、国家主義的ではない、本来の「孝」の重要性を説いている。右の『蒙養篇』では、冒頭の第1条に、「父母によくお仕えするのを孝といい、年長者によくお仕えするのを悌と名付ける」と「孝」「悌」をまず第一の徳目として掲げている。そして第2条で、「孝悌の二字は日夜心がけて、一生忘れてはならない」とそれを強調している。また、第16条では、「孝」について具体的に、「親に仕えるというのは、（口先だけではなく）手足の働きを第一とすべきである。子は親の恩愛に甘えて孝行を怠りやすい。よくよく心がけねばならない」、第30条では「一つのことを行うにも、それが親の心に叶うかどうかをよくよく考えねばならない」と説いている。

このように、懐徳堂では「孝」が重要な理念として掲げられていたことが分かる。「孝」こそはすべての道德の根源であり、「人の道」の基礎と考えられたのである。

しかし、このことは同時に、元禄・享保期に花開いた新たな文化のかけで、そうした理念が必ずしも現実に反映されなくなっていたことをも示唆している。新しい豊かな文化が形成されるということは、それまでの秩序が大きく揺らぐことをも意味するからである。そうした時代にあって、懐徳堂が求めたのは、まさに伝統的な「人の道」、「孝」の思想であった。

### ●「義」と「利」

商業とは、「利」を追求する営みである。ただ、「利」の追求は、人間の欲望を大きな原動力としており、しかも、その欲望にはしばしば歯止めが利かなくなる。また、天下の「利」の総量が一定であるとするれば、「利」の追求は、結果的に他者の利益を奪う行為ともなる。

こうしたことから、伝統的な儒教の倫理観では、「利」はしばしば「義」と対比されつつ批判されてきた。つまり、人は利益ではなく、正義を追求すべしという倫理観である。

しかし、春秋戦国時代、この儒家と対立した墨家は、これとは異なる「義」「利」の論を展開した。つまり、「義」の追求とは、個人がそう思う正義を身勝手に追い求めることではない。世界の人々に共有されるべき正義の追求でなければならない。このような義を追求することは、そのまま世界の利益につながる。

このように墨家は、天下万人の「義」「利」を考えるなら、二つは決して矛盾することはないと説いた。侵略戦争を阻止するために身を挺して弱小国の防衛戦争に従事した墨家集団ならでの考え方である。

また、その後の中国の歴史においても、実際には、真摯に努力を重ねた士大夫が科挙に合格し、栄達と富裕をきわめるとするのは理想の姿とされた。正義の追求と利益の受容とは、本当に矛盾するものなのであろうか。

こうした疑問に対して、懐徳堂学派の答えは明快である。すでに、初代学主三宅石庵は、『万年先生論孟首章講義』で次のように講じていた。すなわち、「仁義を實踐する者は、自ら利益を追求するわけではないが、自然と利がついてまわるのである。……「利」は勝手のよいものであって、そのこと自体に差し障りがあるわけではない。しかし、利益を追求することをあまりに好むようになると、そこに弊害が生ずるのである」と。

ここには、「利」と「義」についての柔軟な思考が見られる。仁義を正しく実践する者には、その結果として「利」が自然についてまわるというのである。「利」それ自体には何も害はなく、それを運用する者の過度の欲望が弊害を生むのだ、と論ずる。

同じことは、中井竹山の『蒙養篇』についても言える。その第25条に、「商人が商業活動によって得る利益は、武士の知行（土地支配による利益）、農民の作徳（年貢を納めた後に残る純益）に相当する。それらはみな商・士・農それぞれの「義」であり「利」ではない。ただし、分不相応の高い利益を貪るような気持ちを「利欲」といい、これはよこしまな誤った道に落ちるものであり、義に背く行為である」と述べる。また、第26条でも「町家（商家）は利欲が肝心と考えるのは、大いなる誤りである」と説く。

このように竹山は、商業活動を、商人の「義」と論じ、それ自体は決して非難されるべきものではないと断言した。こうした「義」「利」観が見られるのも、大坂の町に生まれた懐徳堂の大きな特色の一つである。

## 2. 「批判」——『非物篇』と『非徴』——

### ●「鶴」学問

初代学主の三宅石庵は、一つの学派に固執することなく、諸学の良い点を何でも積極的に取り入れた。その折衷的な独特の学風は「鶴学」と批判されることもあった。鶴とは、伝説上の怪獣の名で、頭は猿、足は虎、尾は蛇に似ているといわれる。

しかし、こうした態度は、懐徳堂が幕府の官許を得ながらも、基本的には大坂の商人に支えられた自由闊達な精神を持つ学校であったことと無縁ではない。また、そこに流れる精神は、江戸幕府の建てた学問所「昌平黌」の性格と対比するとき、一層明瞭となる。

昌平黌は、幕臣・藩士やその子弟だけに入学を許し、正統の朱子学を教授した。これに対して、懐徳堂では、たとえ学費が満身に納入できなくても、また、教科書を持たぬものにも聴講を許し、商用による途中退出もできた（「懐徳堂の学則」参照）。講義の内容も、儒教の精神を中心にしながらも、決して硬直した倫理観を押しつけるのではなく、柔軟な道徳を説いていた（前項の「1. 倫理」参照）。

こうした自由な気風から、当初は、商人に対する躰教育という側面も重視されたようであるが、やがてそこから高度の学問研究が生み出されるに至った。

### ●五井蘭洲『非物篇』

二代目学主の中井登庵とともに、初期懐徳堂を支えた五井蘭洲（元禄10年 [1697] ~ 宝暦12年 [1762]）は、『非物篇』を著した。

これは、荻生徂徠（1666~1728）の『論語徴』を激烈に批判する書である。荻生徂徠は柳沢吉保に仕え、将軍綱吉にも講義を行った江戸の高名な儒者である。その学問は、古文辞学とよばれ、観念的な朱子学を排し、孔子の思想を古典の古訓の解釈から得ようとするもので、旧来の朱子学や、伊藤仁斎の古義学派と対立するものであった。著書に『弁道』『弁名』『論語徴』などがあるが、特に『論語徴』は、中国の清でも紹介された徂徠の代表作である。

この『論語徴』に対して、五井蘭洲はどのような批判を行っているのであろうか。その巻頭の言を見てみよう（(1) ~ (3) は便宜上の区分番号）。

(1) 非に曰く、嗚呼徂徠門を杜して書を読み、世と相渉らず、時に詰り問う者有るや、輒ち曰く、「習い異にし対を置かず。是れ我が家法」と。是を以て栄邁余り有りとも雖も、亦た終に独学固陋に免れず。

(2) 徂来（徠）是の書を撰じ、即ち言う「皆諸を古言に徴す」と。故に命づけて『論語徴』と曰う。然るに書中半ば諸を胸臆に取り、以て説を為す。我未だ其の「徴」為る



を見ざるなり。且つ彼初め皇侃の『義疏』を睹ず。晩年『徴』既に成り、偶々得て之を読む。然るに業を卒うる能わずして物故す。

(3) 故に朱子皇説に同じき者を以て朱説と為し、誤駁して道学の見と為す者多し。笑うべきかな。

まず、(1) で、徂徠の学は「独学固陋<sup>ころう</sup>」であると批判する。徂徠は門を閉ざして本を読み、世間との関わりを持たなかった。詰問する者があってもつっぱねるばかり。いかに徂徠が出世したとしてもそれは独りよがりの偏屈なものである、と述べる。これは徂徠の基本的な人間性や勉学の方法に対する批判である。

次に、蘭洲は(2) で、徂徠は「古言に徴し」て実証的に解釈したと言っているが、実は多くの主観的解釈を混入させている、と『論語徴』の解釈全般についても批判する。これは、「徴」という看板とその実態とにずれがあるとの痛烈な指摘である。

さらに、蘭洲は(3) で、徂徠は梁の皇侃<sup>おうがん</sup>の『論語義疏』を見ておらず、皇侃・朱子共通の解釈を朱子独自の説として批判するという大きな誤りを犯していると述べる。『論語』注釈の歴史は古く、代表的な注釈としては、三国魏の何晏<sup>かあん</sup>の『論語集解』(古注)、梁の皇侃の『論語義疏』(古注系)、南宋の朱子の『論語集注』(新注)がある。このうち、徂徠が主として批判するのは、朱子学の解釈、すなわち『論語集注』である。しかし、徂徠は、『集解』『義疏』『集注』の弁別を充分に行うことなく、皇侃と朱子の解釈を混同したまま朱子批判を行っている、と、『論語』注釈史の立場からも厳しく批判を加えたのである。

なお、「物」とは、徂徠のことを指す。徂徠が物部氏の流れを汲む者として中国風に「物茂卿」と称していたことによる。「非物」とは、その「物」氏(徂徠)を「非」難するという意味である。

こうした先鋭な批判が生み出されたことから、懐徳堂は、単なる町人教育・躰教育の場ではなく、高度な学問教育・知識交流の場でもあったことが分かる。

### ●中井竹山『非徴』

この五井蘭洲『非物篇』を後に校訂して刊行したのが、中井竹山(享保15年[1730]～享和4年[1804])である。竹山は、二代目学主中井齋庵の長男で、名は積善。後に弟の履軒とともに懐徳堂の黄金期を築いた。その竹山にも、『非徴』という『論語徴』批判の書がある。これは、朱子学の立場から『論語徴』を論駁するもので、五井蘭洲の『非物篇』とともに、天明4年(1784)に懐徳堂蔵版で刊行された。その冒頭部分を見てみよう。

非に曰く、吁嗟徂来(徠)物氏、學術の病、其の症、自ら大いに名を好むるに在り。

其の因、仁齋伊藤氏を圧倒せんと欲するに在り。而して其の禍、程朱諸公（程子や朱子などの宋学者たちが）往聖（かつての聖人たち）に継ぎ来学（後世の学）を開くのを廃絶し、政事を害し、風俗を敗り、天下の青衿の士（学生）に深く妖妄邪誕の癩を結ばしむるに至りて後已む。哀れむべきかな。

ここで竹山はまず、物氏（徂徠）の学問の弊害が「名」をあげることにつとめるという尊大な態度にあることを指摘する。その根本的な原因は、徂徠が純粋な学術的態度からではなく、伊藤仁齋への対抗意識から『論語』注釈を行ったことにあると説く。

そうした態度は、程子や朱子などの宋学者たちが孔子・孟子以来の聖人たちの教えを継承し、次の時代の学問を開いたという、偉大な功績を無にするものである。また、時の政事や風俗を乱し、志に燃えた若き学生たちに「妖妄邪誕の癩」（あやしく乱れたなおりにくい病）を植えつけるものである、と厳しく批判する。

この『非徴』も、『非物篇』同様、「<sup>あゝ</sup>吁嗟」という嘆きの言葉に始まり、痛烈な非難の言が連続する。徂徠の学を、『非物篇』が「笑うべきかな」と言えば、『非徴』は「哀れむべきかな」と酷評する。

この両書には、権威に屈することのない強烈な批判精神が見られると言えよう。もっとも徂徠批判については、朱子学の正統化を意図した寛政異学の禁（寛政二年 [1790]）という時代の潮流も関係があろう。しかし、こうした批判精神は、この両書、この時期にのみ突出した現象ではなく、竹山の弟の中井履軒にも、また、それに続く学者たちにも貫かれている。

このように「批判」は、懐徳堂の基本精神の一つであった。また、理念よりも現実を重んじ、口先だけの政治よりも実生活に即した経済を尊ぶという、大坂の風土、商人の気質とも合致する。それは、懐徳堂の精神であるとともに、大坂の町そのものの特色でもあった。

### 3. 「独創」——中井履軒——

#### ●雕題・雕題略・逢原

享保17年（1732）、中井履軒は、竹山の二歳下の弟として懐徳堂内に生まれた。兄とともに五井蘭洲に学んだが、30代半ばに懐徳堂を離れ、私塾「水哉館」を開いた。履軒は、ここで本格的な経学研究に着手、歴史に残る独創的な業績を上げていく。その過程は次のようなものであった。

まず履軒は、既存の経書の版本に自らの注釈を加筆していった。それは、版本上部の空欄部分に直接書き入れた解釈という意味で「<sup>ちょうだい</sup>雕題」と名づけられた。しかしその書き込みが蓄積されて読みづらくなると、履軒はその概要のみをまとめ、「<sup>ちょうだいいりやく</sup>雕題略」として編集した。さらに晩年に至り、履軒はそれらの業績を「<sup>ほうげん</sup>逢原」として集大成した。「逢原」とは原（源）

に逢う意である。

経書について言えば、現在、懷徳堂文庫に残されている「七経雕題」全36冊、「七経雕題略」全20冊、「七経逢原」全33冊が、それぞれの過程に対応する。ここに言う「七経」とは儒家の七つの経典を意味し、『周易』『尚書』『詩経』『礼記』『春秋』の「五経」に『論語』『孟子』を加えた七部の書をいう。履軒の「七経雕題」は、具体的には『周易雕題』『尚書雕題』『詩経雕題』『(春秋)左氏雕題』『礼記雕題』『(大)学(中)庸雕題』『論語雕題』『孟子雕題』からなり、また「七経逢原」は、『周易逢原』『(尚書)夏書逢原』『古詩逢原』『古詩所得端』『古詩古色』『左伝逢原』『論語逢原』『孟子逢原』『中庸逢原』『大学逢原』からなる。履軒はこの「逢原」に、初めて「水哉館学」と署名し、自己の学の完成を表明した。

この過程をさらに具体的に、『論語』を例として示すと、次のようになる。履軒はまず、南宋の朱熹の『論語』注釈である『論語集注』の版本(具体的には「三刻両銭堂朱熹集註論語十卷本」每半葉9行、每行17字、註双行17字)二冊を用いて、その上部欄外に自他の注解を自筆していった。書き入れは、上欄に止まらず、行間の余白や下欄にも及んだ。また、注釈によって従来の解釈を厳しく吟味・批判すると同時に、本文の訓点自体についても一部修正を加えた。

これが、『論語雕題』であり、履軒の経書研究の最初の形態である。次に履軒は、この『論語雕題』十巻を基礎に、本文の句を摘記してこれに自説を述べるという形で要点を二巻にまとめた。これが『論語雕題略』である(但し、「雕題略」は「七経雕題略」と総称されるのみで、『論語雕題略』『孟子雕題略』などという個別の名は付けられていない)。そして最後にこれらを集大成したのが『論語逢原』であり、「七経逢原」に編入されたのである。

また、『中庸』については、独特の解釈が示されている。すでに三宅石庵は、『中庸』の編成に後世の錯簡さくかんがある可能性を指摘し、それは中井竹山らに継承され、懷徳堂独自の「中庸錯簡説」として提唱されていた。履軒はさらに詳細な分析を加えて独自の考え方を示し、「雕題」「雕題略」を経て、その成果を『中庸逢原』としてまとめたのである。

この他、履軒は、『史記』『後漢書』などの史書や『莊子』『古文真宝』などの諸書についても「雕題」を残し、さらには荻生徂徠が度量衡について研究した『度量衡考』を論駁した『度量衡雕題』なども著している。

### ●信仰からの脱却

「雕題」「雕題略」「逢原」に代表される履軒の経学研究は、従来の「漢学」と著しく異なるものであった。それは、「知」的であり「独創」的であるという点である。江戸時代以前、儒学は、貴族・僧侶など特定の身分の者が独占的に秘伝するという性格が強く、その学は「家伝」として守られてきた。江戸時代に入って、儒学がようやく武士・町人にも学ぼうも

のとなっても、その学は依然として、伝統的な解釈を忠実に守るという性格が強かった。

ところが、履軒は、そうした考え方を根本的に革新した。伝統的な解釈を客観的合理的に解析しながら、それを踏まえて自己の新たな理解を記すという、近現代にも通ずるようなきわめて知的な作業を行ったのである。

その一端を、まず『論語』の「序」の部分为例として示してみよう。履軒の『論語』研究は、『論語逢原』として集大成された。それは、朱子の『論語集注』を基に、自己の解釈を示すというものであったが、朱子の序文には、『史記』の孔子世家に基づく孔子の伝記が記されている。ところが、履軒は、「朱子は完全に『史記』を信用しているわけではなく、とりあえず記載して備考とするにとどめている」と、朱子の『史記』評価が低いことを一応指摘しつつ、自身は「事実として認めがたい記述が多くある」とさらに厳しい評価を下している。

例えば、孔子生誕にまつわる神秘的な伝承について、これはみな後人の推測に基づくもので明らかな根拠がないとしている。また、孔子が周に行き老子に礼を問うたという著名な記事について、これは老子の弟子たちが捏造した愚説であると退ける。また、孔子が中都の町の「宰（長官）」となり、ついに「司空」「大司寇」の位に就いたという記事について、これは後の『礼記』の記述に基づくもので信用できず、また「宰」は家臣で、「司空（土地・人民を司る大臣）」「大司寇（刑罰・警察をつかさどる官の長）」は国家の公臣であって、両者の性格はまったく異なり、家臣から公臣への飛躍を説く空虚な伝承であると批判する。また、孔子が華々しく活躍したとされる定公十年の夾谷の会（諸侯同志の会盟）について、孔子はそれを「相（補佐）」しただけなのに、後世の人はこれを宰相の「相」の意味にとって、あたかも孔子が宰相補佐の役に就いたかのように誤解したと説く。

このようにして、履軒は、『史記』の孔子世家の伝記を逐一批判していく。それは、『史記』への直接的批判であり、また、それを無批判に引用した朱子に対する批判でもあった。「四書五経」は犯すべからざる經典であり、孔子は偉大な聖人であるとの観念が不動のものであった時代、この独創的な見解は、突出した合理性に支えられていた。履軒の『論語』研究は、すでに時代を先取りして、儒家信仰、孔子神話の域を脱しつつあったのである。

またこれは、経書の個々の解釈に限定されるものではない。「独創」の精神は、他の多くの文献や遺物を含む履軒の業績すべてに貫かれることとなった。以下では、その例として、「聖賢扇」「紙製深衣」「天図・方図・潮図」、および『越俎弄筆』などを取り上げてみよう。

## ●聖賢扇

聖賢扇は、履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者・学派の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたものであるが、その内容は、諧謔かいぎやくの精神に富んでい

る。履軒はまず、孔子孟子の正統儒学を「伊丹極上御膳酒」として絶讃する。しかし、漢代以降の儒者、宋代・明代の儒者については、それぞれ「諸国の酒」「伊丹並諸白」「火入酒」と徐々に評価が厳しくなり、また、儒家以外の老荘や仏教、神道、禪宗などには、それぞれ「薩摩あわもり」「チンタ」「濁醪どぶろく」「焼酎」と手厳しい評価が下され、さらに、荻生徂徠と太宰春台は「鬼ころし」と酷評されている。

懷徳堂学派による荻生徂徠批判については、すでに「2. 批判」の項で説明したが、太宰春台もその後継者として、徂徠とともに厳しく批判されていることが分かる。これら日本の儒者についてはともかく、孔子廟に祀られるような中国歴代の「聖賢」についても、履軒は、知的な皮肉をきかせながら、その本質を鋭く指摘している。ここには、既定の「中国思想史」「儒教史」を組み替えようとする独創的な史観が見られる。

### ●『越俎弄筆』

宝暦4年(1754)、山脇東洋やまわきとうよう(1705~62)は、京都所司代の許可を得て、死刑囚の死体を解剖した。日本初の医学解剖である。5年後、東洋は、その記録を『蔵志ぞうし』として刊行する。日本初の解剖学書である。

さらに、明和8年(1771)、小塚原(現東京都荒川区)刑場で刑死体の腑分けが行われた。前野良沢・杉田玄白らは、ドイツ人クルムスの解剖図のオランダ語訳(俗称「ターヘル・アナトミア」)を持参してこの解剖に参加した。良沢らは、その解剖図と人体の内部とを照合し、「ターヘル・アナトミア」の正確さに驚嘆した。翌日から始まった「ターヘル・アナトミア」の和訳作業は、安永3年(1774)、『解体新書』として完成した。日本初の翻訳解剖書である。

日本の伝統的医療は、解剖医学によらない中国の古医方(漢方)に基づいて行われてきた。しかし、人体解剖という実証経験に基づく洋学(蘭学)は、日本の医学に大きな衝撃を与え、また、オランダ語の翻訳を通じて大量の西洋文明をもたらすこととなったのである。

大阪大学の源流とされる懷徳堂と適塾は、一般には、各々文系・理(医)系の淵源と位置づけられている。しかし、中井履軒の知的活動は、文系・理系という枠に止まるものではなかった。

履軒の著『越俎弄筆』は、履軒の医書である。その序文によれば、履軒は、友人麻田剛立(元豊後杵築藩の藩医)が獣体解剖を行い、人体との対照確認を行おうとするのを、「かたわらに在りて膝を抱えて寓目(注視)」したという。履軒は、この経験を基に、自ら人体解剖図15葉を彩色筆写し、これに解説を加えた。「越俎」とは、自分の本分を越えるという意味、「弄筆」とはたわむれに書くという意味である。本書は、本来麻田剛立によって執筆されるべきものであったのに、剛立が研究に忙しく著述の暇がなかったから、自ら分を越えて執筆し

たという謙遜の意が込められている。本書の刊行は、安永2年(1773)3月。それは、『解体新書』完成の前年のことであった。

内容は、自序に続き、15葉の人体解剖図が記される。まず第1葉から5葉では、「去皮膜」の状態、次に「去肋而見肺」、更に「去肺而見隔膜及心」、「去隔膜而見肝、去腸而見腸脈」、「去肝而見胆、抉腸而見腸膜」のように、解剖の手順に沿って内臓の様子を記し、第6・7葉では、内臓を前後から見た様子、8～13葉では、「心・肺脈」「心背」「氣道」「肝胆」「脾脂」「精通」の各局部を記し、14葉では「紫白脈大略」として大動脈・大静脈の大略を記し、15葉では「経筋・肉筋」として筋肉の様子を記して終わる。

そして、この図に続き、履軒は、各々について、漢字片仮名交じりで解説文を記した後、「凡そ図記するは通人大抵の模様なり。精くいば人々にて小異あるべし。小異に依りて大同を疑うなかれ」と締めくくっている。

#### ●紙製深衣・天図・方図・潮図

明和2年(1765)9月、中井履軒は、反古紙を使って深衣しんいを作製した。深衣とは、古代の服で、衣うわぎと裳もすそをつなげて仕立てたものである。士大夫の身分の者は、朝廷において常時着用し、一般の人は吉礼の際に着用した。履軒は、古代の礼制を記した『礼記』の記述に基づき、身、裳、袖、衽などのそれぞれ寸法を記しながら、この深衣の雛形を紙で実際に作ってみたのである。また履軒は同年、『礼記』深衣篇や玉藻篇の内容を考証して『深衣図解』を著し、深衣が古代中国の士大夫の燕服(ふだん着)であることを論じている。

これは、とかく中国の礼が観念的に捉えられてきたことに対し、自分の目で実証し、また他者にもそれを明瞭な図解によって示すという、独創的な試みであった。深衣の制度については諸説があり、中国では、清の黄宗羲が、朱子・呉澄・王廷相など五家の図説を列挙してその誤りを指摘する『深衣考』を著し、江永が深衣の制度を『礼記』玉藻によって考証した『深衣考誤』を撰しているが、本書はそれらに匹敵する業績であると言える。

こうした性格に連なるものに、潮図・天図・方図などがある。履軒手製の「潮図」は、地球を中心とする月胞の円図を回転するように作り、その周囲を日胞として、月の位置による潮の満干を示したものである。

「天図」には二種類があり、一つは金箔貼紙製の円額で、天の構造を示したもの。今ひとつは木製で、太陽を中心として月胞・火胞・木胞・土胞・二十八宿を円輪に切り連ね動くように作ったものである。これは、皮紐で動かして、それぞれの公転の様子を観察できるようになっている。

「方図」は、地球を中心として月胞・日胞・星胞・天を示し、その外には「華胥国王(履軒自身のこと。「華胥国」については「懐徳堂と漢語」参照)曰、是ヨリ外ハ我イマダ往キ

タルコトナキ故シラズ」と記している。

これらには、『越俎弄筆』や紙製深衣に通ずる実証的な精神が見られる。また、「方図」に記された言は、自らが体験し得心した以外のことについては安易な推測・判断を示さないという立場を表明している。

### 6-3 懷徳堂と漢語

ここでは、懷徳堂関係の語句の内、中国の古典（漢語）に由来するものを取り上げ、その出拠ならびに意味を解説する。

- 懷徳堂（かいとくどう）
- 齋庵（しゅうあん）・冽庵（れつあん）
- 尚志（しょうし）
- 履軒（りけん）
- 水哉館（すいさいかん）
- 華胥国（かしよこく）
- 天楽楼（てんらくろう）・偷語欄（ちゅうごらん）
- 鶉居（じゅんきよ）
- 戰々兢兢如臨深淵如履薄氷 謝朝華於己披啓夕秀於未振
- 宰我の償（さいがのつぐない）

#### ●懷徳堂（かいとくどう）

「懷徳」の由来には、創設時の関係者の書き残した史料がないため、推測の域を出ないが、幾つかの説がある。『懷徳堂考』を著した西村天因は、『論語』里仁篇の「君子懷徳、小人懷土（君子は徳を懐（おも）い、小人は土を懐う）」を出拠として挙げ、これが長く通説となっていた。しかし、戦後、大阪大学文学部教授となった蔵内数太は、『中庸』に引かれた「詩云、予懐明德（詩に云く予明德を懐う）」（『詩経』の該当箇所は大雅皇矣篇）、および『書経』周書洛誥に見える「王伾殷乃承叙、万年其永觀朕子懷徳（王殷をして乃ち承叙せしめば、万年それ永く朕が子を觀て徳を懐わん）」を指摘した上で、『書経』の方を出典ではないかとした（「懷徳ということ」『懷徳』54号、1985年）。これは、周公が成王に与えた訓戒の語で、周の武王によって殷は滅亡したが、その子の成王が善政を行えば、殷の遺民は周の厚徳に懐くであろうとの意。蔵内は、大坂城落城後の大坂町民は、いわば殷（商）の遺民に比せられないこともない、としてこの言を重視するのである。

なお、『論語』里仁篇の「子曰、君子懷徳、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠」の解釈につ

いては、古注・新注とも、君子と小人の在り方を対比したものと理解する（その場合の刑は法則という良い意味）が、荻生徂徠『論語徴』は「君子徳を懷えば小人土を壊い（土地に安住する）、君子刑を壊えば小人恵を壊う」との別解を提示している。その場合、この里仁篇の孔子の言葉は、『論語』為政篇の「道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以徳、齊之以禮、有恥且格（格は古注によれば正、新注によれば至る）」という徳治主義の主張に類似することとなる。

### ● 磬庵（しゅうあん）・冽庵（れつあん）

懐徳堂の二代目学主中井磬庵（名は誠之、通称は忠蔵、竹山・履軒の父）は、『非物篇』の著者として知られる五井蘭洲（名は純禎、通称は藤九郎、懐徳堂助教）とともに懐徳堂の基礎を築いた。二人は、五井、中井の姓の「井」に因んで、各々の号を付けた。中井磬庵は『周易』「井」卦六四の「井甃无咎」より「甃」を取って「磬庵」を号とした。「井 甃す。とが咎無し」とは、井戸の内壁もすでに修繕され、あとは人に用いられるのを待つばかりであるから、咎はない、の意。一方、五井蘭洲は、九五の「井冽寒泉食」から「冽」を取って「冽庵」を別号とした。「井冽くして、寒泉食わる」とは、井戸の水が清冽に澄み、湧き出る冷たい泉水が人に飲食される、の意である。その象伝の解説によれば、寒泉が食われるのはその徳が中正だからであるという。

### ● 尚志（しょうし）

中井竹山の筆になる「尚志」と記された書幅がある（個人蔵）。その出典は、『孟子』尽心篇上に見える孟子の言葉。齊の国の王子塾が士たる者のつとめるべきことを質問したのに対して、孟子は、志を尚くすることだと答えた。塾がその具体的な意味を問うと、孟子は、仁義に志すことと答え、さらに、一人でも罪のない者を殺せば仁とはいえず、自分の所有物でもないのに奪い取るのは義ではなく、常に仁に身を置き、義を踏み行えば、大人（りっぱな人間）になれる、と説いた。「王子塾問曰、士何事。孟子曰、尚志、曰何謂尚志、曰仁義而已矣、殺一無罪非仁也、非其有而取之非義也、居悪在仁是也、路悪在義是也、居仁由義、大人之事備矣（王子塾問いて曰く、士何をか事とする。孟子曰く、志を尚くす。曰く、何をか志を尚くすと謂う。曰く仁義のみ。一無罪を殺すは仁に非ざるなり。其の有つに非ずして之を取るは義に非ざるなり。居悪くにか在る、仁是れなり。路悪くにか在る、義是れなり。仁に居り義に由れば、大人の事備わる）」。

### ● 履軒（りけん）

中井磬庵の第二子。竹山の二歳下の弟。名は積徳、字は処叔、通称は徳二。履軒ある



いは幽人<sup>ゆうじん</sup>と号した。諡<sup>ふんせい</sup>は文清。享保享保17年（1732）、懷徳堂内で生まれ、兄竹山とともに五井蘭洲に朱子学を学んだ。竹山が懷徳堂学主として活躍したのに対し、履軒は後に懷徳堂を離れて私塾水哉館を開き、そこで膨大な経学研究を残した。初め履軒の経学研究は、既存のテキストの欄外に自説を書き加えることから始まり（『七経雕題』）、それらはやがて整理され（『七経雕題略』）、最終的には『七経逢原<sup>ほうげん</sup>』として完成した。その研究は、脱神話、脱権威の批判的実証的精神に貫かれており、富永仲基・山片蟠桃らとともに近代的英知の先駆的存在であると評価できる。一方、履軒は自らの住まいを、中国古代の聖王黄帝が夢の中で遊んだというユートピア「華胥国」になぞらえ、自らを「華胥国王」と称して、経学研究とは異なる思いを多く書き記した。そうした著作として、経世面では『華胥国物語』『あらまほし』、科学面では『越俎弄筆』『天図』『方図』、歌文面では『華胥国歌合』などがある。文化14年（1817）、86歳で没。

#### ●水哉館（すいさいかん）

中井履軒は、懷徳堂学派の中で独自の位置を占める。兄・竹山が懷徳堂学主として活躍するのに対し、履軒は三十代半ばに懷徳堂から独立して私塾水哉館を営み、龐大かつ精緻な古典研究を行なった。「水哉館」の名称は、孔子がしばしば水を称えていたということに因む。『孟子』離婁篇下に、孟子の弟子の徐子と孟子との問答が次のように見える。「徐子曰、仲尼亟称於水、曰水哉水哉。何取於水也。孟子曰、原泉混混不舍昼夜、盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾（徐子曰く、仲尼<sup>しばしば</sup> 水を称して曰く、水なる哉<sup>かな</sup>水なる哉<sup>かな</sup>と。何をか水に取れる。孟子曰く、原泉は混混として昼夜を舍かず。科を盈たして後に進み、四海に放る。本<sup>もと</sup>有る者は是<sup>か</sup>くの如<sup>ごと</sup>し。是<sup>これ</sup>れ之を取<sup>と</sup>るのみ）。孟子の説明によれば、「水哉」とはたゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常に流れて止まない水に喩えたものと言える。

#### ●華胥国（かしよこく）

安永8（1776）年6月、中井履軒は48才で中村有則の妹と再婚した。翌年、南本町一丁目に転居した履軒は、その住居に華胥国門<sup>かしよこくもん</sup>の扁額<sup>へんがく</sup>を掲げ、自らを華胥国王に擬した。「華胥国」とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝<sup>こうてい</sup>が夢の中で遊んだという理想国で、そこでは身分の上下がなく、民には愛憎の心がなく、利害の対立もなく、自然のままであったという。その故事は『列子』黄帝篇に次のように記されている。

晝寝而夢、遊於華胥氏之國。……其國無師長、自然而已。其民無嗜慾、自然而已。不知樂生、不知惡死、故無夭殤。不知親己、不知疏物、故無愛憎。不知背逆、不知向順、故無利害（（黄帝）昼寝て夢み、華胥氏の国に遊ぶ。……其の国師長無く、自然なるのみ。其の民嗜欲無く、自然なるのみ。生を楽しむを知らず、死を悪むを知らず、故に夭殤無し。己を親しむ

を知らず、物を<sup>うと</sup>疏んずるを知らず、故に愛憎無し。背逆を知らず、向順を知らず、故に利害無し)。

黄帝は、この夢から覚めた後、大いに悟るところがあり、その後、二十八年間、天下は大いに治まって、ほとんど華胥国の如くであったという。また、黄帝が崩御した際、民は黄帝の治を慕って泣き叫び、その悲しみは二百年間続いたという。

この語も、「履軒」や「水哉」に相通ずる性格を持つ語である。なお、その後、履軒は相次いで「華胥国」を冠した書を執筆する。経世については、「華胥国物語」、天文学では「華胥国曆」、歌文では「華胥国嚙語」「華胥国歌合」などである。

### ●天楽楼 (てんらくろう)・偷語欄 (ちゅうごらん)

中井履軒は、安永8年(1776)に再婚した後、<sup>かしよこくもん</sup>華胥国門の<sup>へんがく</sup>扁額を取りつけた借家の二階の一室を、「天楽楼」と名づけた。これは、『莊子』天道篇の「<sup>か</sup>與人和者、謂之人樂。與天和者、謂之天樂(人と和する者は、之を人樂と謂い、天と和する者は、之を天樂と謂う)」に因んだものである。『莊子』は、人間同士が和することを「人樂」と言うのに対して、人が天の自然と和する境地を「天樂」と評した。そして、この天の楽しさをわきまえた者は、生きているときには自然のままに振る舞い、死んでいくときには万物の変化に従い、静かにしているときには陰の気と徳を同じくし、動いているときには陽の気と波を同じくする、と説いた。この思想は「無心の静けさ」につながっていくが、決して隠者(世捨て人)の立場を説いたものではなく、「天樂者、聖人之心、以畜天下也(天樂とは、聖人の心、以て天下を<sup>やしな</sup>畜うなり)」とあるように、天下を経営するという理想を表している。

また、この「天楽楼」の楼上の欄干を、履軒は<sup>ちゅうごらん</sup>「偷語欄」と呼んだ。これは、『春秋左氏伝』の語に因む。襄公三十一年の条に、<sup>しよくそんひよう</sup>叔孫豹が<sup>ちようもう</sup>趙孟の死を予言した言葉として「趙孟將死矣。其語偷、不似民主。且年未盈五十、而諄諄焉如八九十者、弗能久矣(趙孟將に死せんとす。其の語<sup>うす</sup>偷くして、民の主たるに似ず。且つ年未だ五十に<sup>み</sup>盈たざるに、而も諄諄焉として八九十の者の如し。久しき能わず)」とある。叔孫豹は趙孟の言葉がなおざりで、とても民の長のようには見えない。また、歳が五十にも満たないのに、くどくどしく、まるで八、九十歳の年寄りのようだから、長くは生きられないだろうと言ったのである。履軒は、これを自らの戒めとして心に刻み、欄干を「偷語欄」と称したのである。

### ●鶉居 (じゅんきよ)

うずらのように、居所が一定しないこと。かつて上田秋成と中井履軒とが合賛した鶉図一幅があったという。その図に履軒は「悲哉秋一幅、如聞薄暮聲、誰其鶉居者、独知鶉之情」という画賛を記した。これは、『莊子』天地篇に「<sup>か</sup>夫の聖人は鶉居して<sup>こうしよく</sup>穀食(ひな鳥が親鳥

から与えられたままに口移しで餌を食べること)し、鳥行して(鳥のように自由に飛び回って)彰わるる無し(夫聖人鶉居而穀食、鳥行而無彰)」とあるように、鶉が棲むところを転々として一定の場所に止まらないことをいう。懷徳堂の外に身を置いて転居を繰り返した履軒の生涯を、そのまま示したような語である。

### ●戦々兢々如臨深淵如履薄氷 謝朝華於已披啓夕秀於未振

対句を二つに分けて書き、それを家の入り口、門、壁などに左右相對して掛けたものを「聯」あるいは「對聯(たいれん・つうれん)」と言った。懷徳堂学舎には、「入徳門聯」を初めとし、教育的効果を狙って至るところに「聯」がかけられていたという。

これは、『竹山国字牘』によれば、講堂の北牖(北側の窓)の左右に相對してかけてあったもので「北牖聯」と呼ばれる。竹山は、この両者は對偶(句の構成要素がきちんと対応した、いわゆる對句)ではないが、いずれも名句として、聯に記したと述べている。確かに、前句は、四字ずつの三句からなり、後句は六字ずつの二句からなっていて、構成は全く対応しない。

前句の12字は、『詩經』の語。『詩經』<sup>しょうが しょうびん</sup>小雅・小旻の詩に「戦々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し(戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷)」と見える。また、『論語』泰伯篇には、孔子の弟子の曾子<sup>そうし</sup>が臨終に際してこの語を引いたとされる。曾子の言は、「曾子<sup>やまい</sup>疾あり。門弟子を召びて曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云う、戦々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今よりして後、吾れ免るることを知るかな、小子(曾子有疾。召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷。而今而後、吾知免夫小子)」とあるように、孔子の弟子の中でも最も「孝」を重視した曾子が、親から授かった肉体を保全することに細心の注意を払ってきた(身体を傷つけないことは「孝」の第一歩とされた)、その心境を、まるで底なしの淵に臨むような、薄い氷の張った水の上を歩くような「戰戰兢兢」とした気持ちであると述べ、また、死によってそうした緊張から解放されることを述べたものである。

後句12字は、<sup>りくき</sup>陸機(字は<sup>しこう</sup>士衡)の語。『文選』所収の陸機の文章論「文賦」に、「百世の<sup>げつ</sup>闕文を収め、千載の<sup>せんざい</sup>遺韻を采り、朝華を已に<sup>いん</sup>披くに謝り、夕秀を未だ<sup>と</sup>振わざるに啓く(收百世之闕文、采千載之遺韻。謝朝華於已披、啓夕秀於未振)」と見える。これは、陸機があるべき文章について、百世の間見られなかった文を収め、千年の間使われなかった韻を用い、すでに開いてしまった朝の華(使い古された表現)を捨て去り、まだ開いていない夕方の華を咲かせようとする、と述べたものである。

このように左右の二句は、構成上も意味上も、直接には対応しないが、前句が生活態度について、また、後句が文章について、いずれも極めて高い理想を掲げていることが分かる。

●宰我の償（さいがのつぐない）

享和2年（1802）6月、山片蟠桃（1748～1821）は、『夢の代』の初稿『宰我の償』を草し、翌年正月に中井竹山に校閲を求めた。宰我とは、孔子の弟子で、本名は予、字は子我。言語・弁舌に巧みであるとして「孔門十哲」の一人にあげられる人物である。しかし一方で、怠けて昼寝をしたことを孔子にとがめられたことがあった。『論語』公冶長篇に「宰予、昼寝ぬ。子曰く、朽木は彫るべからず、糞土は牆は圻るべからず。予に於てか何ぞ誅せん（宰予晝寢。子曰、朽木不可彫也、糞土之牆不可圻也。於予與何誅）」と見えるのがそれである。蟠桃は、自分をその宰我に擬し、眠るのを止めて書いたので、『宰我の償』と題した。これは後に中井履軒から難じられて『夢の代』と訂正した。

## 7. 懐徳堂事典

本コンテンツは、懐徳堂関係の主要な語句について解説した事典である。DBの根幹をなす「2. 懐徳堂文庫」の解題を執筆するに際し、その文中に登場する重要語句の解説を逐一（ ）内に記すのは繁瑣であり、また、解題ごとに提供する情報の質量に差異が生ずることが懸念された。そこで、解題中に登場する重要語句を「人物」「事項」「書誌」の3群に分類して提示した。項目数は、「人物」33項目、「事項」37項目、「書誌」35項目の計105である。

この事典は、「2. 懐徳堂文庫」の解題および「4. 懐徳堂年表」にリンクしており、例えば、解題中で着色されている人名や事項をクリックすると該当の事典項目の解説が展開するようになっている。解題を支援するとの性格から、選定した項目は、解題中に登場する語句を原則とし、また、一項目の字数は概ね400字程度に止めた。本コンテンツの担当者は、湯浅邦弘、竹田健二の2名である。

なお、本コンテンツは、その後、大幅に拡充され、更に貴重資料の解説をも包括し、『懐徳堂事典』（湯浅邦弘編、大阪大学出版会、2001年）として刊行されている。

### 7-1 人物

#### ●麻田剛立（あさだごうりゅう）（1734～1799）

もと豊後国杵築藩の藩医。本姓を綾部氏と称したが、天文学・医学を好み、脱藩して来坂、天文学塾先事館を開く。山片蟠桃もその門下生である。中国からもたらされた暦学や漢方がなお主流であった時代に、自らの実証で得た知識を基として、新たな天文学・医学の発展に寄与した。中井履軒と交遊があり、履軒は、麻田の動物解剖に立ち会った経験を基にして『越俎弄筆』を執筆した。また、履軒は『履軒数聞』の中で、麻田剛立が実測した地球や月、太陽の周径、地球からの距離などを「麻子測法」として記している。剛立はその後、寛政7年（1795）に幕府から改暦御用を命ぜられたが、高齡を理由に辞退し、門下の高橋至時と間重富を推挙した。幕府天文方に登用された二人は、寛政10年（1798）から施行された寛政暦作成を担当した。

### ●石田梅岩 (いしだばいがん) (1685~1744)

江戸中期の町人哲学者。名は興長、通称は勘平、梅岩(梅巖)は号。丹波国(京都府)の出身。京都の商家に奉公に出て、独学で神道・儒学などを学び、小栗了雲に師事して悟りを開き、心学しんがくの祖となる。享保14年(1729)、45歳の時、自宅で無料の庶民教育を始める。朱子学をもとに、老荘、神道、禅宗をも取り込んだ平易な講説は、日本における社会教育の草分けであり、石門心学せきもんしんがくと呼ばれるその学は、弟子の手島堵庵てじま とあんによって大成された。特に、商人が商売で得る利益は武士の俸禄と同じく正当なものだから、職分に自信を持つようにと主張。悪徳商人を非難し、商人の倫理(正直と儉約)を説いた。そうした点は、町人を主たる受講生とし商業活動の基盤としての倫理道徳を説いた懐徳堂教育の性格とも類似する。元文4年(1739)、主著『都鄙問答』を刊行。また、延享元年(1744)には『(儉約)齊家論』を著した。

なお、梅岩の孫弟子にあたる井上宗甫(三木屋太兵衛)は、天明5年(1785)、心齋橋筋一丁目の自宅を開放して心学明誠舎しんがくめいせいしゃを設立、庶民教育にあたった。

### ●伊藤仁斎 (いとうじんさい) (1627~1705)

江戸前期の儒学者。名は維貞、字は源佐、号は仁斎、棠隠。諡号は古学先生。親族が勧めた医学の道を進まず、朱子学の研究に没頭、やがて朱子学に疑問を抱き、仏教や『老子』を学んだが、結局儒教に立ち返った。朱子学は孔子や孟子の教えと異なると批判し、「最上至極宇宙第一の書」である『論語』とその解説である『孟子』とを、朱子の注釈によらずに読み、孔子や孟子の教えに直接触れることを主張した。その独創的な学説は古義学と呼ばれ、また寛文2年(1662)に開かれた仁斎の家塾は古義堂と称された。仁斎の著書『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『大学定本』『語孟字義』などは、いずれもその死後、子の東涯や門人の手によって刊行された。『中庸』に漢代の儒者の学説が混入しているとする仁斎の主張は、懐徳堂の三宅石庵の中庸錯簡説に影響を与えた。五井持軒も若い時に仁斎に学んでいる。

### ●伊藤東涯 (いとうとうがい) (1670~1736)

江戸中期の儒学者。名は長胤、字は源蔵、号は東涯、慥慥斎。伊藤仁斎の子。仁斎の死後、その家塾・古義堂を継いで、古義学を継承した。また仁斎の著書を編集・出版したが、その際に仁斎の草稿にかなりの訂正・増補を行っていることが知られている。著書に『周易経翼通釈』『訓幼字義』『古今学変』『経史博論』『制度通』『用字格』『名物六帖』『紹述先生文集』などがある。東涯は懐徳堂の中井齋庵と交友があり、享保18年(1733)には、平野の含翠堂への行き帰りの際、懐徳堂を訪問している。また五井蘭洲は、20歳の時に古義堂に入門、東涯に学んだ。

### ●荻生徂徠（おぎゅうそらい）（1666～1728）

江戸中期の儒学者。名は双松<sup>なべまつ</sup>、通称は惣右衛門、徂徠は号。物部氏の流れを汲む者として、中国風に「物徂徠」「物茂卿」と称した。館林藩主時代の徳川綱吉に仕えた侍医の子として江戸に生まれる。のち、柳沢吉保に仕え、將軍綱吉にも講義を行った。その学問は、古文辞<sup>こぶんじ</sup>学と呼ばれ、観念的な朱子学を排し、孔子の思想を古典の古訓の解釈から得ようとするもので、旧来の朱子学や、伊藤仁斎の古義学派とも対立するものであった。著書に『弁道』『弁名』『論語徴』などがあるが、特に『論語徴』は、中国の清でも紹介された徂徠の代表作である。懐徳堂学派は、この徂徠の学を厳しく批判し、五井蘭洲・中井竹山は、徂徠の『論語徴』に対して、各々『非物篇』『非徴』を著した。

### ●草間直方（くさまなおかた）（1753～1831）

江戸時代中・後期の大阪の町人学者。京都の枳屋唯右衛門<sup>ますやただえもん</sup>の子として生まれ、10歳の頃から両替商・鴻池家に奉公し、安永3年（1774）、鴻池家の別家<sup>べっけ</sup>（使用人がのれんわけを許され独立した家）・草間家の女婿となる。文化5年（1808）独立して今橋で両替屋を経営した。通称・鴻池伊助。商人として山片蟠桃と同時期に大阪で活躍し、また蟠桃と同じく、懐徳堂で中井竹山・履軒に学んだ。晩年隠居してから、我が国における最初の貨幣史である『三貨図彙』全44冊を著し、古代から江戸時代に至るまでの貨幣の歴史を紹介するとともに、貨幣経済の発展について歴史的考察を加え、幕府による米価の統制を批判した。ほかに『草間伊助筆記』『鴻池新田開発事略』『茶器名物図彙』などを著した。

### ●五井持軒（ごいじけん）（1641～1721）

江戸中期の儒学者。名は守任<sup>もりとう</sup>、通称は加助、持軒は号。寛永18年（1641）、大阪に生まれた。和歌を下河辺長流<sup>しもこうべちやうりゅう</sup>に学び、15歳の時に京都に行き、伊藤仁斎、中村惕齋<sup>なかむらてきさい</sup>らに師事した。30歳で帰坂した後、漢学塾を開く。『日本書紀』など和学にも精通し、貝原益軒<sup>かいばらえきけん</sup>、三輪執斎<sup>みわしっさい</sup>、三宅石庵<sup>みやけせきあん</sup>らと交流があった。その学問は朱子学を主としたが、性・理気などに関わる議論は好まなかった。四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）を繰り返し講じたので、「四書屋加助<sup>ししよ</sup>」と呼ばれたという。なお、懐徳堂助教を務めた五井蘭洲は、持軒57歳の時の子（三男）である。

### ●五井純実（ごいすみざね）（1693～1761）

五井持軒の次男。三男の蘭洲の4歳上の兄。大阪に生まれ、初め内記<sup>ないき</sup>と称したが、後に権蔵と改めた。号は桐陰<sup>とういん</sup>。鷹司家<sup>たかつかさけ</sup>に仕えたが、後に辞して江戸へ行き、幕府の御先手鉄炮組<sup>おさきてぐみてつぱう</sup>

よりき  
与力の職に知行250石で仕えた。宝暦11年（1761）、69歳で没。

●五井蘭洲（ごいらんしゅう）（1697～1762）

江戸中期の大坂の儒者。名は純禎、字は子祥、通称藤九郎、号は蘭洲、冽庵、梅塢。五井持軒の三男。20歳の時に京都・古義堂の伊藤東涯に入門。享保11年（1726）の懐徳堂官許の後、中井翫庵に招かれて講師の一人となるが、同14年（1729）に江戸へ行く。江戸在住中に一時津軽藩に仕えたが、元文5年（1740）に病気を理由に離藩して大坂に戻る。以後、翫庵を補佐し、助教として懐徳堂の教育を支えた。その学問は、父・持軒同様、朱子学を主とし、特に江戸在住中に接した荻生徂徠の著作『論語徴』に対しては厳しい批判を加えた。翫庵の子の竹山と履軒は、帰坂後の蘭洲から教育を受けた。江戸で蘭洲が著した徂徠批判の書は、蘭洲の没後、竹山・履軒の校訂を経て、天明4年（1784）に『非物篇』と題して刊行された。

●武内義雄（たけうちよしお）（1886～1966）

中国哲学者。三重県内部村（現・四日市市）の生まれ。京都帝国大学支那哲学史学科を卒業、大正3年（1914）、大阪府立図書館司書となる。西村天囚の勧めを受けて、大正8年（1919）重建懐徳堂の講師となり、中国に留学。帰国後、大正12年（1923）に東北帝国大学教授となる。後に宮内省御用掛として皇太子の教育に当たる。昭和17年（1942）帝国学士院会員、昭和35年（1960）文化功労者。精密な文献批判の方法を確立し、また科学的な思想史学を樹立したことで知られる。著書に『支那思想史』（のち『中国思想史』と改題）、『老子原始』、『論語の研究』などがある。また重建懐徳堂の講師であった時に、佚存書として有名な『論語義疏』の校訂を行った。その成果は、大正12年（1923）、孔子没後2400年記念事業の一環として懐徳堂より刊行されている。

●太宰春台（だざいしゅんたい）（1680～1747）

江戸中期の儒学者。名は純、通称は弥右衛門。春台は号。信濃国飯田藩士の子として生まれる。浪人生活を経た後、朱子学を学び、32歳で荻生徂徠に師事。徂徠の後継者として多くの業績を残した。経学関係の著に『論語古訓』『詩書古伝』など。また経済学にも通じ、主著『経済録』の付録では藩営専売を勧め、その利点を説いた。反徂徠の立場をとる懐徳堂においては、徂徠とともに批判の対象とされ、履軒の「聖賢扇」には、徂徠・春台が併せて最低の評価を付されている。

●富永仲基（とみながなかもと）（1715～1746）



江戸中期の大坂の思想史家。字は子仲また仲子。号は謙斎、南関、藍関。通称・道明寺屋三郎兵衛。懷徳堂を創建した五同志の一人である道明寺屋吉左衛門（富永芳春）の三男。弟の定堅（号は蘭臯）とともに三宅石庵に学んだ。儒家思想を歴史的に批判した『説敵』（亡佚）を若くして著した。そのために石庵に破門されたといわれるが、事実かどうかは不明。後に仏教研究に取り組み、その成果を『出定後語』を刊行。また『翁の文』を著し、日本においては神仏儒の三教とは別の「誠の道」を尊ぶべきと説いた。その学問は、思想の展開と歴史・言語・民俗との関連に注目した独創的なもので、後発の学説は必ず先発の学説よりもさかのぼってより古い時代に起源を求めるとする「加上説」を中心とした。後に内藤湖南は、経典を相対化し、実証的にその歴史的生成過程を解明しようとした仲基の研究方法を、高く評価した。

#### ●富永芳春（とみながほうしゅん）（1684～1739）

懷徳堂を創建した五同志の一人。名は徳通、芳春は号。通称は道明寺屋吉左衛門。道明寺屋は、少なくとも芳春の先代から、大坂尼崎で惣菜としての漬物物を製造販売していた。芳春の代になってからは、醤油醸造業も営み、当時の大坂でも有数の大商人の一人となる。五井持軒や三宅石庵に学んだ好学の人でもあった。懷徳堂創建の際に敷地を提供したほか、懷徳堂官許の運動のため中井登庵が江戸へ行く際に同行するなど、懷徳堂の創設とその初期の運営において大いに貢献した。懷徳堂文庫には、芳春の書簡数通が収められている。

なお、三男の仲基は懷徳堂で学び、懷徳堂の異才と称され、また四男の荒木蘭臯（名は定堅、字は子剛）も懷徳堂で学んだのち、池田で儒学者田中桐江に師事して、漢詩文を中心とする当地の文化的発展に寄与し、蘭臯の子の李溪（別号は商山）・梅間も懷徳堂で学んで、頼春水・山陽らと交流を持った。

#### ●内藤湖南（ないとうこなん）（1866～1934）

明治～昭和前期のジャーナリスト、東洋史学者。名は虎次郎、湖南は号。陸奥国（秋田）出身。「三河新聞」や「大阪朝日新聞」「台湾日報」「万朝報」などで編集者・論説者を務め、特に中国問題の第一人者として活躍した。のち京都帝国大学文科大学（のち文学部）史学科教授となり、中国史の時代区分説など、独創的な研究を打ち立てた。その間、懷徳堂記念会の顧問となり、自ら講師として重建懷徳堂で講義を行い、懷徳堂学派の内、特に富永仲基と山片蟠桃を、突出した真の知性として絶賛した。湖南の独創的な中国史研究は、資料を相対化してその歴史的意義と生成過程を実証しようとする仲基の研究に多くの示唆を得たとされる。その業績をまとめたものとして、『内藤湖南全集』全14巻（1969～76）がある。

### ●中井贅庵（なかいしゅうあん）（1693～1758）

懐徳堂二代目学主。中井竹山・履軒兄弟の父。名は誠之、通称は忠蔵・四郎。贅庵は号。諡は貽範。元禄6年（1693）、播州龍野の生まれ。父は藩医中井玄端（1645～1720）。宝永3年（1706）、14歳の時、一家で大坂に移住。19歳の時、当時、尼崎町一丁目（現在の大阪市東区）に開塾していた三宅石庵に入門し、儒者の道を志した。享保11年（1726）の懐徳堂官許に際しては、かねて面識のあった江戸の三輪執斎の援助を得て官許の獲得に奔走した。官許を得た後、懐徳堂に移り住み、初代預り人、二代目学主を務めた。懐徳堂の官許に消極的だったとされる三宅石庵に対して、贅庵は対外折衝や実務能力の才を発揮し、懐徳堂の展開に貢献したと言える。

なお、贅庵の著作としては、日本における服喪についての研究『喪祭私説』、実際の事件をもとに記した『五孝子伝』（1739）が注目される。前者は、中井履軒の『服忌図』に見られるように、懐徳堂学派の葬送・服喪研究へと継承され、後者は、五人の子どもたちの「孝」を顕彰する内容で、以後の懐徳堂、および大坂町奉行による孝子顕彰運動の先駆と位置づけられる。

### ●中井蕉園（なかいしょうえん）（1767～1803）

中井竹山の第4子。名は曾弘、字は伯毅、通称は淵蔵。号は蕉園・仙坡。仙坡は船場にちなむという。母は革島氏。明和4年（1767）、懐徳堂内に生まれる。家学を受け、懐徳堂預り人となる。詩賦文章に長じ、歴史書『越史』（未定草稿）を著し、また、『周易』『礼記』『春秋左氏伝』などの経書の欄外に細字の書き入れを行った。手記『雕蟲自為』からは、蕉園が父・竹山の期待に応えようと日夜読書に励んだ様子が窺える。竹山の期待を担っていたが、享和3年（1803）、37歳の若さで亡くなった。

### ●中井碩果（なかいせきか）（1771～1840）

中井竹山の第7子。名は曾縮、字は士反、通称は七郎。号は碩果・抑楼。石窩とも記す。文化元年（1804）、竹山の死去に伴い、34歳で懐徳堂第5代教授となる。ただし、その際には、履軒が名目上の学主を務めており、両者の具体的な出講関係は未詳である。同14年（1817）、履軒の死去により、教授（学主）となった。妻は頼山陽の母梅颯の従妹。天保3年（1832）、履軒の次男柚園の子の桐園を養子に迎えた。

懐徳堂の学風の保持に努めたため閉鎖主義的傾向に陥り、学問的には大きな発展をもたらすことはなかったが、一方で、理財に長じていた碩果は、同志からの寄付金もあって懐徳堂の財政を立て直し、多くの蔵書・備品を増やした。碩果の詩集として、『篋集』がある。なお、大塩平八郎も、幼時に碩果に教えを受けている。碩果は大塩平八郎の乱の4年後、天保

11年(1840)、70歳で病没した。

●中井竹山(なかいちくざん)(1730~1804)

懐徳堂4代目学主。中井髡庵の長男。名は積善<sup>せきぜん</sup>、字は子慶<sup>しけい</sup>、通称は善太<sup>ぜんた</sup>。号は竹山、同関子、渌翁、雪翁。諡は文桓、のち文恵。享保15年(1730)、懐徳堂内に生まれる。中井履軒の2歳上の兄。弟の履軒とともに五井蘭洲に師事して朱子学を学び、のち懐徳堂の黄金期を築いた。竹山は、父髡庵の亡き後、29歳で預り人に就任して三宅春楼を支え、また、春楼亡き後は、学主(教授)として懐徳堂の経営に務めた。

懐徳堂の内部では、「安永七年(1778年)六月定」全8条を初めとする懐徳堂の諸規定を整備し、寛政4年(1792)の学舎再建に尽力するなど、懐徳堂の発展に努めた。また他方、安永3年(1744)、経世策をまとめた『社倉私議<sup>しゃそうしぎ</sup>』を龍野藩に呈出し、天明8年(1788)の松平定信の来坂に際してその諮問に答え、それを『草茅危言』にまとめるなど、対外的にも活躍した。

思想的には、朱子学を主体としつつ、陽明学をも排除することがなかったとされる。主著に、荻生徂徠の『論語徴』を論駁した『非徴』、日本史ブームの先駆けとも言える『逸史』、年少者向けに「人の道」を箇条書きにした『蒙養篇』などがある。また、竹山が知人や門人から問われた学問・政治・経済など種々の問題について答えた書簡を集めたものとして、『竹山先生国字牘<sup>こくじとく</sup>』がある。享和4年(1804)、75歳で没。

●中井木菟麻呂(なかいつぐまろ)(1855~1943)

中井桐園の長男。中井竹山・履軒の曾孫に当たる。号は天生<sup>てんせい</sup>・黄裳。安政2年(1855)、懐徳堂内で生まれ、14歳で懐徳堂の閉校を迎える。その後、中井家伝来の書籍などの保管、懐徳堂関係資料の蒐集、懐徳堂学舎の再建に努めた。重建懐徳堂が設立された後は、二度にわたって中井家伝来の懐徳堂関係資料を懐徳堂記念会に寄贈した。昭和7年(1932)には、資料を甲種遺物(旧懐徳堂書院の屏風・扁額など、書堂の付属物)、乙種遺物(中井髡庵・竹山・蕉園・碩果の遺書類など、中井氏一家の遺品)に大別した上で、甲種遺物47点を寄進し、昭和14年(1939)には、旧懐徳堂および水哉館の遺書遺物を寄贈した。前者については、『懐徳』11号に「懐徳堂遺物寄進の記」(中井木菟麻呂)の中に、また後者については、『懐徳』17号に「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」(吉田鋭雄)中の315点として記録されている。現在、懐徳堂文庫所蔵資料で「天生寄進」の印記があるものがそれである。旧懐徳堂と重建懐徳堂とをともに知る人物として、また、旧懐徳堂や水哉館の遺書遺物の継承という点で極めて重要な役割を果たした。なお、木菟麻呂は、敬虔なロシア正教徒でもあり、ニコライ大主教を助けて聖書の翻訳に尽力した。昭和18年(1943)、89歳で没。

### ●中井桐園（なかいとうえん）（1823～1881）

中井柚園の子で、中井碩果の養子。中井履軒の孫に当たる。名は及泉<sup>きゅうせん</sup>、字は公混<sup>こうこん</sup>、幼名は軒太郎<sup>いなたろう</sup>。後、修治と改める。履軒没後の文政6年（1823）、水哉館で生まれる。中井碩果の死去に伴い、18歳で懐徳堂最後の預り人となったことから、水哉館は懐徳堂に合併される形となった。年少で懐徳堂の預り人に就任したため、並河寒泉の指導・教育を受けつつ懐徳堂の経営に参画した。温厚な性格であったが、門下生や子女に対しては厳格であった。その子中井木菟麻呂<sup>なかいつぐまろ</sup>は幼時の記憶として、「常に父の前に讀書を授けらるることを畏れ、好みて外祖寒泉に就きたり」と語っている（『懐徳堂水哉館先哲遺事』）。また一方で蔵書・書画・家具什器類を売却するなどして、懐徳堂および並河・中井両家を財政面で支えたが、幕末維新の動乱に際し、『逸史』『詩律兆』『通語』『非物篇』『非徴』『瑣語』『質疑篇』などの版木を売却するまでに至った。

懐徳堂の閉校後、明治6年（1873）までは本庄村において家塾を続けていたが、同年3月、大阪府の江南小学校の教師となり、老松町に転居。さらに江戸堀南通りに転居して、学校勤務のかたわら、好徳学院と称する私塾を開いた。後、学校を辞職し、もっぱら私塾に教授していたが、明治14年（1881）、59歳で没した。

### ●中井柚園（なかいゆえん）（1795～1834）

中井履軒の第2子。名は環<sup>かん</sup>、字は君玉<sup>くんぎょく</sup>、幼名は菊麿、菊次郎、通称は雄右衛門。柚園は号。履軒が開いた私塾水哉館を継承し、水哉館教授となった。墓誌や行状などの記録がなく、伝記についてはほとんど不明。手記が数冊残されているほか、父・履軒の『通語』の手写本や、履軒の書に書き入れたテキストを残しており、よく家業を継承したことは推測される。懐徳堂文庫所蔵の「聖賢扇」（履軒）の文面や『孝経大義』（履軒）の題簽は柚園の筆によるものである。天保5年（1834）、40歳で没し、水哉館も閉じられた。

### ●中井養仙（なかいようせん）（1626～1711）

中井贅庵の祖父。寛永3年（1626）、広島生まれ。寛文年間（1661～72）、大坂に出て医業を開く。その後、飯田藩主で大坂城定番の脇坂安政に仕官して信州に赴いたが、脇坂氏の転封により、寛文12年（1672）、龍野に移った。しかし、宝永3年（1706）、藩主に直言して入れられず辞職、家族を引き連れて大坂に移住した。正徳元年（1711）、86歳で没。その孫の中井贅庵が懐徳堂二代目学主に就任し、またその後も代々中井家が懐徳堂の学主・預り人として活躍したことを考えれば、この養仙の人生が中井家と懐徳堂をつないだと言える。

### ●中井履軒（なかいりけん）（1732～1817）

中井齋庵の第2子。竹山の2歳下の弟。名は積徳、字は処叔、通称は徳二。履軒あるいは幽人ゆうじんと号した。諡は文清ぶんせい。享保17年（1732）、懐徳堂内で生まれ、兄竹山とともに五井蘭洲に朱子学を学んだ。竹山が懐徳堂学主として活躍したのに対し、履軒は後に懐徳堂を離れて私塾水哉館を開き、そこで膨大な経学研究を残した。初め履軒の経学研究は、既存のテキストの欄外に自説を書き加えることから始まり（『七経雕題しちけいちょうだい』）、それらはやがて整理され（『七経雕題略』）、最終的には『七経逢原ほうげん』として完成した。その研究は、脱神話、脱権威の批判的実証的精神に貫かれており、富永仲基・山片蟠桃らとともに近代的英知の先駆的存在であると評価できる。

一方、履軒は自らの住まいを、中国古代の聖王黄帝こうていが夢の中で遊んだというユートピア「華胥国」になぞらえ、自らを「華胥国王」と称して、経学研究とは異なる思いを多く書き記した。そうした著作として、経世面では『華胥国物語』、『有間星あまほし』、科学面では『越俎弄筆』、『天図』、『方図』、歌文面では『華胥国歌合』などがある。文化14年（1817）、86歳で没。

### ●並河寒泉（なみかわかんせん）（1797～1879）

中井竹山の外孫。並河尚誠しょうせいに嫁した竹山の娘とじの子。懐徳堂最後の教授。名は朋来ともきあるいは鳳来ほうらい、字は享先きょうせん、通称は復一。寒泉は還暦以前の号。晩年「桜宮」に住み「樺翁」と号す。これは、従祖父である履軒の『左九羅帖さくくわじょう』に、サクラの正しい表記が「樺」であるとする説に基づいたものである。

17歳で伯父の中井碩果の門に入り、懐徳堂で教鞭を執った。一旦懐徳堂を離れたが、のち、碩果の死去に伴い、44歳の時に教授となった。懐徳堂の講義日程を遵守し、門人を武士役人層にまで広げ、大坂町奉行に懐徳堂の援助を願い出るなど、懐徳堂の経営・維持に努め、また文庫の建築、『逸史』の上梓などの事業を推進した。懐徳堂の諸生からは「大先生」、晩年には「老先生」と敬称されていた。

しかし、幕末維新の動乱によって、明治2年（1869）、懐徳堂は終焉を迎えた。同年12月、寒泉は「百余り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりて出づ」の歌を門に貼り付けて学舎を去り、城北の本庄村に転居した。主著の『辨怪』は、懐徳堂学派の無鬼論とその実践的性格を知りうる重要な資料である。

なお、寒泉の曾祖父並河誠所（1668～1738）は、伊藤仁斎の高弟で、懐徳堂開学の年には、三宅石庵の助教を務めた。また、寒泉の娘は、寒泉と同時期に預り人を務めた中井桐園に嫁いだ。また、蜚街たんがい（名は尚一、字は有勲）は寒泉の子で、懐徳堂の助教を務めたが、明治元年（1868）、20歳で没した。懐徳堂文庫には、「蜚街先生詩稿」「蜚街先生残稿」が残されている。

### ●西村天囚（にしむらてんしゅう）（1865～1924）

重建懐徳堂の理事兼講師。鹿児島種子島出身。名は時彦<sup>ときつね</sup>、字は子駿、号は天囚・碩園<sup>せきえん</sup>。初め郷里の儒者前田豊山に学び、明治9年（1876）、11歳で藩校種子島学校に入学。のち東京で重野成斎・島田篁村に師事、明治16年（1883）、東京帝国大学古典講習科に入学。中退の後、大阪朝日新聞社に入り、明治43年（1910）、懐徳堂記念会を創設し、大阪朝日新聞に「懐徳堂研究」を連載して、その顕彰に努めた。その連載をまとめた『懐徳堂考』は、今日においても、懐徳堂研究の最も基本的な文献としての価値を持つ。

大正5年（1916）、重建懐徳堂の竣工後は、広島高等師範から赴任した松山直蔵<sup>まつやまなおざう</sup>専任教授とともに、懐徳堂理事・講師として尽力した。懐徳堂の復興・顕彰を通して天囚が目指したものは、商都大阪における文科大学の設置、宋学の復興による国民性の涵養であったとされる。主著に『日本宋学史』がある。また、晩年には『楚辞』『尚書』の研究と資料蒐集に努め、天囚の書齋は『楚辞』にちなんで「読騷廬<sup>どくそうろ</sup>」と名づけられた。現在、懐徳堂文庫漢籍の内でも『楚辞』関係資料は、「楚辞百種」と総称され、重要なコレクションの一つとなっている。さらに、天囚は文献善本の写本叢書を編集し、「小天地閣叢書<sup>しょうてんちかくそうしょ</sup>」としてまとめた。乾集・坤集の計143冊からなる同叢書には、「懐徳書院揭示」「履軒中井先生行状」「大阪府学五舍銘并序」「懐徳堂記録」「史記雕題」などの懐徳堂関係資料の他、広瀬淡窓『読論語』、猪飼敬所『論語標記』などの註釈書、「昌平饗書生寮生名録」「浪華人物志」「鹿児島県人物伝備考」などの資料が収録されている。

なお、『懐徳』2号は「碩園先生追悼録」という特集になっており、天囚関係の資料が、「碩園先生著述目録」「故碩園先生旧蔵楚辞類書目」としてまとめられている。

### ●三宅観瀾（みやけかんらん）（1674～1718）

三宅石庵の9歳下の弟。名は緝明<sup>しゅうめい</sup>、字は用晦<sup>ようかい</sup>、通称は九十郎<sup>くじゅうろう</sup>、観瀾は号。寛文12年（1672）、『大日本史』編集のため、徳川光圀<sup>みつくに</sup>が江戸の水戸藩邸内に設けた「彰考館<sup>しょうこうかん</sup>」の総裁を務めた。初め、兄石庵とともに、朱子学者山崎闇斎<sup>やまざきあんさい</sup>の高弟浅見綱斎<sup>あさみけいさい</sup>に師事したが、のち江戸に出て木下順庵<sup>きのしたじゅんあん</sup>（新井白石の師）に入門、元禄10年（1697）、水戸藩に仕官して彰考館に入り、『大日本史』の編纂に当たった。宝永7年（1710）、彰考館総裁に就任、さらにその翌年、新井白石の推挙により幕府に登用された。

なお、懐徳堂では、明和8年（1771）ごろから『大日本史』の筆写が総力をあげて行われ、一部が懐徳堂に納められた。

### ●三宅春楼（みやけしゅんろう）（1712～1782）

三宅石庵の子。三代目懷徳堂学主。名は正誼、字は子和、通称才次郎、春楼は号。宝暦8年(1758)、二代目学主中井齋庵の死去に伴い、その遺言によって三代目学主に就任した。就任に際し、春楼は、石庵の時に定められた「播州大坂尼崎町学問所定約」(1735年)に漏れている事柄や実情に合わなくなっている点を書き加え、新たな学則として定めた。この内、重要なのは、学主世襲の禁を解く、異学者を招かず、医書詩文集を講ずるを許す、などであり、石庵の頃からの微妙な変化をうかがうことができる。病弱だったと伝えられており、際だった学問的業績は残していないが、五井蘭洲(助教)、中井竹山(預り人)らに支えられながら、初期懷徳堂の発展に努めた。天明2年(1782)、71歳で没。

### ●三宅石庵(みやけせきあん)(1665~1730)

懷徳堂初代学主。名は正名、字は実父、通称は新次郎、号は石庵(石菴と表記されることもある)または万年。宅子と尊称されることもある。寛文5年(1665)、京都の生まれ。父三宅道悦の影響で幼少から学問を好み、初め朱子学者浅見綱斎に師事、のち陽明学に近づく。江戸、讃岐に滞在後、元禄13年(1701)頃、来坂。尼崎町二丁目で私塾を開く。享保9年(1724)、大坂市中の大火(いわゆる「妙知焼」)のため、平野に避難していたが、五同志らに迎えられ、懷徳堂初代学主に就任。官許の認可がおりた享保11年(1726)に行った記念講義の筆記録が『論孟首章講義』として残されている。初期懷徳堂の基礎を築いたが、諸学の良い点は何でも折衷して取り入る学風は「鶴学問」と称されることもあった。享保15年(1730)、66歳で没。なお、弟に水戸彰考館総裁を務めた観瀾が、また、子に懷徳堂三代目学主を務めた春楼がいる。

### ●三輪執斎(みわしっさい)(1669~1744)

江戸中期の陽明学者。京都の人。18歳の時、のちに白木屋を開く大村彦太郎とともに江戸に遊学、山崎闇斎の高弟佐藤直方に入門するが、朱子学に疑問を抱き、陽明学に転じた。三宅石庵らと交流があり、懷徳堂が官許を得るに際して助力した。懷徳堂文庫には、三輪執斎書状1通が残されている。なお、陽明学は江戸初期に日本に伝えられ、初めは危険思想視されたが、中江藤樹、熊沢蕃山、そして三輪執斎などの活躍により浸透し、大塩平八郎の乱に見られるような知行合一の実践を促した。懷徳堂も、三宅石庵の学風が「鶴学問」と評されることがあるように、朱子学を中心にしながらも、陽明学を取り入れる側面もあった。

### ●室鳩巢(むろきゅうそう)(1658~1734)

江戸中期の朱子学者。名は直清、字は師礼、通称は新助、号は鳩巢、滄浪、英賀。加賀藩に仕え、京都の木下順庵に学んだ。新井白石、雨森芳洲らと並び、木門五先生の一人とし

て知られる。後に白石の推挙により幕府に仕え、享保10年(1725)には8代将軍徳川吉宗に仕える奥儒者となった。著書に『六論衍義大意』『猷可録』などがある。また赤穂浪士事件の際に『赤穂義人録』を著し、朱子学の立場から浪士たちを「義人」として顕彰した。

鳩巢は懐徳堂の中井齋庵と交友があり、奥儒者となったことを齋庵に手紙で知らせている。この時期、齋庵は懐徳堂官許の運動を進めており、齋庵にとって鳩巢との交友は支えになったものと推測される。

#### ●梁田蛻巖(やなだぜいがん)(1672~1757)

江戸中期の儒者。漢詩人。名は邦美、字は景鸞、通称は才右衛門。美濃加納藩に仕えた後、宝永3年(1706)から江戸で塾を開き、新井白石や室鳩巢らと交友があった。懐徳堂の中井齋庵とも交友があり、蛻巖は享保10年(1725)、新井白石の訃報を齋庵に伝えている。享保4年(1719)に明石藩に仕え、以後明石に住み、明石で没した。朱子学者であるとともに詩人として活躍、著書に『蛻巖集』『蛻巖先生答問書』などがある。懐徳堂文庫には、梁田蛻巖尺牘一幅が収められている。

#### ●山片蟠桃(やまがたばんとう)(1748~1821)

江戸時代中・後期の大阪の町人学者。本名は長谷川有躬。播磨国印南郡神爪村に生まれ、宝暦10年(1760)に升屋別家(使用人がのれんわけを許され独立した家)の伯父・久兵衛の養子となり、升屋本家に奉公を始めた。本家の当主・平右衛門(山片重賢)は蟠桃を懐徳堂に通わせ、蟠桃は中井竹山と履軒とを生涯師と仰いだ。また麻田剛立に天文学を習う。後に升屋本家の支配番頭として活躍し、大名貸として成功、文化2年(1805)主家の親類並となり、山片芳秀と改名した。享和2年(1802)から晩年にかけて書いた主著『宰我の償』(履軒の意見により『夢の代』と改題)において、実証的で合理的な思考に基づく独自の思想を論じた。その内容は、天文・地理・歴史・法律・経済など多方面に及ぶが、中でも徹底的な無鬼論が有名である。

なお、蟠桃の業績にちなんで、日本文化の国際通用性を高めた優秀な著作とその著者を顕彰する「山片蟠桃賞」が設けられている。その1982~1991の10年間の受賞者については、大阪府生活文化部文化課『山片蟠桃賞の軌跡』(清文堂出版、1993)が紹介している。また、懐徳堂関係の業績としては、平成2年(1990)にテツオ・ナジタが受賞し、その邦訳が『懐徳堂 一八世紀日本の「徳」の諸相』(子安宣邦訳、岩波書店)として刊行された。

#### ●吉田鋭雄(よしだはやお)(1879~1949)

重建懐徳堂最後の教授。字は敏夫、号は北山。明治12年(1879)、大阪市生まれ。初め大



阪朝日新聞社に勤務。大正5年(1916)、重建懷徳堂書記に就任。後、懷徳堂助教授、のち教授として、富永仲基の研究を初めとする多くの業績を残した。また、この間、文部省在外研究員として中国に留学し、小学(『説文解字』など文字学)関係書の蒐集に努めた。逝去後、その旧蔵漢籍約4400冊が大阪大学に寄贈され、現在、懷徳堂文庫内に北山文庫として保管されている。

## 7-2 事項

### ●預り人(あずかりにん)

懷徳堂の校務・俗務の最高責任者。懷徳堂の運営は、学務と校務とに分担され、学務上の責任者が学主と呼ばれたのに対して、校務・俗務の責任者は預り人と呼ばれた。享保11年(1726)に懷徳堂が江戸幕府から官許を得たことを受けて、幕府から拝領した学問所用地を預かる、というのが原義。預り人は、対外的な雑事を含む校務全般を担当し、授業を兼任することもあった。現代的に言えば、学主は学長兼教授、預り人は事務長という位置づけになる。歴代の預り人は次の通り。中井翫庵、中井竹山、中井蕉園、中井碩果、並河寒泉、中井桐園。

### ●懷徳(かいとく)

財団法人懷徳堂記念会が編集・発行する機関誌。大正13年(1924)創刊、昭和16年(1941)から昭和23年まで一時休刊したが、年1回刊、最新号は第69号(2001年)。懷徳堂関係を主とした漢文学、日本文学などに関する学術論文、随想など数本の他、懷徳堂記念会が主催する「懷徳堂講座」の講演要旨や、「資料報告」「懷徳堂関係研究文献提要」などから成り、懷徳堂関係論著や記念会の足跡についての貴重な資料集となっている。当初は、懷徳堂堂友会の編集によっていたが、戦後は、大阪大学文学部内の運営委員会により編集が行われている。第55号(1986年)に第50号までの総目次が掲載されている。

### ●『懷徳』とバーチャル懷徳堂(かいとくとばーちやるかいとくどう)

昭和6年(1931)刊行の『懷徳』第9号には、旧懷徳堂に関する貴重な資料が掲載されている。中井終子「安政以後の大阪学校」および「旧懷徳堂平面図」がそれである。中井竹山・履軒の曾孫にあたる中井木菟麻呂(1855~1943)が幼時の記憶を述べて語った内容を、木菟麻呂の妹の終子が記述したものである。時代を「安政(1854~1859)以後」と江戸末期に限定するのは、木菟麻呂自身の幼少時の記憶に基づく内容を記述するためであったという。また、「学校」と記されているのは、中井竹山の頃より、懷徳堂が一般には「大阪学校」あるいは「学校」と呼ばれて親しまれていたことによるという。「安政以後の大阪学校」は全

17節からなり、「近代懐徳堂の構造」「懐徳堂の園庭」「教授及び学校預り人の事」「懐徳堂の授業ぶり」「講筵及び輪講」「授業料及会費の事」など、懐徳堂学舎の構造と教育・運営の実態を伝える貴重な資料となっている。この内、懐徳堂学舎の構造を記した部分は、「旧懐徳堂平面図」とともに、大阪大学創立70周年記念事業の一環として公開されたバーチャル懐徳堂構築の重要な資料となった。

これによれば、懐徳堂は現在の今橋通りに面して「表口十一間半（約20メートル）、奥行二十間（約36メートル）」の建物であり、正門を入り、漆喰で固めた通路を約10メートル進むと玄関に至る。「玄関の式台は四畳ほどで、懐徳堂と書いた刻額が鴨居の上に掲げて」あった。「玄関は六畳敷で、正面に一間半の押入（向かって右方）と半間の板敷（左方）とがあり、そこに書台と称した小机が二十余も重ねて」あった。その上には、「講釈日、輪講日、詩文会の定日を示した額」が懸かっていた。受講生はこれを見て、講義情報などを確認し、各自「小机」を持って講堂に向かったのである。

玄関の西（左手）には「七畳半」ほどの「東房」があり、その南寄りには「大衝立」が置かれ、玄関に面した裏面は「虎の墨画」、その前に刀掛が置かれ、講堂に面した表面には「読聖賢書、立修齊志、存忠孝心、行仁義事」という朱文公大書の拓本が張られ、懐徳堂の象徴となっていた。この東房を経て講堂に入る。

講堂は、東房の西隣に位置し、襖の上の欄間には「網形の透かし彫りの中に宋六君子図」がはめこんであり、天井は『孟子』の「井田（孟子が理想とした土地制度）」にちなんで「井の字形」。「向かって正面（北）は一間半の広い床の間で、右手の床脇が一間、袋棚と違棚」。「床の間には通常文天祥の墨本忠孝の大幅」が懸けられていた。また、講堂南面の二つの柱には、中井竹山の揮毫による「經術心之準繩、文章道之羽翼」の聯（堂聯）が掲げられていた。この講堂は「十五畳」の広さであったが、多くの受講生を収容する際には、襖を取り外し、玄関・東房・講堂と続く約30畳の大広間に展開した。

こうした記述を基に、バーチャル懐徳堂では、外観・式台・玄関・東房・講堂という学舎の主要部分はコンピュータグラフィックスによって再現された。また、このバーチャル空間内は、閲覧者が自由に探索（ウォークスルー）でき、さらに、大阪大学懐徳堂文庫資料として現存する資料については、懐徳堂データベースにリンクし、その詳細説明を閲覧することができる。このように、バーチャル懐徳堂は、『懐徳』第9号所載の文字資料・平面図としての懐徳堂を、新たに三次元空間に再現したのである。

### ●懐徳堂遺書1（かいとくどういしょ）

戦災による焼失を免れ、戦後大阪大学に寄贈された重建懐徳堂の蔵書3万6千点のこと。財団法人懐徳堂記念会は、昭和20年（1945）3月の大阪大空襲で学舎が焼失し、その活動の

拠点を失ったことに加えて、戦後のインフレによって財団の基金の価値が激減し、活動の継続が困難となった。そこで、当時文科系学部を新設することになった大阪大学に協力を求め、昭和24年（1949）、重建懐徳堂の蔵書を大阪大学に寄贈し、懐徳堂事業は財団法人懐徳堂記念会と大阪大学とが協力して行うことになった。昭和58年（1983）に懐徳堂友の会が設立されてからは、懐徳堂事業は財団法人懐徳堂記念会・懐徳堂友の会・大阪大学の三者によって受け継がれ、平成8年（1996）には懐徳堂友の会と財団法人懐徳堂記念会とが一体化して、今日に至っている。なお、これとは別に、明治44年（1911）、懐徳堂記念会によって刊行された10種の書をまとめて「懐徳堂遺書」と呼ぶ場合もある。また、現在、大阪大学および懐徳堂記念会所蔵の懐徳堂関係資料は、その後の受贈・蒐集分も併せて、約4万7千点にのぼっている。

### ●懐徳堂遺書2（かいとくどういしょ）

明治44年（1911）、懐徳堂記念会によって刊行された書。旧懐徳堂の復興顕彰を目的に、明治43年（1910）に設立された懐徳堂記念会は、そのための具体的な事業として、旧懐徳堂所蔵の貴重書を翻刻して刊行する計画を立てた。五井蘭洲関係として『茗話』、『勢語通』、中井竹山関係として『奠陰集』、『竹山国字牘』、中井履軒関係として『論語逢原』の五種、および「懐徳堂五種」としてまとめられた『論孟首章講義』（三宅石庵）、『五孝子伝』、『富貴むらりょうのうじじょう』（中井菴庵）、『蒙養篇』、『貞婦記録』（中井竹山）の総計10種であり、いずれも活字翻刻され、「懐徳堂遺書」と総称された。「懐徳堂五種」を除く各書の奥付には、「明治四十四年十月三日印刷」「明治四十四年十月五日発行」「編輯兼発行者 大阪市北区梅ヶ枝町二百十三番屋敷懐徳堂記念会代表西村時彦」「印刷者 吾妻健三郎」「印刷所 東洋印刷株式会社」「製本所 堀越日進堂」「発行所 村松文海堂」とある。なお、これらとは別に、戦後、懐徳堂記念会が大阪大学に寄贈した旧懐徳堂蔵書3万6千点を「懐徳堂遺書」と総称する場合もある。

### ●懐徳堂官許（かいとくどうかんきょ）

享保9年（1724）に創設された懐徳堂が、大坂町奉行所において、幕府公許の学問所として認められたことを指す。これにより、懐徳堂は校地に対して諸役免除の恩典が与えられ、また大坂学問所とも呼ばれることになった。その前年、菅野兼山が江戸市中に学問所を創立することを目安箱で願い出、幕府の援助を受けて会輔堂を創設した。その後、さらに京・大坂において学問所を設立する意図が將軍家（徳川吉宗）にあることを、三輪執齋が伝え聞き、中井菴庵に知らせて運動させた。菴庵は同志と相談し、三宅石庵にはしばらく伏せたまま奔走（江戸大坂の往復6回）、執齋らの助力によって実現した。もっとも、石庵は幕府などと

の関係を好まず、また五同志のなかでも意見が分かれていた。なお、後の重建懐徳堂の人々は、この幕府官許の時期を以て懐徳堂の創設とした。

#### ●懐徳堂考 (かいとくどうこう)

西村天囚による懐徳堂研究の書。明治43年(1910)、西村天囚(朝日新聞記者、のち京大講師)は、懐徳堂記念会を創設し、大阪朝日新聞に「懐徳堂研究其の一」を連載して、その顕彰に努めた。本書はこの連載を基に、明治43年(1910)3月に『懐徳堂考上巻』として35部、翌年に『懐徳堂考下巻』として75部刊行され同志に配布されたものである。その後、大正14年(1925)に、懐徳堂記念会より重印され、また、昭和59年(1984)、懐徳堂友の会より、初印本の復刻がなされた。内容は、三宅石庵・五井蘭洲から並河寒泉に至る懐徳堂140余年の歴史を通覧したものであり、今日においても、懐徳堂研究の最も基本的な文献としての価値を持つ。

上巻は、懐徳堂の創建された当時の、大坂の学問的背景の説明(序説)、五井持軒(五井蘭洲の父)から三宅春楼までの主要人物、および懐徳堂の同志について解説する。下巻は、上巻の概要、中井竹山、中井履軒の解説に始まって、並河寒泉、懐徳堂の廃絶までを述べる。また、復刻版には、『懐徳堂考』を重印する際に加えられた、懐徳堂教授松山直蔵の序文および口絵写真23葉、さらに人名索引を付載した『懐徳堂考付録』(別冊、全50頁)が付けられた。

#### ●懐徳堂五種 (かいとくどうごしゅ)

明治44年(1911)、懐徳堂記念会によって刊行された書。旧懐徳堂の復興顕彰を目的に、明治43年(1910)に設立された懐徳堂記念会は、そのための事業として、旧懐徳堂所蔵の貴重書を翻刻して刊行する計画を立てた。本書は、三宅石庵関係として『論孟首章講義』、中井齋庵関係として『五孝子伝』『富貴村良農事状』、中井竹山関係として『蒙養篇』『貞婦記録』の計五種を線装本1冊として活字翻刻したもの。その奥付には「明治四十四年十月三日印刷」「明治四十四年十月五日発行」「編輯兼発行者 大阪市北区梅ヶ枝町二百十三番屋敷懐徳堂記念会代表西村時彦」「印刷者 堀越幸」「印刷製本所 堀越日進堂」「発行所 村松文海堂」とある。なお、同時に翻刻刊行された旧懐徳堂蔵書五種と併せて「懐徳堂遺書」と総称される場合もある。

#### ●懐徳堂師儒公祭 (かいとくどうしじゅこうさい)

江戸時代の懐徳堂の儒者を偲ぶ記念式典。大阪府立図書館長今井貫一の主唱で創設された大阪人文会の明治43年(1910)1月の例会で、西村天囚は、五井蘭洲の事跡を講演し、懐徳

堂師儒公祭の挙行を提案した（ただし、師儒公祭の件を推進したのは、中井竹山・履軒の曾孫にあたる中井木菟麻呂であるとの別伝もある）。その提案は、人文会の席上で可決され、懷徳堂記念会が母体となって、明治44年（1911）、中之島公会堂において第一回の式典を挙行した。発起人には、高崎親章（大阪府知事）、植村俊平（大阪市長）、村山龍平（朝日新聞社長）、本山彦一（大阪毎日新聞社長）、住友吉左衛門（住友銀行社主）、鴻池善右衛門（鴻池銀行社主）など、政財言論界の著名人が名を連ねている。昭和20年（1945）の重建懷徳堂の焼失によって断絶したが、その精神は、戦後の記念会・友の会における「懷徳忌」として引き継がれている。

#### ●懷徳堂堂友会（かいとくどうどうゆうかい）

大正5年（1916）に再建された懷徳堂（重建懷徳堂）関係者の同窓会。大正12年（1923）11月4日、発足。重建懷徳堂は昭和20年（1945）の大阪大空襲で焼失し、そこで行われていた諸事業も中断した。しかし、災禍を免れた蔵書が大阪大学に寄贈されたことにより、財団法人懷徳堂記念会と大阪大学文学部とが提携して、各種事業を行うこととなったが、堂友会はその主要な後援組織であった。初代会長は重建懷徳堂教授松山直蔵。

なお、昭和58年（1983）に懷徳堂友の会が設立されたことにより、堂友会は発展的に解消したが、堂友会の主要な活動であった開学記念祭式、親睦旅行、古典講読は、それぞれ現在の懷徳堂記念会による、懷徳忌（中井家の菩提寺である誓願寺における追悼祭典、毎年一回春に開催）、見学会、古典講座に引き継がれている。

#### ●懷徳堂友の会（かいとくどうとものかい）

財団法人懷徳堂記念会の事業を後援すべく設立された任意団体。昭和58年（1983）設立。明治43年（1910）に設立され大正2年（1913）に財団法人の認可を受けた懷徳堂記念会の活動を支援する組織として、在阪の諸法人と大阪大学文学部が協力して設立した。財団法人懷徳堂記念会とともに懷徳堂の顕彰に努めてきたが、本体の記念会より支援組織である友の会の活動が盛んになるなどの問題点が生じたことから、改組を計画し、平成8年（1996）、友の会は、財団法人懷徳堂記念会に一本化され、発展的に解消した。

#### ●懷徳堂文庫図書目録（かいとくどうぶんことしょもくろく）

大阪大学所蔵懷徳堂文庫図書の目録。昭和51（1976）、大阪大学文学部編集・発行。全体は、「漢籍の部」「国書の部」から成る。「漢籍の部」は、伝統的な四部分類（経部、史部、子部、集部）に叢書部・新学部を加えた六部からなり、さらに各々の内部が『京都大学人文科学研究所漢籍目録』に準じて細分されている。「国書の部」は日本十進分類法により、細

目内の配列は50音順とする。両部とも、各書籍については、撰者、刊年、刊行者などの書誌情報を簡明に注記する。また各々の末尾に書名索引を付す。

本目録に収載されるのは、懐徳堂記念会所蔵・蒐集図書（旧懐徳堂先賢著述・蔵書・関係諸記録、重建懐徳堂期の蒐集に係る研究用漢籍・和刻本・朝鮮本など約36,000冊）の他、北山<sup>ほくざん</sup>文庫（重建懐徳堂最後の教授吉田鋭雄（号は北山）旧蔵漢籍約4,400冊）、木間瀬<sup>きませ</sup>文庫56点（懐徳堂記念会元理事木間瀬策三旧蔵書幅）、岡田文庫（岡田伊左衛門旧蔵詩文関係漢書約6,000冊）である。

なお、大阪大学所蔵のいわゆる「懐徳堂文庫」はこれらに加えて、さらに、新田文庫・中井家文書（懐徳堂最後の学問所預り人中井桐園の孫・新田和子氏所蔵和漢書・掛け軸・器物類約560点）、並河寒泉文庫（懐徳堂最後の学主並河寒泉の著述および旧蔵書155点）、逆瀬文庫（逆瀬家旧蔵書幅・短冊・扇面52点）、吉永文庫（経済法科大学教授吉永孝雄氏旧蔵卷子・帖など90点、近世文人・幕末維新の著名人の書簡など約400通）、戦後の懐徳堂記念会・友の会蒐集品若干点などを包括するもので、これらの総計は約47,000点にのぼる。

#### ●懐徳堂文庫復刻叢書（かいとくどうぶんこふっこくそうしょ）

大阪大学懐徳堂文庫が所蔵する懐徳堂の名著を影印復刻したシリーズ。大阪大学懐徳堂文庫復刊刊行会監修、懐徳堂・友の会発行、吉川弘文館発売。懐徳堂関係資料の中でも特に貴重な名著について、各々全文を写真撮影して掲載し、さらに巻末に詳細な解題を加えている。懐徳堂資料は大阪大学附属図書館の貴重書コーナーに収められており、その公開を望む声が高かった。本シリーズはそれに応えるもので、昭和63年（1988）以来、ほぼ毎年1冊のペースで刊行されている。これまでに刊行された書は次の通り。

- ・『非徴』（懐徳堂第4代学主中井竹山による荻生徂徠『論語徴』反駁の書）
- ・『非物篇』（五井蘭洲著、中井竹山校訂。徂徠批判の先駆的著作）
- ・『華胥国物語』（懐徳堂学派を代表する経学家中井履軒の経世論と科学書を網羅。宇宙・人体解剖図をカラーで収録）
- ・『史記雕題』（上・中・下3冊、中井履軒が和刻本『増補史記評林』の欄外に注釈を書き入れた『史記』研究書）
- ・『中庸雕題』（懐徳堂学派の創見である「中庸錯簡説」に基づいて、中井履軒が独自の『中庸』テキストを作成し、注釈を加えたもの）
- ・『詩雕題』（『詩経』に中井履軒が注釈を施したもの。篇次を改定し、朱子学的『詩経』解釈を批判している）
- ・『論語雕題』（懐徳堂経学の達成点を示す履軒の『論語』解釈。荻生徂徠とは異なる方向からの朱子学批判を示す）

- ・『周易雕題』(和刻本『周易本義』の欄外に履軒が精密な注釈を書き入れたもの)
- ・『莊子雕題』(中井履軒が『莊子』の異端性を肯定的に評価し、江戸期の老莊学史上に独自の位置を占める)
- ・『孟子雕題』(中井履軒が『孟子』について、朱子学本来の性善説理解と異なる解釈を示しており、伊藤仁斎の所説を批判的に継承したもの)

### ●学主 (がくしゅ)

懷徳堂の学長兼教授。懷徳堂の運営は、学務と校務とに分担され、学務上の最高責任者が学主と呼ばれた。学主は、懷徳堂の学務を統括し、自ら講義を担当したので、教授とも呼ばれ、助教じょきょうがそれを補佐した。懷徳堂創設期の初代学主(教授)は三宅石庵であり、助教には、五井蘭洲などが名を連ねた。また、中井竹山以前は学主とのみ称したが、竹山の時、対外的な届書などには学主の名を用い、漢文体の文書などには教授と記したため、以後は教授とのみ称するようになった。なお、二代目以降の学主(教授)は次の通りである。中井鏗庵、三宅春楼、中井竹山、中井碩果、中井桐園、並河寒泉。また、中井履軒も、竹山逝去の際、名目上の学主に就いたが、実際には、懷徳堂から一定の距離を置き、自らの私塾すいさいかん水哉館で研究教育に専念した。

### ●華胥国 (かしょこく)

中井履軒が自らの私塾に名づけた理想の国。安永9年(1780)、南本町一丁目に転居した履軒は、その住居に華胥国門かしょこくもんの扁額へんがくを掲げ、自らを華胥国王に擬した。「華胥国」とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝こうていが夢の中で遊んだという理想国で、そこでは身分の上下がなく、民には愛憎の心がなく、利害の対立もなく、自然のままであったという。その故事は『列子れつし』黄帝篇に次のように記されている。

晝寢而夢、遊於華胥氏之國。……其國無師長、自然而已。其民無嗜慾、自然而已。不知樂生、不知惡死、故無夭殤。不知親己、不知疏物、故無愛憎。不知背逆、不知向順、故無利害((黄帝)昼寝て夢み、華胥氏の国に遊ぶ。……其の国師長無く、自然なるのみ。其の民嗜欲無く、自然なるのみ。生を楽しむを知らず、死を悪むを知らず、故に夭殤無し。己を親しむを知らず、物を疏うとんずるを知らず、故に愛憎無し。背逆を知らず、向順を知らず、故に利害無し)。

黄帝は、この夢から覚めた後、大いに悟るところがあり、その後、28年間、天下は大いに治まって、ほとんど華胥国の如くであったという。また、黄帝が崩御した際、民は黄帝の治を慕って泣き叫び、その悲しみは200年間続いたという。

この語も、「履軒」や「水哉」に相通ずる性格を持つ語である。なお、その後、履軒は相

次いで「華胥国」を冠した書を執筆する。経世については、『華胥国物語』、天文学では『華胥国曆』、歌文では『華胥国囃語』『華胥国歌合』などである。

### ●含翠堂 (がんすいどう)

大坂南部の平野郷ひらのごうにあった、いわゆる郷学ごうがくの一つ。土橋七郎兵衛友直・土橋九郎右衛門宗信・成安源右衛門・徳田四郎左衛門ら平野郷の有力者たちによって、享保2年(1717)に創設された。学舎は同志の一人井上赤水いのうえせきすい(のち懐徳堂の助教)の自宅を分割し、間口五間(約9メートル)、奥行八間(約15メートル)の建物が設立された。初め、玄関先の庭の松にちなんで「老松堂ろうしょうどう」と称したが、三宅石庵が「含翠堂」と命名した。「含翠」の語は、宋ほんの范質しつの「遲遲澗畔松、鬱鬱含晩翠(遅々たる澗畔の松は、鬱々として晩翠を含む)」(戒従子杲詩)という詩句にちなむ。含翠堂は、藩校や私塾などとは経営方法を異にし、同志らが定期的に資金を積み立てて、その利息によって運営された。学問的には特定の学統によらず、三輪執斎わしっさい・伊藤東涯いとうとうがいの他、石庵や五井持軒なども招かれて講義を開いている。三輪執斎は享保19年(1734)、含翠堂の同志に請われて「含翠堂記」を記しており、『摂津名所図会』には、伊藤東涯が含翠堂に来讲した時の様子を描いた「伊藤東涯含翠堂講義図」が見える。

持軒と石庵の二人は、懐徳堂創設前の享保9年(1724)、大坂が大火に遭った際に、平野郷へ難を逃れている。また懐徳堂創建の際の五同志の一人・富永芳春(道明寺屋吉左衛門)は、含翠堂にも出資している。含翠堂は懐徳堂の先駆けとして位置づけることができ、両者の繋がりは深い。

なお、含翠堂は、規模は小さいながら明治5年(1872)まで続き、昭和60年(1985)、大阪市平野区平野宮町に含翠堂址碑が建てられた。また、昭和24年(1949)には、土橋友直の家に保管されていた蔵書・日記・遺物が大阪大学に寄贈され、昭和46年(1971)、文学部国史学研究室によって『含翠堂(土橋)文庫目録』が刊行された。その内の主要な史料を収録したものに『平野含翠堂資料』(梅溪昇・脇田修編、清文堂出版、1973年)がある。

### ●寛政異学の禁 (かんせいいがくのきん)

江戸後期、幕府が寛政の改革の一つとして行った教学振興策で、寛政2年(1790)、湯島ゆしま聖堂せいどうあずか預りの林大学頭信敬はやしだいがくのかみのぶたかに対して、塾内の教育は朱子学専一とし、他の学問を禁止したことを指す。当時は、徂徠学派、仁齋学派、折衷学派が流行し、朱子学を中心としていた林家りんけの家塾は振わず、頼春水らいしゅんすい、尾藤二洲びじゅう、柴野栗山りつざんらによる朱子学擁護論を受けて、老中・松平定信まつらさだのぶによってこの禁令が実施された。この後続いて幕府は昌平坂学問所の整備を進め、また官吏の登用試験に朱子学を用いるなどしたため、一般にも朱子学は盛んになった。また諸藩の藩校に朱子学者が用いられる傾向も生じた。そもそもこの禁令は、幕府の教育機関に



対するものであり、全国的に朱子学統一を目指したものではなかったが、塚田大峰、市川鶴鳴、皆川淇園、片山北海らが激しく反対した。

定信は天明8年(1788)に来坂し中井竹山と対面、その会見後、竹山は『草茅危言』を執筆し、寛政3年(1791)に定信に献上している。その中で、懷徳堂を拡充して「官学」とし、また京都に学校(観光院)を新設することを提案している。

### ●経学・経書(けいがく けいしょ)

経書とは、古代の聖賢によってつくられたとされ儒家が尊んだ經典を指し、単に「経」ともいう。「経」とは、縦糸の意。一般には、「四書」や「五経」などを指す。経学とは、その経書の解釈などを研究する学問を指す。孔子の学団においては「詩」と「書」とが教科書として学ばれ、戦国時代以降儒家は、孔子の手を経て成立したとされる「詩」「書」「礼」「楽」「易」「春秋」の「六経」を尊んだ。やがて「楽経」が亡佚して「五経」となったが、後に孔子以外の聖賢の述作なども経書に含められ、七経、九経、十二経、十三経などと数える。宋代には、もともと『礼記』中の篇であった『大学』と『中庸』とが抽出され、『論語』『孟子』と併せた四部の経書が「四書」と呼ばれた。

江戸時代の日本にもたらされた経学は、朱子学であり、懷徳堂でも朱子学を基本として講じたが、必ずしも朱子の説に拘泥することなく、むしろ批判的な研究を行った。その最大の成果は、中井履軒による経学研究『七経雕題』『七経雕題略』『七経逢原』である。

### ●孝子顕彰運動(こうしけんしょううんどう)

親孝行に努めた子どもを見つけだして顕彰しようとする運動。懷徳堂や大坂町奉行、江戸幕府など、全国的な運動として展開した。懷徳堂では、門人加藤景範が、山城国葛野郡川島村の孝子義兵衛の行状を記した『かはしまものかたり』や、死刑を宣告された父の身代わりを申し出た五人の子どもたちを讃える中井鏗庵の『五孝子伝』などが、早期の例として注目される。懷徳堂では、以後も「孝」を重要な徳目として掲げ、孝子を探して顕彰するまでに至り、それはさらに大坂町奉行や江戸幕府による孝子顕彰運動となって展開していった。『かはしまものかたり』や『五孝子伝』は、これらの先駆的存在であったと言える。しかし、このことは逆に、孝子を探し出さねばならぬほど「孝」の精神が退廃しつつあったことをも示唆しており、また、幕府が「孝」子を顕彰することによって、それをお上への「忠」義に転化しようとしていたこともうかがわれる。

### ●古義学(こぎがく)

伊藤仁斎の学問、およびそれを継承した子の東涯らの学問を指す。仁斎学ともいう。仁斎

は、朱子学を孔子や孟子の教えと異なるものとして批判し、「最上至極宇宙第一の書」である『論語』とその解説である『孟子』とを、朱子の注釈によらずに読み、孔子や孟子の教えに直接接触することを主張した。宋・明の儒学を批判し、古の孔子・孟子の教えに復帰することを説く学派を、まとめて古学派といい、仁斎の古義学や、荻生徂徠の古文辞学は、古学派の中でも代表的な学派である。

### ●五同志（ごどうし）

懐徳堂を創建し、その運営を支えた五人の大坂町人。三星屋武右衛門（中村睦峰、号は良斎）、道明寺屋吉左右衛門（富永芳春）、舟橋屋四郎右衛門（長崎克之）、備前屋吉兵衛（吉田益枝）、鴻池又四郎（山中宗古）。五同志は、中井齋庵と図り、尼崎一丁目（現在の大阪市東区今橋四丁目）に表口6間半（約12メートル）、奥行20間（約36メートル）の学舎を造り、三宅石庵を学主として招いた。彼らは、懐徳堂の創設に際して基金を拠出し、またそれを運用して利益を稼ぐなど、商人の才覚を発揮して懐徳堂の経済的基盤を作った。なお、富永仲基は、五同志の内の道明寺屋吉左右衛門の三男である。

### ●混沌（詩）社（こんとん（し）しゃ）

明和2年（1765）、片山北海を中心とし、田中鳴門・平沢旭山・葛子琴・篠崎三島・木村兼葭堂ら14人が大坂において結成した詩社。後に頼春水（頼山陽の父）も参加した。混沌社は塾や学校と異なる緩やかな組織であり、社員は月に一度（16日）北海の家に集まり、漢詩文を作ってその作品を互いに論評しあった。そもそも詩作の流行は、詩文を重視した徂徠学の影響によるもので、混沌社員の中にも徂徠学系統の人物が多いが、やがて詩作は経学から離れて独自の世界を構築、混沌社は大坂の漢詩壇の中心として活発に活動し、全国的に注目された。

懐徳堂の中井竹山は混沌社員との交流があり、社員にはならなかったものの混沌社へ出入りし、また混沌社員を懐徳堂に招いている。特に頼春水との交友は親密で、春水が結婚した時の媒酌人を務めている。

### ●財団法人懐徳堂記念会（ざいだんほうじんかいとくどうきねんかい）

懐徳堂の学術文化活動を継承顕彰すべく設立された団体。明治2年（1869）に閉校した旧懐徳堂を復興しようという気運が高まった明治43年（1910）、西村天囚らの呼びかけで設立された。翌年には、中之島公会堂において、懐徳堂の儒者たちを顕彰する記念式典を挙行し、懐徳堂貴重書の復刻刊行を行うなど、懐徳堂の復興と顕彰に努めた。

会の発起人には、高崎親章（大阪府知事）、土居通夫（大阪商業会議所会頭）、植村俊平

(大阪市長)、小山健三 (第三十四銀行頭取)、島村久 (鴻池銀行理事)、鴻池善右衛門 (鴻池銀行社主)、藤田平太郎 (藤田組主)、住友吉左衛門 (住友銀行社主)、鈴木馬左也 (住友総理事)、上野理一 (朝日新聞社主)、本山彦一 (毎日新聞社主)、今井貫一 (大阪府立図書館長) など、大阪の政治・経済・文化を代表する人物が名を連ね、全国から特別会員622名、普通会员1370名が加入した。

大正2年(1913)8月、財団法人の認可を受け、永田仁助・西村天囚・今井貫一・水落庄兵衛・広岡恵三の五名を理事、永田仁助(浪速銀行頭取)を理事長として法人登記を行った。大正5年(1916)の懷徳堂校舍再建の後、専任の教授や学外の講師による講義と講演を市民に開放し、大阪の文科大学、市民大学としての務めを果たした。戦後は、戦災を免れた懷徳堂蔵書を一括して大阪大学に寄贈し、以後、大阪大学文学部との提携のもと、春秋記念講座、古典講座、学術雑誌『懷徳』の刊行、懷徳堂文庫復刻叢書や懷徳堂ライブラリーの出版など、各種事業を展開して今日に至っている。平成13年(2001)度現在、法人会員85社、個人会員810名。

なお、永田の後の歴代理事長は次の通り。小倉正恒(住友本社総理事、大蔵大臣)、今村荒男(元大阪大学総長)、上野精一(朝日新聞社社主)、北沢敬二郎(大丸会長)、堀田庄三(住友銀行頭取)、伊部恭之助(住友銀行相談役最高顧問)。平成13年7月に巽(たつみ)外夫(三井住友銀行特別顧問)が就任し、現在に至っている。

### ●重建懷徳堂(じゅうけんかいとくどう・ちょうけんかいとくどう)

大正2年(1913)に設立された財団法人懷徳堂記念会が、大正5年(1916)に東区豊後町(現・中央区本町橋)に建てた学舎のこと。敷地は、府立大阪博物場西北隅にあたる361坪が無償で貸与された。講堂では、昭和20年(1945)3月の大阪大空襲によって焼失(書庫を除く)するまで、大阪市民のための授業が行われた。授業には、中国の古典と日本の古典とを中心にした講義(平日の夕刻と日曜の午後の一週5回)、人文科学の高度な内容の定期講演(毎週土曜日)、一般教養的な通俗講演(月に1~2回)、年少者を対象とする素読科<sup>そどく</sup>などがあった。

職員は、講義を担当する常任の教授一名、助教授・講師(常任・臨時)・書記・司書若干名からなり、教授として松山直蔵<sup>まつやまなおぞう</sup>、財津愛象<sup>ざいつあいぞう</sup>、吉田鋭雄<sup>よしだはやお</sup>、講師(常任)として吉沢義則、林森太郎、武内義雄、財津愛象、稲束猛、秋月胤継、岡山源六、阪倉篤太郎、大江文城、張源祥などが教壇に立った。また講演には顧問の内藤湖南<sup>ないとうこなん</sup>、狩野直喜<sup>かのなおき</sup>の他、京都帝国大学や第三高等学校の教授を中心に、学外から多くの講師が招かれた。

重建懷徳堂の事業運営費は、ほとんどが財団の基本財産と寄付とで賄われており、講演は無料、講義も低額の堂費(月額20銭から2円)で受講できたため、多数の市民が来聴し、大

阪の文科大学・市民大学の役割を果たした。

「重建」の称は、江戸期の旧懐徳堂を再建したとの意味であり、「ちょうけん」と呼ぶべきであるが、現在は「じゅうけん」の呼称が通行している。

なお、コンクリート造りの書庫に収められていて戦災を免れた重建懐徳堂の蔵書3万6千点は、昭和24年（1949）、懐徳堂記念会から一括して大阪大学に寄贈された。その図書目録として『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、昭和51年）がある。

### ●朱子学（しゅしがく）

中国・宋代に興った新しい儒学（宋学）を集大成した、南宋の朱熹の学問を指す。従来の儒教が五経を中心としたのに対して、朱熹は理気二元論を説き、『四書集注』を著し、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書を中心とした、「学んで聖人に至る」ことを目指す儒学を構築した。朱子学は、朱熹の晩年には偽学として弾圧されたが、元代に科挙の標準的テキストとされ、以後600年余り、中国における国家教学となった。また東アジア世界に伝わって大きな影響を与え、特に朝鮮半島においては李朝の国家教学として中国以上に尊ばれた。

日本には鎌倉時代に伝わり、後に江戸幕府の体制教学（官学）となったが、伊藤仁斎の古義学や荻生徂徠の古文辞学など、朱子学を批判する学問も盛んに行われた。懐徳堂の学問は、三宅石庵の学が「鶴学」と称されたように、朱子学・陽明学をともに尊んだとされるが、五井蘭洲によって朱子学に定められた。

### ●昌平饗・昌平坂学問所（しょうへいこう しょうへいざかがくもんじょ）

いずれも江戸湯島にあった江戸幕府直轄の教育機関を指し、正式には「学問所」という。もとは林羅山によって創設された林家の家塾であり、上野忍岡にあった。元禄3年（1690）、施設と内容を拡充して湯島昌平坂に移転し、昌平饗あるいは湯島聖堂と呼ばれ、林家は聖堂預を世襲し、将軍の侍講を務めていた。寛政2年（1790）、林大学頭信敬に対して寛政異学の禁が命ぜられると、幕府によって湯島聖堂の整備が進められ、柴野栗山、岡田寒泉が儒官に任ぜられた。寛政5年（1793）に林述斎が家を継ぐと、さらに学制の規則・施設が整えられ、古賀精里、佐藤一斎らが儒官に任用された。寛政9年（1797）述斎に3000石の禄が与えられ、正式に幕府直轄の学問所「昌平坂学問所」となり、勘定奉行の管理下に置かれた。この学問所は元来旗本・御家人を対象としたが、林家もしくは儒官の門人であれば藩士や浪人も聴講を許された。明治維新の際に新政府によって接收され、明治2年（1869）に再開したが、翌年休校、その後廃校となった。

懐徳堂が創設されたのは、湯島聖堂に遅れること30年余であったが、湯島聖堂が寛政異学の禁までは林家の家塾としての性格が強かったのに対し、懐徳堂は、当初から三宅家・中井

家の家塾としてではなく、町人を対象とした開かれた学校として運営され、朱子学を基礎としながらも、柔軟性に富んだ教育研究を展開していったことは注目に値する。

なお、懐徳堂文庫には、「昌平覺書生寮姓名録」写本（小天地閣叢書、坤集所収、本文130丁）があり、『懐徳』42号に、東京大学史料編纂所所蔵本との一部校合結果、および姓名索引・藩名備考を付して翻刻されている。

### ●水哉館（すいさいかん）

中井履軒の私塾。履軒は、30代半ばに懐徳堂から独立して私塾水哉館を営み、歴大かつ精緻な古典研究を行なった。「水哉館」の名称は、孔子がしばしば水を称えていたということにちなむ。『孟子』離婁下篇に、孟子の弟子の徐子と孟子との問答が次のように見える。「徐子曰、仲尼亟称於水、曰水哉水哉。何取於水也。孟子曰、原泉混混不舍昼夜、盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾（徐子曰く、仲尼<sup>ちゅうじしばしば</sup>亟水を称して曰く、水なる哉、水なる哉と。何をか水に取れる。孟子曰く、原泉は混混として昼夜を<sup>お</sup>舍かず。科を<sup>あな</sup>盈たして後に進み、四海に<sup>いた</sup>放る。本有る者は是<sup>か</sup>くの如し。是れ之を取るのみ）」。これによれば、「水哉」とはたゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常に流れて止まない水に喩えたものと言える。以後、履軒は、自らの経学研究書に「水哉館学」と署名した。なお、水哉館における履軒の著述・蔵書の状況を知り得る資料として、『天樂楼書籍遺蔵目録』がある。また、重建懐徳堂設立の際に中井家より寄進された懐徳堂および水哉館の遺書遺物を整理した目録として「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」（『懐徳』17号）がある。

### ●誓願寺（せいがんじ）

浄土宗知恩院の末寺。天正9年（1581）、無宅天牛によって建てられた。大坂夏の陣と太平洋戦争の際に全焼している。中井家の墓所であり、中井覺庵・竹山・履軒・蕉園・碩果・桐園、並河寒泉など、懐徳堂関係者の墓約30基が現存する。また井原西鶴の墓があることでも有名である。懐徳堂記念会が主催する毎年春の「懐徳忌」はこの誓願寺で行われる。現・大阪市中央区上本町西4丁目。

### ●大日本史（だいにほんし）

水戸藩の2代藩主・徳川光圀によって事業が開始され、明治39年（1906）に完成した漢文の歴史書。その編纂のために設置された<sup>しょうこうかん</sup>彰考館の総裁を、三宅石庵の弟・<sup>かんらん</sup>観瀾が務めている。江戸時代には水戸藩において、また明治維新後も引き続き水戸徳川家によって、編纂事業が継続された。<sup>じんむ</sup>神武天皇から南北朝時代末期の後小松天皇の治世までが、中国の正史にならって紀伝体で書かれている。本紀73巻、列伝170巻、志126巻、表28巻の合計4部397巻、

別に目録5巻。元禄10年(1697)に本紀が、さらに光圀の没後の正徳5年(1715)に列伝が脱稿、享保5年(1720)幕府に献上された。

史料によりつつ皇統の正<sup>せい</sup>閏<sup>じゆん</sup>と人物の評価とを定めることを目的とし、神功皇后を皇妃伝に、大友皇子を本紀にそれぞれ入れ、また南朝を正統とする。その編纂と改訂には、塙保己<sup>はなわほ き</sup>一<sup>いち</sup>ら多くの学者が関わり、また長年にわたる編纂事業によって、水戸学と呼ばれる独自の学風が生まれた。

懐徳堂では、明和8年(1771)ごろから『大日本史』の筆写が総力をあげて行われ、一部が懐徳堂に納められた。その筆写者は37名、校訂者は三宅春楼・中井竹山・履軒・加藤景範の4名であった。安永5年(1776)には、津和野藩家老の依頼を受けた頼<sup>らい</sup>春<sup>しゆん</sup>水<sup>すい</sup>(頼山陽の父)がその懐徳堂本を借り、筆写している。

### ●龍野藩(たつのはん)

播磨<sup>はりま</sup>国<sup>くに</sup>揖<sup>いつ</sup>西<sup>さい</sup>郡<sup>ぐん</sup>龍野(現・兵庫県龍野市)を城地とした藩。江戸時代に本多政朝、小笠原長次、岡部宣勝、京極高和が相次いで封ぜられ、万治元年(1658)幕領となった後、寛文12年(1672)に信州飯田藩より脇坂氏が5万3千石で移封、以後明治維新まで続いた。

懐徳堂の中井齋庵の祖父・養仙は、飯田藩主・脇坂安政の藩医となり、主君の移封により龍野に移住した。齋庵の父・玄端とその弟・玄意も龍野で藩医を務め、玄意とその子孫は、代々龍野で藩医として仕えたが、玄端は後に辞職して大坂に移住、齋庵ら家族も従った。齋庵の母・そのは、晩年を龍野で過ごし、齋庵はそのの看病のため一時大坂から龍野に帰っている。

龍野藩は、元禄年間に藤江熊陽<sup>ふじえ ゆうよう</sup>・股野龍溪<sup>またのりゅうけい</sup>を召し抱え、またその両家を継いだ藤江軍治・股野玉川<sup>ぎょくせん</sup>によって学問が定着した。軍治・玉川は中井竹山と同年輩であり、さらにその子の藤江貞蔵・股野嘉善は竹山の指導を受けるなど、龍野藩と懐徳堂には密接な交流があった。また江戸中期より窮乏した藩経済に対して、竹山は『社倉私議<sup>しゃそうしぎ</sup>』を著して打開策を示し、一旦は不採用となったものの、後に、懐徳堂で竹山に学んだ小西澹斎<sup>こにしたんさい</sup>によって取り上げられ、文政3年(1820)、実施されるに至った。

なお、龍野伝来の中井家関係資料や龍野藩関係資料は現在、龍野市立歴史文化資料館に保存されており、その図書目録として『龍野文庫図書目録』(龍野市教員委員会、1994年)がある。

### ●定約・定書(ていやく さだめがき・ていしょ)

懐徳堂の諸規定を定めたもの。「定約」は教育制度を含む懐徳堂全般の取り決めについて記したもの、「定書」は学舎や学寮における諸規定について記し、講堂・学寮などに掲示され

たもの。定約としては、「播州大坂尼崎町学問所定約」全7条、「宝暦八年(1758)定約附記」全5条など、定書としては、「宝暦八年(1758)定書」全3条、「安永六年(1777)正月定書」全1条、「安永七年(1778年)六月定書」全8条などが著名である。これらの規定から、懐徳堂では、学費・聴講・身分の上下などについて、当時としてはかなり自由な精神で臨んでいたこと、第4代学主中井竹山によって学則が厳格に整備されたこと、などが知られる。

なお、懐徳堂の教育や運営を知りうる資料としては、この他、享保9年(1724)5月から天明3年(1783)3月に至る学内の主要な出来事66条を年代順に記した『懐徳堂内事記(ないじき)』、享保11年(1726)から安永9年(1780)に至る大坂奉行所や町内との折衝など73条を記した『懐徳堂外事記』などがある。

### ●適塾(てきじゅく)

緒方洪庵(1810~1863)の主宰した蘭学塾。洪庵は備中国足守藩<sup>あしもり</sup>の子として生まれ、のち大坂に出て蘭方医<sup>なかくてんゆう</sup>の中天游に学び、長崎遊学を経て、大坂に戻り、天保9年(1838)、瓦町に蘭学塾を開いた。塾の名は、洪庵の号「適々齋<sup>てきてきさい</sup>」にちなみ、「適々齋塾(適塾)」と称した。塾は後に、船場<sup>かしよ</sup>過書町(現在の大阪府中央区北浜三丁目)に移ったが、塾生は全国から集まり、橋本左内<sup>はしもとさない</sup>、福沢諭吉、大村益次郎(村田蔵六)、長与専齋<sup>ながよせんさい</sup>、大鳥圭介<sup>おおとりけいすけ</sup>など、幕末・維新にかけて活躍した人材が多く輩出した。また、除痘館<sup>じょとうかん</sup>を設けて種痘<sup>しゅとう</sup>の普及に努め、コレラの流行に際しては『虎狼痢治準』(1858年)を刊行するなど、医学の発展に貢献した。適塾は、懐徳堂とともに、大阪大学の源流となっており、塾舎は、国の史跡・文化財に指定されている。

### ●天楽楼(てんらくろう)・偷語欄(ちゅうごらん)

中井履軒の私塾の二階の一室の名、およびその部屋の欄干の名。履軒は、安永8年(1779)に再婚した後、華胥国門<sup>かしよこくもん</sup>の扁額<sup>へんがく</sup>を取りつけた借家の二階の一室を、「天楽楼」と名づけた。これは、『莊子』天道篇の「與人和者、謂之人樂。與天和者、謂之天樂(人と和する者は、之を人樂と謂い、天と和する者は、之を天樂と謂う)」にちなんだものである。『莊子』は、人間同士が和することを「人樂」と言うのに対して、人が天の自然と和する境地を「天樂」と評した。そして、この天の楽しさをわきまえた者は、生きているときには自然のままに振る舞い、死んでいくときには万物の変化に従い、静かにしているときには陰の気と徳を同じくし、動いているときには陽の気と波を同じくする、と説いた。この思想は「無心の静けさ」につながっていくが、決して隠者(世捨て人)の立場を説いたものではなく、「天樂者、聖人之心、以畜天下也(天樂とは、聖人の心、以て天下<sup>やしな</sup>を畜うなり)」とあるよう

に、天下を経営するという理想を表している。

また、この「天楽楼」の楼上の欄干を、履軒は「ちゅうごらん 儉語欄」と呼んだ。これは、『春秋左氏伝』の語にちなむ。襄公31年の条に、しよくそんひょう ちようもう 叔孫豹が趙孟の死を予言した言葉として「趙孟將死矣。其語儉、不似民主。且年未盈五十、而諄諄焉如八九十者、弗能久矣（趙孟將に死せんとす。其の語儉くして、民の主たるに似ず。且つ年未だ五十に盈たざるに、而も諄諄焉として八九十の者の如し。久しき能わず）」とある。叔孫豹は趙孟の言葉がなおざりで、とても民の長のように見えない。また、歳が50にも満たないのに、くどくどしく、まるで8,90歳の年寄りのようだから、長くは生きられないだろうと言ったのである。履軒は、これを自らの戒めとして心に刻み、欄干を「儉語欄」と称したのである。

### ●同志会（どうしかい）1

懐徳堂の経営を支えた同志の会。懐徳堂は、享保9年（1724）に大坂の町人五同志によって創設され、その後も、この五同志を中心とする町人たちによって、経済的基盤が支えられてきた。その会を同志会という。同志会は、懐徳堂経営のために基金を提供し、また、その基金の運用利益を捻出するなど、町人の才覚を活かして懐徳堂の経営を支えた。「懐徳堂義金簿」には、これら同志による、安永9年（1780）から天明4年（1784）までの5年間の義金積み立てとその使途、および貸付とその利息などが記録されている。受講生の学費には多くを期待しなかった懐徳堂の経営に、この同志会は不可欠の存在であったといえる。

### ●同志会（どうしかい）2

日講とは別に同志が集まり、日講所定の書とは異なる文献を学習する会合。享保11年（1726）、三宅石庵が開講した際の規定によれば、日講では四書の他、『書経』『詩経』などを講ずることとしたが、この会合では、『象山集要』（陸象山の文集『陸象山全集』の摘要か）を講じた。毎月15日を会合日としていたが、後に16日に変更となった。このように三宅石庵は、公開の日講では朱子学のテキストを講じつつ、同志会では陸象山の文献を講じており、その折衷的傾向が窺える。なお、同志会は、春楼の頃には休会状態となっていたが、竹山によって再興され、毎月13日に行われた。

### ●鶴学問（ぬえがくもん）

懐徳堂初代学主三宅石庵の学風を批判的に呼ぶ名。三宅石庵は、一つの学派に固執することなく、諸学の良い点を何でも積極的に取り入れた。その折衷的な独特の学風は「鶴学」と批判されることもあった。鶴とは、伝説上の怪物の名で、頭は猿、足は虎、尾は蛇に似ているといわれる。『せんてつそうだん 先哲叢談』には、「世石庵を呼んでぬえ 鶴学問と為す。此れ其の首は朱子、尾は



(王)陽明、而して声は(伊藤)仁斎に似たるを謂ふなり」という香川修徳(号は太沖)の言が見える。しかし、こうした態度は、懐徳堂が幕府の官許を得ながらも、基本的には大坂の町人に支えられた自由闊達な精神を持つ学校であったことと無縁ではない。そこで説かれた倫理道徳も、決して硬直したものではなく、儒家の道徳論では厳しく対立するとされてきた「義」と「利」についても柔軟に考えるなど、懐徳堂そのものが良い意味での鶴的要素を含んでいたとも言える。

### ●無鬼論(むきろん)

鬼神の存在を否定する思想。伝統的儒家思想においては、死後の靈魂の存在が肯定され、人間は死後鬼神になるとされる。また仏教や神道なども、鬼神の存在を認める。こうした鬼神の存在を肯定する思想に対し、それを否定する立場の主張を無鬼論という。懐徳堂の山片蟠桃は、その著『夢の代』において、徹底した合理主義的立場から鬼神の存在を否定した。人間の魂魄について「生レバ有、死スレバ無」であるとする蟠桃は、北宋の程子や朱子の鬼神論をも含む「有鬼」の立場を、激しく批判している。また、並河寒泉の『辨怪』は、怪異鬼神・狐狸妖怪の存在を否定し、その迷妄を解き明かす目的で著されたもので、懐徳堂学派の「無鬼論」の思想とその系譜を知ることができる。

### ●蘭学・洋学(らんがく・ようがく)

日本に伝来したオランダ系の西洋学術のこと。江戸初期には南蛮学・蛮学と呼ばれていた。8代将軍・徳川吉宗による実学の奨励、漢籍系西洋科学書の輸入規制緩和などを契機に盛んになった。続く田沼意次の時代に、杉田玄白や前野良沢らがオランダ解剖書の翻訳『解体新書』を刊行し、これを新しい学問の創出と位置づけて「蘭学」と呼んだ。幕末以降、オランダ以外の国からも西洋の学術が伝わると「洋学」とも呼ばれた。その内容はさまざまな分野にわたり、医学・天文学・砲術などの科学技術を中心としつつも、西洋史・地理学など人文学的な知識をも含んでいる。幕末期、江戸の伊東玄朴の象先堂や大坂の緒方洪庵の適塾など、民間の蘭学塾は大いに盛えた。懐徳堂においても、中井履軒は麻田剛立の天文学に深い関心を寄せた。また山片蟠桃も剛立に天文学を習ったほか、翻訳や漢訳を通して蘭学に接している。

### ●聯(れん)

漢文の対句を二つに分けて書き、それを家の入り口、門、壁などに左右相對して掛けたもの。「対聯」「柱聯」「門聯」「楹聯」とも言う。通常、扁額(横額)とセットにして掲げられ、扁額の文字と聯の内容とは密接な関連がある。懐徳堂学舎には、教育的効果を狙って

至るところに「聯」がかけられていたという。その内、最も著名なものは、懷徳堂の中門の左右に掛けられていた竹製の聯「学を力めて以て己を修め、言を立てて以て人を治む（力学以修己 立言以治人）」である。この門の上部に竹山の筆で「入徳之門」と記した額がかけられていた（散佚）ことから、この聯は「入徳門聯」と呼ばれる。また、この他、講堂南面の二つの柱に掲示された「堂聯」（下聯のみ残存）、講堂の北牖（北側の窓）の左右に相對して掛けてあった「北牖聯」（散佚）などがあった。

### 7-3 書誌

#### ●印・落款（いん らっかん）

印影のこと。その本が作り上げられた段階で、版本の題簽や見返し、序・跋、巻末や奥付に各種の印がある場合がある。見返しには魁星印（文運を司る星の形の印）や版元印・蔵版者印、序・跋には関防印（書画の右肩に押す印）や姓氏字号印、巻末や奥付には版元印・蔵版者印と、印が押される所はほぼ一定である。また書画が完成した際、作品に姓名字号、年月、識語、詩文などを記して自作であることを示すが、その時に落款印を押すことから、画譜の場合には各面に落款印があることが多い。この他に、その本の所蔵者や旧蔵者が押した蔵書印がある。

懷徳堂文庫所蔵の印として著名なのは、混沌社社友の葛子琴（1739～1784）によって作成された中井竹山の印で、「子慶氏」、「積善印信」と篆刻されている（子慶は竹山の字、積善は竹山の名）。また、中井蕉園の備忘録『雕蟲自為』には、印記の図案が記されている。旧懷徳堂先賢の代表的な印は、『懷徳堂印存』にまとめられている。

その他、懷徳堂文庫所蔵文献の内、中井木菟麻呂が重建懷徳堂に寄進したものについては、「天生寄進」の印、西村天囚旧蔵書で後に遺族から重建懷徳堂に寄贈されたものについては「碩園記念文庫」の印（碩園は天囚の号）、同じく天囚が筆写して旧蔵していたものについては、「碩園鈔蔵」の印が見られ、さらに戦後、懷徳堂文庫が一括して大阪大学に寄贈され、附属図書館の所蔵となった段階で、「大阪大学図書之印」が押印された。

#### ●影印本（えいいんぼん）

原本を写真で複製して印刷した本。景印本とも表記する。覆刻本の原本が主として刊本であるのに対して、影印の原本は写本・刊本を問わない。また、覆刻本は原本を概ね原寸通りに複製するのに対して、影印本は、縮小されることも多い。懷徳堂文庫所蔵の貴重書の内、『非物篇』『非徴』『華胥国物語』など約10種が、影印本（原本を写真撮影により縮小印刷）として懷徳堂記念会から刊行されている。

### ●折本（おりほん）

横長の文書などを一定の寸法にジャバラ状に折り込み、前後に表紙をつけた本。卷子本が、いちいち広げたり巻き戻したりという不便さを抱えるのに対して、折本には、そうした作業の不便さはなく、その形態は、卷子本と線装本との中間に位置すると言える。法帖（習字の手本を集めた本）にこの形態が多かったことから、帖装本、法帖仕立などともいう。懐徳堂文庫の内、中井竹山の『蒙養篇』は折本に仕立てられたものの代表例である。

### ●懐徳堂蔵版（かいとくどうぞうばん）

懐徳堂所蔵の版木で刷った書物。中井木菟麻呂が幼時の記憶をたどって記したという「旧懐徳堂平面図」（『懐徳』9号）には、内玄関を入れて右手に続く長屋の奥、下男部屋の南が「学校版スリ部屋」となっており、木菟麻呂の妹・終子によれば、「逸史や通語の板木が置かれ、いつも職人が出入りして仕事をしていた」（同）という。現存する懐徳堂蔵版の内、著名なものとしては、五井蘭洲の『非物篇』、中井竹山の『非徴』、中井履軒の『華胥国物語』などがあり、また、『華胥国物語』など、その版木が残存しているものもある。

### ●書き入れ（かきいれ）

本を購入したり借りた読者が、その本に後から書き加えた文章や符号、あるいはそれを別の人が書き写したものの総称。墨筆で書かれることが多いが、朱墨などが用いられる場合もある。また、胡粉を用いてもともとあった文字や符号を塗りつぶし、その上に記したものや、角筆を用いたものなどもある。通常、本文の上下などにある空白の部分に記されるが、紙を貼り付けて記したものもある。書き入れのある本のことを、書き入れ本という。懐徳堂文庫には、中井履軒が経書の刊本に細字で詳細な書き入れをおこなった『七経雕題』を初め、中井蕉園・中井柚園らの書き入れ本が多数残されている。

### ●刊記・奥付（かんき おくづけ）

刊本で出版の年月日や出版地、出版者などを記した部分のことを刊記という。書物の最後の部分に付されることが多い。刊記の周囲が枠で囲まれていたり、あるいは鐘や鼎などの形の中にあるものは、特に木記と呼ばれる。また、刊記が文章として記されているものを刊語、刊記を巻末に別丁（別葉）にして付載したものを奥付という。例えば、懐徳堂文庫の内、五井蘭洲の『瑣語』には、「明和四年丁亥三月 大阪心齋橋筋 松村九兵衛 中橋筋北久太郎 町 井上丹六」との刊記が見える。なお、現在に至るまで日本の書籍の末尾に奥付が付される契機となったのは、享保7年（1722）に南町奉行大岡越前守によって出された御触書であるとされる。刊記の一般化に伴い、刊語は廃れていった。

### ●漢籍（かんせき）

国書（和書ともいう）と対になる語で、中国人により漢文で書かれた書籍のこと。<sup>かんしよ</sup>漢書、からぶみともいう。なお、本文が漢籍のままであり、日本人によって訓点が施されているだけのものなども漢籍と見なされる。ただし、本文の間に日本人の注釈が加筆され特別な書名があるものなどは、漢籍と見なされない場合があり、漢籍と国書との分類には難しい点がある。

例えば、懐徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』は、懐徳堂初代学主三宅石庵による『論語』と『孟子』の各首章についての講義を筆録したものである。『懐徳堂文庫図書目録』は、『論語』『孟子』に対する注釈という点を重視して「漢籍」に分類しているが、石庵の注釈部分が漢字片仮名交じり文で筆録されているという点では「国書」とも言える。また、五井蘭洲『非物篇』、中井竹山『非徴』は、ともに荻生徂徠に対する批判の書という点で「国書」に分類されているが、漢文で記された『論語』の注釈という点では、むしろ「漢籍」に近い。

### ●卷子本（かんすぼん）

書物を巻物の形にしたもの。紙を横に長く継ぎ合わせて軸に巻き、のべ広げて読むように装訂してある。けんすぼんとも読む。中国では、紙が発明された漢代から唐代まで用いられたが、木版印刷が盛行し線装本が主流となった宋代以降少なくなった。日本では、江戸時代にも往々にして見られた。特に絵入りのものは絵巻物として珍重されている。懐徳堂文庫本の内、中井竹山の『中庸錯簡説』、中井履軒の『老婆心』、『履軒先生行状』などは卷子本仕立てになっている。

### ●活版本（かっぱんぼん）

活字を組んで印刷した本。<sup>えんいんぼん</sup>鉛印本とも言う。

### ●刊本（かんぼん）

印刷されて出版された本。特に、木版印刷の本を言う場合が多い。版本、<sup>すりぼん</sup>摺本、印本などとも言う。



### ●匡郭（きょうかく）

版本の版面の本文の四周を囲む枠。単に枠とも言う。毎葉の上下左右が一重の枠となっているものを四周<sup>ししゅうたんべん</sup>単辺、二重枠になっているものを四周<sup>ししゅうそうべん</sup>双辺、左右のみが二重で上下は一重枠のものを左右<sup>さゆうそうべん</sup>双辺と言う。二重枠（双辺）は、通常、外側が太く内側が細くなっているの

で、子持枠、子持輪郭などとも言う。また、匡郭に囲まれた版面の各行の縦線を野・界・界線、界線があるものを有界と言い、匡郭がないものを無枠・無匡郭、界線がないものを無野・無界などと言う。また、匡郭内の文字数は、毎半ごとに表記する。

例えば、懷徳堂文庫所蔵本の内、五井蘭洲の『瑣語』の版式は、「左右双辺」「有界」「毎半葉九行、毎行二十字」、中井竹山の『社倉私議』の版式は、「四周双辺」「無界」「毎半葉九行、毎行十八字~二十三字」、中井履軒が雕題を書き入れた『論語集註』のテキストは「四周单辺」「無界（ただし、篇と篇との境界は有界）」「毎半葉九行、毎行十七字、注文双注十七字」である。

### ●魚尾（ぎよび）

版心にある、魚の尾の形をしたもの（「」「」状のもの）のこと。燕尾ともいう。さまざまな形のものがあるが、黒地のものを黒魚尾、白地のものを白魚尾という。また版本によって、魚尾がないもの、一つだけのもの（単魚尾）、二つあるもの（双魚尾）などがある。二つある場合、版心上部にあるものを上魚尾、版心下部にあるものを下魚尾といい、上魚尾と下魚尾とが同じ向きのもので、逆を向いているものがある。現在の原稿用紙の中央部に、その名残を見ることができる。

### ●極め書き・極め札（きわめがき きわめふだ）

鑑定書き。ある本の内容について、その筆者・真贋などについて鑑定した一種の証明書。数行で記され、単に極めともいう。鑑定家が乱発した場合もあり、全面的に信用することはできない。

### ●国書・和本（こくしょ わほん）

国書とは、漢籍と対になる語で、日本人によって書かれた書籍のことを指す。和書ともいう。ただし、日本人が注釈を加えたり編集をした書籍などについて、漢籍と国書との分類には難しい点がある。漢籍・国書が内容について分類したものであるのに対して、和本・唐本は出版が行われたところによって分類した語で、和本とは、日本で出版された和装の書籍のことを、また唐本とは、中国で出版された書籍のことを、それぞれ指す。懷徳堂文庫の書籍は、圧倒的に漢籍が多く、また貴重書も経学研究を中心とした漢籍に集中しているが、例えば、五井蘭洲が『古今和歌集』に施した註釈である『古今通』、中井履軒が理想の国の有様を流麗な仮名文で記した『華胥国物語』などは国書の代表例である。

### ●賛（さん）

絵画の中にその絵に関する内容の詩・文などを書きつけること。また、その詩・文。画賛、<sup>がさん</sup>讚、画讚とも言う。もとは、漢文の文体の名で、人物や事物を賞賛する韻文を意味した。懐徳堂文庫所蔵絵画の内、<sup>ぼくぎくず</sup>「墨菊図」には中井覺庵の賛、<sup>らんこう</sup>中井藍江の筆による「中井竹山肖像画」には竹山自身の賛が記されている。また岩崎象外が猿蟹合戦を主題として描いた「<sup>かいし</sup>解師伐袁図」には、中井履軒が『春秋左氏伝』の文体を巧みに模倣した長文の賛を記している。

### ●識語・奥書（しきご おくがき）

版本であれ、写本であれ、その本が作り上げられるまでにはなく、その本を購入したり借りた読者が後から書き加えた文章のことを、識語という。書かれている場所は問わない。その本の成立や来歴に関わる貴重な情報となることもあるが、すべて信頼できるわけではなく、逆に誤った情報であることもある。奥書とは、書物の末尾に書き加えられた文章のことで、一般に識語に含まれるとされる。奥書の内容は、書物の制作や書写・校訂の経緯、あるいは補修に関するものから、読後の感想などの場合もある。書写を重ねた場合は、その都度奥書が加えられる。例えば、懐徳堂文庫本の内、中井履軒『戦国策雕題』の来歴が同書に記された伊藤介夫の識語によって分かり、『論語聞書』各冊の講義者が同書の識語によって分かり、『中庸懐徳堂定本』巻末に中井焦園の識語が付されている、といった具合である。

### ●自筆本・手稿本（じひつほん しゅこうほん）

編著者自ら手書きした本。自筆鈔本・自筆抄本ともいう。この内、特に草稿の段階で印刷には至らなかったものを手稿本・自筆稿本という。また、編著者以外の著名人が手書きしたものを、<sup>しゅしゃほん</sup>手写本・<sup>しゅひつほん</sup>手筆本・<sup>しゅしょうほん</sup>手鈔本などという。懐徳堂文庫には、五井蘭洲の『勢語通』、中井竹山の『草茅危言』『社倉私議』、中井履軒の『深衣図解』『越俎弄筆』『通語』、並河寒泉の『辨怪』など、多くの自筆本・手稿本が残されている。

### ●写本（しゃほん）

手書きによって記された本。<sup>しょうほん</sup>鈔本・<sup>しょうほん</sup>抄本は、もと漢語であるが同意。ただし、日本語で抄本という場合、書き抜きの本（抄録された抜粋本）を指すことがある。写本に対して、印刷刊行された本を版本、刊本という。

### ●首書（しゅしょ）

書物の本文の上方に記された注釈や批評。かしらがきとも読む。<sup>とうしょ</sup>頭書・<sup>ごうとう</sup>龍頭・<sup>びひょう</sup>眉標ともいう。首書のある本を、首書本・頭書本・龍頭本などという。懐徳堂文庫には、中井履軒の『七経雕題』を初め、首書本が多くみられる。『竹山先生首書近思録』『蕉園首書春秋左氏伝』な

どもその例である。

### ●序・自序（じょ じじょ）

編著の経緯などについて記した、まえがき・はしがきのこと。自序とは、編著者自身が記した序のことをいう。これに対して、師・先輩・友人などが書いたものは他序という。序文に記された編著の経緯は、その書物の由来を知る上で重要である。例えば、懷徳堂文庫本では、中井竹山が著した徳川家康の一代記『逸史』に竹山の自序があり、また、同じく竹山が松平定信に献上した『草茅危言』にも自序が記されている。

### ●線装本（せんそうぼん）

冊子本の綴じ方の一つ。紙の文字面を外にして一枚ずつ縦に二つ折りとし、それらを重ねて折り目と反対側を糸で袋綴じしたもの。中国から日本に伝わり、江戸期板本・写本における最も普通の形態となって、「袋綴じ」と呼ばれた。「線装」とは糸綴じのこと。糸穴が四つあるものが通常で、これを「四針眼訂法」「<sup>ししんがんでいぼう</sup>四つ目綴じ」などという。線装本の綴じ方とは反対に、一枚ずつ折り目の外側に糊をつけて表紙裏に貼り付けたものを、「<sup>でっしょうそう</sup>粘葉装」「<sup>こちよう</sup>胡蝶装」などという。懷徳堂文庫所蔵の写本・刊本のほとんどは線装本である。

### ●題簽・外題（だいせん・げだい）

表紙に記された書名を外題または標題・表題などといい、特に、紙・布などを表紙に貼り付け、そこに書名を記したものを題簽という。通常は、表紙の左肩に張られるが、和本では、表紙の中央に張られているものも多い。また、外題の文字が印刷されている場合は、印刷外題、手書きの場合は、<sup>かきげだい</sup>書外題、<sup>にくひつげだい</sup>肉筆外題、書題簽などという。また、題簽にではなく表紙に直接書きつけたものを、「打付け書き」または「直書き」と称する。

なお、外題は、筆者自身ではなく、出版者や後人が加える場合もあり、内題と異なることもあるから注意を要する。また、版本の書名のみを新しく刷り直して新版らしく見せかけた刊本を、特に<sup>げだいがえぼん</sup>外題換本という。懷徳堂文庫の内、例えば、三宅石庵の講義録は、内題としては「官許学問所懷徳堂講義」と記されるが、後に加えられたと思われる表紙題簽および扉には「萬年先生論孟首章講義」と記されている。

### ●帙（ちつ）

古書を保護するためのおおい。厚紙に布などを張って作り、数冊をまとめてくるむ。<sup>しよちつ</sup>書帙、<sup>とう</sup>套、<sup>しよとう</sup>書套、<sup>とうす</sup>套子ともいう。帙に記された書名を帙題簽という。懷徳堂文庫本の内、漢籍、国書の貴重書のほとんどは、藍色の帙に収められている。また、その題簽は、懷徳堂記念会の

書記を長年勤めた藤塚誠二の筆による。

●注（頭注・旁注・割注・双注・脚注）（ちゅう（とうちゅう ぼうちゅう わりちゅう そうちゅう きやくちゅう））

本文に対して、その意味内容などを説明した文章のことを注という。本文の上方にあるものを頭注（首書（かしらがき）ともいう）、本文の横（行間）にあるものを傍注（旁注ともいう）、本文の下方にあるものを脚注、本文の途中に、二行の小字で入れられたものを割注（双注ともいう）という。なお、懷徳堂文庫本の内、「<sup>ちようだい</sup>雕題」と呼ばれる中井履軒の注釈は、『礼記』王制篇の「南方を蛮と曰う、<sup>ひたい きぎ</sup>題を雕み趾を交え、火食せざる者有り」に因み、額に入墨するという意味から転じて刊本に記した頭注を意味する。そうした履軒の注釈書としては、『七経雕題』『史記雕題』『莊子雕題』『古文真宝雕題』『天経或問雕題』などがあり、これらは<sup>しゆしよばん</sup>首書本と呼ばれる。ただし、履軒の雕題は、刊本欄外の上部に書ききれなくなると、下欄や葉の綴じ目付近に記されることもあり、実際には頭注のみではない。

●底本（ていほん・そこほん）

校訂・翻訳・抄写・影印などの際に、拠り所とした原本。例えば、中井履軒の『論語雕題』は、『三刻両銭堂刊朱熹集註論語』十巻を底本として、欄外に注釈を加えたものであり、明治44年（1911）に懷徳堂記念会から刊行された『<sup>もうようへん</sup>蒙養篇』は、中井竹山手稿『蒙養篇』を底本として活字翻刻したものである。

●内題（ないだい）

書物の扉、または本文の初めに記された書名。これに対して、表紙に記された書名を外題という。外題は筆者自身ではなく、出版者や後人によって加えられる場合もあり、内題と外題が一致しないことも多い。例えば、中井竹山の『詩経』注釈書は、内題は「詩経」、外題（書題簽）は「詩集傳」となっており、また、中井履軒は、『史記雕題』を撰した際、底本として用いた『史記評林』の題簽の「評林」の二字を削って、自ら「<sup>きくし</sup>史記削柿」と書いている、など内題と外題の不一致は懷徳堂文庫本にも多く見られる。

●跋・後序（ばつ こうじょ）

序に対して、書物などの末尾に記された、あとがきのこと。<sup>ばつぶん</sup>跋文、<sup>こうばつ</sup>後跋、後序などともいう。編著者自身が記した場合は<sup>じばつ</sup>自跋といい、師・先輩・友人・弟子などが書いたものは他跋という。感想や批評、その書物の来歴などを記すことが多い。例えば、懷徳堂文庫本では、五井蘭州が著した漢文随筆『瑣語』の巻末には、中井竹山の跋が記されている。



### ●版心（はんしん）

線装本（袋綴じ）では、印刷されたそれぞれの紙を、文字面を外側にして縦に二つ折りにし、それを重ねて綴じる。版心とは、それぞれの紙の折り目となる、本文の記されていない部分のこと。<sup>はしら</sup>柱・板口・書口などともいう。ここに、<sup>ぎよび</sup>魚尾、書名、巻数、丁数（葉数）、字数、<sup>こっこう</sup>刻工（版木を彫った職人）の名などを記すことが多い。また、版心上部が白いものを白口、黒いものや縦に黒い線があるものを<sup>こっこう</sup>黒口という。例えば、天明4年（1784）に懐徳堂から刊行された五井蘭洲の『非物篇』、中井竹山の『非徴』の各版心には、ともに、篇名、丁数、懐徳堂蔵版であることを示す「懐徳堂」の文字が記されており、魚尾はなく、白口である。なお版心は、現在の原稿用紙の中央部に、その名残を見ることができる。

### ●版本（板本）（はんぼん）

版木に文字などを彫って印刷した本。印本、刻本、刊本とも言う。これに対して、手書きの本を稿本、写本という。

### ●尾題（びだい）

<sup>ないだい</sup>内題の一つで、篇や巻の本文の最後に記されている題名のこと。<sup>おくだい</sup>奥題ともいい、<sup>かんしゅだい</sup>巻首題（本文の冒頭に記された題）と対応する。

### ●袋綴じ（ふくろとじ）

冊子本の綴じ方の一つ。線装本の日本的呼び方。用紙が中心で縦に二つ折りにされ、袋状になっていることによる俗称である。

### ●覆刻本・復刻本（ふっこくほん ふっこくほん）

原本を再刊する場合、原本の版下を使用するか、または原本と同じ体裁の版下をつくって原本通り複製した本。または覆刊本、復刻本、<sup>じゅういんぼん</sup>重印本ともいう。なお、大阪大学懐徳堂文庫復刻刊行会監修の『懐徳堂文庫復刻叢書』（懐徳堂友の会発行、吉川弘文館発売。現在、『非徴』『非物篇』『華胥国物語』など10種）は、原本を写真撮影により縮小印刷したものであるから、厳密に言えば、影印本である。

### ●付訓・訓点（ふくん くんてん）

漢文を訓読する際に加える返り点・送りがな・句読点などをまとめて訓点と呼ぶ。訓読は、漢文を巧みに日本語として訳読するものだが、漢文の語順と日本語の語順とは異なるため、

日本語の語順に合わせるための工夫として、レ（かりがね・れ）点、一・二・三・四点、上・中・下点、甲・乙・丙点、天・地・人点などの返り点を漢字の左下に付けて、読む漢字の順序を示す。また、日本語の用言の活用語尾や助詞・助動詞などを、送りがなとして、漢字の右下に片仮名で添える。また漢字の字音や訓を書き添えることも多い。漢文を訓読し句読点・訓点を施すことを付訓という。懐徳堂文庫所蔵の漢籍には、和刻本に付された従来の句点、返り点、送りがななどについて、中井履軒が胡粉で丁寧<sup>ていねい</sup>に塗抹し、その上に訂正を記したものもある。これら独自の訓読法を履軒は「水哉館読法」と称し、その読法によって経書を注解したものに、『水哉館読法礼記』『水哉館読法書経』などの著がある。

### ●葉・丁（よう ちょう）

印刷された紙を数える時の言葉。葉・丁も同じ意味。版本では、印刷されたそれぞれの紙を、文字面を外側にして二つ折りにするので、一葉（一丁）が表・裏の2ページになり、1ページ分を半葉という。葉が脱落している場合を「欠葉」<sup>けつよう</sup>・「落丁」<sup>らくちょう</sup>と呼ぶ。また丁の順序が乱れている場合を「乱丁」<sup>らんちょう</sup>と呼ぶ。一般に、書籍の行格（字詰のこと）は半葉を基準とし、「每半葉〇行、行〇字」（1ページ毎の行数は〇行で、1行の字数は〇字、の意）と表す。例えば、五井蘭洲の『瑣語』の行格は、「每半葉九行、每行二十字」である。またほとんどの版本では、丁数（葉数）を版心<sup>はんしん</sup>に記す。序、本文、跋<sup>ばつ</sup>で、それぞれ丁数を別に数えることが多い。

### ●和刻本（わこくほん）

日本で出版された書籍のこと。和本<sup>わほん</sup>（日本で出版された書籍）には写本も刊本も含まれるが、和刻本は刊本のみを指す。また、整版<sup>せいばん</sup>（版木を用いて印刷したもの）だけでなく、活字版<sup>かっじばん</sup>（活字を用いて印刷したもの）も含む。和板<sup>わばん</sup>ともいう。中井履軒の漢籍研究は、既存の和刻本の欄外に注釈を書き入れるという形式のもの（雕題）が多く、例えば、『尚書雕題』『詩雕題』『史記雕題』『後漢書雕題』『三国志雕題』などは、江戸時代に出版された和刻本を底本とし、その欄外に注釈を書き入れるとともに、その句点、返り点、送りがななどについても、胡粉で丁寧<sup>ていねい</sup>に塗抹し、訂正を加えている場合がある。

## 附録1 懐徳堂文庫の歴史

懐徳堂関係資料が大阪大学附属図書館貴重図書室に配架されるまでの概略を、以下に年表としてまとめる。なお、懐徳堂自体の歴史の詳細については、本文「4. 懐徳堂年表」参照。

- 享保9 (1724) 懐徳堂、開学
- 享保11 (1726) 懐徳堂、官許。
- 明治2 (1869) 懐徳堂、閉校。
- 明治43 (1910) 西村天囚、「五井蘭洲伝」を講演、懐徳堂記念会、設立。中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』執筆。
- 明治44 (1911) 府立大阪博物場美術館において懐徳堂先賢遺書遺物展観開催。懐徳堂師儒公祭挙行される。西村天囚『懐徳堂考』刊行。懐徳堂記念会から『懐徳堂五種』『懐徳堂印存』など刊行される。
- 大正2 (1913) 懐徳堂記念会、財団法人として認可される。
- 大正5 (1916) 大阪市東区豊後町19番地に重建懐徳堂竣工、松山直蔵を教授として招聘。
- 大正11 (1922) 孔子没後2400年記念事業として、孔子祭を挙げる。
- 大正12 (1923) 孔子没後2400年記念刊行として、武内義雄講師校訂の『論語義疏』、懐徳堂より出版される。
- 大正13 (1924) 懐徳堂堂友会、『懐徳』を創刊。
- 大正14 (1925) 『懐徳堂文科学術講演集』『懐徳堂百科通俗講演集第一輯』刊行。西村天囚旧蔵書、碩園記念文庫として懐徳堂に寄贈される。
- 大正15 (1926) 懐徳堂創学200年、重建懐徳堂10周年記念として懐徳堂書庫ならびに研究室竣工。『懐徳堂要覧』刊行。
- 昭和6 (1931) 中井木菟麻呂「旧懐徳堂平面図」作成。
- 昭和7 (1932) 中井木菟麻呂、中井家伝来の懐徳堂関係資料を懐徳堂記念会に寄贈。
- 昭和11 (1936) 中国の精華大学教授劉文典来堂、碩園文庫の調査研究を行う。
- 昭和14 (1939) 中井木菟麻呂、昭和7年に続き、中井家伝来資料を懐徳堂記念会に寄贈。伊藤介夫遺族より、旧懐徳堂図書寄贈される。
- 昭和17 (1942) 重建懐徳堂25周年記念事業として中井竹山『草茅危言』を刊行。
- 昭和20.3 重建懐徳堂、大阪大空襲により、書庫棟を残して焼失。
- 昭和24.12.26 懐徳堂記念会、戦災を免れた重建懐徳堂蔵書を一括して大阪大学に寄贈。「懐徳堂文庫」と命名され、受入先となった文学部が整理にあたる。(この当時、大阪大学附属図書館本館はまだ建設されておらず、各部局に文学部

- 分室、法学部分室のように分室が設けられていた。なお、分室は後に分館と改称された。)
- 昭和31. 3 懐徳堂文庫、文学部から附属図書館に管理換となる。但し、資料そのものは、文学部分館、文学部中国哲学研究室などに分散収蔵されたままであった。同年3月15日、吉田鋭雄（重建懐徳堂最後の教授、1879～1949）旧蔵漢籍約4400冊を「北山文庫」として受贈。
- 昭和35. 4 附属図書館本館（豊中地区）第一期工事完成。懐徳堂文庫、一部が図書館に移転。
- 昭和41. 3 附属図書館本館第二期工事（書庫棟2層の増築）完成。同年、懐徳堂文庫、一括して書庫棟第2層に収蔵される。但し、一部はなお文学部内にあった。
- 昭和45 『懐徳堂文庫図書目録』編纂のための総合調査始まる。これに併せて、文学部内に残されていた資料も、順次、書庫棟第2層に配架されていった。
- 昭和51. 3 『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部）刊行。
- 昭和54 新田和子（中井木菟麻呂の妹終子の養女）所蔵中井家関係資料受贈。第一次「新田文庫」。
- 昭和56. 6 附属図書館書庫棟が増築（3～6層）され、懐徳堂文庫は第6層の貴重図書コーナーに移転。
- 昭和58 「新田文庫」第二次受贈。計1800余点。
- 平成9. 12 附属図書館、懐徳堂資料の一部を電子化し、「電子展示」としてWWWで公開。
- 平成13. 5 大阪大学創立70周年記念事業で、懐徳堂貴重資料のデータベースおよび懐徳堂CG公開。
- 平成13. 8 懐徳堂文庫、附属図書館新館（平成12. 3. 28竣工）6階貴重図書室に総合移転。

## 附録 2 参考文献

### 【懐徳堂関係研究書・資料】

- ・中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』
- ・西村天因『懐徳堂考』
- ・懐徳堂記念会『懐徳』
- ・大阪大学文学部『懐徳堂文庫図書目録』
- ・大阪大学懐徳堂文庫復刊刊行会『懐徳堂文庫復刻叢書』
- ・懐徳堂記念会『懐徳堂の過去と現在』
- ・懐徳堂記念会『懐徳堂要覧』
- ・懐徳堂記念会『懐徳堂印存』
- ・大阪大学『懐徳堂の過去と現在』
- ・懐徳堂記念会『懐徳堂記念会の九十年』
- ・大阪市立博物館『懐徳堂—近世大阪の学校—』（第百三回特別展図録、1986年）
- ・懐徳堂友の会・懐徳堂記念会『懐徳堂—浪華の学問所—』（大阪大学出版会、1998年）
- ・龍野市立歴史文化資料館『龍野と懐徳堂』（特別展「龍野と懐徳堂—学問交流と藩政—」図録、2000年）
- ・脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』（大阪大学出版会、1997年）
- ・宮本又次『大阪文化史論』（文献出版、1979年）
- ・加地伸行ほか『中井竹山・中井履軒』（明德出版社、1980年）
- ・陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、1994年）
- ・湯浅邦弘編『懐徳堂事典』（大阪大学出版会、2001年）

### 【伝記・史料】

- ・原念斎『先哲叢談』
- ・角田九華『近世叢語』『続近世叢語』
- ・竹林貫一編『漢学者伝記集成』（名著刊行会）
- ・近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、1985年）
- ・三善貞司編『大阪史蹟辞典』（清文堂、1986年）
- ・三善貞司編『大阪人物辞典』（清文堂、2000年）
- ・鎌田春雄『近畿墓跡考大阪の部』（大鏡閣、1922年）
- ・市古貞次監修『国書人名辞典』（岩波書店、1993～99年）
- ・子安宣邦監修『日本思想史辞典』（ぺりかん社、2001年）

- ・関儀一郎・関義直『近世漢学者伝記著作大事典』(琳琅閣書店・井上書店、1943年)
- ・長沢規矩也『漢学者総覧』(汲古書院、1979年)
- ・日本随筆大成編集部『日本随筆大成』新装版第1期14(吉川弘文館、1993年)

#### 【書誌学】

- ・長澤規矩也『図書学辞典』(三省堂、1979年)
- ・川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、1982年)
- ・陳国慶著・沢谷昭次訳『漢籍版本入門』(研文出版、1984年)
- ・魏隠儒ほか著・波多野太郎ほか訳『漢籍版本のてびき』(東方書店、1987年)
- ・藤井隆『日本古典書誌学総説』(和泉書院、1991年)
- ・中野三敏『江戸の板本』(岩波書店、1995年)
- ・井上宗雄ほか『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、1999年)

#### 【学校・図書館史】

- ・笠井助治『近世藩校の総合的研究』(吉川弘文館、1960年)
- ・国立公文書館『内閣文庫百年史』(国立公文書館、1985年)
- ・特別史跡閑谷学校顕彰保存会『増訂閑谷学校史』(福武書店、1987年)
- ・梅溪昇・脇田修『平野含翠堂資料(清文堂資料叢書第四卷)』(清文堂出版、1973年)
- ・筑波大学中央図書館十周年事業計画委員会年史編纂部会『筑波大学図書館史』(筑波大学附属図書館、1989年)
- ・国立国会図書館『国立国会図書館三十年史』(国立国会図書館、1979年)

### 附録3 貴重資料画像データ状況（兼資料名索引）

今回のDB作成に際して、多くの貴重資料が写真撮影されデジタル画像化された。これにより、大阪大学所蔵の懐徳堂資料について、閲覧・貸出しが可能となった画像データの点数は格段に増加した。

また、平成13年度から3カ年計画で進行中の「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」（文部科学省科学研究費による）でも、更に貴重資料200点の撮影が計画されている。従って、現時点に於ける懐徳堂資料の画像データはソース別に次のように分類できる。

- ① 今回のDB作成に際して撮影され、デジタル画像化された資料（全てカラー、ポジフィルムとデジタル画像）。
- ② 財団法人懐徳堂記念会所蔵の写真ポジフィルム（一部モノクロ）。
- ③ 大阪大学附属図書館所蔵のフォトCD（附属図書館ホームページで公開されているデジタル画像、ほとんどは②をデジタル化したもの）。
- ④ 大阪大学70周年記念事業の後、「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」の一環として順次撮影中のもの（全てカラー、ポジフィルムとデジタル画像）。

次に、今回のDBに収録した各資料について、上記の類別を明示しつつ以下に列挙する。これは本稿の資料名索引を兼ねる。

#### 【凡例】

- |  |
|--|
| <p>A. 掲載順は資料名の50音順。</p> <p>B. 懐徳堂DBに使用したデータソース（上記の①～③に対応）。なお、この中には、①②に重複するデータもあるが、今回のDBでは①を優先して収録した。そのため、①でありかつ②であるものもある。こうした関係の詳細については、④の撮影が一段落した段階で、別稿に於て明らかにしたい。</p> <p>C. 本稿269頁以下に掲載した画像の通し番号。一は他書において既に画像が公開されており、今回割愛したもの。</p> <p>D. 本稿「2. 懐徳堂文庫」の該当頁数。</p> |
|--|

A 資料名	B データソース	C 画像番号	D 該当頁数
【ア】			
・ 有間星	①	62	121
・ 安永七年六月定	③	—	56
・ 逸史	①	20	45
・ 逸史自序進牋質疑	①	22	48
・ 逸史進牋草稿	①	21	47
・ 易断	①	07	27
・ 越史	①	76	146
・ 越俎弄筆	③	—	118
・ 翁の文	①	68	133
【カ】			
・ 解師伐袁凶	③	—	124
・ 懷徳堂永統助成金覚書	①	81	153
・ 懷徳堂瓦当拓本	③	—	57
・ 懷徳堂記	①	23	49
・ 懷徳堂記額	③	—	57
・ 懷徳堂義金簿	①	26	58
・ 懷徳堂蔵書目	①	82	154
・ 懷徳堂内事記	③	—	59
・ 懷徳堂幅	③	—	11
・ 華胥国新曆	①	53	108
・ 華胥国物語	①	63	122
・ 華胥国物語版木	①	83	155
・ 葛子琴刻印	①	27	60
・ 河凶累棊	①	43	92
・ かはしまものかたり	③	—	50
・ 紙製深衣	①③	64	124
・ 旧懷徳堂平面図	③	—	156
・ 孝経大義	①	34	69
・ 洪範懷徳堂定本	①	78	149
・ 後漢書雕題	①	39	87
・ 古今通	①	05	22

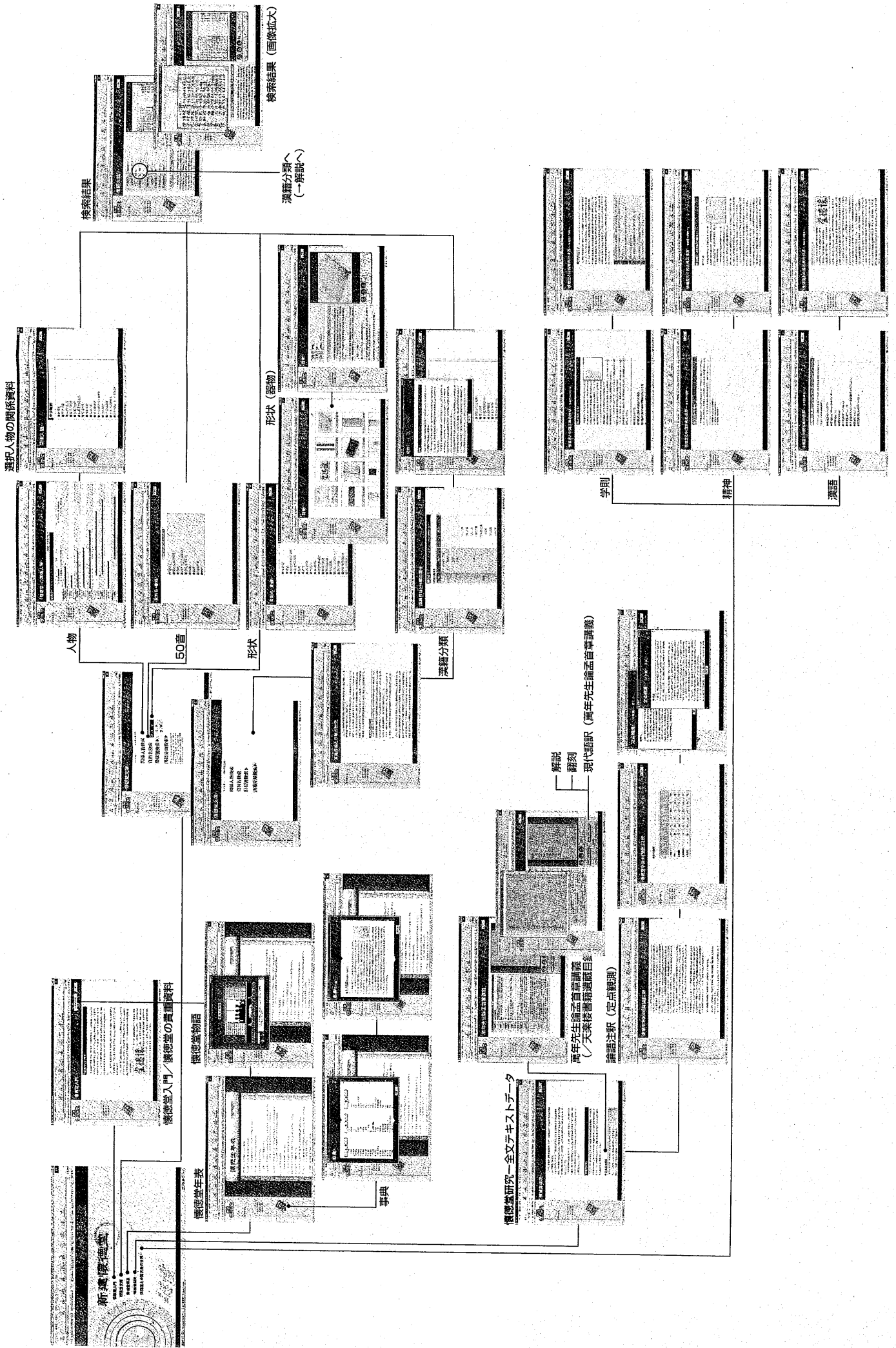


・古文真宝前後集雕題	①	51	104
【サ】			
・宰我の償（夢の代）	①	—	137
・再建前の懷徳堂図	③	—	16
・左九羅帖	③	—	125
・瓊語	①	04	21
・三貨図彙	①	—	137
・三国志雕題	①	40	89
・三国志雕題草本	①	41	90
・史記雕題 附 史記削柿	①	38	86
・四書句辨	①	11	32
・詩断	①	08	28
・七経雕題	①	35	70
・七経雕題略	①	36	75
・七経逢原	①	37	80
・社倉私議	①	15	38
・出懷徳堂歌	③	—	152
・出定後語	①	—	135
・朱文公大書拓本	①	28	60
・春秋左伝比事蹄	①	10	31
・蕉園首書詩経集註	①	71	139
・蕉園首書周易	①	70	138
・蕉園首書春秋左氏伝	①	73	142
・蕉園首書礼記集説	①	72	141
・小学雕題	①	45	95
・詩律兆	①	24	51
・深衣図解	③	—	65
・水哉子	①	54	109
・聖賢扇	③	—	126
・勢語通	①	06	24
・世説新語補雕題	①	47	98
・先君子逢原笈蓋表書	①	65	127
・戦国策雕題	①	42	91

・莊子雕題	①	48	100
・草茅危言	①	16	40
・宋六君子図	①	29	61
【夕】			
・竹山先生国字牘	①	17	41
・竹山先生首書近思録	①	12	34
・治水濶論	①	44	93
・中庸懷德堂定本	①	13	35
・中庸錯簡説	①	14	37
・中庸首章解	①	03	20
・中庸天樂楼定本	①	33	68
・潮図	③	—	130
・雕蟲自為	①	75	145
・雕蟲篇	①	77	148
・通語	①	60	117
・奠陰文集並詩集	①	25	53
・天経或問雕題	①	46	96
・天図（紙製）	③	—	128
・天図（木製）	③	—	128
・天樂楼書籍遺蔵目録	①	52	106
・唐詩選国字解	①	50	103
・東萊博議	①	74	144
・堂聯	①	30	62
・富永春芳尺牘	①	67	133
・度量衡考雕題	①	58	115
・度量考提要	①	59	116
【十】			
・中井竹山肖像画	③	—	63
・中井履軒肖像画	③	—	131
・並河寒泉翁像	①	80	152
・入徳門聯	③	—	64
【八】			
・白鹿洞書院揭示拓本	①	66	132

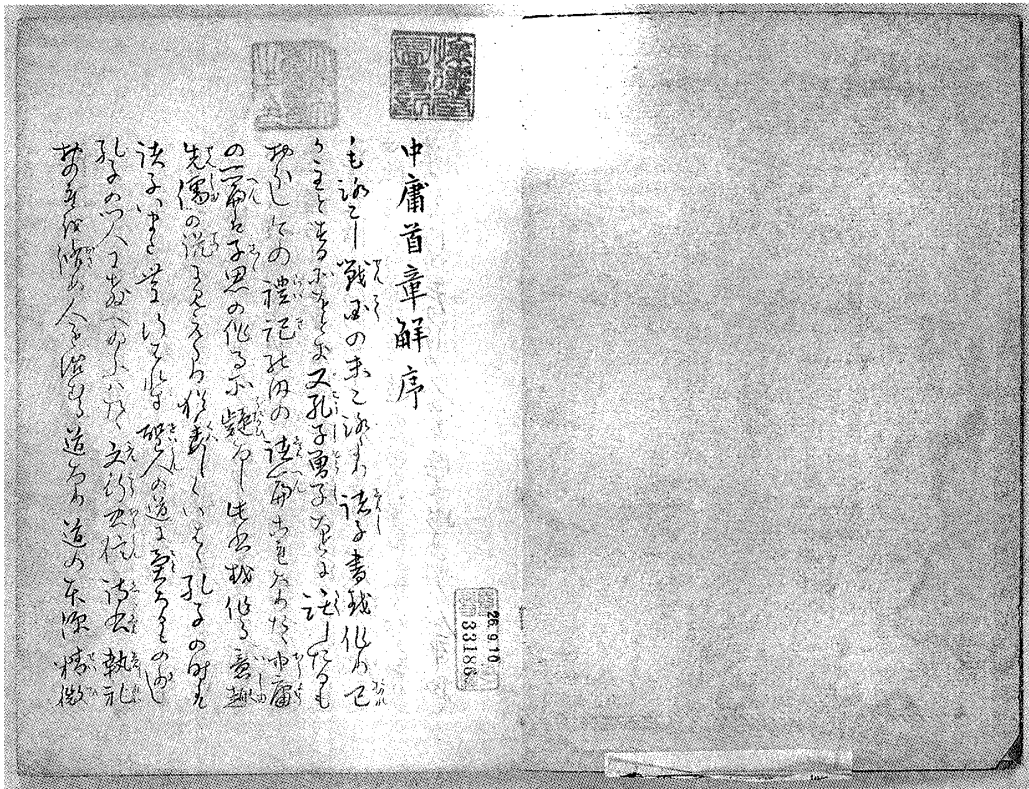
・非徴	①	18	42
・非物篇	①	02	18
・服忌図	①	32	66
・文恵先生襄事録	③	31	64
・辨怪	①	79	150
・方図	③	—	129
・宝暦八年定	③	—	25
・宝暦八年定約附記	③	—	26
・墨菊図	③	—	17
【マ】			
・万年先生論孟首章講義	③	—	12
・三宅石庵書状	③	—	15
・三輪執斎書状	③	—	17
・蒙養篇	①	19	44
【ラ】			
・履軒古風	①	55	110
・履軒数聞	①	56	112
・履軒弊帚	①	57	113
・柳文	①	49	101
・礼断	①	09	30
・老婆心	①	61	120
・論語聞書	①	01	14
・論語徴駁	①	69	135

# 附録4 懷徳堂データベース サイトMap

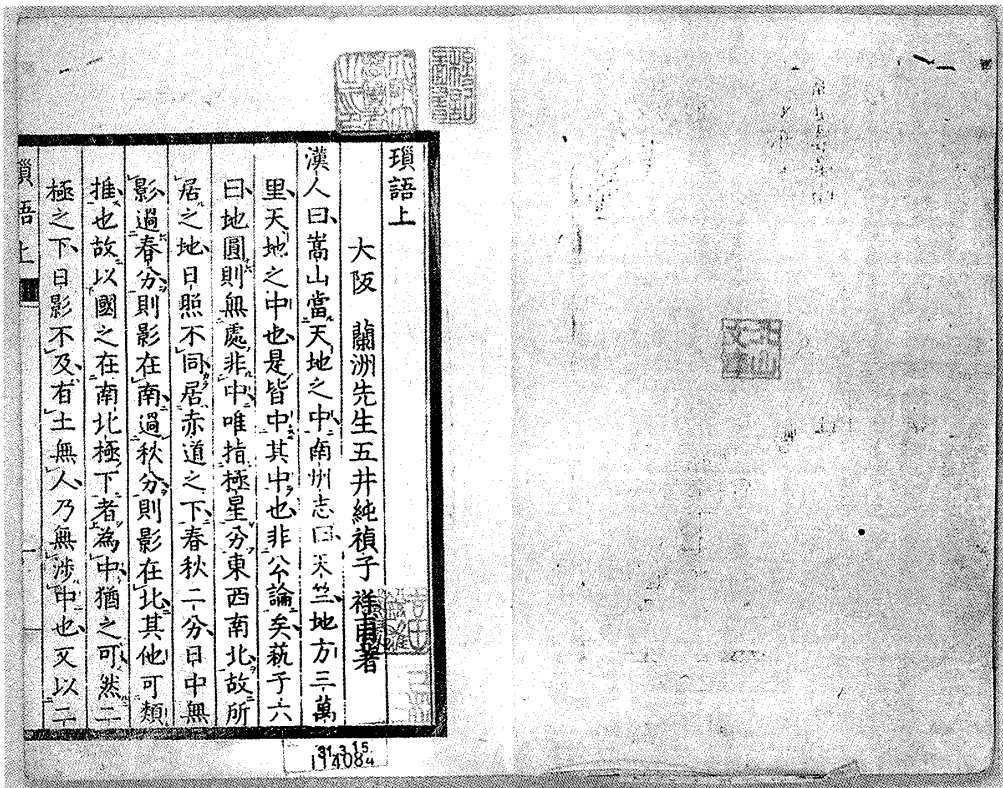


# 懷德堂文庫貴重資料画像

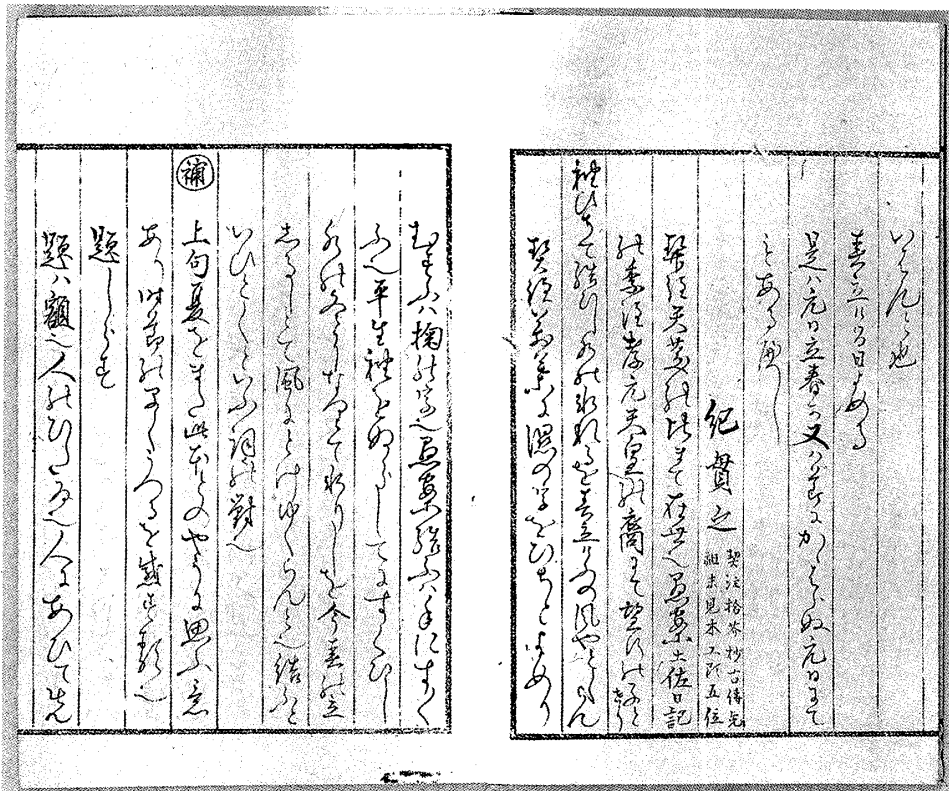




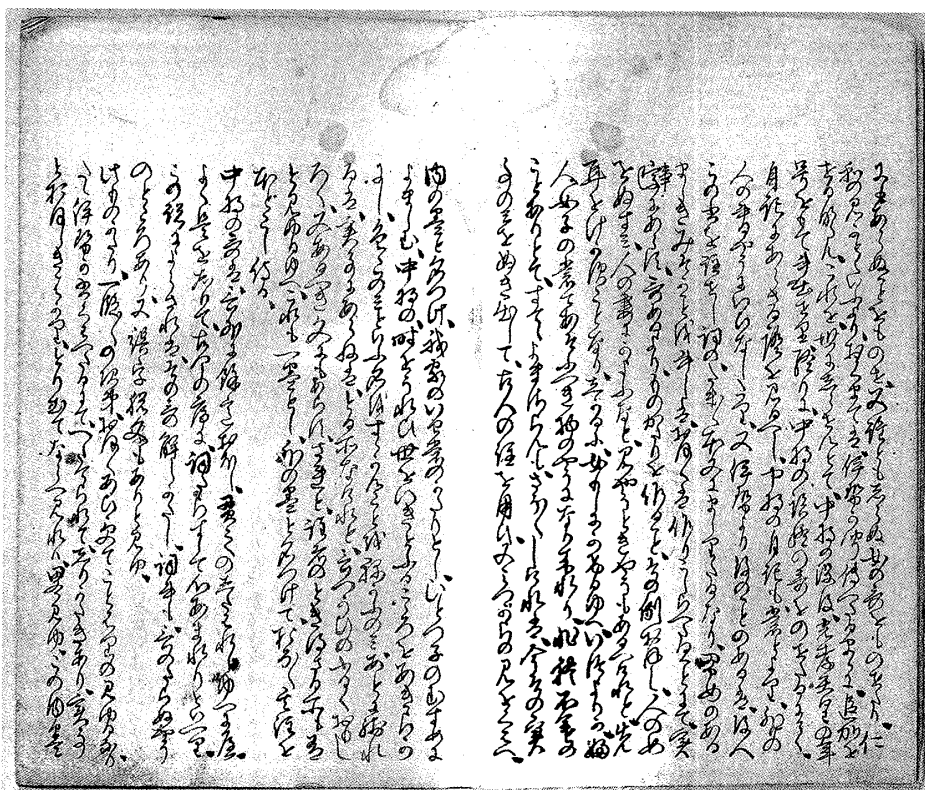
03. 中庸首章解 (20頁参照)



04. 瑣語 (21頁参照)



05. 古今通 (22頁参照)

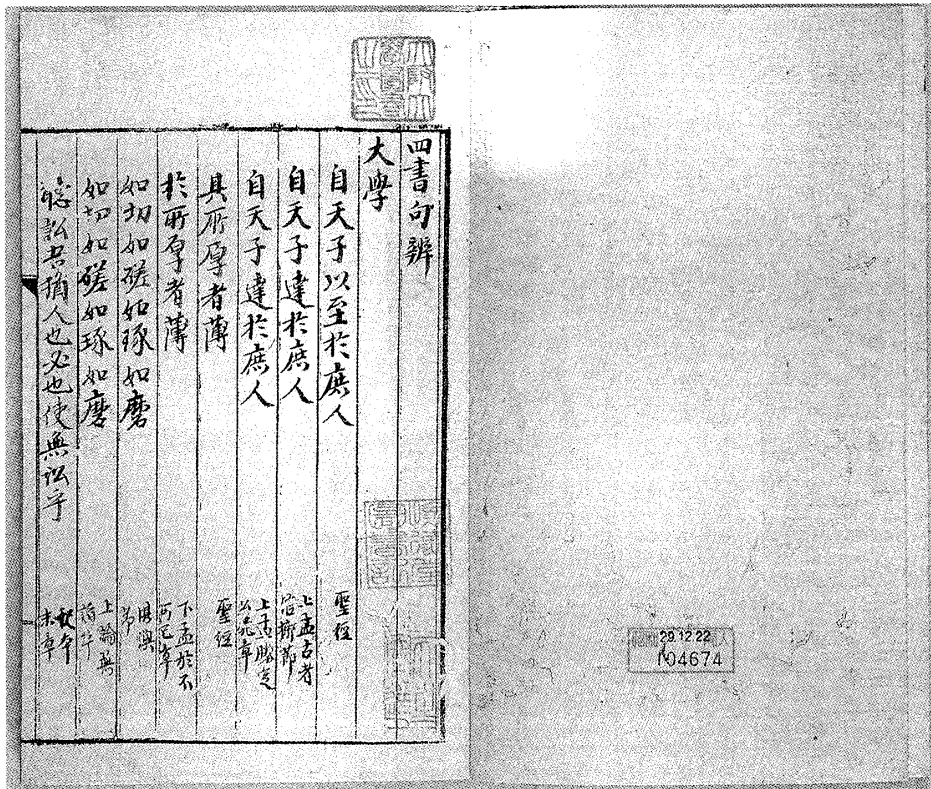


06. 勢語通 (24頁参照)





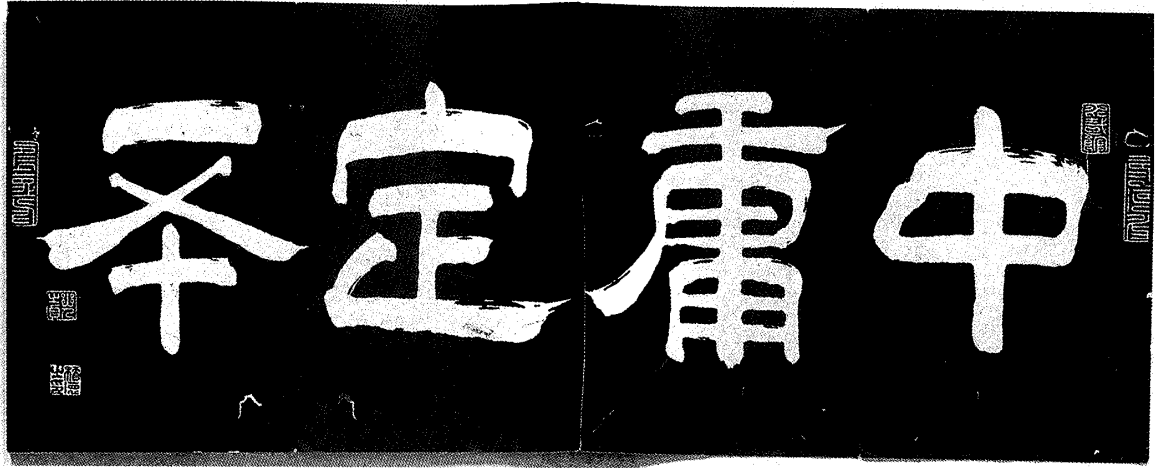




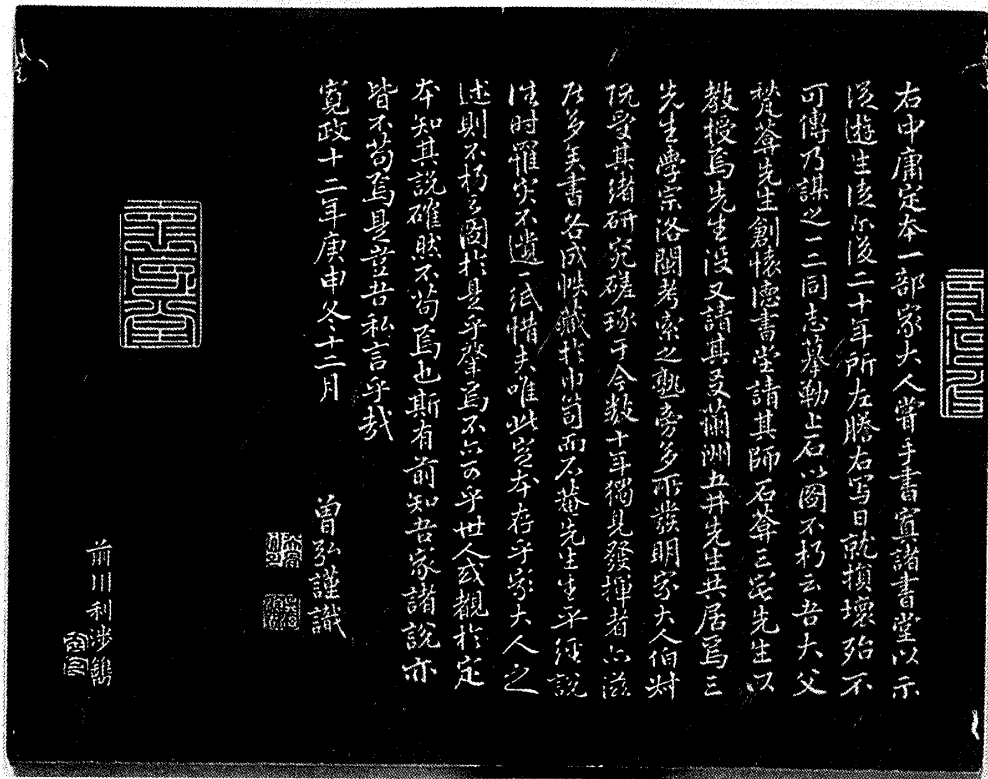
11. 四書句辨 大学の部 (32頁参照)



12. 竹山先生首書近思錄 (34頁参照)



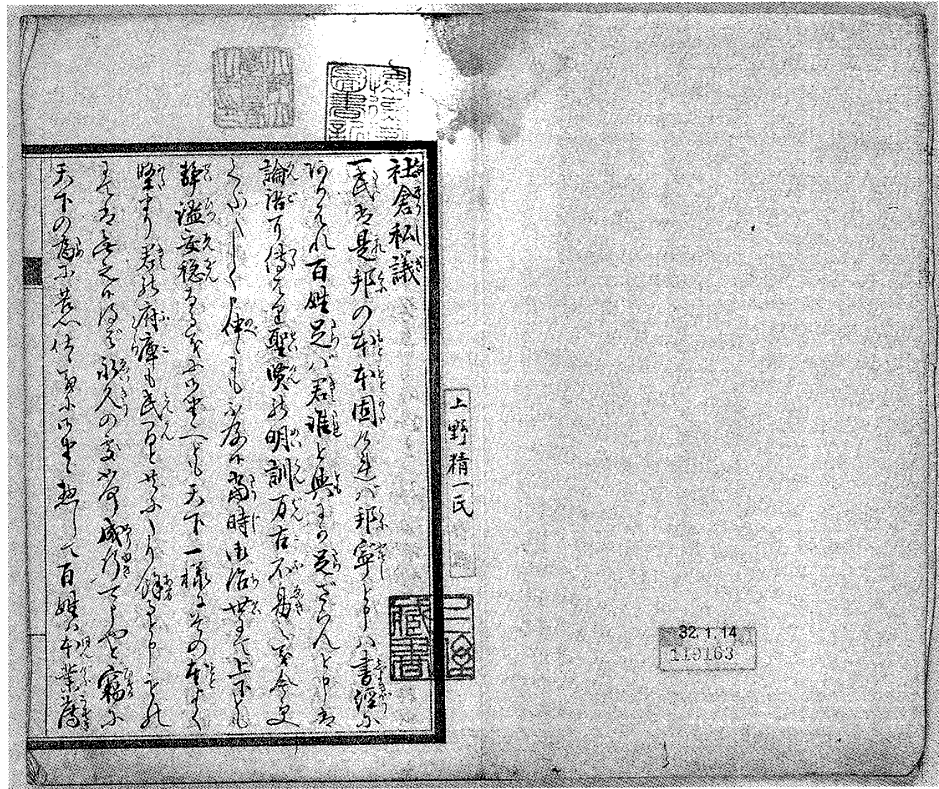
13-1. 中庸懷德堂定本 (35頁参照)



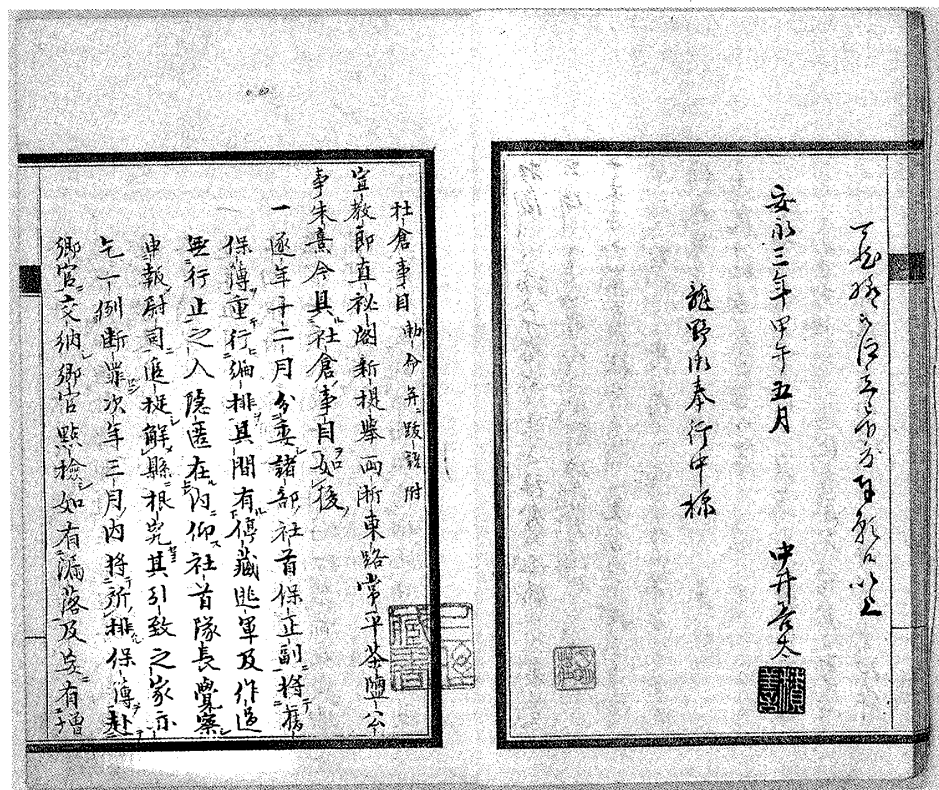
13-2. 同 中井蕉園識語部分



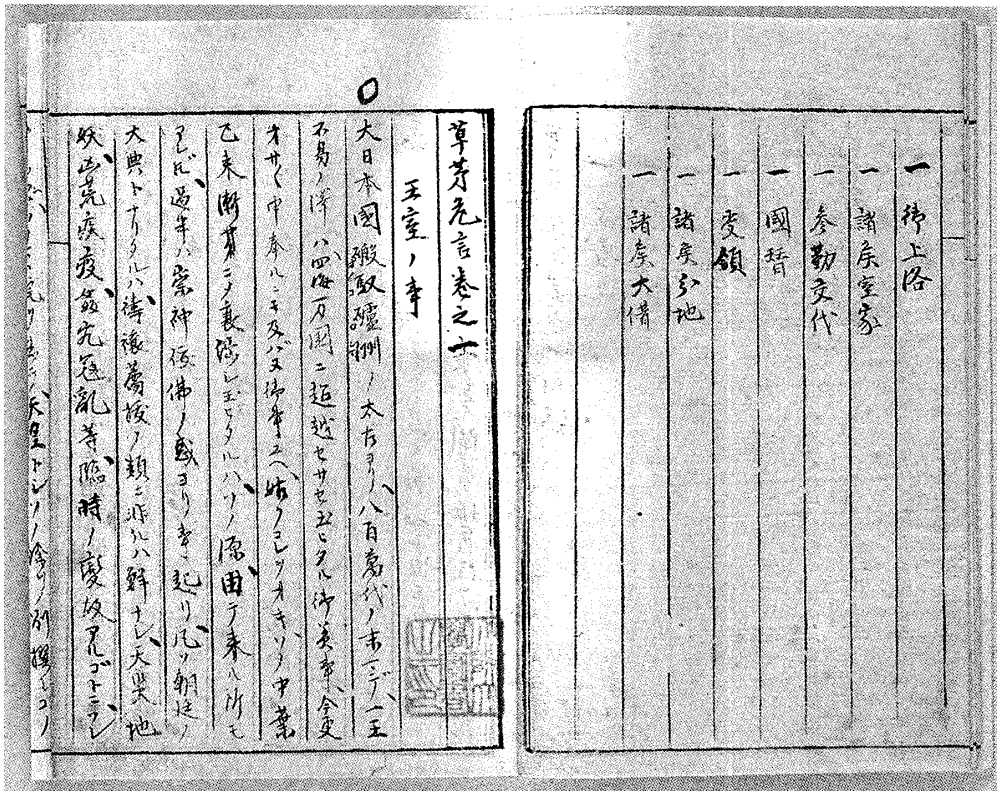
14. 中庸錯簡説 (37頁参照)



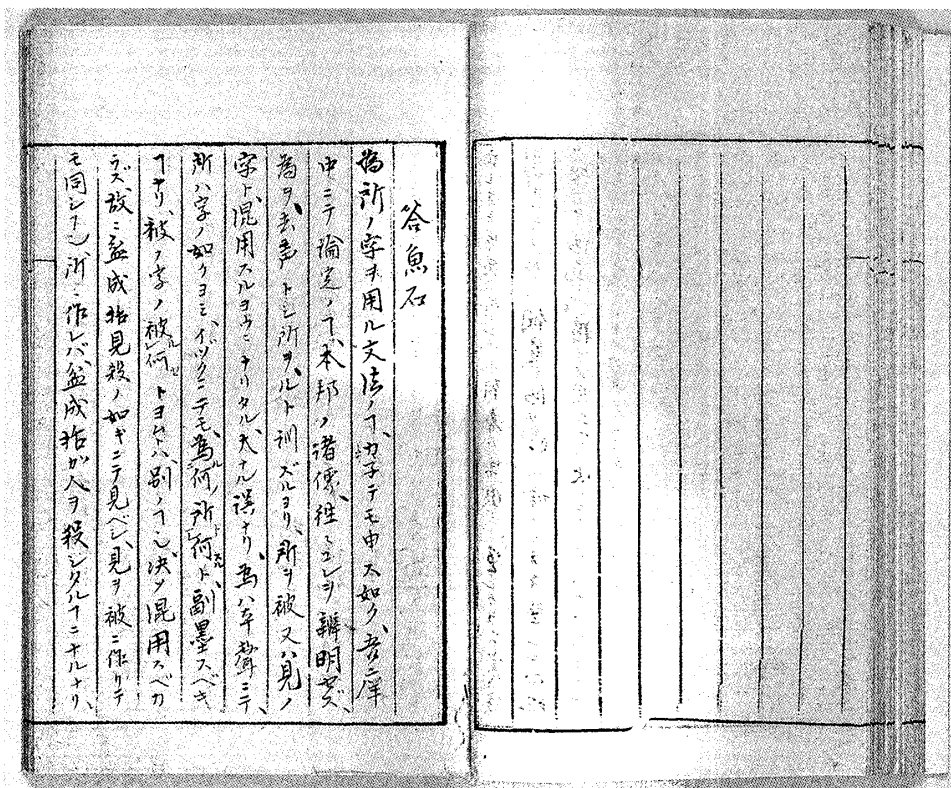
15-1. 社倉私議 冒頭部 (38頁参照)



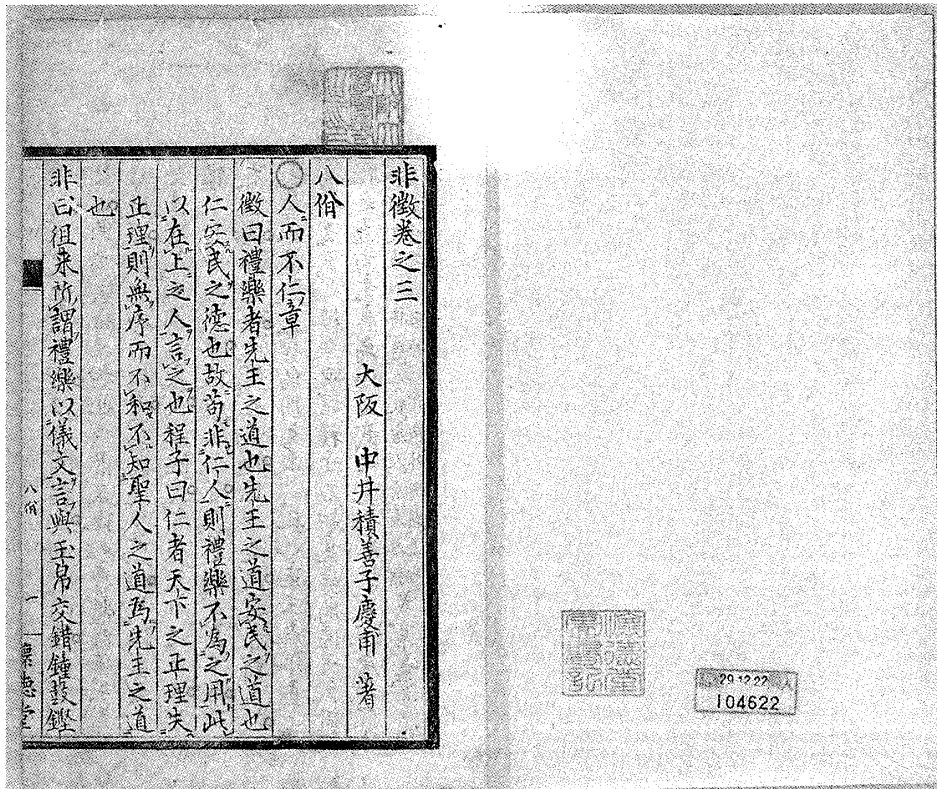
15-2. 社倉私議 「社倉事目 勅命 并跋語附」冒頭部



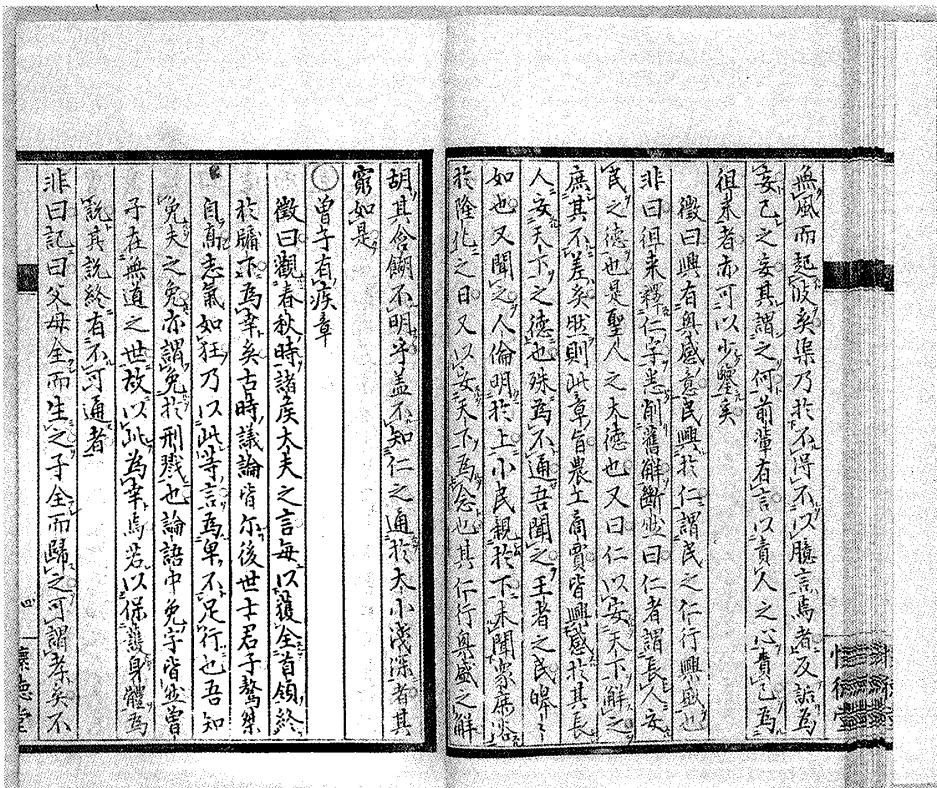
16. 草茅危言 卷一「王室ノ事」冒頭部 (40頁参照)



17. 竹山先生国字牘 「答魚石」部分 (41頁参照)



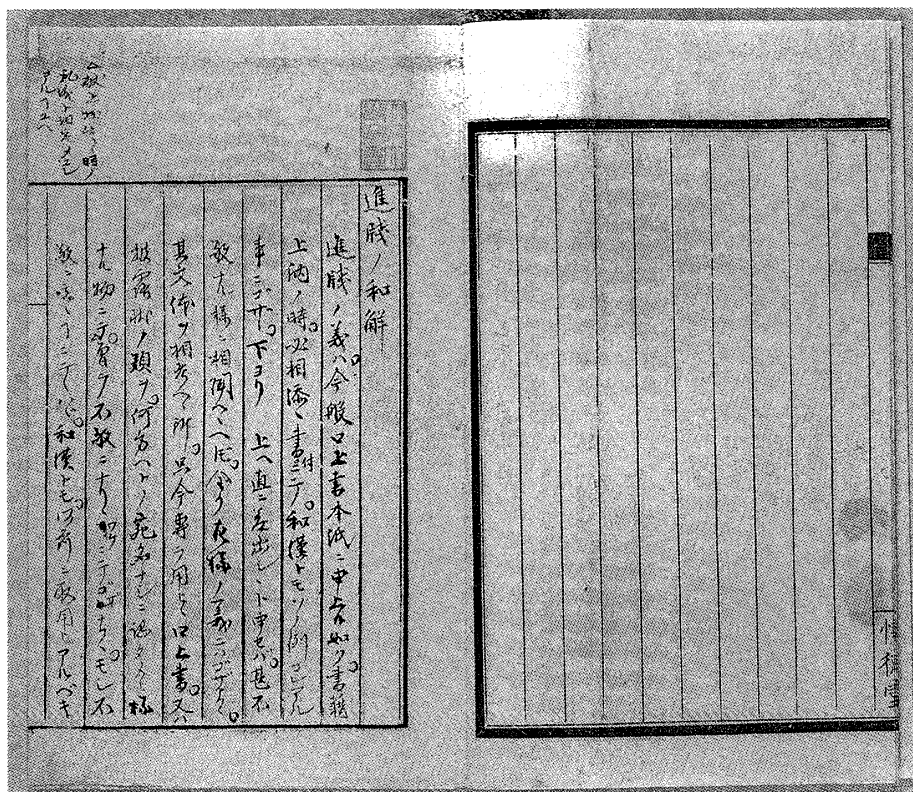
18-1. 非微 八俗篇冒頭部 (42頁参照)



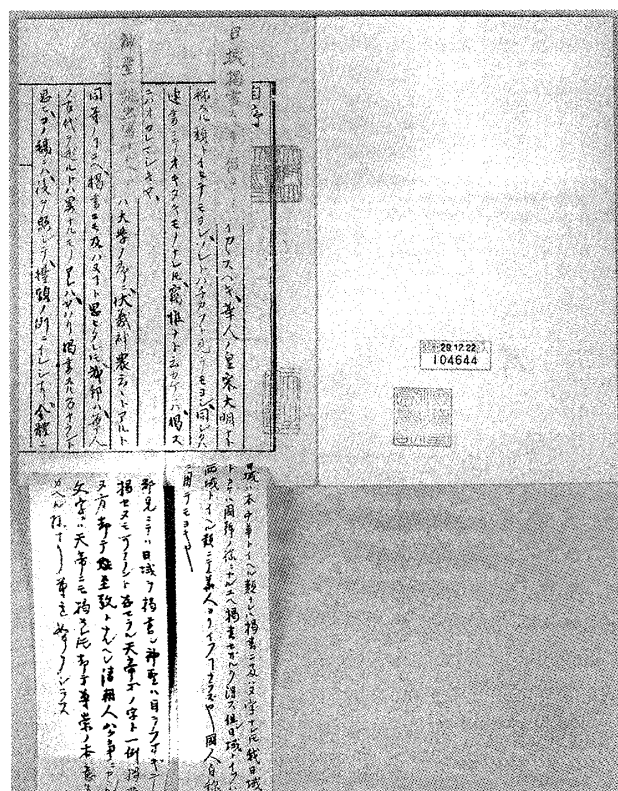
18-2. 同 曾子有疾章部分



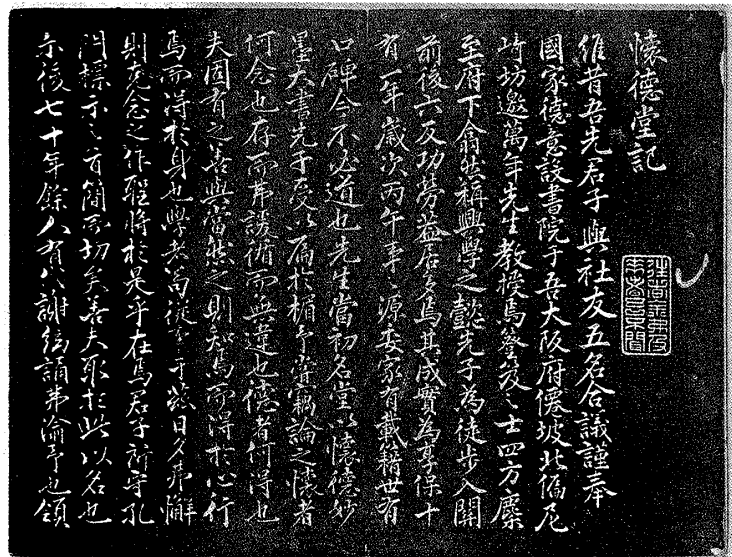
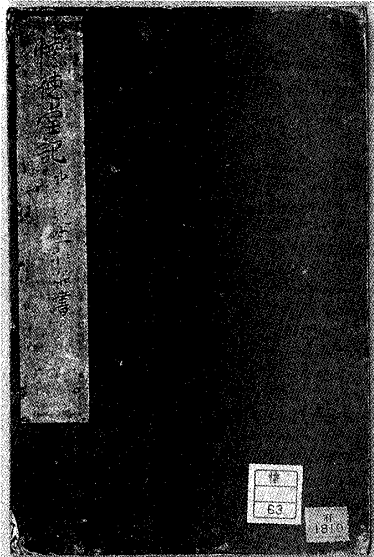




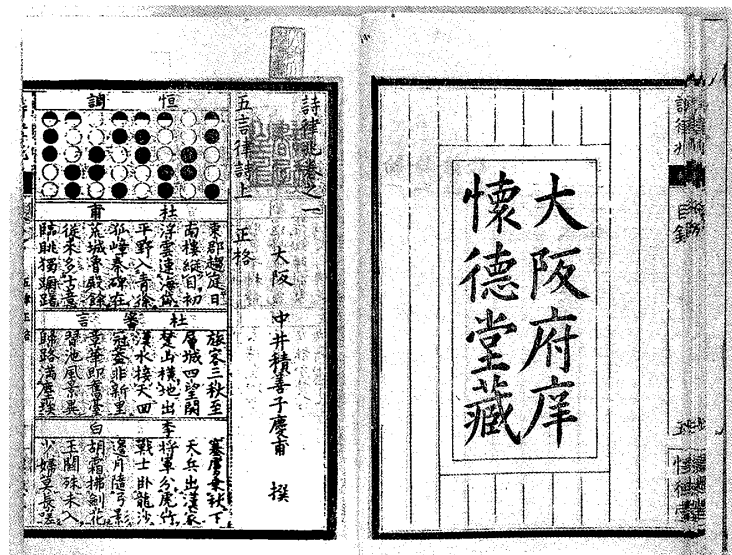
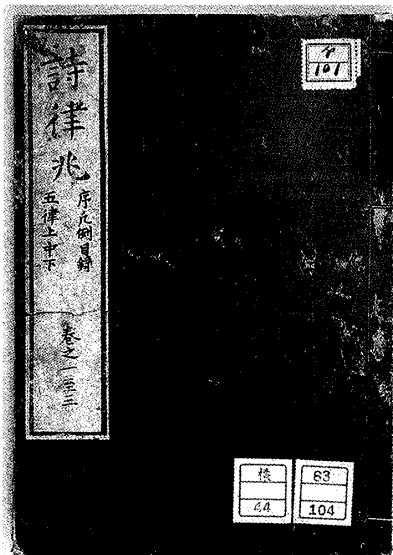
21. 逸史進戢草稿 「進戢ノ和解」部分 (47頁参照)



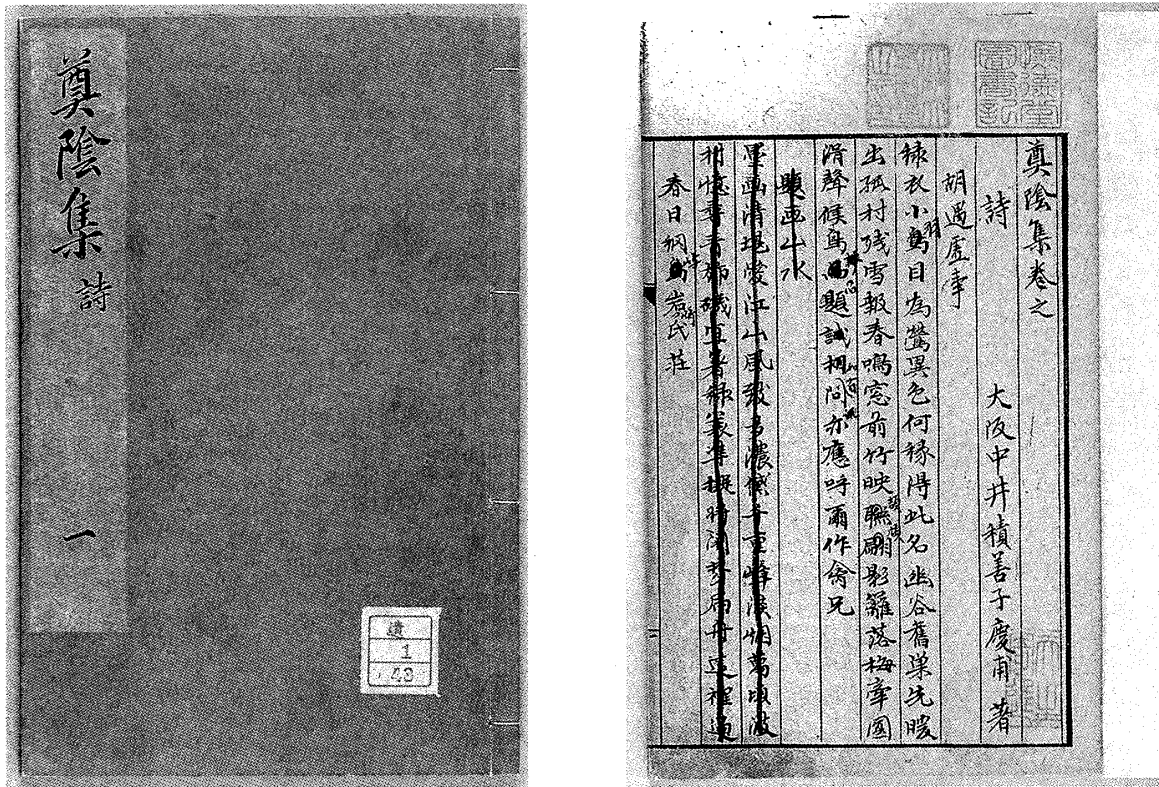
22. 逸史自序進戢質疑 付箋添付の例 (48頁参照)



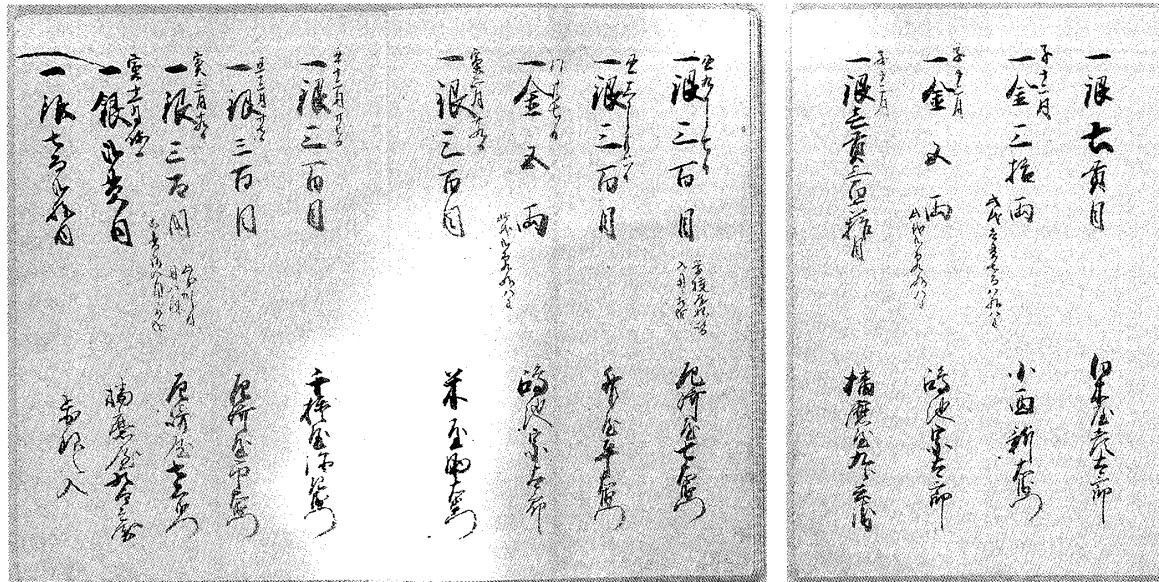
23. 懷德堂記 (左から) 表紙、中井竹山撰碑文拓本 (49頁参照)



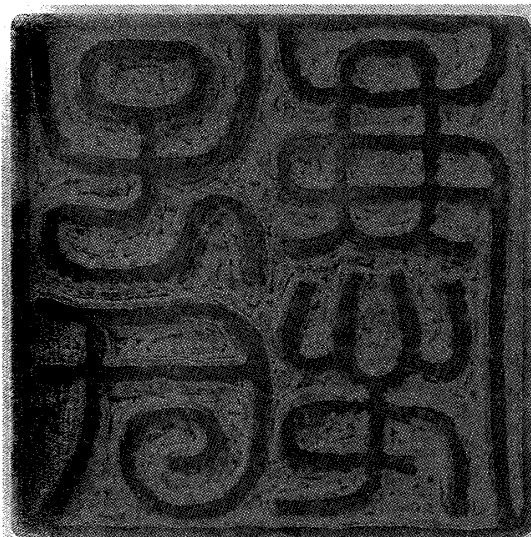
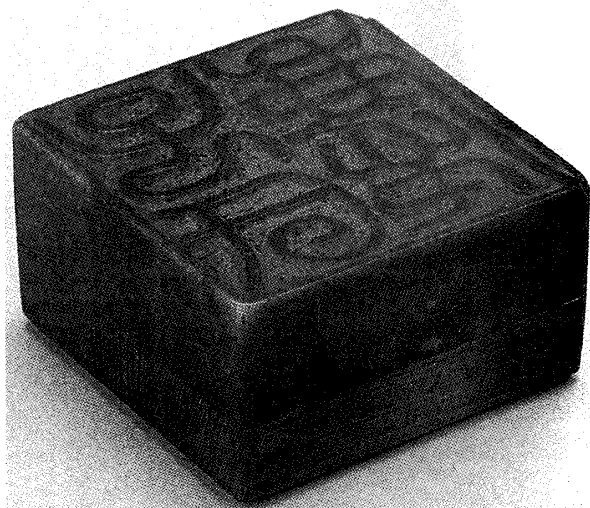
24. 詩律兆 (51頁参照)



25. 真陰集 「詩」の部 (53頁参照)



26. 懷徳堂義金簿 同志義捐金および氏名欄部分 (58頁参照)



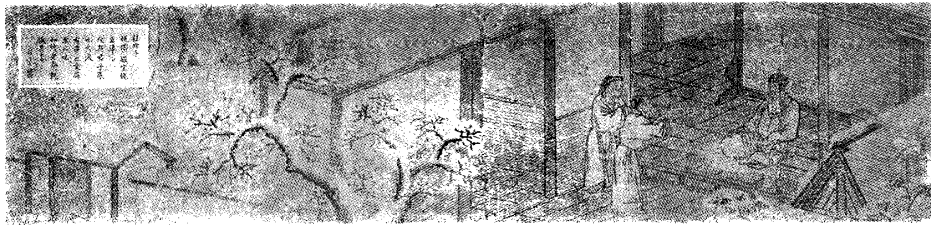
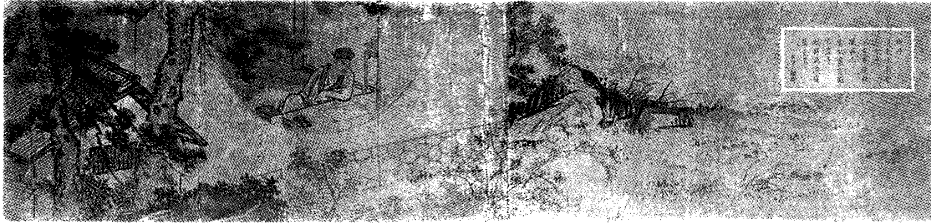
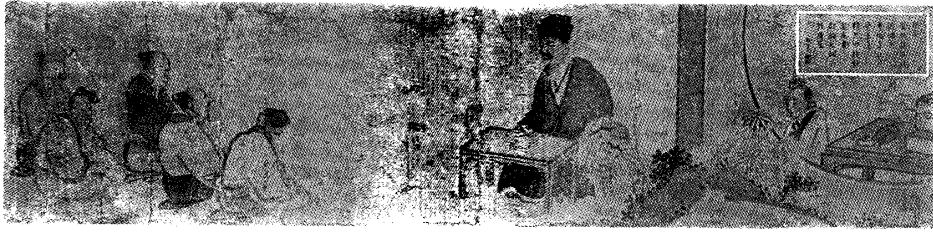
27-1.2. 葛子琴刻印 子慶氏印 (60頁参照)



27-3.4. 葛子琴刻印 積善印信印 (60頁参照)



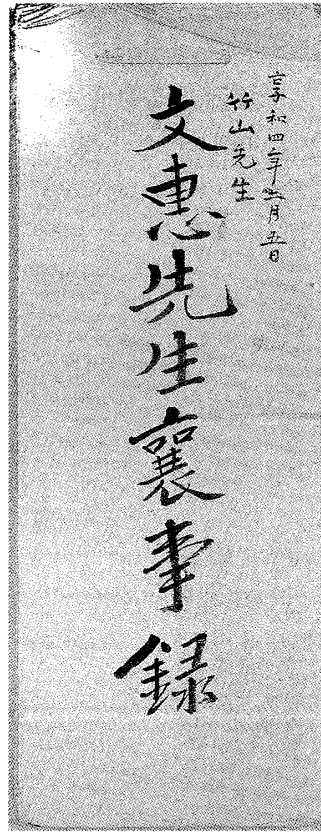
28. 朱文公大書拓本 (60頁参照)



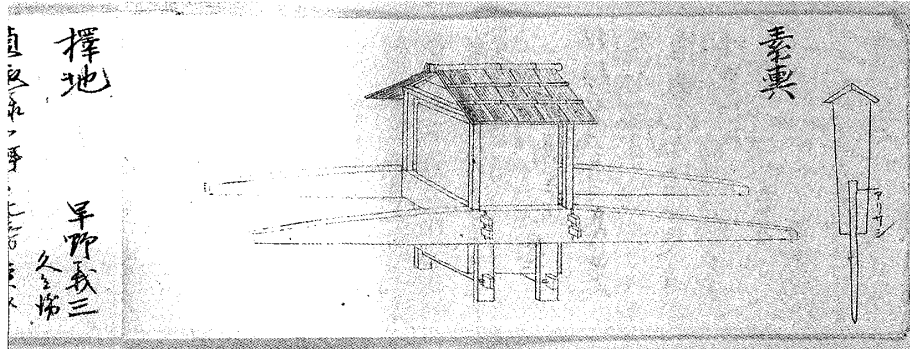
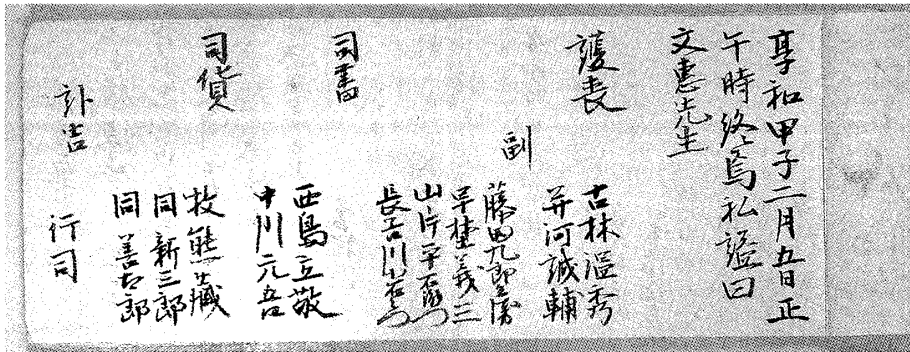
29-1.2.3.4.5.6. 宋六君子図 (上から順に) 張載、周敦頤、程顥、程頤、司馬光、邵雍 (61頁参照)



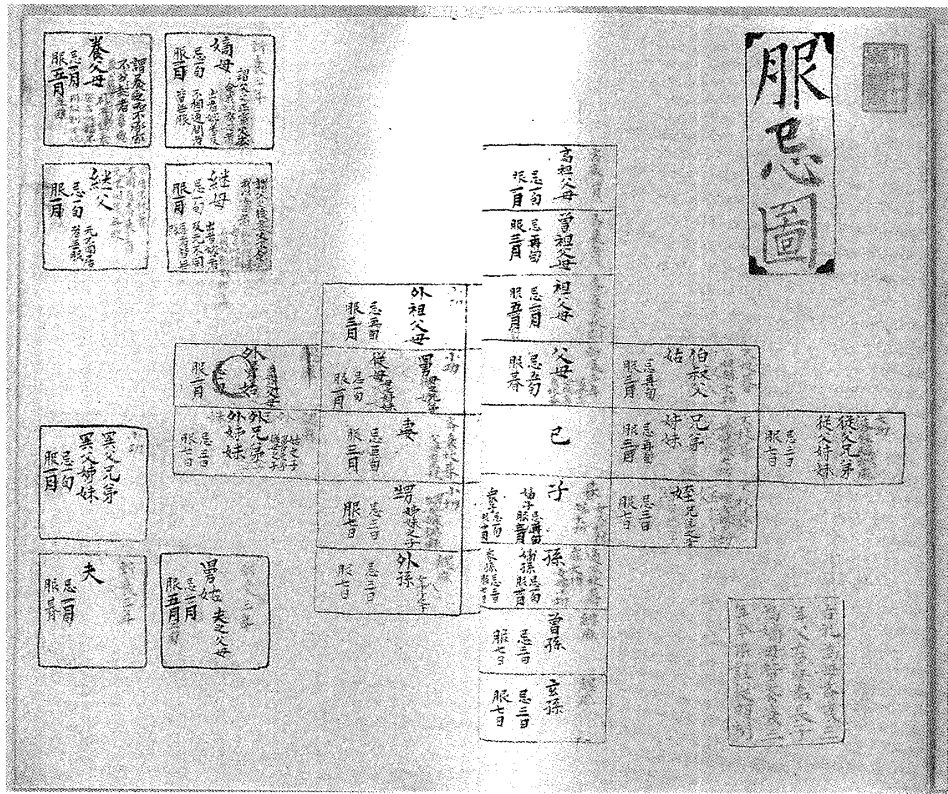
30. 堂聯 (残存部分)  
(62頁参照)



31-1. 文惠先生襄事録 表紙 (64頁参照)



31-2.3. 文惠先生襄事録 (上から) 冒頭部、同「素輿図」部



32. 服忌図 (66頁参照)

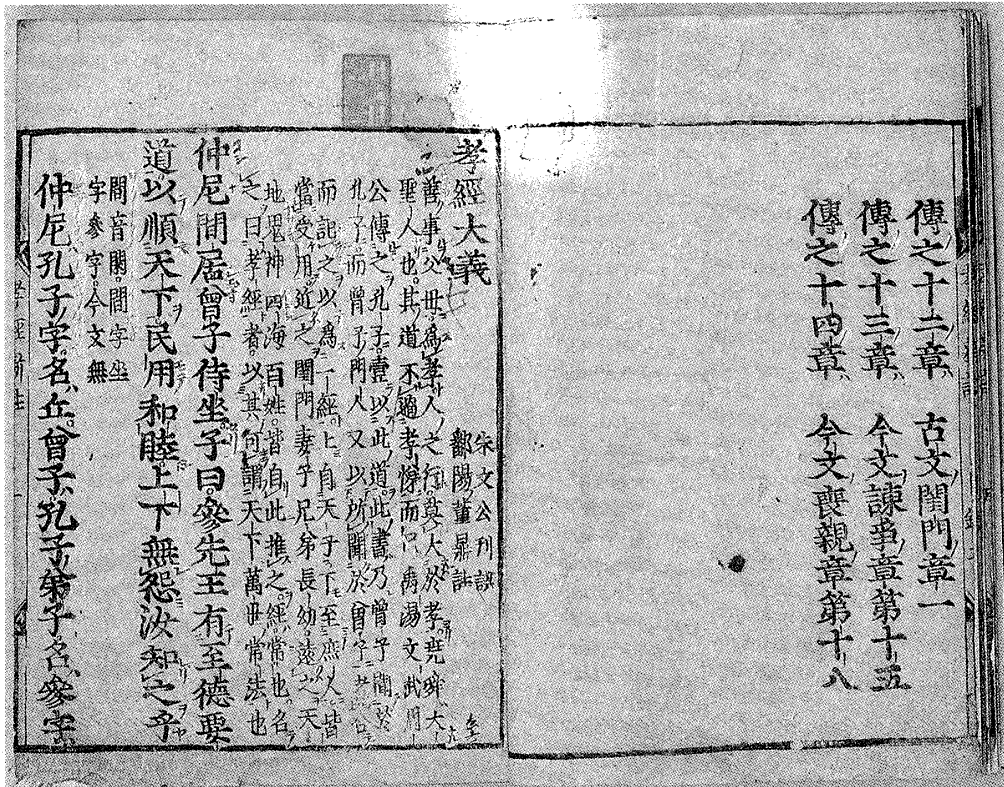
凡庶民則百姓勸來自工則財用足柔遠人則四方  
 歸之懷諸侯則天下畏之而齊明盛服非禮不動所  
 以脩身也去讒遠色賤貨而貴德所以勸賢也尊其  
 位重其祿同其好惡所以勸親親也官盛任使所以  
 勸大臣也忠信重祿所以勸士也時使薄斂所以勸  
 百姓也日省月試既稟稱事所以勸百工也送往迎  
 來嘉善而矜不能所以柔遠人也繼絕世舉廢國治  
 亂持危朝聘以時厚往而薄來所以懷諸侯也講九  
 爲天下國家有九經所以行之者一也  
 右第十三章

○凡事豫則立不豫則廢言前定則不跲事前定則不  
 困行前定則不疚道前定則不窮節在下位不獲乎  
 上民不可得而治矣獲乎上有道不信乎朋友不獲  
 乎上矣信乎朋友有道不順乎親不信乎朋友至順  
 乎親有道交諸身不誠不順乎親矣誠身有道不明  
 乎善不誠乎身矣  
 右第十四章

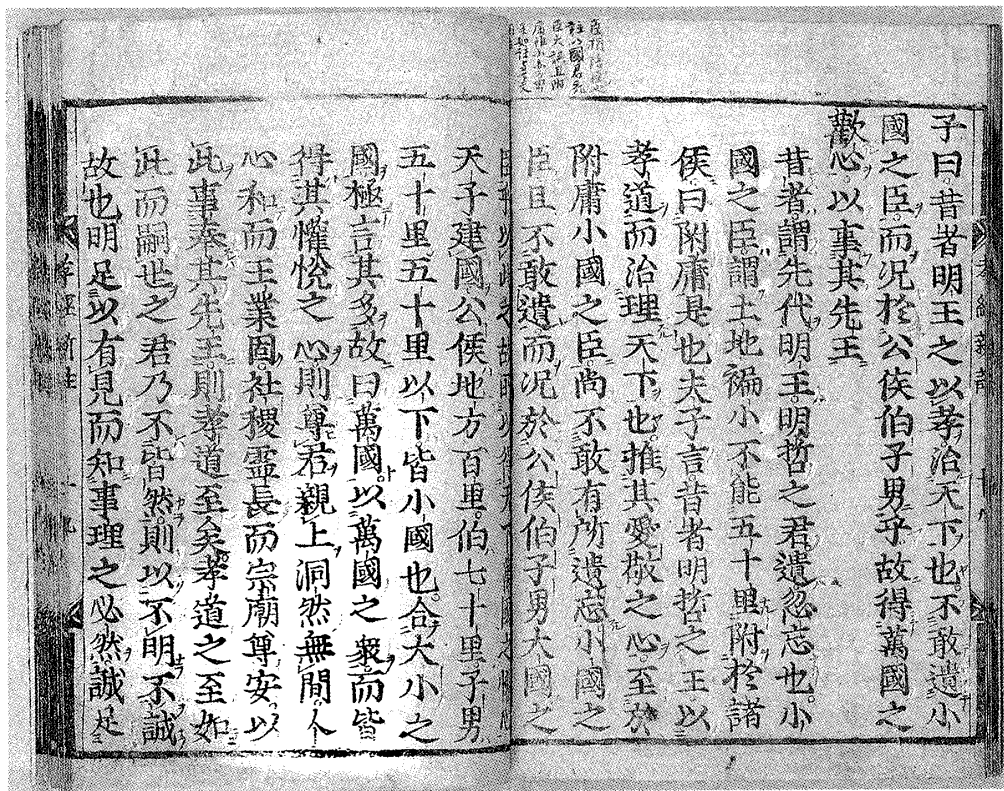
○誠者天之道也誠之者人之道也誠者不勉而中  
 不思而得從空中道而天也誠之者擇善而固執之  
 者也

33. 中庸天樂樓定本 中井履軒の改訂の例 (68頁参照)

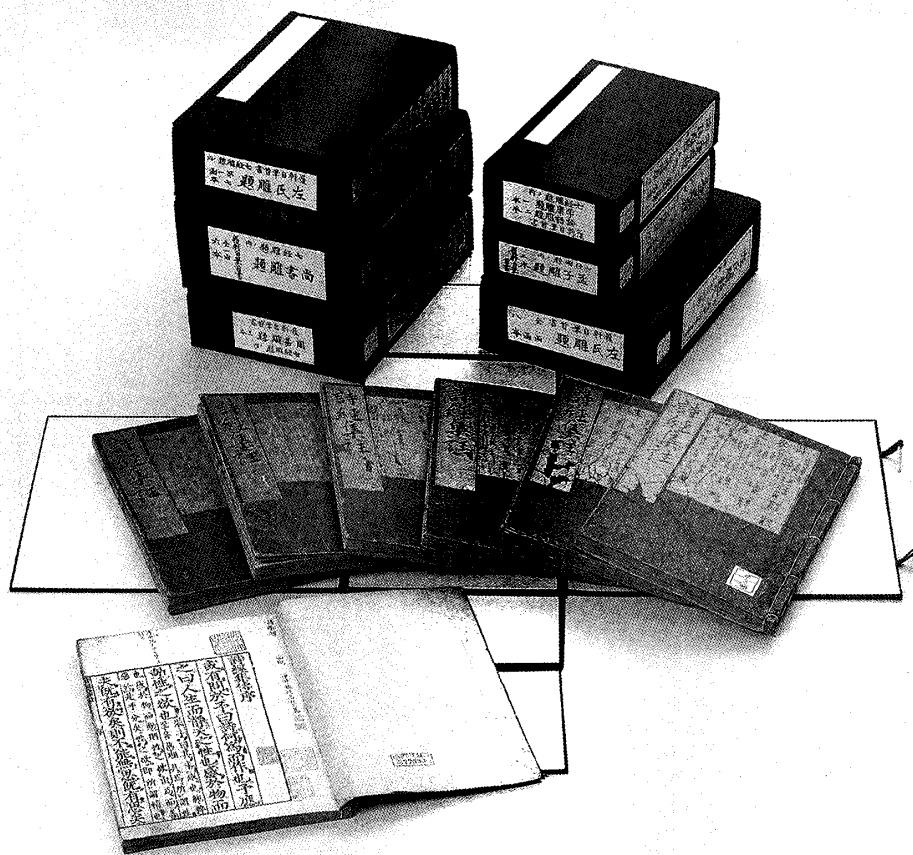




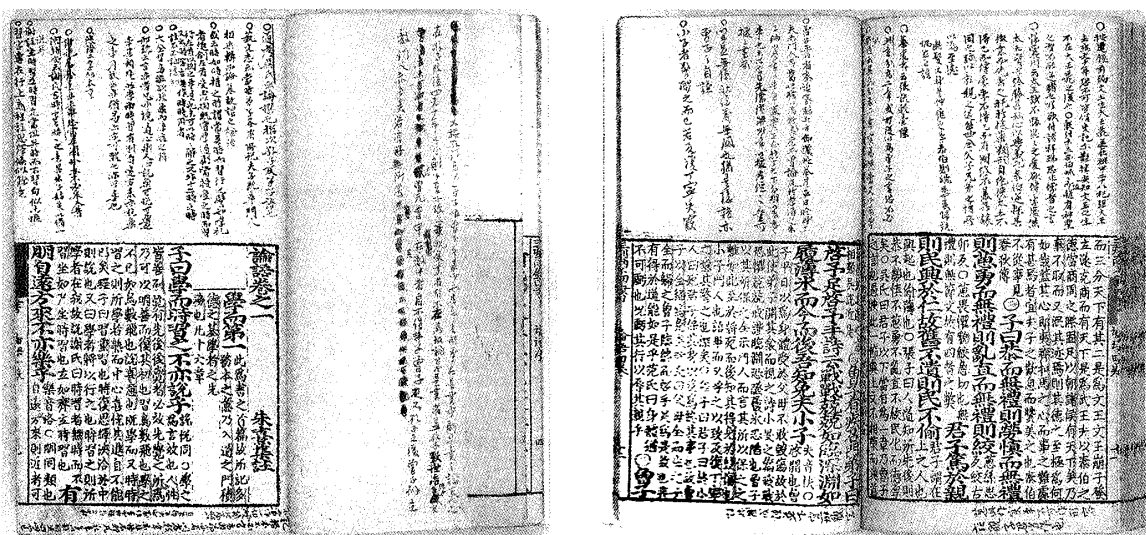
34-1. 孝經大義 本文冒頭部 (69頁参照)



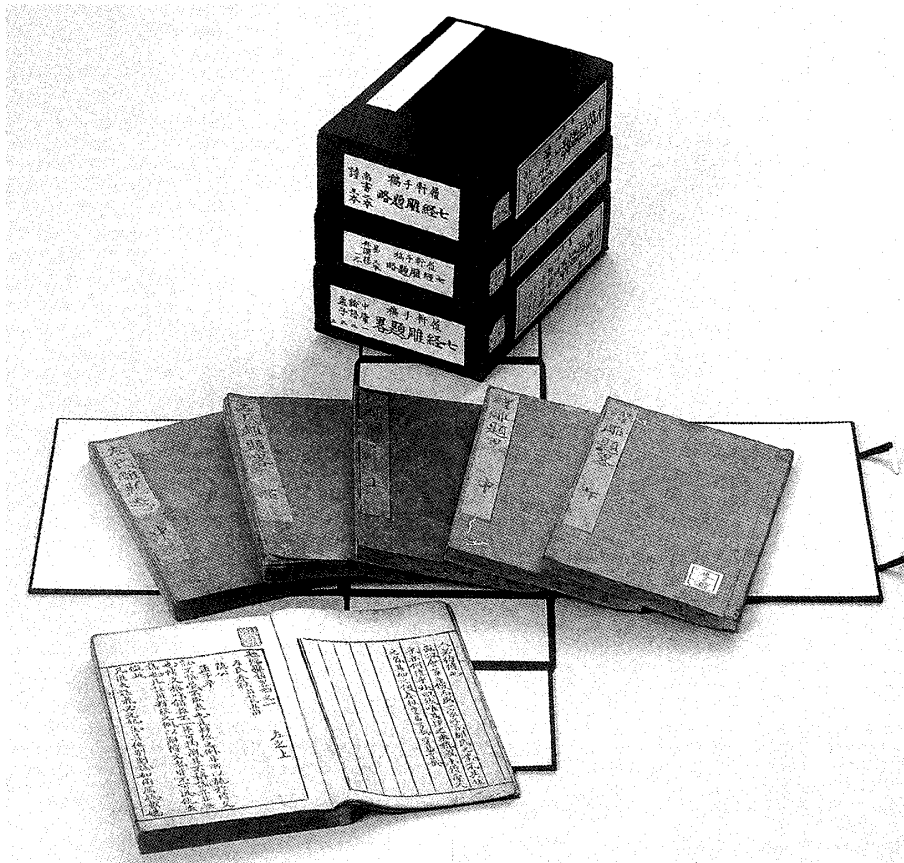
34-2. 同 書き込み例



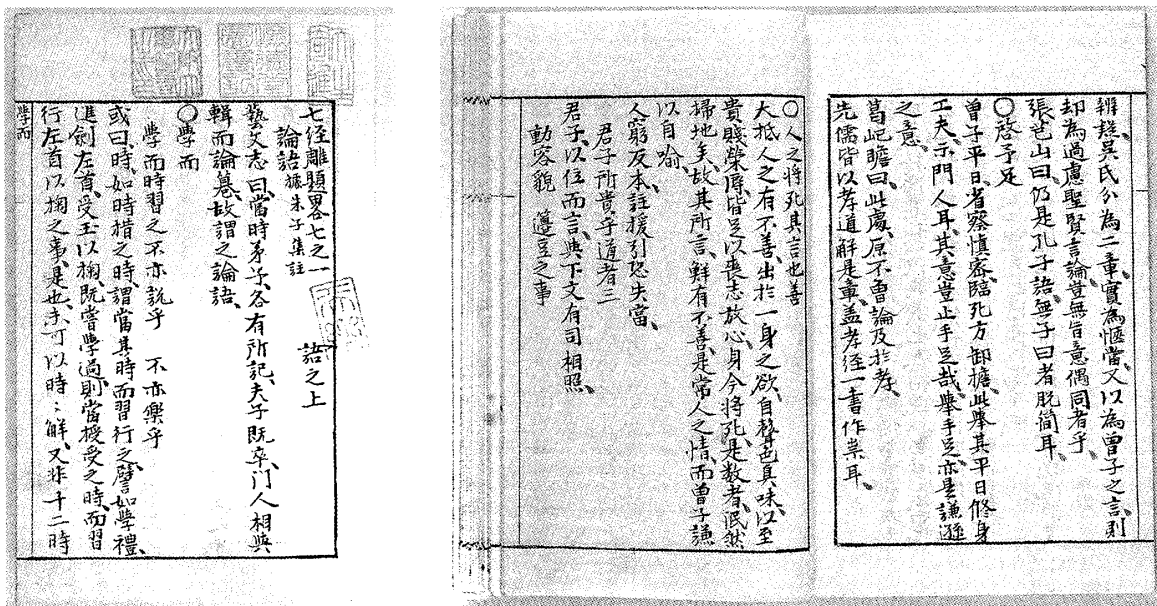
35-1. 七經雕題 (70頁参照)



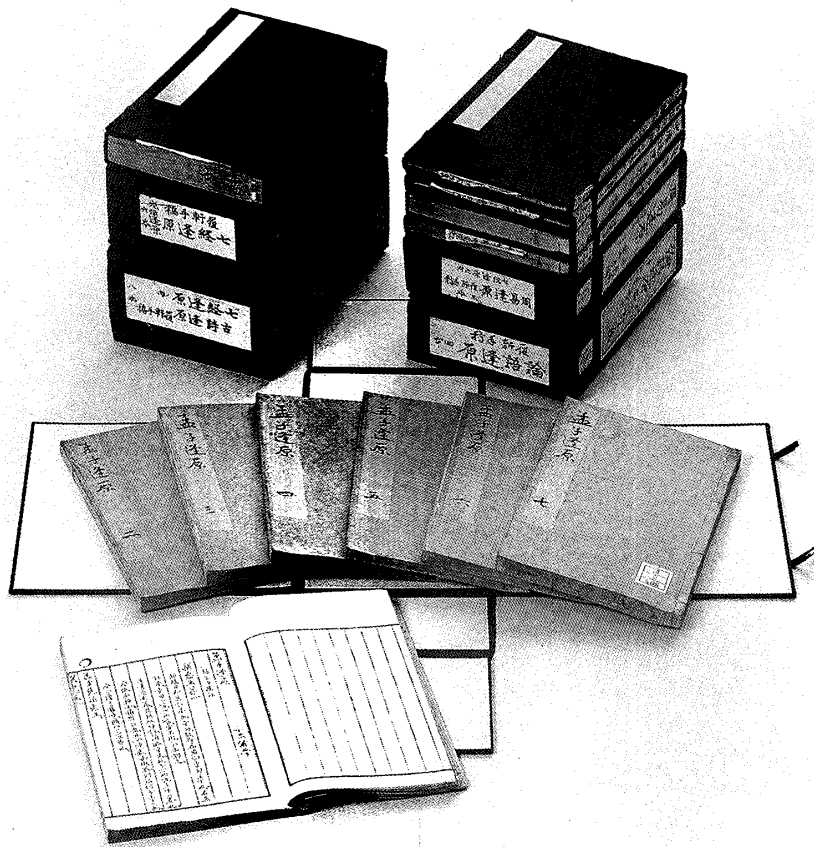
35-2. 論語雕題 (左から順に) 学而篇冒頭部、曾子有疾章部分



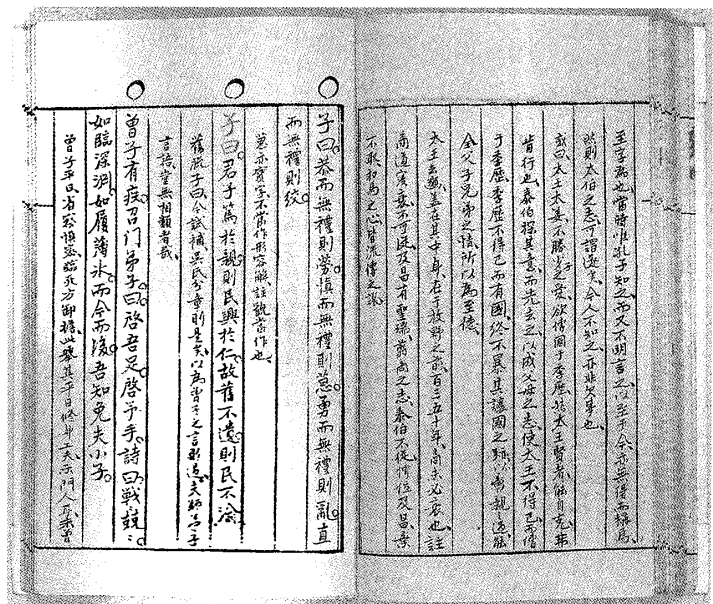
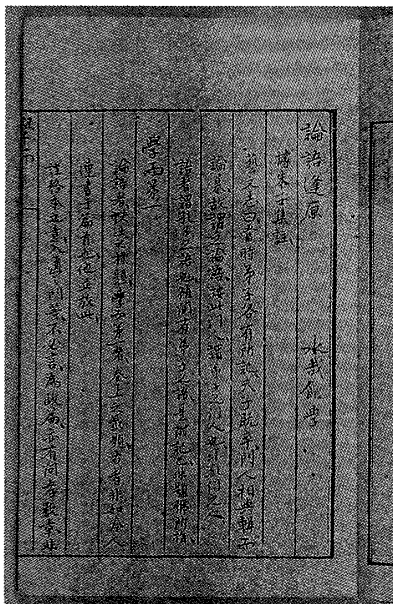
36-1. 七經雕題略 (75頁参照)



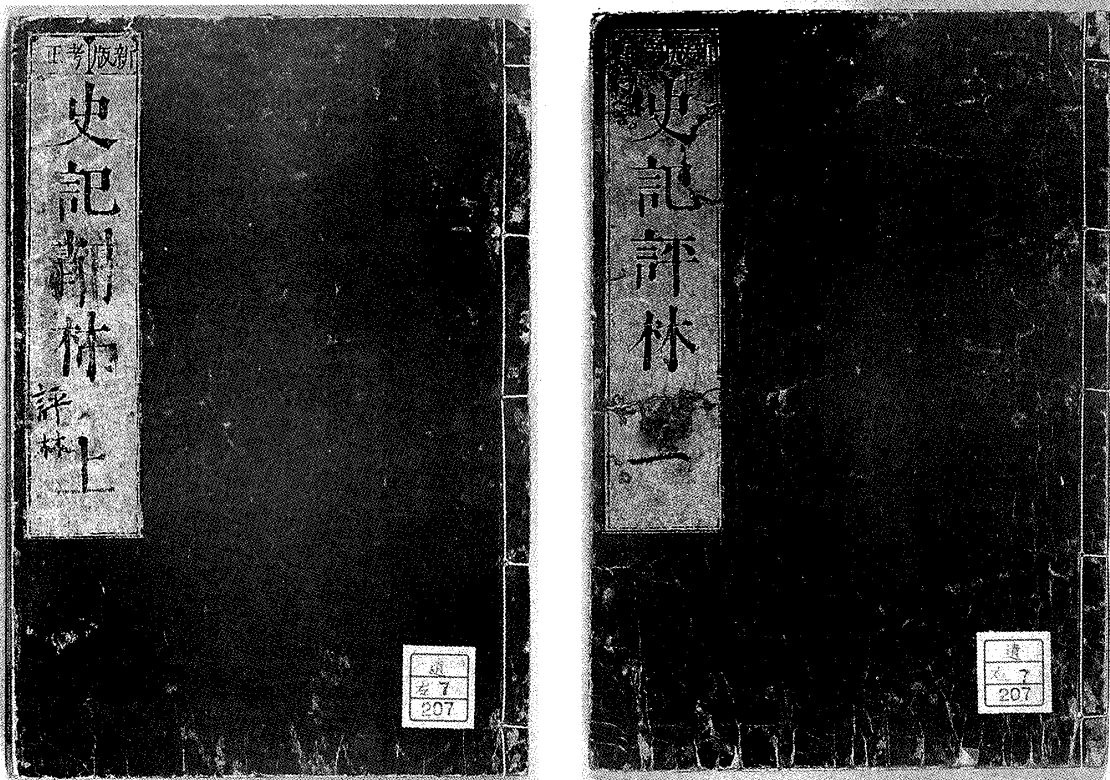
36-2. 論語雕題略 (左から順に) 学而篇冒頭部、曾子有疾章部分



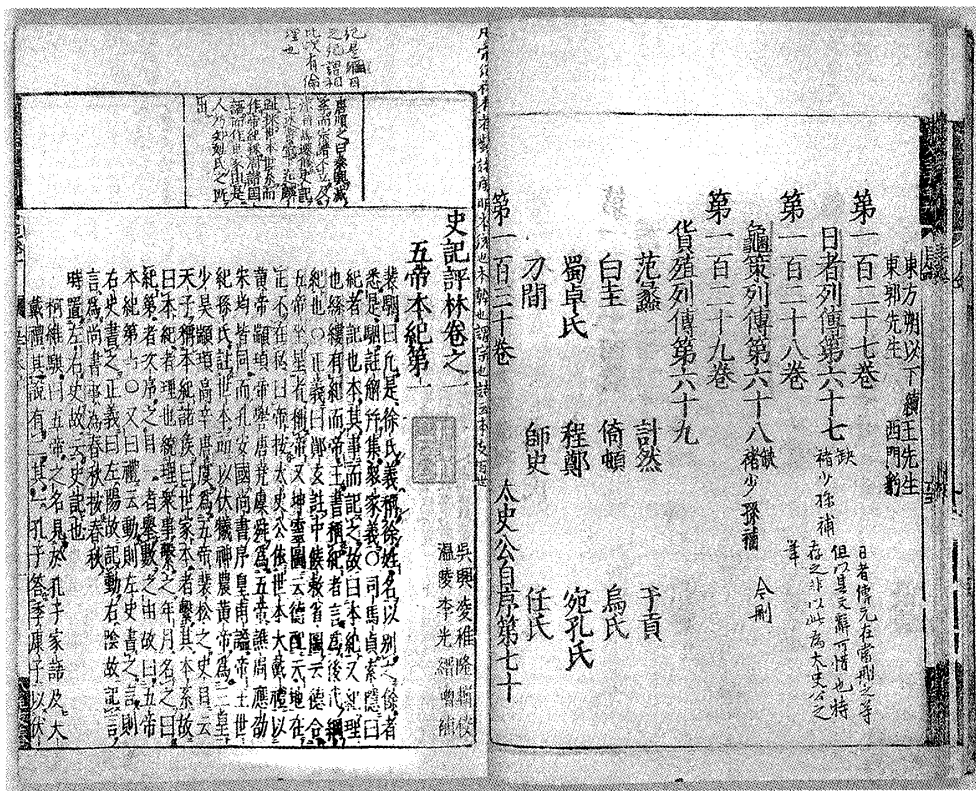
37-1. 七經逢原 (80頁参照)



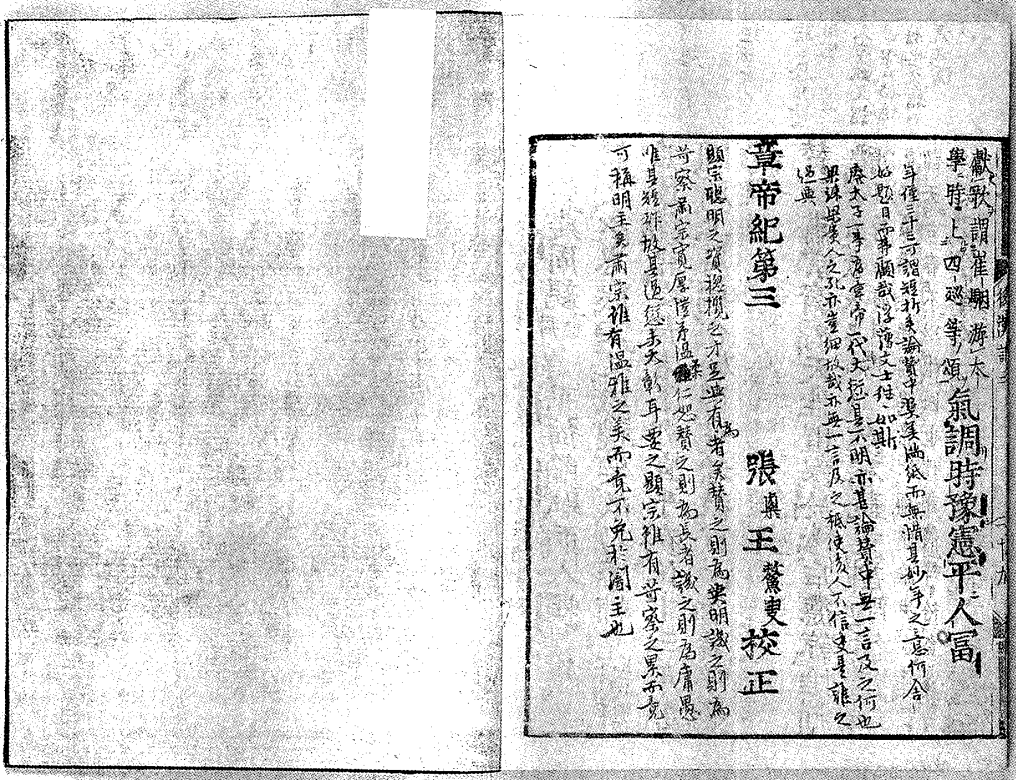
37-2. 論語逢原 (左から順に) 学而篇冒頭部、曾子有疾章部分



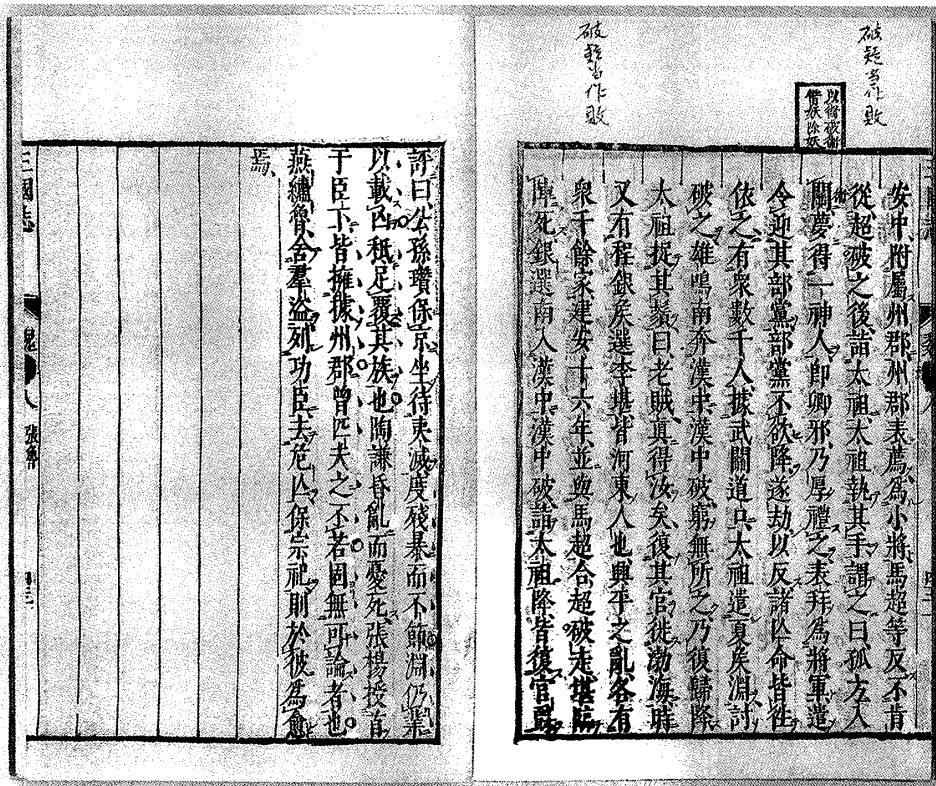
38-1. 史記雕題附史記削柿 表紙 (86頁参照)



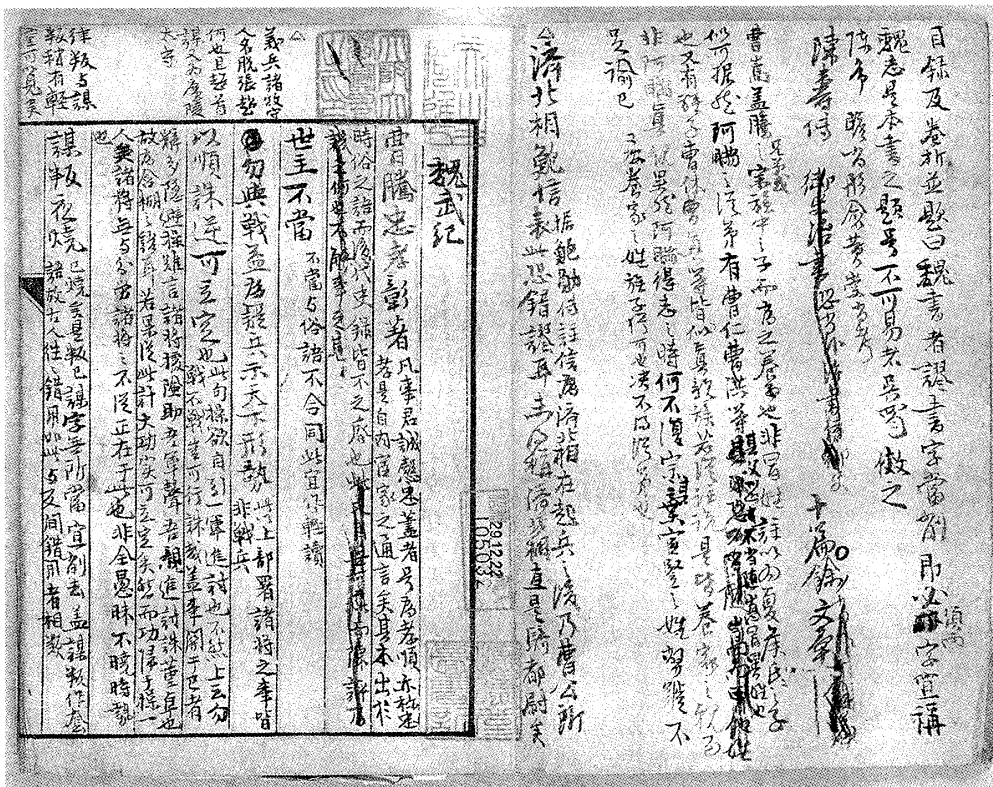
38-2. 同 五帝本紀部分



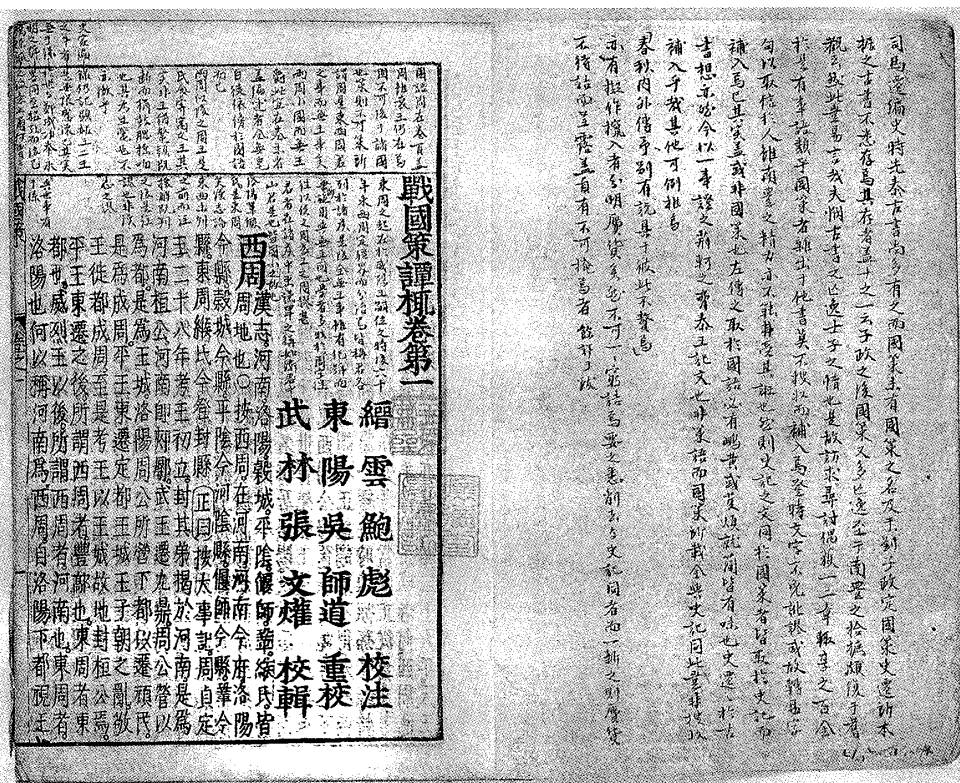
39. 後漢書雕題 章帝紀末尾書き入れ (87頁参照)



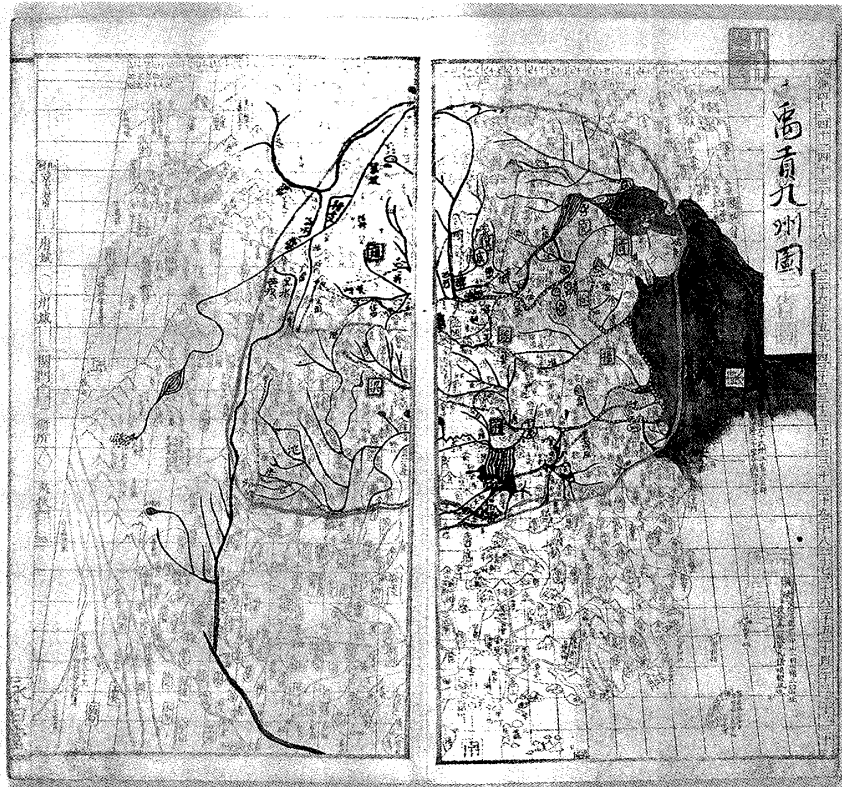
40. 三国志雕題 (89頁参照)



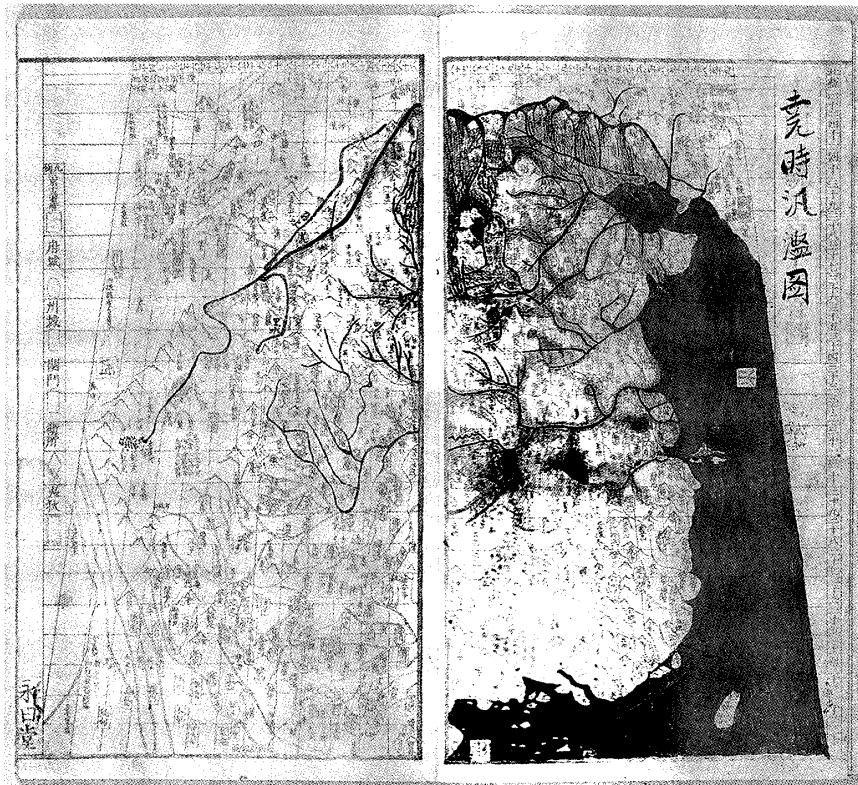
41. 三国志雕題草本 (90頁参照)



42. 戰國策雕題 (91頁参照)



43. 河圖累棊 禹貢九州圖 (92頁参照)



44. 治水濶論 堯時汎濫圖 (93頁参照)



### 小學卷之一

陳選句讀

**內篇** 夏氏曰上卷為內篇，下卷為外篇。許文  
平公曰：內篇者，小學之本原。外篇者，小  
 學之支流。○內篇有四：立教、明倫、敬身、皆述  
 虞夏商周聖賢之言，乃小學之綱也。稽古、據  
 典、外篇有三：事言、述漢以來賢人之言，所以  
 廣立教、明倫、敬身也。善行、紀漢以來賢  
 人之行，亦所以廣立教、明倫、敬身也。

**立教第一** 此篇述古聖人所以立極，教人  
教，立教身之教，而已。篇首皆教  
 一章，則教之本原也。凡十三章。


**子思子曰天命之謂性，率性之謂道，脩道之**

### 小學題辭終

也。嗟嗟，嗟辭，老而得也。此皆後世教學不明，  
 雖如上文所云，然亦幸有人以秉彜極天罔匪，  
 我於是纂輯，普所聞者，以為小學之書，庶幾可  
 以覺後世之學者。爾初學之小子，宜敬受此  
 書而學之。此非我老耄之妄言，是乃前聖  
 之遺訓也。此一節首解小學開後學之意。

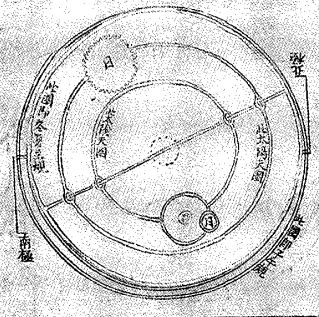
45. 小學雕題 (95頁參照)

### 地平受子午規之圖



地居天中，乃設平規  
 於象外者，以分地上  
 地下界也。側立者，乃  
 子午規。此極之出地  
 兩極之入地，各隨所  
 在可測定。渾象，此  
 規中以二極為圓極，  
 運轉一日一周，以合  
 天體之行度也。

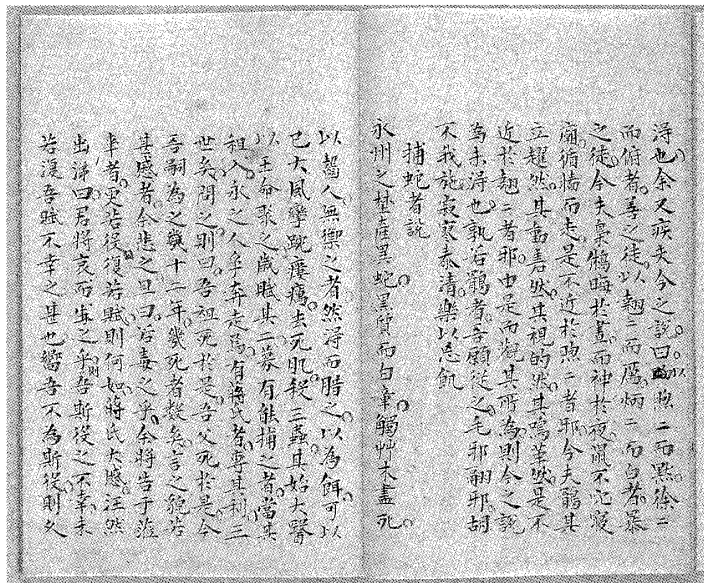
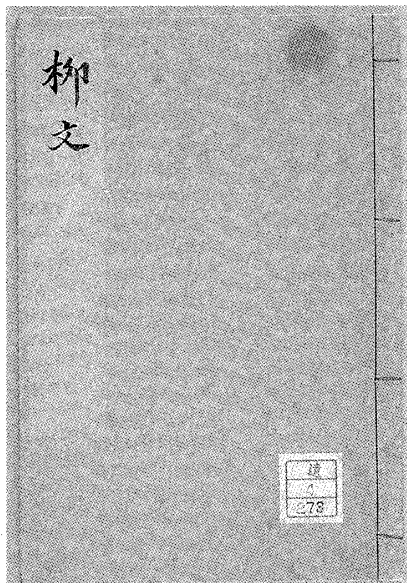
### 渾象內日月地三形圖



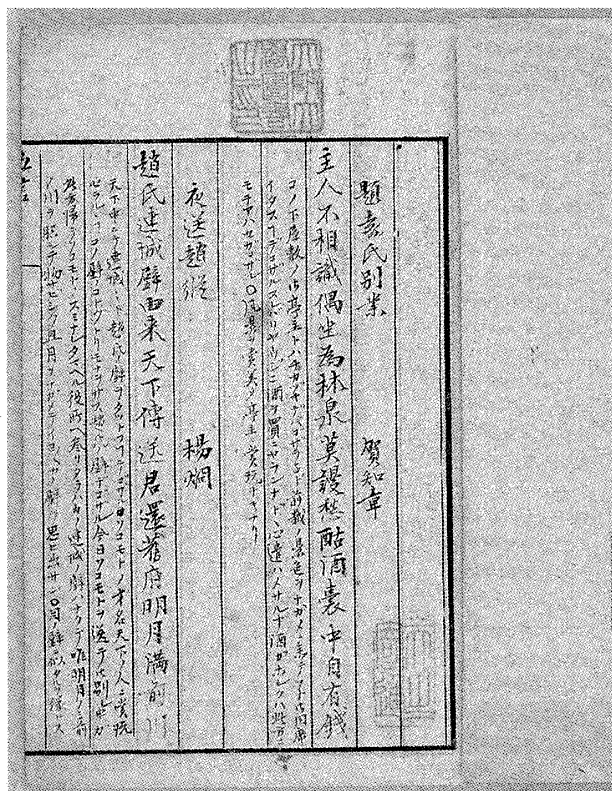
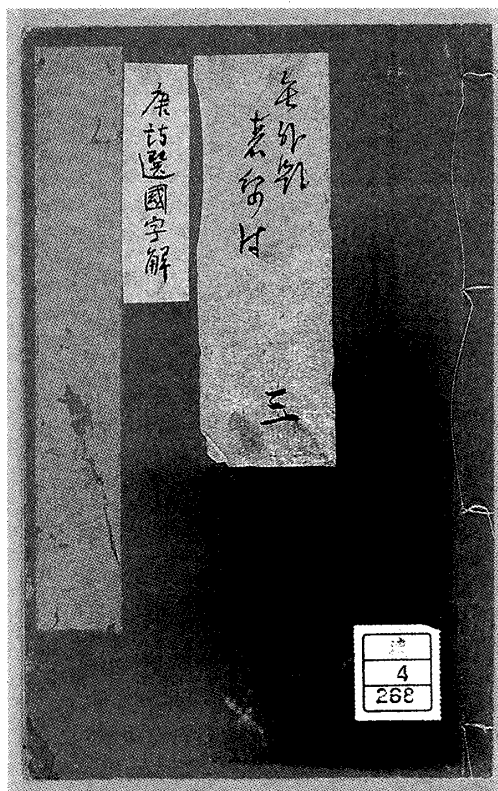
此渾象內日月地三  
 形圖，最外一圓，用天  
 子午規，最內一圓，用  
 冬夏至規，冬夏至規  
 對貫一輪，為黃道輪，  
 最中一圓，為地球形，  
 外一圓，貫輪，兼轉為  
 月輪。上應月遊輪，  
 徑十二度，輪心上，  
 規上亦可旋轉，以承  
 太陰轉之期，為九道  
 此水道，因月自有遊  
 輪，月輪又兼黃道  
 轉，故也。此外一圓，指  
 大亦貫輪，內為日輪，  
 規以承太陽形，用此  
 二圓，可辨日月交食  
 之理。此皆渾象也。

46. 天經或問雕題 (96頁參照)





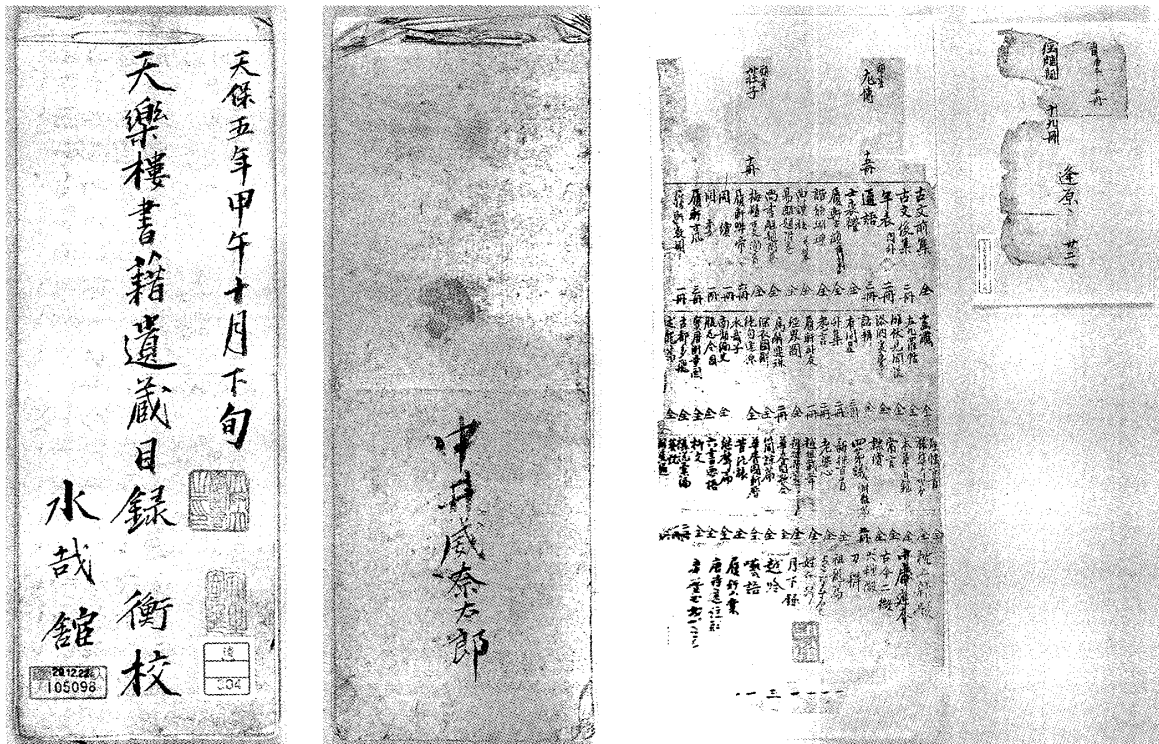
49. 柳文 (左から) 表紙、同「捕蛇者説」部分 (101頁参照)



50. 唐詩選国字解 (左から) 表紙、冒頭部 (103頁参照)

芝木有椿中尚有之 若比於禽獸禽有鸞鳳獸有麟  
 有麟禽中獨有鸞鳳之類 若比於葉土實滋五穀土養  
 民滋潤也 世間無限物無比無學人  
 ○司馬溫公勸學歌文主釋師師生敬學二者  
 養子不教父之過訓導不嚴師之惰反懶也 父教師嚴  
 兩無外學問無成子之罪煖衣飽食居人倫國士勝文  
 有道飽食煖衣進居而無教則近於禽獸聖人有憂人之  
 使幼為司徒教以人倫父子有親君臣有義夫婦有別  
 朋友有信 視我笑談如土塊反對 攀高不及下品流稍  
 遇賢才無與對勉後生方求誨投明師莫自昧 一朝雲  
 路果然登姓名亞等呼先輩室中若未結親姻自有佳  
 人求匹配勉婢汝等各早修莫待老來徒自悔勸勉汝  
 及早修學並等老來  
 悔之無及及無及 諸逆反  
 ○柳屯田勸學文養子必教教則必勤學則廉  
 父母養其子而不教是不愛其子也雖教而不嚴是亦  
 不愛其子也父母教而不學是子不愛其身也雖學而  
 不勤是亦不愛其身也是故養子必教教則必嚴嚴則  
 必勤勤則必成學則庶人之子為公卿不學則公卿之  
 子為庶人人知勤學則職者則使之貴  
 ○王荆公勸學文名安石字公甫宋朝  
 讀書不破費讀書人不 讀書萬倍利自有萬倍 書顯官  
 讀書不破費讀書人不 讀書萬倍利自有萬倍 書顯官

51. 古文真宝前後集雕題 (104頁参照)



52-1.2.3. 天樂樓書籍遺藏目錄 (左から) 表紙、裏表紙、紙片 (106頁参照)

一番イ 事卷箱  
 一武用辨界 八冊  
 一訓蒙圖彙 八冊  
 一守彙合卷 十冊  
 一官職備考 八冊  
 一五代一覽 七冊  
 一日本人物史 二冊  
 一襲東圖式 二冊  
 一忠誠後鑑錄 五冊  
 以上品  
 二番口 五十卷箱  
 一和谷訓點 六枚  
 一蒙求古板 八冊  
 一孝經大義 八冊  
 一照后遺識 一冊  
 一鳩巢猷可錄 三冊  
 一四書說約 十九冊  
 一唐詩訓解 四冊  
 一周易傳義 四冊  
 一說苑 五冊  
 一草書淵海 一冊  
 一慎思錄 六冊  
 一古刀銘盡 九冊  
 以上十二品

一周易傳義 四冊  
 一說苑 五冊  
 一草書淵海 一冊  
 一慎思錄 六冊  
 一古刀銘盡 九冊  
 以上十二品  
 三番八 二枚片鏡前  
 慶野先生著述 秘書塗茶箱鏡前  
 真鍮圓扇前蓋一枚  
 逢原 御老後著述  
 大學雜議 古板 中庸逢原 冊  
 論語逢原 四冊 孟子逢原 冊  
 易古本書 二冊 詩古本古色 冊  
 古詩得所編 左傳 六冊  
 以上逢原 冊 禮有故而著  
 之  
 離題  
 中庸 冊 論語 冊 孟子 三冊  
 易古本 冊 南書 冊 典讀 冊  
 詩古本 冊 左傳 冊 禮 冊  
 以上 冊 易下 冊 失  
 尚書離題附言 紙一冊

一東 全  
 一樵抄 二冊  
 一郵有道碑 二冊  
 一帝言 二冊  
 一王喪禮 二冊  
 以上十二品  
 倭文  
 一有間星 四冊  
 一極刑芳議 二冊  
 一老汲安心 二冊  
 以上三品  
 和文  
 一外集 二冊  
 一嚙語 二冊  
 一芳議雜篇 二冊  
 一均田芳議 二冊  
 一弟香園相可芳集 冊  
 一弟香園歌合 二冊  
 一越吟 三冊  
 一壺議 紙一冊  
 一音狂談 二冊  
 一古今二微 二冊  
 一風懷百首 紙一冊  
 一新採百首 紙一冊  
 一古都多飛 紙一冊  
 一南類編史 可成談

一音狂談 紙一冊  
 一古今二微 二冊  
 一風懷百首 紙一冊  
 一新採百首 紙一冊  
 一古都多飛 紙一冊  
 一南類編史 可成談  
 一神樂催馬樂 紙一冊  
 以上十二品  
 一中庸天樂樓索 二冊  
 一先生頭書左傳毒 冊  
 一唐本四書 五冊  
 一古文真寶 頭書 二冊  
 一四書 五冊  
 以上五品  
 一左久羅帖 紙一冊  
 一畫觸 紙一冊  
 以上三品  
 右三番鏡前大木箱入  
 四番 二冊 引出符  
 引出符  
 一懷德帖 一過風法帖  
 一對月帖 一歲銘帖  
 一天朗帖 一黃庭帖  
 一蘭洲先生直蹟  
 一履軒先生手本 卷分裝  
 一回假名 引出符  
 一蕉園先生折手本 引出符

52-4.5.6.7. 天樂樓書籍遺藏目錄 (上から) 一番イ~四番二

楷書自處洞行書先生施教行書  
 一萬年先生後步帖 一帖  
 一中國定本 一帖  
 一萬年先生後步帖 一帖  
 一國策集 五冊  
 一國策集 五冊  
 一先生真蹟草稿色 二冊  
 一伊勢物語 二冊  
 一古今和歌集 二冊  
 一老子經 二冊  
 一五代論 二冊  
 一陸羽茶經 二冊  
 一註解楚辭全集 六冊  
 一大和本草 十冊  
 以上四品 合三品  
 五番ホ 五卷箱  
 一非羽篇 六冊  
 一非微 八冊  
 一論語義疏 五冊  
 一文選帝訓 十冊  
 一釋氏要覽 三冊  
 一集右印篆 四冊

一文選帝訓 十冊  
 一釋氏要覽 三冊  
 一集右印篆 四冊  
 一諸經名物辨解 四冊  
 一天經或問 三冊  
 一世說新語 十冊  
 一毛詩品物 二冊  
 一子華孝狀 二冊  
 一孟子白文 二冊  
 一周易 二冊  
 以上五品  
 六番ハ  
 一書經集註 七冊  
 一詩經集註 七冊  
 一禮記集註 七冊  
 一莊子離題 十冊  
 一梁書 五冊  
 一聖論廣訓 二冊  
 一十八史界 七冊  
 以上七品  
 七番ト

一明季遺聞 四冊  
 一五代史 十冊  
 一近思錄 七冊  
 一新刻蒙求 三冊  
 一蒙求詳說 九冊  
 一蒙求詳說 九冊  
 一資治通鑑 十冊  
 一文章規範 十冊  
 一古文真寶 十冊  
 一水引攷異紙 十冊  
 一回 雜書  
 以上九品 印畧之  
 八番千  
 一史記 十冊  
 一漢書 五冊  
 先生頭書  
 一後漢書 十冊  
 先生頭書  
 右廣屋氏自至十番預

天保五年甲午十月下旬  
 十一番ル  
 一三國志 四冊  
 十一番ヲ  
 一晉書 五冊  
 十一番リ  
 一正字通 七冊  
 十四番力  
 一唐詩正聲 二冊  
 一尺牘集要 四冊  
 一詩律北 三冊  
 一世說新語 三冊  
 一虞書曆象俗解 三冊  
 一類書卷要 四冊  
 一增補和漢名教全 四冊  
 一和漢年契 二冊

52-8.9.10.11. 天樂樓書籍遺藏目録 (上から) 五番ホ~十四番力

類書  
古文前集 二冊  
古文後集 一冊  
釋親考 一冊  
同續編 一冊  
一 名物六帖 五冊  
一 異本每序自來 人品儀威 每  
異相每事 每 天文 二冊  
飯時 每身 每 每  
一 冠辭考 十冊  
一 志於志の後 一冊  
一 小回後 一冊  
一 浪毛津百々 一冊  
一 智永千字文 一冊  
一 赤城義人録 一冊  
一 紫蘭叢 一冊  
一 正名緒言 卡 二冊  
一 碧世音編 桌 一冊  
以上五品  
一 十五卷 日  
一 近思錄 七冊  
一 繪本福壽草 五冊  
一 有斐録 一冊

一 蕉園先生文集 一冊  
一 文馬篇 雜先生 一冊  
一 深衣圖解 辨 一冊  
一 釋史世系圖 一冊  
一 西卷 一冊  
一 諸落窪 一冊  
一 源志雜銘 一冊  
一 閉距離 羊 留 一冊  
一 省中秘籍 一冊  
一 全交篇 一冊  
一 華香國祀 一冊  
一 唐詩品彙抄 一冊  
一 三體詩 一冊  
一 小學備考 一冊  
一 和漢三才圖録 一冊  
一 日本諸家物誌 一冊  
一 和歌のたぐひ 一冊  
一 夜行聲帯 草 編 一冊  
一 表裏私説 十本 五冊  
一 文化武鑑 四冊  
一 歌出 小 本 四冊  
一 雜書 附 封 二冊

以上十五品  
一 十六卷 日  
一 圓機活法 十冊  
一 易 三冊書 一冊詩 一冊  
一 左傳 子 每 禮 子 壽 一冊  
一 小學 一冊  
一 含英 若 一冊  
一 小帳法 一冊  
一 和圖數記 二冊  
一 通語問答記 一冊  
一 武家深秘録 一冊  
一 通語 製 生 醫學 一冊  
一 紙牙 一冊  
一 十題百々 一冊  
一 頭陀銘 裏 一冊  
一 聚分額會 九冊  
一 四書 額 表 物 一冊  
以上十七品  
一 十八卷 日

以上十七品  
一 十八卷 日  
一 雜著類 此後軒先生之著  
一 殊記 其 无 者  
一 十卷詩 白川 花 記 歌 龍 祝 聖 志  
一 全書 和 聖 宮 宮 儀 集 鐘 録 鏡  
一 之 園 高 集 詩 會 齋 英 左 傳 名 号  
一 宦 令 其 系 無 妻 麻 胡 野 未 歸 城 志  
一 東 照 堂 道 訓 傳 理 光 琉 球 四 島 浮 城 志  
一 餘 派 堀 示 止 卷 后 修 學 牙 師 論 二 冊  
一 支 直 飲 酒 當 心 文 十 書 瑞 雲 堂 貨 財 圖  
一 朱 子 與 劉 文 達 行 錄 文 信 編 在 洋 行 傳 十  
一 薩 摩 集 傳 錄 以 藤 木 氏 諸 氏 在 洋 行 傳 十  
一 漆 金 製 上 政 元 年 難 陳 十 冊

一 四書 額 梅 沢 元 子 六冊  
一 四書 風 悟 六冊  
一 世 説 抄 撮 四冊  
一 同 集 成 五冊  
一 東 萊 博 議 小 本 四冊  
一 齊 氏 要 術 十冊  
一 天 工 問 物 九冊  
一 齊 家 寶 要 四冊  
一 草 書 額 會 三冊  
一 西 國 孝 子 史 考 二冊  
一 圖 画 寶 鑑 二冊  
一 函 雅 註 疏 五冊

雜著類  
 履軒擊帚 土冊  
 一老言 二冊  
 履軒古風 三冊  
 水哉子 五冊  
 履軒右韻 宋一冊  
 履軒右韻 宋一冊  
 諧韻珊瑚 一冊  
 枕上雜題 一冊  
 履軒臥友 一冊  
 二連珠 年表 一冊  
 一年表內篇 一冊  
 一年表外篇 一冊  
 徑界圖 一冊  
 一數聞 一冊  
 一詁辨 一冊  
 一深衣圖解 一冊  
 一述龍篇 一冊  
 一乃甲辨 一冊  
 一傳疑小史 一冊  
 一越祖弄筆 一冊  
 履軒雜說帶編 一冊  
 一裸說彙編 一冊  
 一度量考提要 一冊  
 寶曆測量圖 一冊

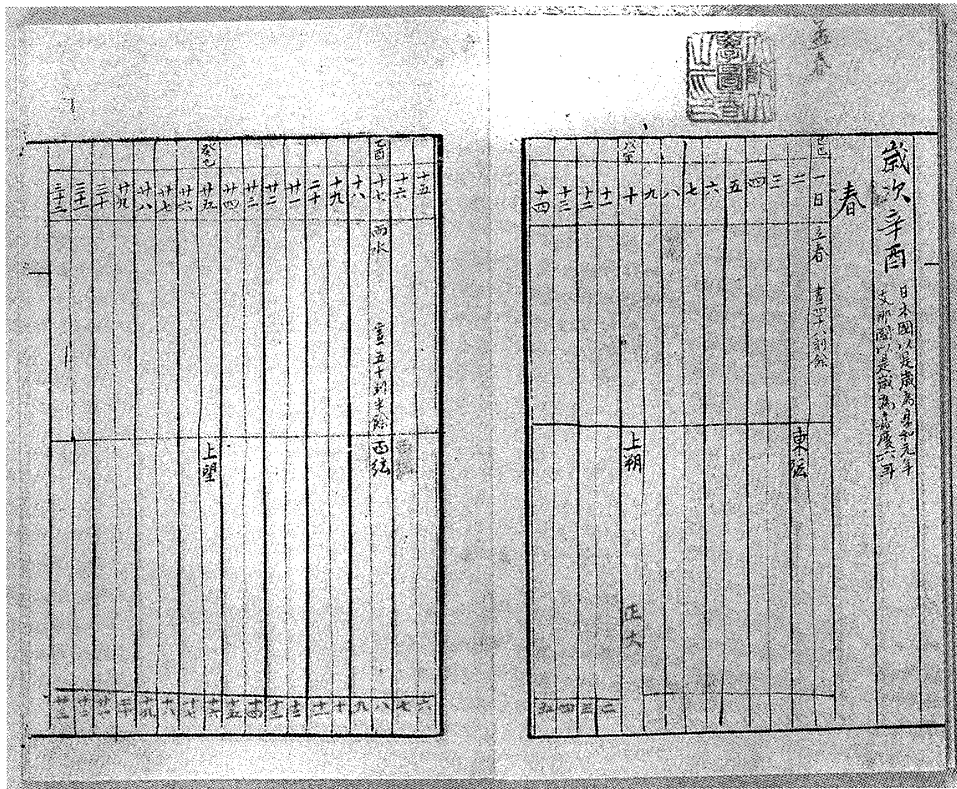
履軒雜說帶編 一冊  
 傳疑小史 一冊  
 越祖弄筆 一冊  
 履軒雜說帶編 一冊  
 裸說彙編 一冊  
 度量考提要 一冊  
 寶曆測量圖 一冊  
 華香國新曆 一冊  
 制度通 一冊  
 浴泊多囊 宋  
 浚河茅議 一冊  
 徑界目錄 一冊  
 簡諒篇 一冊  
 姓氏斷 一冊  
 繼聲篇 全  
 柳文 全  
 辨妄 全  
 日本史目錄 全  
 鷄助疑文 全  
 本草目錄 全  
 絕句逢原 全  
 月下錄 全  
 隸續 一冊  
 梅賾古文高書 全  
 汪伯玉絕句 全  
 服忌圖 全

一家體異回歌 二冊  
 一度量衡考 二冊  
 已上西岳  
 竹書 一冊  
 四書先生燕 五冊  
 治水洞論 一冊  
 河圖界基 一冊  
 日本輿地 一冊  
 喝蘭地球 一冊  
 忠義集摘要 一冊  
 全塚碑銘 一冊  
 貽範先生行狀 一冊  
 伏生尚書 一冊  
 文甫先生碑 一冊  
 通表桑小記 一冊  
 已上上品  
 篋底錯雜逸史失  
 所疑在三番中  
 在土苗至廿番  
 西村庄兵衛殿  
 預り

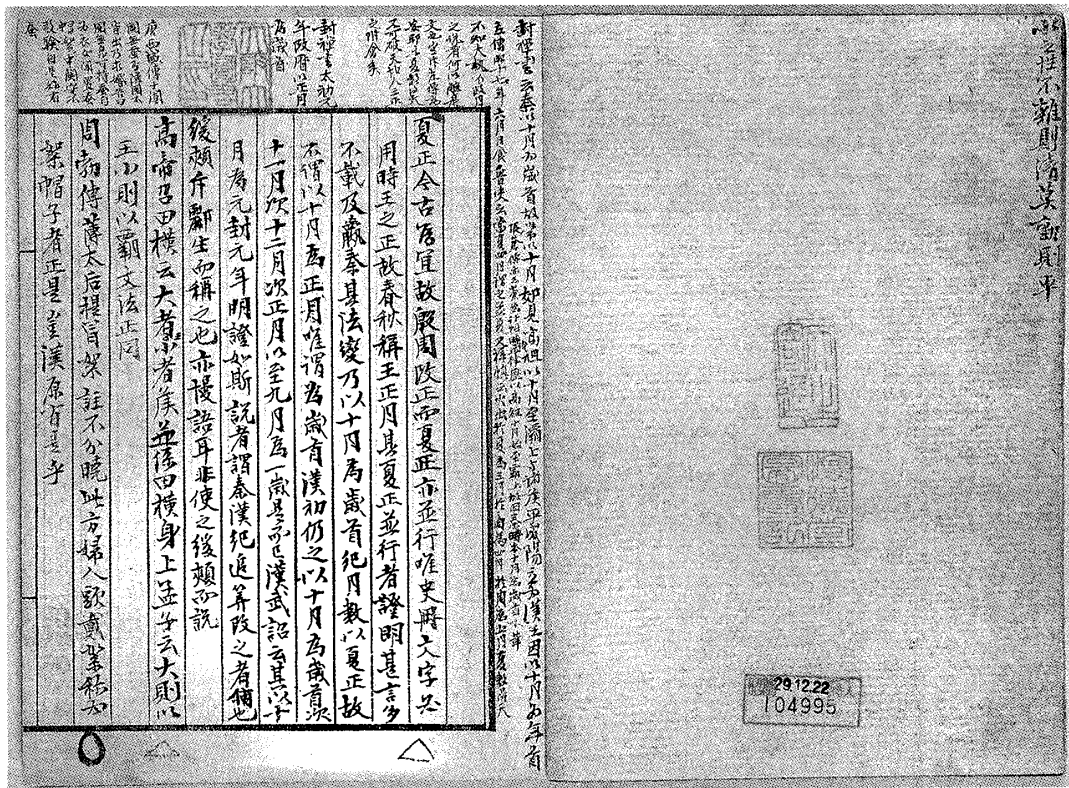
紛失書 九番  
 前漢 共之卷  
 易離題 下  
 一論語義疏 一冊  
 增補元明史畧 一冊  
 文章規範 一冊  
 古文直室 一冊  
 老漢安心 五冊  
 在八品書以備異日  
 之搜索  
 竹島衛校正  
 在土苗至廿番  
 西村庄兵衛殿  
 預り

52-16.17.18.19. 天樂樓書籍遺藏目錄 (上から) 十九番ツ~二十番ネおよび紛失書

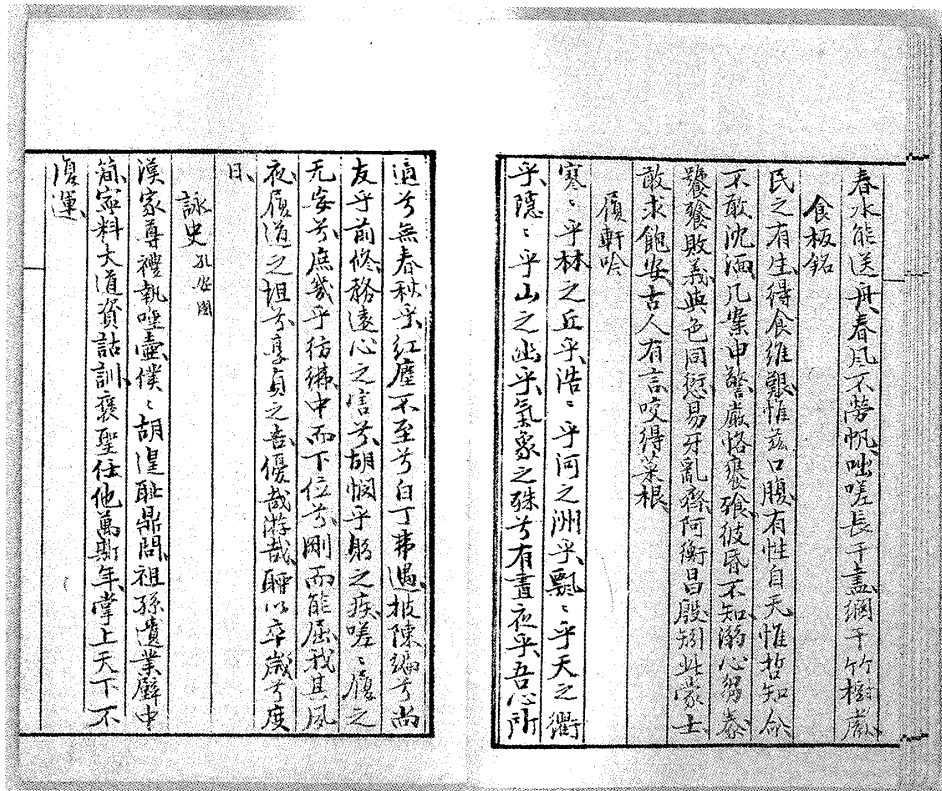




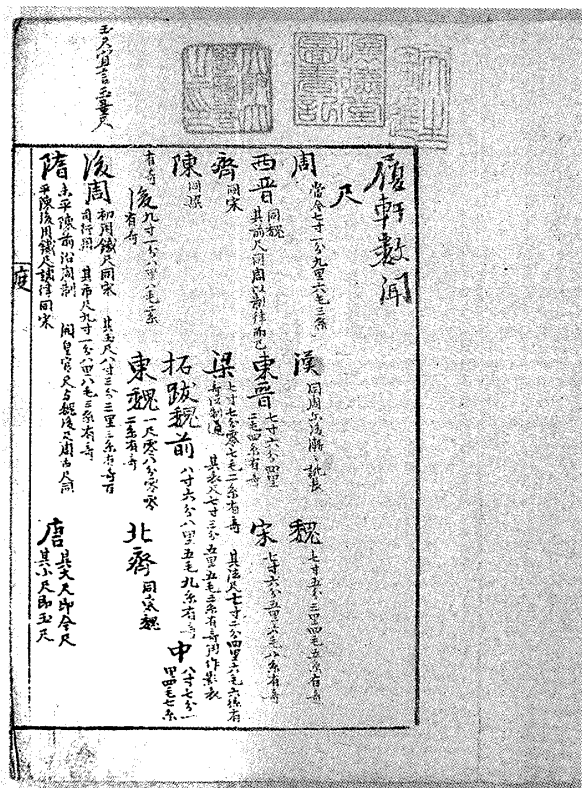
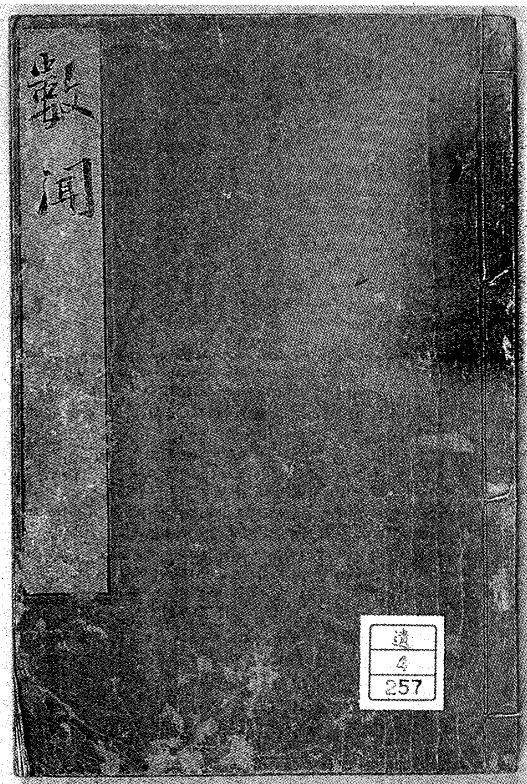
53. 華胥国新曆 享和元年 (1801) 春の部 (108頁参照)



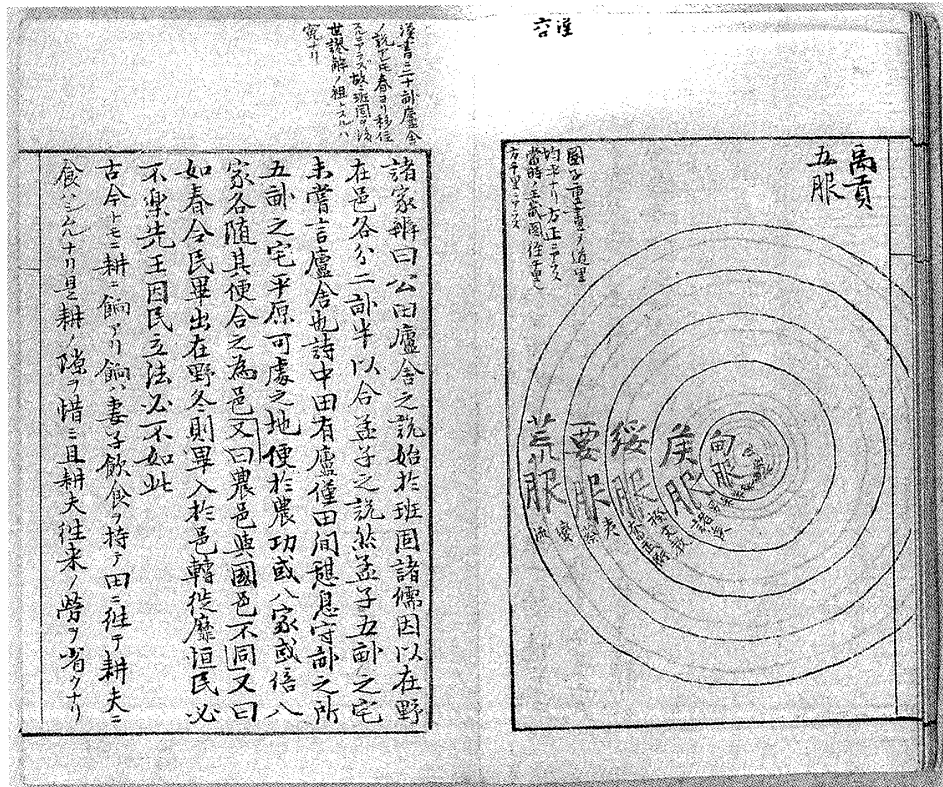
54. 水哉子 (109頁参照)



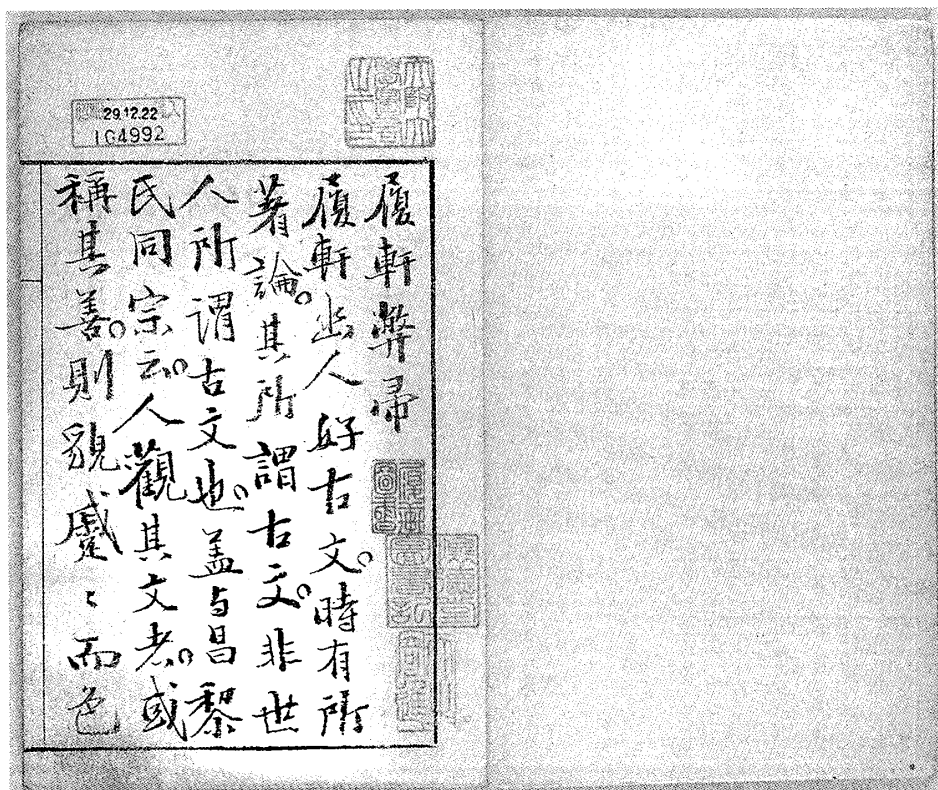
55. 履軒古風 「履軒吟」部分 (110頁参照)



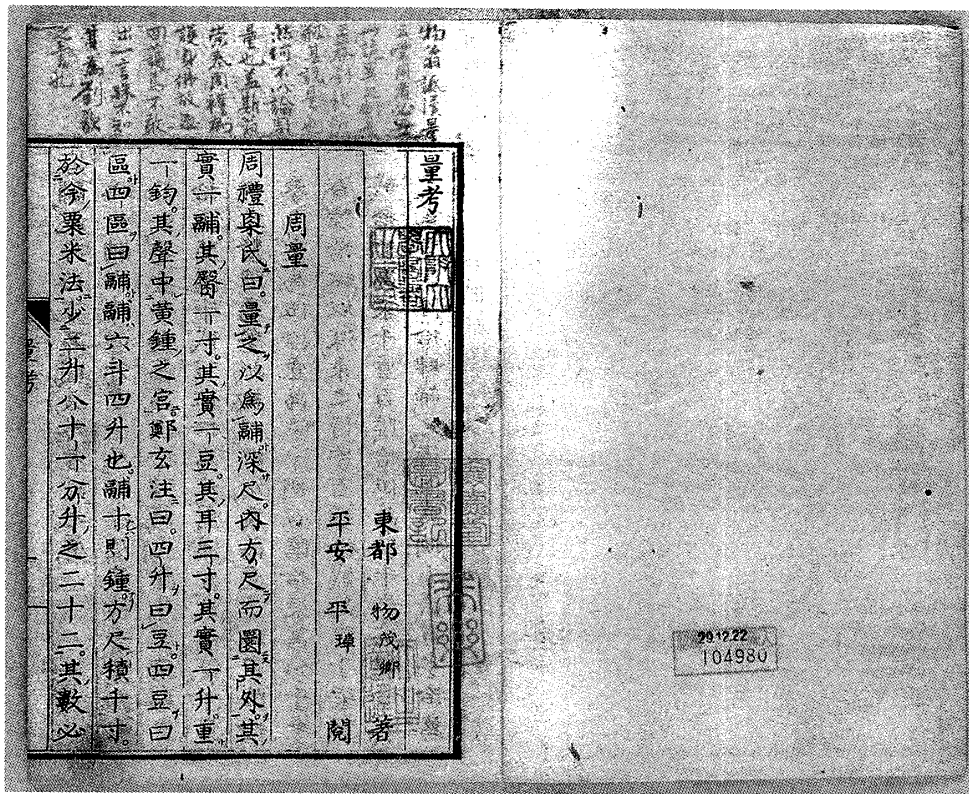
56-1.2. 履軒數聞 (左から) 表紙、冒頭部 (112頁参照)



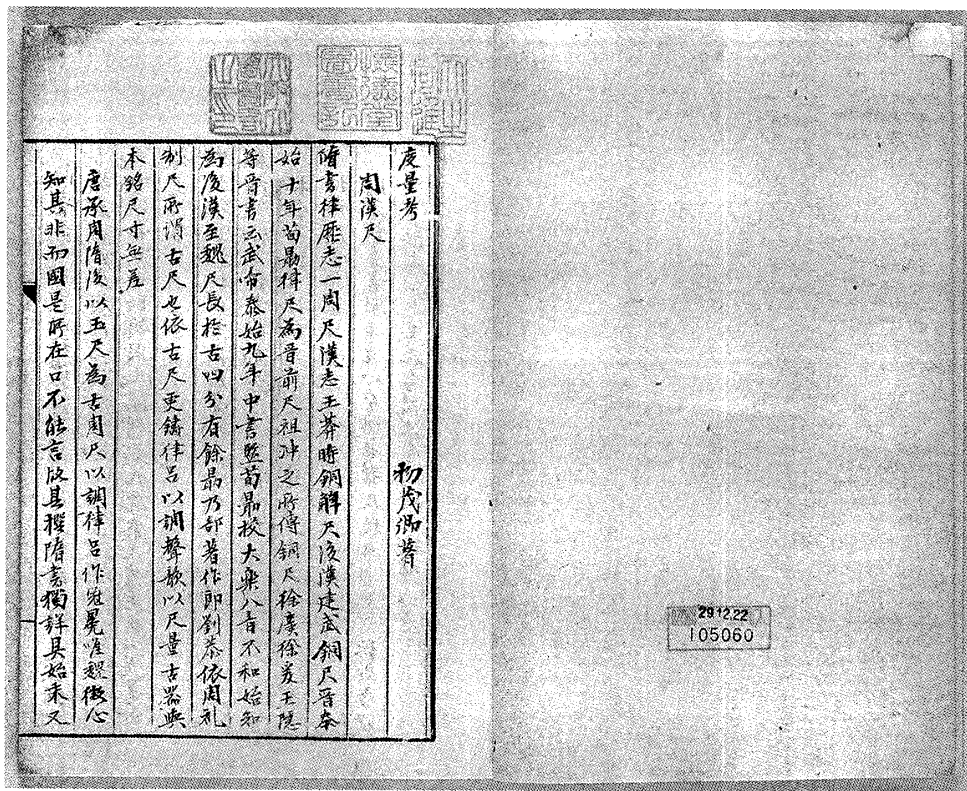
56-3. 履軒數間 禹貢五服部分



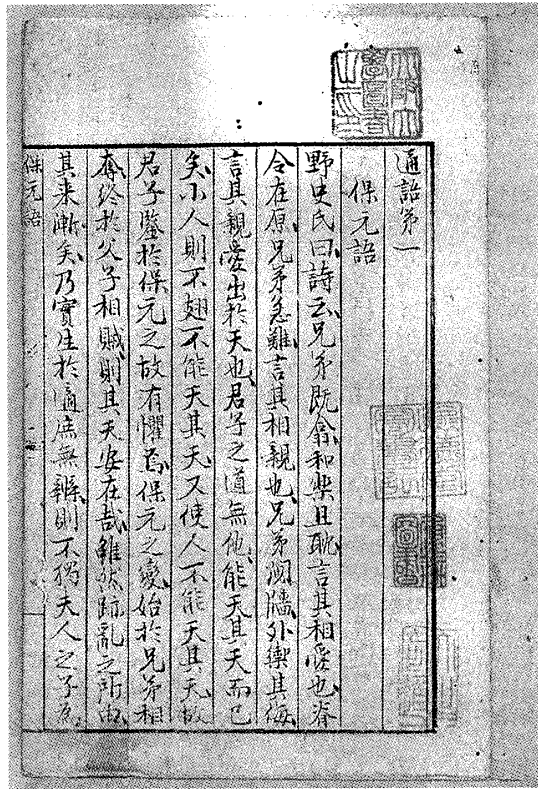
57. 履軒弊帚 (113頁参照)



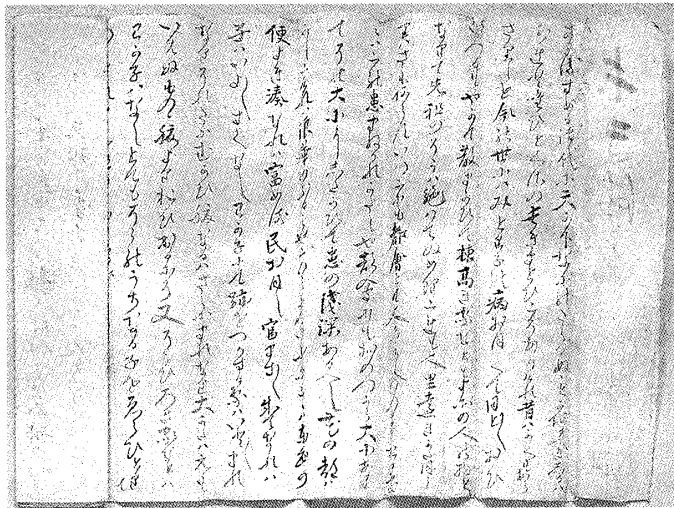
58. 度量衡考雕題 「量考」冒頭部 (115頁參照)



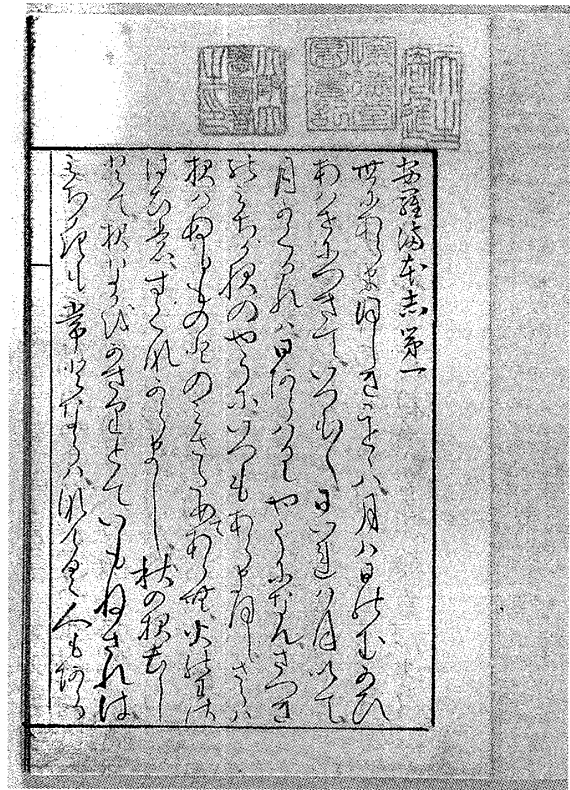
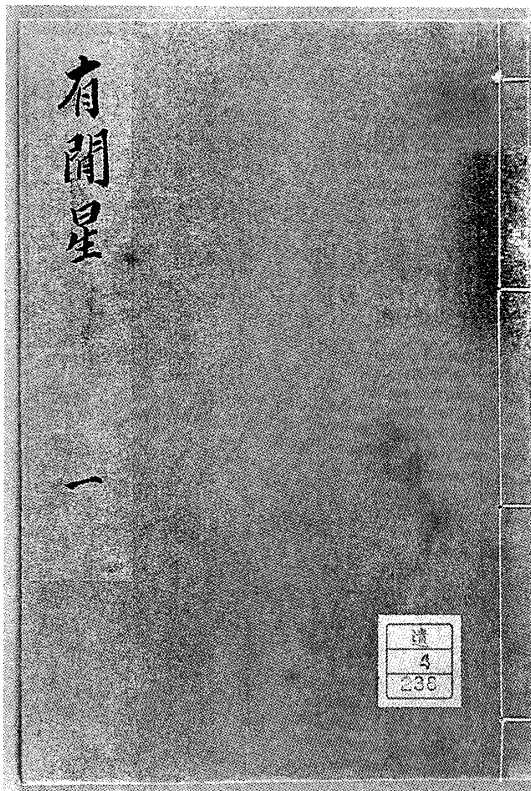
59. 度量考提要 冒頭部 (116頁參照)



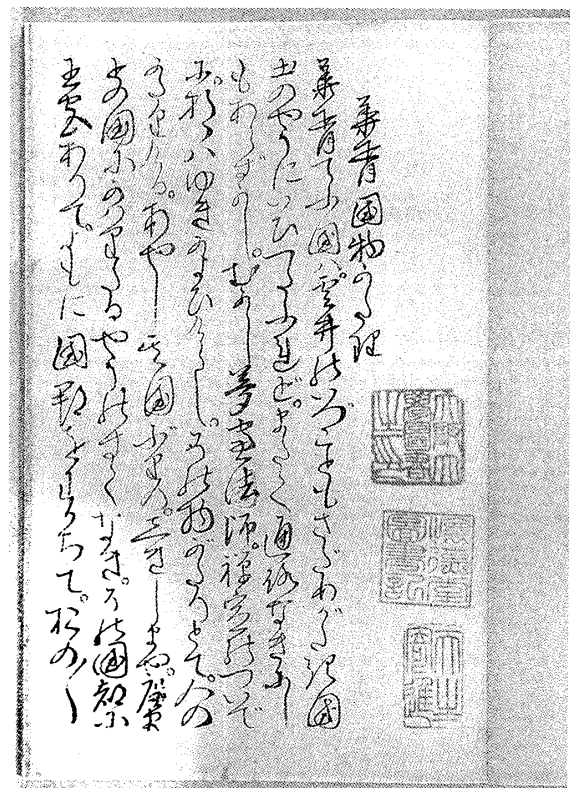
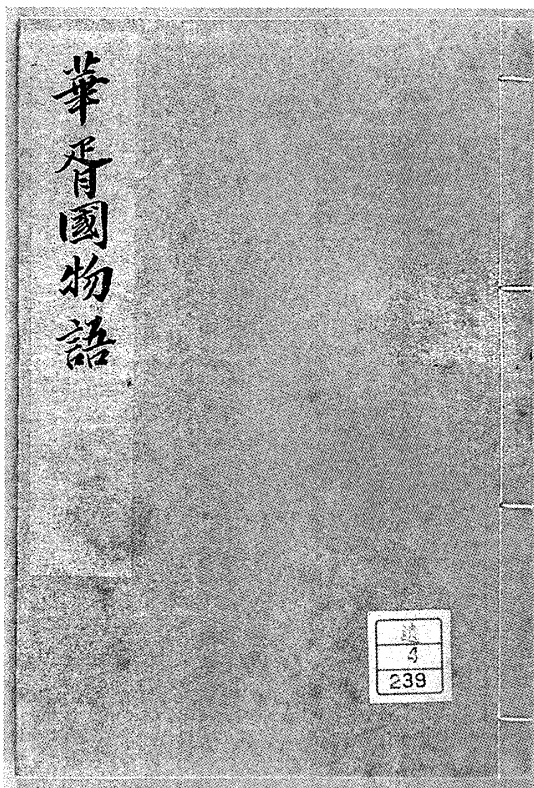
60. 通語 (117頁参照)



61. 老婆心 (120頁参照)



62. 有間星 (左から) 表紙、冒頭部 (121頁参照)



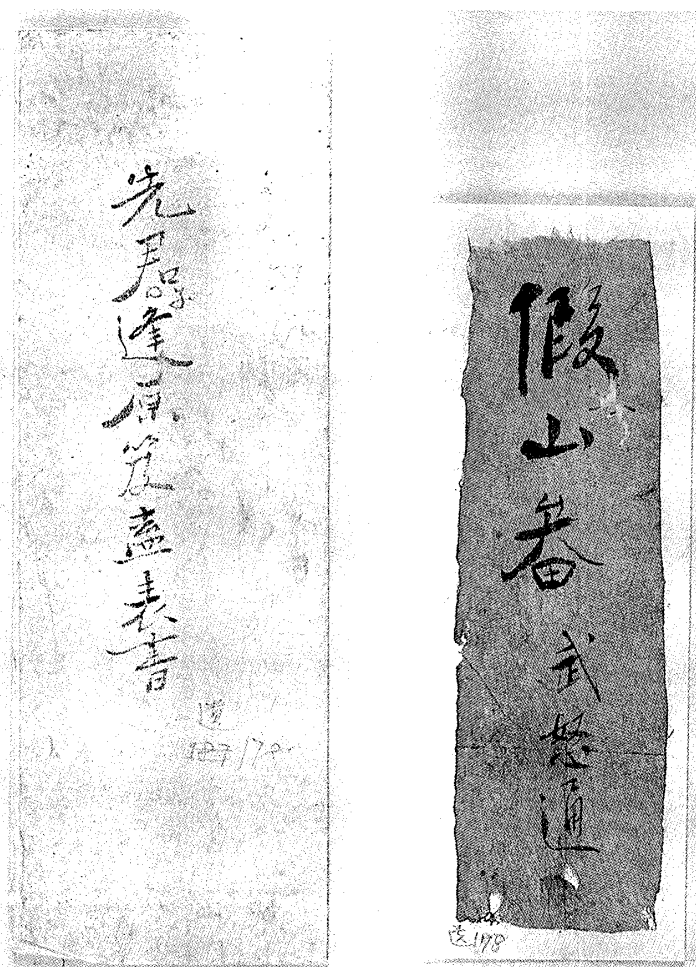
63. 華胥国物語 (左から) 表紙、冒頭部 (122頁参照)



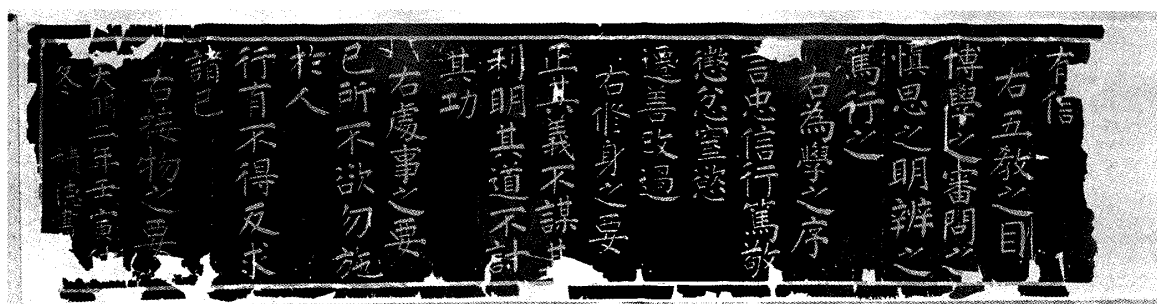
64-1. 紙製深衣 表面 (124頁参照)



64-2. 同 裏面 (背面)

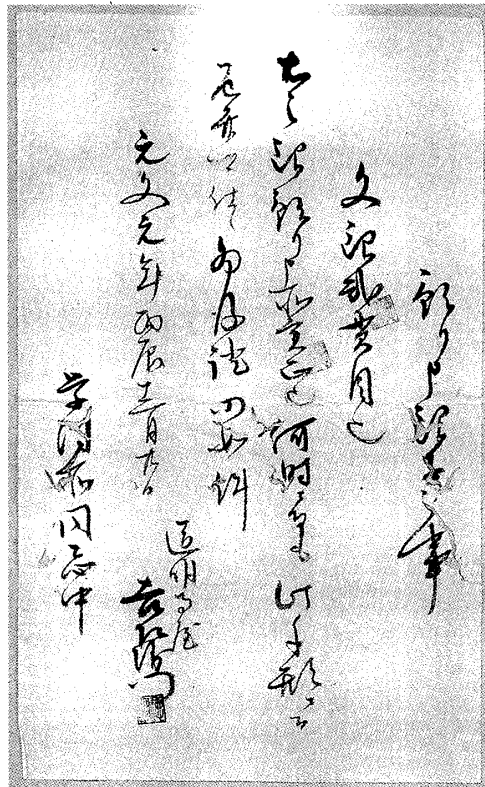


65. 先君子逢原笈蓋表書 (127頁参照)

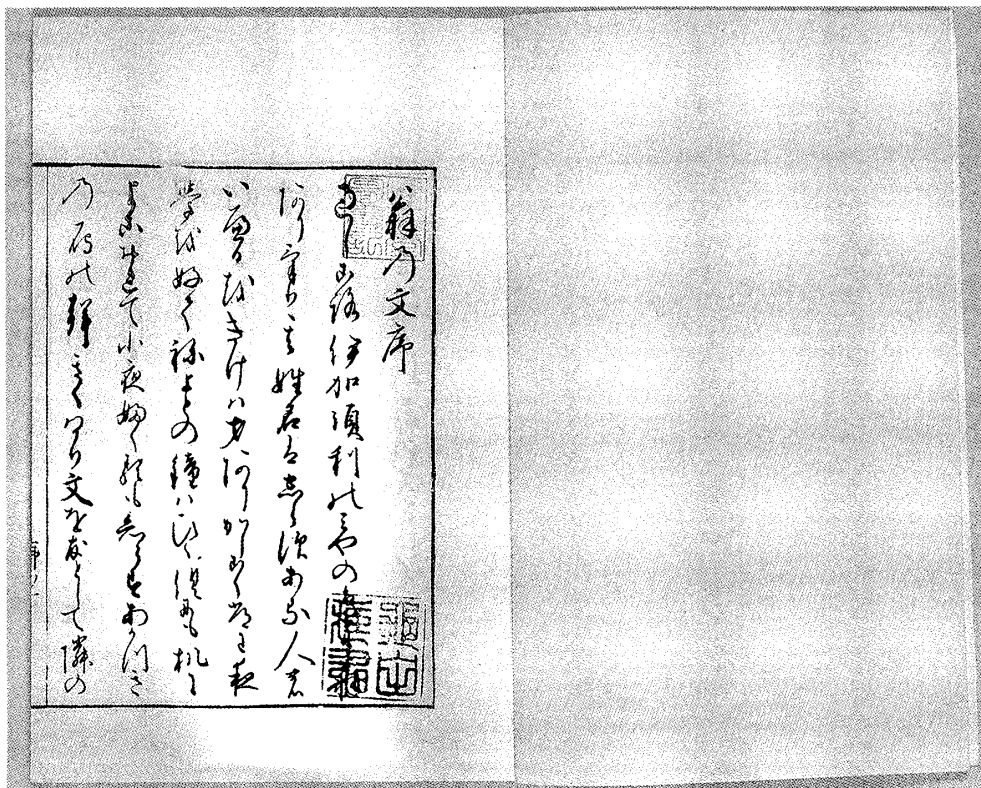


66. 白鹿洞書院揭示拓本 (132頁参照)





67. 富永春芳尺牘 (133頁参照)



68. 翁の文 (133頁参照)

孔子生於周末之下  
 哉然哉然之下  
 獨潛心斯書。然學不師古之下  
 以基觀物子。物子亦乃教然自取諸其  
 心。以為解者。古今學者。孰不師古。亦孰  
 不誦乎古文。但有彼疏於此。云爾。物子  
 豈能盡知古文。其所謂微者。亦一人之  
 私微。非天下之公微也。其徒云云者。皆  
 臆子自夢也。非狂則癡。天下掠虛頭藻

○系子蓋其魁也  
 蓋先王詩書禮樂。孔子之前之下  
 仲基曰。論無定之義。雪溪先生盡之。且  
 以物子之解。論語是孔子論定前世。四  
 術傳義之異者。基閱現存論語。一無有  
 之類者。物子所讀。豈有別本乎。可怪。如  
 但命孔子事業云爾。何其泛焉。又論珠  
 無定之義乎。聞夫第一義。猶且擔枷過  
 杖。可憐二十篇。不過一場懣懣。

69-1. 論語微駁 富永仲基注引部分 (135頁參照)

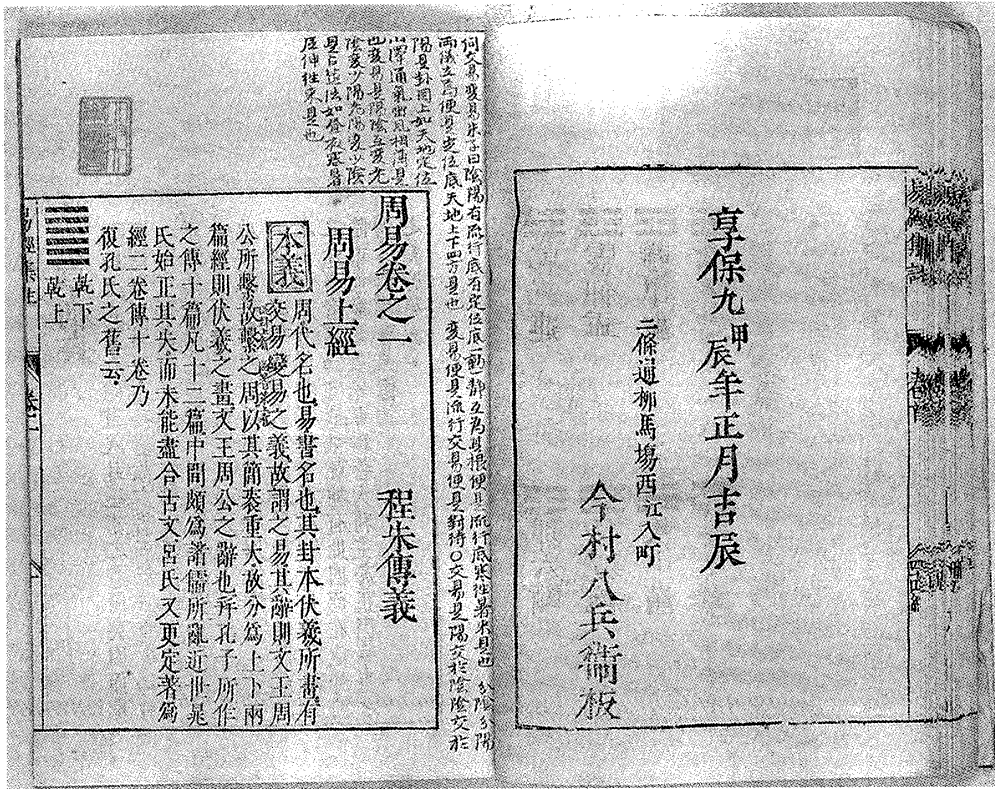
言。故其議論如秋雲變移不定。不見主  
 意所在。但見前後攢播耳。

○子曰恭而無禮章  
 意何晏曰。畏懼之貌之下  
 雅勁捷而無穩言。板本穩下脫註字  
 君子篤於親。則民興於仁。此民字對君  
 子。其謂細民也。明矣。但徠每云仁者安  
 民。長人之德。而破仁義性德之說。此則  
 曰民興於仁。謂民之仁行興盛也。卒露  
 焉。

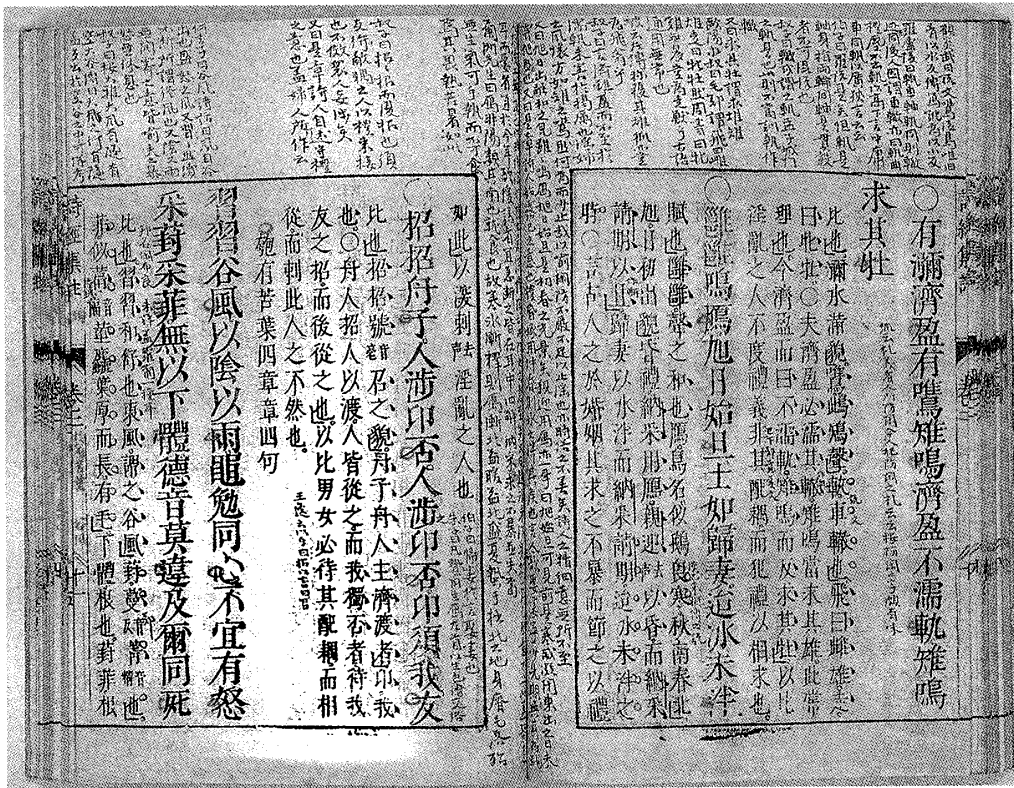
○曾子有疾章  
 自此以下。忽忙中稿駁。事不違考索。文  
 字亦鹿草。期他日得暇補正。改削雪溪  
 或曰。宋儒不問時與鋒。以今言視古文。  
 以己心斷古之事。所以失也。  
 又曰。若克宋儒此解。則百工亦害於道  
 矣。禹之治水也。股無胈。胈不生毛。恐不  
 免於不孝焉。可謂不通已。

○曾子有疾孟敬子問之章

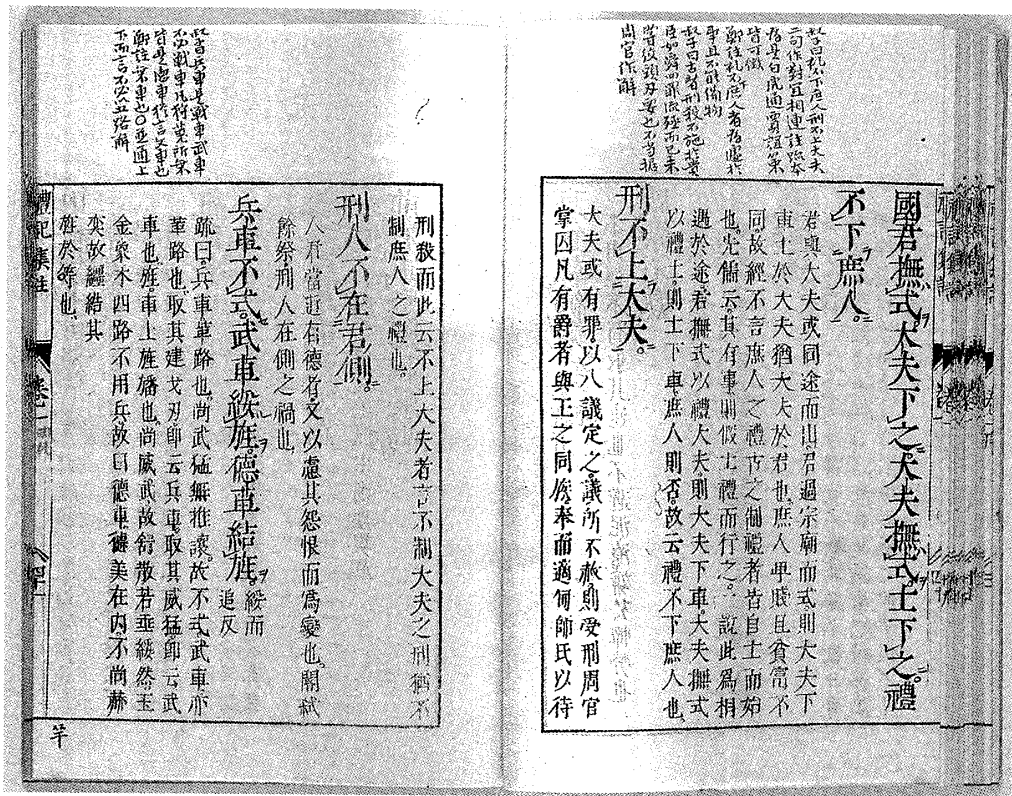
69-2. 同 曾子有疾章部分



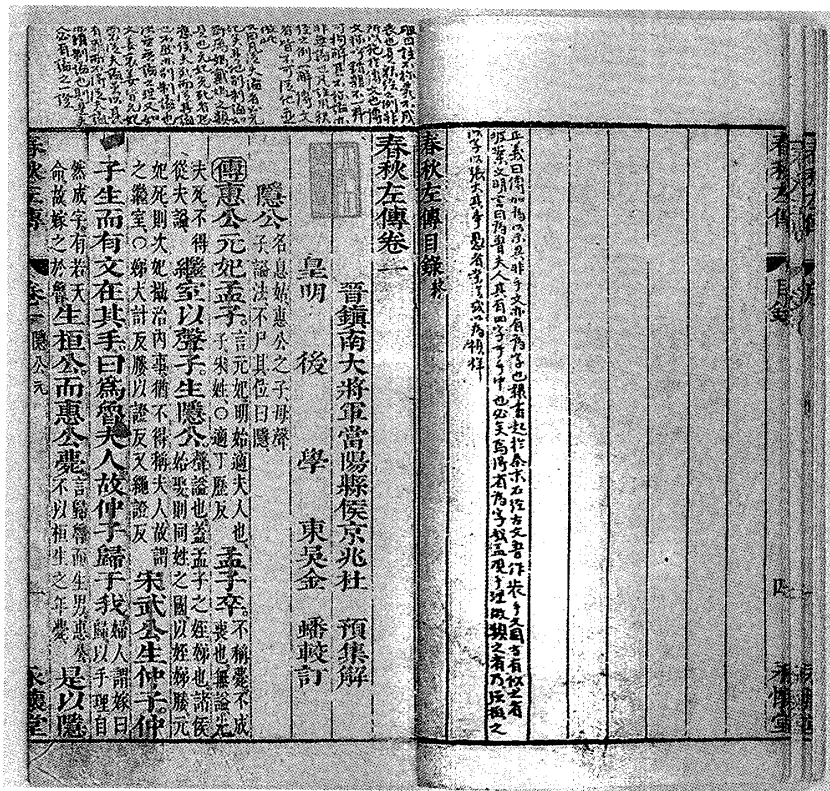
70. 蕉園首書周易 冒頭「乾」卦部分 (138頁参照)



71. 蕉園首書詩經集註 竹山履軒説の引用例 (139頁参照)



72. 蕉園首書礼記集說 書き入れの例 (141頁参照)



73. 蕉園首書春秋左氏伝 本文冒頭「隱公」部分 (142頁参照)

周禮師多子  
則更之而此白  
方北白而此三  
曰其北四曰  
北往也往此  
百子往也  
北者  
有之  
三  
用此水下  
三北之法曰  
北曰其北曰  
北往也往此  
北往也往此  
北往也往此  
方功義  
周禮  
 而觀之禮泉瑞石川沸水鳴亦吾心之發見也而占之  
 方功義曰老少奇耦亦吾心之發見也未灼之前三兆已  
 具本揲之前三易已彰龜既灼矣著既揲矣是兆之吉乃  
 吾心之吉是易之變乃吾心之變混融交徹底然無際歟  
 申枲株云平哉故曰聖人不煩卜筮在聖人觀之機變而  
 齊已為煩矣況區區推步揣摩之煩耶卜筮之理嘗見於  
 太知之訓矣曰卜不習言而已卜吉之外無他語也又嘗  
 見於神書之囑矣曰龜從筮從而已卜從之外無他語也  
 又嘗見於武王之誓矣曰厥夢協朕卜而已卜協之外無  
 他語也又嘗見於周公之誥矣曰卜相水東溲水西惟浴  
 食而已一食之外無他語也後世始求吉凶於心外心愈  
 疑而說愈繁說愈繁而驗愈疎傳之以習史之習雜之以  
 巫祝之說和鑿即欲勝一中之失之於心而求之於事殆  
 見其勢而日拙矣左氏之所載是已或者以左氏所載即  
 發命申動心驗目而不知起隱說衰二百四十二年之間  
 其驗者纔數十事耳是數十事者聚於左氏之書則多散  
 於二百四十二年之間則希闕於家絕無而僅存也乃可  
 誣謾無驗不傳于書者吾意不啻什百千萬於此也謂左  
可也  
從之  
其  
唯論  
史記卷一百一十五

74. 東萊博議 地冊卷二の書き入れの例 (144頁参照)

申<sup>辛</sup>亥 廿七  
 夏<sup>六月七月</sup> 辛<sup>申</sup> 亥<sup>27</sup> 歲の葉  
 詩<sup>大</sup>經<sup>全</sup> 註疏  
 論語<sup>大</sup> 註疏  
 孟子<sup>大</sup> 註疏  
 大學<sup>大</sup> 註疏  
 中庸<sup>大</sup> 註疏  
 朱子語類  
 近思錄  
 世說新語  
 無傳  
 辨誤  
 合註  
 百篇 四百一篇  
朱子語類  
通鑑

75. 雕蟲自為 「月課」辛(申)亥27歳の葉 (145頁参照)

越世志

長尾氏其先平氏鎮府忠道之後也其苗裔率越上  
 秋氏曰景忠後三世有高景應安元年越亂高景有  
 有功於是越有田御而高景位第一御高景卒子賴  
 景嗣賴景子賴景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴  
 景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴  
 景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴  
 景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴景嗣賴景卒子賴

104687

兩上秋

...

76. 越史 (146頁参照)

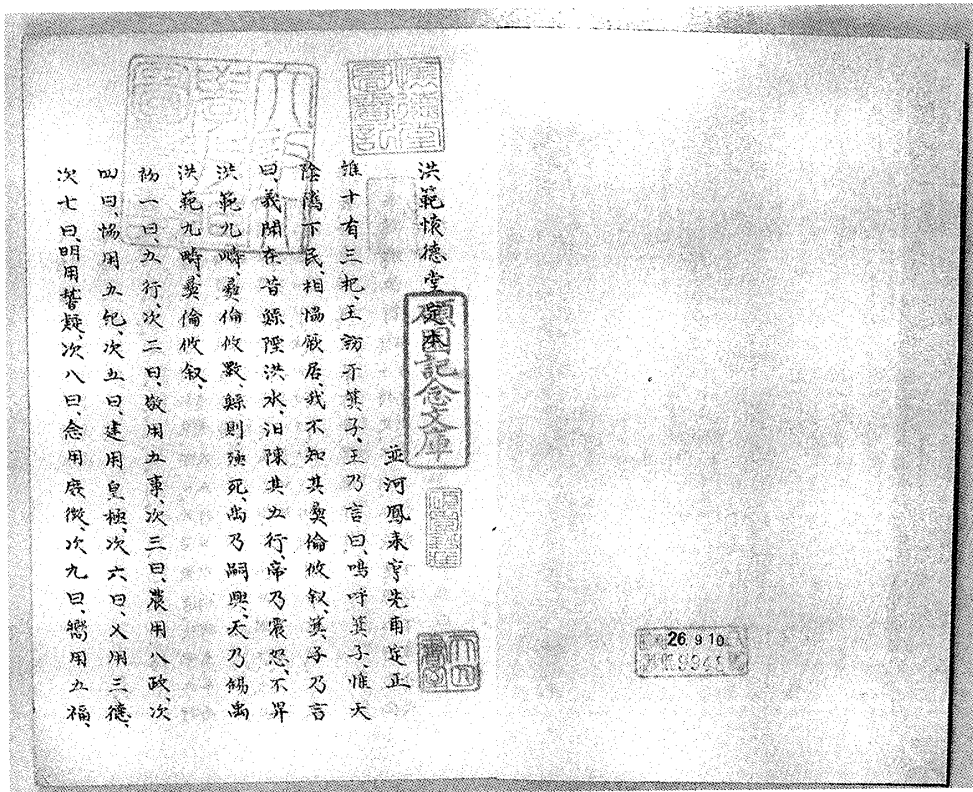
德坡雕蟲

一宵十賦 壬子二月之望

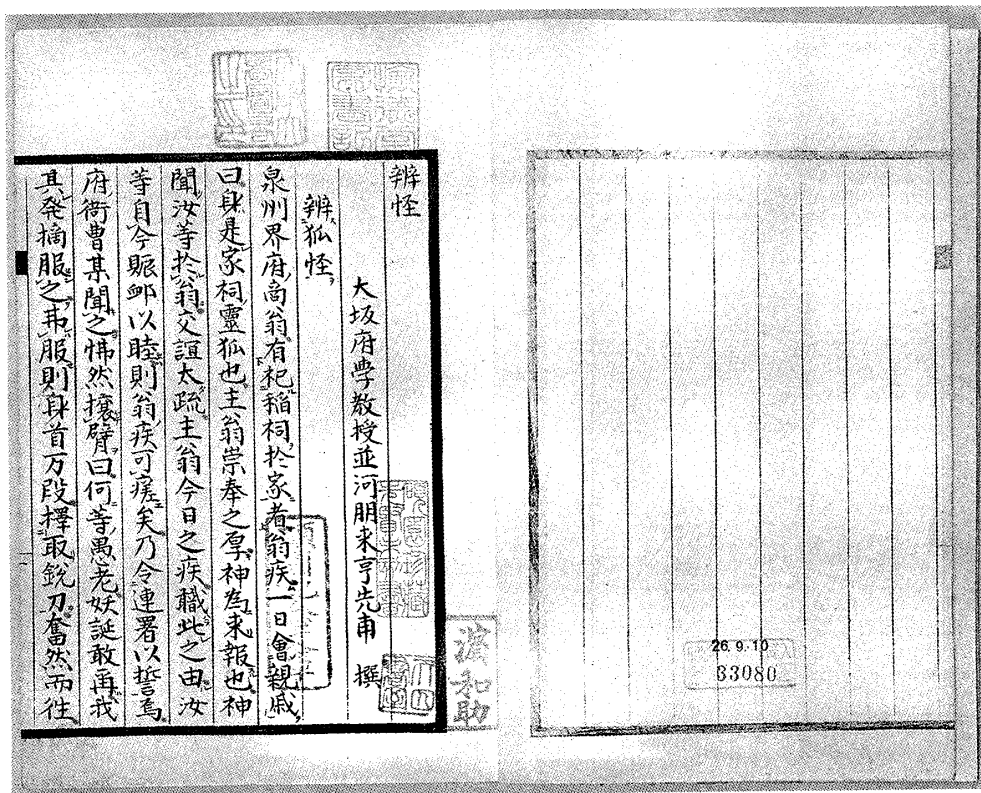
露賦

至恩兮似露，至德兮似露。天壤兮靈物，頭角兮異議。  
 萬物育兮厥積，見唯露靈兮恩德萬。曉露兮何  
 驗之饒，維其至兮豈薄宜。露之精兮，氣福以升。  
 凝澗以和兮，津液漏陰。露物成規兮，節應機。宛轉  
 無窮兮，精明有軌。露形於露兮，夜芬秘於方。露  
 之空疑，料割而俱。露兮，或龍眠而篇，露雖其露之小

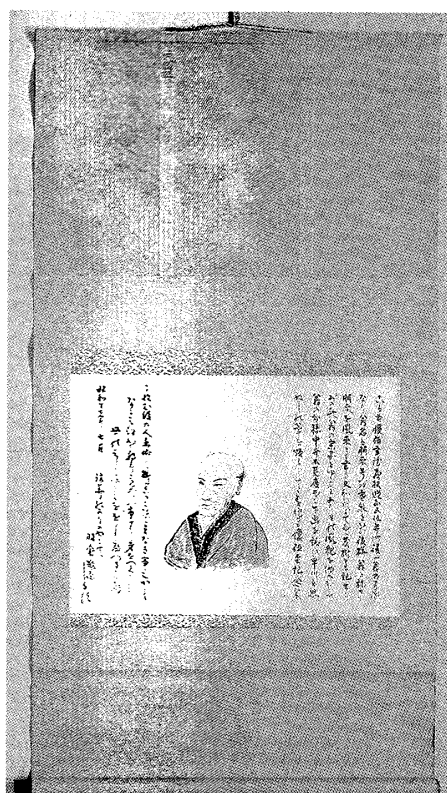
77. 雕蟲篇 並河寒泉写本上冊冒頭「露賦」部分 (148頁参照)



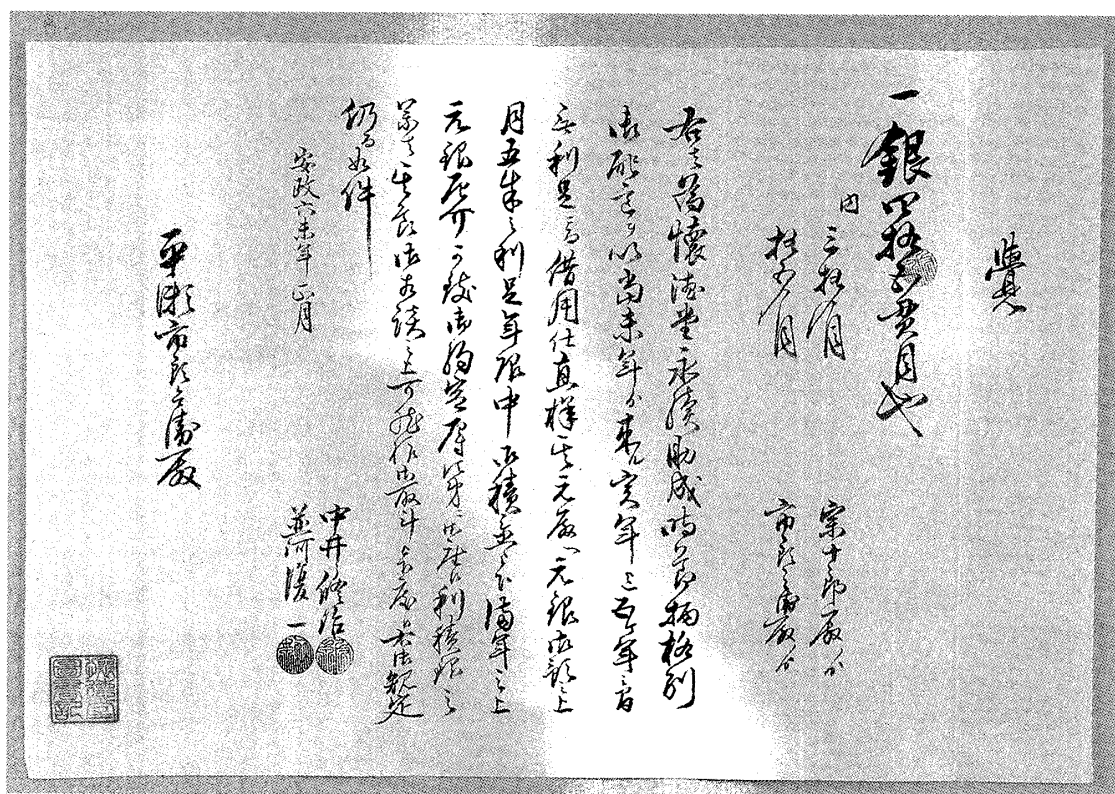
78. 洪範懷德堂定本 (149頁參照)



79. 辨怪 冒頭「辨狐怪」部分 (150頁參照)



80. 並河寒泉翁像 (152頁参照)

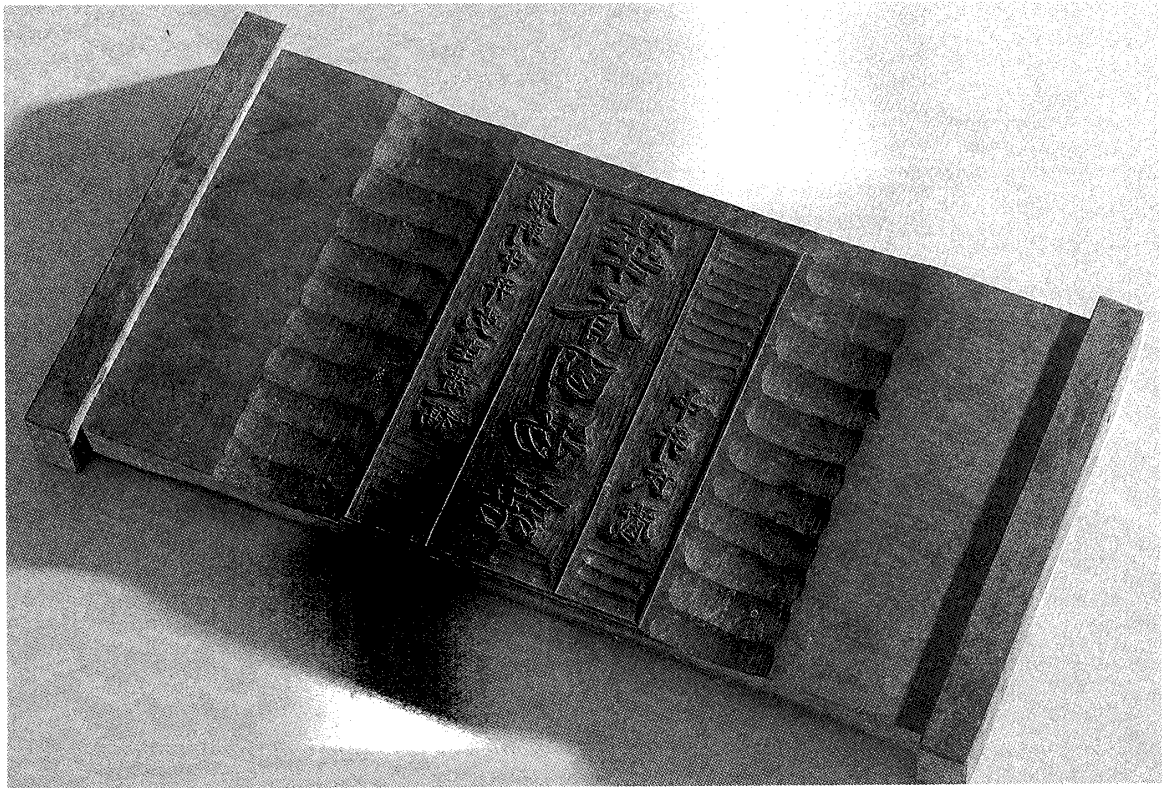


81. 懷德堂永統助成金覺書 (153頁参照)





82. 懷德堂藏書目 冒頭部 (154頁参照)



83. 華胥国物語版木 (155頁参照)

懐徳堂データベース全コンテンツ  
All Contents of the Kaitokudo Data Base

湯浅 邦弘 文学研究科哲学講座(中国哲学)教授  
YUASA Kunihiro

大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編 第42巻

---

2002年(平成14)3月1日 印刷  
2002年(平成14)3月15日 発行

編集兼 大阪大学大学院文学研究科  
発行者 豊中市待兼山町 1-5